真・恋姫†無双　ご都合主義で萌将伝！

AUOジョンソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　ご都合主義で萌将伝！

【Ｎコード】
Ｎ８３４５Ｗ

【作者名】
ＡＵＯジョンソン

【あらすじ】
聖杯戦争が終わり、三国の大戦も終わった後の、いわゆる萌将伝とかｈｏｌｌｏｗ　ａｔａｒａｘｉａといった番外編のようなものです。
前作よりもさらにご都合主義を加速させた作品となっておりますので、ご都合主義、オリ主に嫌悪感を感じる方は戻るをクリックしてください。

第一話　聖杯戦争が終わった後に（前書き）

番外編を作ってみましたが、三国統一の後の北郷一刀の扱いの難しさに悩み、執筆が難航していました。
お待ちしていただいた方も、そうでない方も、拙作で楽しんでいただければ幸いです。
それでは、どうぞ。

第一話　聖杯戦争が終わった後に

街には桜が咲き誇る。平行世界が融合し、サーヴァント六体が復活を果たした。
五胡への対応も終わり、少しは落ち着いたなぁ、と少し感慨深くなってくる。
ちなみに、同じ四日間を繰り返すんじゃないか、という心配はもう無い。すでに一ヶ月以上が経っているが、ループする気配が無いからだ。
後、さらっと言われたためにスルーしかけていたが、シャオのところにいったバーサーカーも違和感無く受け入れられていた。
どうやら、シャオがバーサーカーを妙に気に入ったらしく、肩に乗って突撃（ロース）しているのをたまに見る。・・・あれ、イリヤ？
やはりロリっ娘には往々にしてバーサーカーが割り当てられる運命なのだろうか。
ちなみに、俺もサーヴァントであり、シャオの婿（予定）であるらしいので、呉の人たちから信頼されて真名を預けてもらっている。

「・・・お、ここだ。」

目的地に到着すると同時に思考をいったん切り替える。
今日ははじめての三国会議。考え事をしながら臨むわけにはいかないからな。

「あ、ギルさん。おはようございます」

「おはよう、朱里」

部屋に入り、一番近かった朱里の隣に並ぶ。いつ見てもうちの軍師

たちは可愛いなぁ。
そんな風に和んでいると、一刀が入ってくる。
天の御使いである一刀は、三国の平和の象徴として天下三分の要となっている。
まぁ、原作と同じく彼は形だけのトップではあるが、それでも彼の存在は重要だ。
最初は俺が一刀の立場に着くという案も出たらしいが、受肉したとはいえサーヴァントなので、いろいろと不都合も出てくる。
そのために天の御使いとはいえただの人間である一刀に白羽の矢が立ったのだ。
それに、俺は目立つより裏方のほうが似合っている。ま、本音を言えばそんな面倒くさそうな立場には就きたくないという願望も混ざっているのだが。

「遅いわよ、一刀。・・・さて、これで全員そろったわね。はじめましょう」

こうして、初めての三国会議が始まった。

・・・

会議の後、月も詠も侍女の仕事のため暇をもてあました俺は、市場へと足を伸ばした。
うんうん、貨幣の統一はうまく言っているようだ。
こんなんなりでも中身は現代人ということで、それを知っている一刀から相談されたこの貨幣統一の案。
纏め上げるのは面倒だったが、こうして成果が出てくれるのは嬉しいものである。

「それにしても、活気が良いなぁ・・・ん?」

なんだろう。見なかったことにしたいものが二つ落ちてる・・・。

「あ、ギル様。良いところに」

「・・・これ、どうしたんだ?」

俺に気づいて声をかけてきた警備隊の人間に聞いてみる。

「その・・・俺もさっき見つけたばかりなのですが・・・どう見てもその・・・あの人なので、どうしようかと」

「だよなぁ・・・。下手に連れて行って、雪連あたりに会わせたら・・・」

「やめてください。胃が痛くなってきます。」

「分かった。俺が面倒見ておくよ」

「本当ですか!?」

本当に嬉しそうにそういった彼は、それではよろしくお願いします、と言って去っていった。

近づいてみると、ぐぅ、と腹が鳴ったのが聞こえたので、取り合えずどこか食事のとれるところに行こうと二人を抱えた。

うわ、軽いな・・・。

・・・

「がつがつがつ!」

「はむはむはむ！」

おーおー、良い食べっぷりだ。

「店主、まだ食べそうなんでいくつか追加」

「おうよ！任せなぁ！」

俺が厨房へ声をかけると、店主の親父が元気な返事を返してくれる。
拾った二人の横には大量の皿が積み重ねられており、かなりの量を食べたことをあらわしている。
周りの客はその食べっぷりに興味津々のようだ。良い食べっぷりだもんな。

「はふはふはふ」

「もぐもぐもぐ」

「あいよ、追加お待ち！」

新しく追加された料理に手を伸ばす二人。ふむ、そろそろ満足してきたころかな？

「はふー、おなかいっぱいなのじゃー！」

「そうですねー。おいしかったですよー」

「それは良かった。・・・で、そろそろ話を聞いても良いか？」

皿を片付けてもらいながら、二人・・・袁術と張勲から話を聞く。
なんでも、領土を追い出された後に傭兵団を組織し、賞金稼ぎをしながら放浪していたらしい。
だけど、だんだんと金が無くなり、しばらく食事を取れないままほとんど迷子のように荒野を歩いていて、何とか街には着いたものの、ものを買う金が無く、流石に倒れた、とのこと。
・・・ふむ、なるほど

「じゃあ、二人とも。」

「なにかの?」

「なんでしょー」

「俺が保護してやるよ。袁術・・・はともかく、張勲。少しは兵も動かせるだろ?ちょっと手伝ってくれれば、衣食住は保障するし、働き次第では給与も出す」

「うーん、魅力的ですねー」

「また倒れたくは無いだろ?安全も保障できるしな。」

「・・・むー、そですね、分かりました。お世話になります。美羽さまも、それで良いですか?」

「む?うむ、くるしゅうないのだ!」

「というわけなので、これからよろしくお願いしますね。・・・えーと」

「ああ、俺はギル。蜀の将だ」

「ぎる？・・・ギルってあの・・・金色の将の・・・？」

「・・・なんだその二つ名。」

「袁紹さんと同じような金色鎧の癖に、その能力は桁違い。噂では、三国全ての将を相手にして大立ち回りをこなしたとか・・・」

「・・・ちょっと誇張されてるけど、おおむねそんな感じだ。」

三国全ての将って・・・無理だろ、あれは。

「うーん、これは結構なところにお世話になることになっちゃいましたねぇ」

「はは。ま、諦めてくれ。・・・さて、そろそろ城に案内したいんだけど」

「あ、分かりましたー」

「店主、お金はここに」

「へい！・・・ん？ちょっとギル様！こんなにいただけません！」

「迷惑料込みだよ。それじゃ、お邪魔したねー」

「ほわー、自然にこういうことできる人っているんですねぇ」

「七乃？」

「はーい。なんでしょうかー？」

「何をぶつぶついってておるのじゃ？」

「あははー、ちょっと感動してただけですよー」

その後、城に行けば雪連がいることを伝えると、二人ともガクブルしていた。

・・・小動物っぽくて和むなぁ。もうちょっといじめたくなる。

・・・

「ここを使ってくれ」

「おおー！ふかふかなのじゃ！」

「喜んでいただけて何よりだ。」

「うむ！お主には世話になりっぱなしじゃのう。何かお礼をしたいのじゃが・・・」

「いいよ、そんなこと」

「そうじゃ！お主を妾の夫にしてやろうかの」

話を聞かない娘だなぁ・・・。

でも、ちょっと嬉しいかな。あれだな、娘に「わたしねー、おおきくなったらぱぱとけっこんするのー」といわれた気分かな。まだ娘いないけど。

「ありがとう、嬉しいよ」

「うむうむ。よきにはからうのじゃ。それでは、おぬしのことはこれから主様と呼んでやるのじゃ。ありがたく思うのじゃ。」

「おー、いいね」

「うむ！主様も妾のことは真名の美羽と呼んで良いのじゃ！」

「美羽、か。うん、そう呼ばせてもらおう。あと、張勲」

「あら、美羽様の旦那様なのですから、七乃で結構ですわ、ご主人様っ」

「そう？じゃあ、七乃。みんなに紹介したいし、軍師たちのところに行こうか。」

「分かりましたー」

こうして、美羽と七乃を拾った。後でそのことを詠に相談すると、頭を抱えられたのは言うまでも無いことだろう。

・・・

「主様！おきてたも！」

「・・・ん？美羽？」

真夜中。俺は美羽にたたき起こされた。

「なんだよ、こんな真夜中に。」

「あ、私が説明しますね」

「頼む」

七乃の説明によると、何でも六つ巴で実戦形式の大規模演習を行うらしい。その中の一つの勢力になったのだが、どう考えても勝てないため助力を求めに来たらしい。

「妾の夫は強いと聞いての。・・・だめかの？」

「・・・いや、別にそれは良いんだけど。みんなから許可は取ってある？」

「えーっと、美羽さまが蜀の王に許可を取りに行ったらしいですよ？」

「・・・一人で？」

「お一人で。」

「すごいな、この子。・・・あ、月にも許可取った？」

「む？そやつは誰なのじゃ？」

「俺の主なんだけどさ、その子は蜀に属してるんだ。だから、他の陣営に行くならそっちにも許可とってほしいんだけど・・・」

「あ、それなら大丈夫ですよ」

「ほんとか？」

「ええ。美羽さまが劉備さんのところに行ってる間に場内の兵士たちに話を聞いていたら、あなたの主の話が聞けまして。ついでなんで許可とっておきました。」

「すごいな、七乃」

「美羽さまのおもしろ・・・雄姿を見るためならば、頑張りますよ？」

「・・・うん、まぁいいや。取り合えず、明け四つから戦闘開始なんだろ？なら、いろいろと準備しないとな。」

「あ、兵たちは表に並ばせてあるので。」

「へえ、じゃあすぐに出立しようか。」

「はいっ。ほら、美羽さまいきますよ」

「うむっ。苦しゅうないのだ！」

こうして、俺は袁術陣営として美羽の陣営で動くこととなった。

・・・

取り合えず、本陣に美羽、その補佐に七乃、そして将が俺だけという最悪な状況下で蜀魏呉の三国に勝つには、やはり漁夫の利しかあ

りえないだろう。
まず俺は美羽を説き伏せ、山の中で残り一国になるまで待機することにした。
山に隠れる前にはきちんと各国の間諜を撒いておいた。
俺がいることすら露見してはいないだろう。それほどまでに徹底した。
後は美羽と七乃を何とかなだめながら、山の中で待機することに。
・・・暇だし、放った間諜からの報告でも見てるかな。
えーっと、蜀は先鋒に恋と鈴々、翠の三人か。右翼には愛紗と蒲公英で左翼は星と焔耶が担当。
中軍には桔梗と紫苑の二人を配置し、詠とねねは騎馬隊を率いての遊撃担当。そして本陣にはやっぱり桃香が配置され、朱里がその補佐についている。
そして戦闘狂の雪連率いる呉は先鋒に思春と明命が。そして祭が魏を警戒するような動きを見せており、さらに亞沙が武官として参戦するらしい。
冥琳と穏の軍師二大巨頭は雪連が突き進む道を切り開く役割になったらしい。そして、連華は本陣の守備についたとのこと。
で、優勝候補筆頭の魏。
当然というかなんというか、夏候惇が先鋒につき、さらに霞まで先鋒になったらしい。
右翼は夏候淵と郭嘉が。左翼は許緒と典韋が担当している。
楽進たち魏の三羽烏は遊撃隊に。その補佐は程?になったとのこと。
本陣には華琳と一刀が陣取っている。

「・・・ふぅむ」

そんな風に状況を分析していると、伝令から蜀が魏呉にはさまれたと報告を受けた。

「へえ、そうなったのか」

なら、蜀が最初に落ちて、次に呉がおちるな。で、最後まで残った魏を損害なしの袁術軍で蹂躙すればいいかな。

・・・とりあえず、最低限の警戒だけして、後の兵士たちは休憩させることにした。変に緊張させていざというとき動けなかったら困るしな。

「交代で最低限の警戒だけして、後は休憩してていい。そう伝えてくれるか」

「はっ。」

伝令がわき目も振らずに走っていく。

よし、後は美羽に少しだけはちみつを与え、七乃を上手にいなしてすごせばいいな。

・・・

戦いが始まる少し前。詠ちゃんから、気になることを聞いた。

「え？」

「・・・だから、今日の演習を見学してもらおうとギルの部屋にいったんだけど・・・もぬけの殻だったの」

そこで、詠ちゃんと月ちゃんはお城の人間にお兄さんを見なかったか聞いて回ったらしい。

すると、ある兵士さんから、詠ちゃんが部屋を訪ねる少し前にお兄さんがどこかへ言ったという話が聞けた。

「もしかしたら、他の陣営にいるのかも」

「えー・・・さすがに、宝具使うのは自重するよね？」

「・・・宝具を自重したって、元々の能力が高いんだから意味ないわよ。」

た、確かに。

恋ちゃんと宝具を使わずに素で勝てるお兄さんが、この戦いで現れたりしたら・・・

「それにしても・・・どこについてるんだろうね、お兄さん」

「さぁ？・・・でもま、魏の北郷に頼まれたりとか、呉の小連に引っ張られたか、袁紹か袁術に無理やり連れて行かれたか、白連になきつかれたか・・・。」

「あ、あははー。全部鮮明に想像できちゃうところが怖いよねぇ・・・」

怒りのこもった詠ちゃんの言葉に、私は苦笑いを返すしかなかった。

・・・って、あれ？怒りがこもって・・・？

「もしかして、詠ちゃん・・・。蜀以外にお兄さんがついちゃったから嫉妬してるの？」

私がそういうと、詠ちゃんは一瞬きょとんとした後、耳まで真っ赤にしてあたふたし始めた。

「ち、ちがっ、あ、あのねぇっ、ボクは別にギルがどうとかそういうことをいってるんじゃなくて、他の所についたら勝率が下がっちゃうって話を・・・！」

「うんうん、わかってるよ、詠ちゃん」

「わ、わかってないわよね！？」

・・・それにしても、どこにいったんだろ、お兄さん。
できたら、私の隣にいてほしかったんだけどなぁ。

・・・

蜀が脱落した後、魏は呉へと食らいついた。
しばらくすると呉の左翼は魏の勢いに負け、壊滅した。
右翼と合流した本陣も、新たに投入された夏候惇によって壊滅させられ、呉の牙門旗が倒れた。

「呉が落ちた！袁術軍、戦闘準備！」

テキパキと戦闘準備を終わらせ、整列する袁術軍の兵士たちに、赤い槍（ゲイボルグの原典）を掲げながら声を上げる。

「行くぞ、みんな！魏は勝利したものと思い込んでおり、油断している！その隙を突き、俺たちは奇襲をかける！」

「応！」

「俺たちが目指すのは魏の牙門旗のみ！それ以外は無視していい！最低限の隊列を維持していれば、後は勢いに任せてしまってかまわ

ん！」

練度が低い袁術軍の兵士たちに多くを抱えさせては、もしかすると魏に逆襲されて負けるかもしれないと考えた俺は、簡単な指示だけを与えることにした。

「ただし、油断して死なないように！それだけは注意しろ！」

「応！！」

「行くぞ！突撃ぃー！」

「おーっ！」

突撃の銅鑼を鳴らしながら、袁術軍は山から駆け下りる。

「うははははーっ、行くのじゃー！蹴散らすのじゃー！」

馬に乗った七乃と、七乃の前に相乗りしている美羽の前を駆けつつ、赤い槍（ゲイボルグの原典）で魏の兵士たちをなぎ払う。

「貴様はっ！」

「セイヤッ」

野性の勘なのか、魏の誰よりも早く立ち直った夏侯惇が華琳と俺の間に立ちふさがる。

だが、戦いの後でさすがに疲れているのか、俺の一撃でその大剣を弾き飛ばされてしまう。

その後すぐに腕に巻かれた布を回収し、戦闘不能扱いにする。

「すまんな」

「なんだとっ・・・！」

夏候惇の横をすり抜け、いまだ若干の硬直を見せる夏候淵に向かう。彼女の弓の腕は確かだからな。ここでつぶしておかなければ、馬上の二人が危ない。

「うははははーっ！妾の強さを見せ付けるのじゃー！」

「きゃーんっ、お嬢様さいこーっ！」

背後でコントを繰り広げている美羽たちをスルーしつつ、夏候淵へと駆けていく。

「くっ・・・！」

「二人目っ！」

ろくな反撃もできずに夏候淵の布も回収し、兵士を蹴散らしながら華琳の元まで向かう。

・・・そういえば、どっちの牙門旗をとればいいんだろうか。華琳？一刀？

「・・・両方倒せばいいか。」

「く、まさかそっちについていたとはね」

「マジかよっ！」

「マジだよ、すまんね！」

華琳が絶を薙いでくるが、赤い槍（ゲイボルグの原典）で簡単に弾いてしまえた。
やっぱり華琳も疲れてるんだなぁ。俺がサーヴァントであることを差し引いても、流石に二つの大軍を相手にした後の疲れは響いているらしい。

「うははははーっ！やっぱり妾は最強なのじゃーっ！」

「よっ、流石お嬢様！自分の手柄でもないのにそんなにえらそうにできるなんてっ！そこに痺れる憧れるうっ」

「もっと褒めてたもー！」

一刀は・・・まぁ、対応できないよな。
夏候惇と華琳は特別だろう。あんなに早く立ち直るのは流石としか言いようがない。

「よし、魏の牙門旗は奪ったぞ。袁術軍の勝利だ！」

「うはははは～っ！」

「よっ、流石ご主人様ですねっ」

ふー、終わったかー。

「お疲れ、華琳、一刀」

「・・・まさか、そっちについてたなんてね」

「え?聞いてなかったのか?」

「袁術が桃香に『妾の夫も参戦させてよいかの?』とかいってきたから、どんなのが出てくるかと思って面白半分に許可したのだけど・・・」

「あー、夫云々は無視していいぞ」

「でしょうね。」

はぁ、とため息をつく華琳から目をそらし、一刀に視線を向ける。

「一刀も、お疲れ様。」

「あー、なんていうか、気が抜けた。」

「はは」

「ギルならともかく・・・袁術に負けたっていうのは認めたくないなぁ・・・。」

「ま、ショックだろうなぁ。」

俺に気づいた蜀や呉の面々がこちらに近づいてくるのが見える。

あ、愛紗とか詠とか完璧に怒ってるなぁ・・・。

「あなたも大変ね。・・・ま、一応同情しておくわ」

「ありがとさん。」

・・・

「そういえばお兄さん」

「なんだ、桃香」

ある日の政務で、唐突に桃香が話しかけてきた。

「七人の英霊さんの中で、一番強いのって誰なの？やっぱりお兄さん？」

「・・・ふーむ」

そうだなぁ、桃香にはいろいろと説明しておいたほうがいいかもなぁ。

俺はいったん筆をおく。

「ちょっと休憩しようか。ゆっくり話したいし」

「うん、お願い」

えーと、まずは何から説明するべきか。

「まず、七つのクラス・・・役割の事は説明してたよな？」

「うんっ。剣士さんとか、それぞれの特徴があるんだよね？」

「そのとおり。剣士は最優、槍兵は最速、狂戦士は最強、なんて風にそれぞれ秀でるところがあるんだ。」

他は知らないけど。何だろう、アーチャーは・・・最善？ライダーは最多、キャスターは最賢、アサシンは最悪・・・かなぁ。

「後は、地理とか相性とかマスターからの魔力供給とか英霊本人の人格で強弱は変わってくるから、単純に誰が強いとかははっきりできないなぁ」

まぁ、英霊の中で、という縛りならばネイキッド英雄王が一番強いんだけど。
そういうことじゃないよなぁ。

「うーん、いろいろ難しいんだねぇ。・・・じゃあ、何もない荒野で、みんなが全力をだせるってなったら、七人の中で一番なのは？」

「それだったらやっぱり俺かなぁ。王の財宝（ゲートオブバビロン）と乖離剣エアの天地乖離す開闢の星（マ・エリシュ）があるから、本気で全力なら、すべての英霊に打ち勝てると思うな」

「へー！へー！お兄さんってやっぱり強いんだー！」

「まぁ、仮にも英雄王だしな。で、次に狂戦士の武蔵坊弁慶、三番はやっぱり最優の英霊、剣士の劉備だな。」

「はうはう、私とは大違いだよね、正刃さん・・・」

「うーん、まぁ、英霊と人間は比べられないからなぁ」

うんうんと頷きながら話を続ける。

「三国の将の人たちが天下一品武闘会をやるみたいだけど、ギルさんだったら出場者全員に勝てそうだよねー」

「んー、そういう公式な仕合とかだと宝具を自重しないといけないから、恋あたりに負けると思うなぁ。」

「あ、そっか。・・・うーん、むつかしいなぁ」

「難しいって・・・桃香は俺に武闘会に出てほしいのか？」

「え、えへへー。お兄さんが闘ってるところ、最近見ないから・・・」

「いいじゃないか、平和ってことだし。」

「えー。お兄さんのかっこいいところ見たいのにー」

ぶーぶー、とこちらにブーイングを飛ばす桃香に苦笑しつつ

「俺の闘ってるところを見たいならたまにセイバーたちと模擬戦してるからそれを見にくれば？」

と言ってみたが、いつやってるかわからないじゃない、と返されてしまった。

・・・そりゃそうか。いちいち桃香に報告なんてしてないし、始まるのはいつも唐突にだしな。

「・・・じゃ、諦めるしかないな」

「うぅー・・・」

「ほら、そろそろ休憩終わり。俺たち二人しかいないんだし、さっさと終わらせちゃおうぜ」

「・・・うん」

・・・若干元気のないように見える桃香が気になったが、ま、すぐに戻るだろうと思い直し、政務に意識を戻した。

・・・

「へぅ、す、すごいね、詠ちゃん」

「う、こんなにおっきいの・・・？」

「その本に書いてある中では、腕ほどの太さのもあるとか・・・」

「あわわ・・・は、入るのかな・・・」

今日は珍しく侍女のお仕事がお休みのため、同じくお休みだった詠ちゃんと朱里ちゃん、雛里ちゃんと私の四人で、朱里ちゃんたちの持ってきた艶本を見ています。

四人で読んだ感想を話し合ったりしていると、突然扉が叩かれました。

「月、いるかー？」

「ぎ、ギルさんっ・・・！？」

「はわわ、本を隠さないと・・・！」

「あわわ、とりあえず寝台の下に・・・！」

少しばたばたした後、扉の向こうにいるギルさんにどうぞ、と声をかけました。

「入るぞー。お、詠。朱里に雛里もいるのか。」

「あ、はい。今日は軍師の皆さんで討論をしていたんです。私は聞いてるだけなんですけど」

「そっか。・・・あ、そうそう。これ」

そういってギルさんが渡してくれたのは、磨かれた宝石に紐を通したものでした。

「それ、一応持っておいてくれ。持ち主に危機が訪れたときに一瞬で防御結界を展開するっていうものなんだけど」

「は、はい。・・・あの、何でそんなものを？」

「月にもしものことがあったら嫌だからな。・・・それじゃ、邪魔したな」

そういって、私の頭をくしゃっと撫でてから部屋を出て行くギルさん。

へぅ、顔が熱いです・・・。

「ふー・・・ギルさんがきちんとのっくしてくれる方で助かりました・・・」

「そうね。他のやつらだったらもっと大変なことになってただろうし。」

「あわわ・・・気を取り直して、読み直しましょう」

寝台の下から艶本を取り出し、再び読み始めるみんな。

「やっぱり、最初って痛いのかしら」

詠ちゃんがつぶやく。

・・・それは、その。

「えっと、そうみたいですよ。」

「あわわ・・・」

「・・・痛いけど、そのうち慣れるよ？」

あ。

・・・と、思ったときには遅かった。

あわてて自分の口を押さえたけど、三人の目はこちらに向いている。

「ゆ、ゆゆゆゆ月っ！？ど、どういうことっ！？」

「はわわ・・・月ちゃんは、その、した、んですか？」

「あわわ・・・や、やっぱり、ギルさんと・・・？」

「へぅ、あの、えっと・・・」

じりじりと詰め寄ってくる三人から逃げようと後ずさっていると、壁際まで追い詰められてしまいました。
ど、どうしよう・・・。
別に内緒にしているわけではないけど、やっぱりこういうことを話すのは恥ずかしいです・・・。

「ゆーえー！あーそーぼー！」

「・・・はぁ、部屋に入る前にはまずノックを・・・おや？」

そんなことを考えていると、大声とともに扉が開かれました。
入ってきたのは響ちゃんと孔雀ちゃん。
た、助かった・・・。

「・・・おやおや、真昼間から艶本か。」

「艶本・・・うわ、しかも結構過激なのも・・・。」

ニヤニヤしながら艶本を見る孔雀ちゃんと、恥ずかしそうにしながらもぺらぺらと中身を読む響ちゃん。

「はわわっ！あの、それは・・・！」

「あわわっ・・・ええっと・・・！」

「ふふ、大丈夫。言いふらすつもりはないよ。・・・そだな、ボクもその読書会に参加させてもらおうかな。」

「孔雀ちゃん、大胆だねぇ。でも、私も興味あるからちょうどいい

かな。私も読むー！」

「ど、どうしよう、雛里ちゃん・・・」

「と、とりあえず・・・月ちゃんから話を聞きたいな」

・・・ぜんぜん助かってなかった・・・！？

どういうことだい？と二人から事情を聞いた孔雀ちゃんと響ちゃんも興味深そうにこちらへ近づいてきます。

「ボクもそういうのはやったことなくてね。経験者の話を是非聞いてみたい」

「月ちゃん、一足お先に大人の女になってたんだねー。どんな感じなの？」

二人増えて、計五人に詰め寄られてしまいました。

「へぅ・・・わ、わかりました・・・お、お話します・・・！」

だから、座ってくださいっ。と言って、五人を落ち着かせました。

興味津々と言った表情で椅子に座った五人にお話しするため、緊張しつつ私も椅子に座りました。

「えと、初めての時のお話なのですが・・・」

・・・

第一話　聖杯戦争が終わった後に（後書き）

一刀くんの扱いに悩み、魏のキャラを主人公のハーレムに突っ込むかどうかで悩んでおります。
魏で主人公のハーレムに入れてほしいキャラなどいましたら感想に書いていただければ何とかします。

誤字脱字、ご感想お待ちしております。

第二話　水着の素材のために（前書き）

萌将伝の話は時系列が分かりづらいので話の展開に困ります。
それでも、完結目指してがんばるので、よろしくお願いします。

それでは、どうぞ

第二話　水着の素材のために

「はっくしょん！」

「どうした、ギル。風邪か？」

「・・・いや、違うと思う。誰か、噂でもしてるのかなぁ」

俺は、一刀に誘われて昼飯を食べに街まで出てきた。
一刀はこっちに来てからというもの、男の友達がいなかったらしい。
なので、俺が暇しているとこうしてよく昼食なんかに誘われる。

「そりゃ、ギルは大人気なんだから噂くらいされるだろ」

冗談交じりにそういった一刀は、ずずず、とラーメンを啜る。

「あまりほめるなよ。照れるだろ」

「少しは照れてる顔をしてからそう言ってくれ」

こちらを恨めしそうに見てくる一刀に、すまんな、と言ってから、
俺もラーメンを啜る。

「・・・それにしても、暑いな・・・」

「そうか？」

「・・・英霊って暑いのとか感じにくいんだっけ？」

「そうみたいだな。・・・でもま、最近暑すぎて政務とか大変みたいだし・・・」

「あー・・・それについてはギルに感謝してる。ギルがいなかったら、いろいろと仕事がとまってたと思う。」

「どういたしまして。・・・どっかにレジャー施設でもあればいいんだけどな。時代が時代だし・・・」

「レジャー施設ねぇ。川なら近くにあるけど。というかまず、水着っていう概念がないらしいし」

「みたいだな。服を着たままか、全裸か。・・・すげえ二択だよな」

「同意するよ。」

「・・・水着、作ってみるか。」

話をしているうちに、俺は月と詠の水着姿を見てみたくなったのだ。

「えっ!?」

「素材はわからんが・・・代用品が無いか服屋の人に聞いてみようぜ」

「そうだなぁ・・・やるだけやってみるか!」

「その意気だ。」

代金を払い（一刀の分は俺が払った。何でも、魏の三羽烏の食費で

大変らしい。南無）、服屋へと向かう。

「はぁ、強くてしなやかで、水に濡れてもすぐ乾き、普通の布のように肌に張り付いて邪魔になったりもしない素材・・・ですか？」

「やっぱり、心当たりとかは無いか」

「申し訳ありません、ギル様」

「いや、興味本位だったから、気にしないでくれ」

一刀がいろんな服を注文し、その注文どおりに仕立て上げたという職人の腕をもってしても、あの素材は再現できないか。

うーん、と頭を抱えていると、服屋の息子の暑気あたりを見に来たという華佗に出会った。

貂蝉つながりで知り合った彼は五斗米道（ゴッドヴェイドー）を極めるために旅をしている医者で、何でも鍼治療で治す名医だ。

「一刀か。それにギルも。どうしたんだ？涼しい服の相談か？」

「実は・・・これこれしかじかの」

「かくかくうまうまか。なるほど・・・」

・・・通じるんだ、あれで。

「確かに難しい問題だな・・・」

「華佗でも心当たりは無いか・・・。いろいろなところを旅してきたって聞くから、もしかしたらと思ったけど・・・」

「いや、無いことはないぞ」

「本当か！？」

「ああ。だが、厳しい道のりになる。・・・それでもやるか？」

・・・

華佗から聞いた素材のありか。
貂蝉と卑弥呼、そして華佗の三人でようやく倒したという龍の皮が
水着の素材となりえるらしい。

「とりあえず、龍の元へは黄金（ヴィマーナ）と宝石の飛行船で向かおう」

「・・・いきなり宝具かよ」

「当たり前じゃないか。幻想種の龍と戦うんだぞ。消耗は避けたい。」

「ギルにそういわれると、倒せるかどうか不安になってくるんだけど。」

「安心しろって。・・・最悪、お前だけでも帰すから」

「安心できねえよ！むしろ不安が増すじゃねえか！」

「まったく、わがままだなぁ。」

「そういう問題か！？」

「まぁまぁ。後は・・・人手だな。一刀の知り合いで、秘密が守れる奴に心当たりは？」

「・・・何人か」

「よし、そいつらのところへ行こう」

・・・

この時間ならあそこにいるな、とつぶやく一刀についていくと、兵士の宿舎にたどり着いた。
宿舎に入ると、いたのは一般の兵士たちだった。

「お、大将！」

「どうしたんスか？」

「ああ、ちょっとな・・・。」

「って、ギルさまままでいるじゃないですか！？何事ですか！？」

「頼みごとがあるんだが・・・一刀、こいつらってお前が以前話してた・・・」

「ああ・・・仲間（とも）だ」

「なるほど、信用できるな。いいか・・・」

兵士たちに簡単に内容を説明する。

水着という下着のようなかたちをした水遊び用の服を作りたい。
しかし、そのためには龍の皮を手に入れる必要があり、そのための人手を集めている。
それから一刀にバトンタッチ。彼らの魂を揺さぶる説得ができるのは一刀だけだ。
水着を着ているときに起こるうれしはずかしハプニングの話やらを聞いているうちに兵士たちは興奮してきたらしい。

「それで北郷さま。その水着に使うのが・・・」

「そう。さっきも言ったが・・・龍の皮だ。」

伸縮性に飛んでいて、濡れても丈夫。華佗から聞いた話では、龍の皮が最適だと聞いていた。
その話を出したとたん、彼らの顔は曇った。
・・・流石に、龍に挑むというのは尻込みするか・・・。

「厳しくはあるが・・・ギルも協力してくれる！みんなで協力すれば、絶対にできるはずだ！」

「分かったッス！俺、水着のために頑張るッス！」

だが、そういって立ち上がったのは魏の兵士のみだった。
・・・流石に、俺が一緒だからと言っても尻込みしてしまうか。
サーヴァントのことを知らない一般の兵士たちの俺への認識は、「飛将軍呂布と張り合える将」といったものだろう。
宝具の存在を知らないのならば、そんなものだ。

「やっぱり、厳しいか？」

「龍・・・ですよね？いくらなんでも、相手が悪すぎるというか・・・」

「みんな、情け無いッスよ！水着姿の女のこのために、頑張りましょうよ！」

「・・・」

「・・・」

「・・・みんな」

一人というのはまずいな。
龍の皮を剥いだり、肉を切ったりする人員は多いほうがいい。

「大丈夫だ。」

「え？」

「ぎ、ギル様・・・？」

「俺には、龍に勝つ秘策がある。みんなには、その手伝いをしてもらいたいんだ」

「秘策・・・本当ですか？」

「ああ。・・・ただ、ここでそれを説明することはできない。きてくれた者だけに、俺の秘密とともに教えよう」

「・・・みんな、無理は言わない。挑めると思った人だけ、門のと

ころに集合してくれ」

俺と一刀はそういった後、宿舎を出た。

・・・

「みんな・・・！」

「大将。二人だけに良い思いはさせませんよ」

「そういうことですね。ギル様の秘策、私も信じようと思います」

「お供しますよ、地の果てまで」

「袁紹さまのおっぱいのために！」

「顔良さまのおっぱいのために！」

「よし・・・なら、みんなで龍を倒し・・・龍の皮を手に入れるぞーっ！」

「おおおーーーっ！！」

そういって腕を突き上げる兵士たちとともに、林の中へと入っていく。

「これは・・・！」

「黄金の船・・・！？」

黄金と宝石（ヴィマーナ）の飛行船を見た兵士たちの驚きの声が聞こえる。

「で、でも、何で森の中に船が・・・？」

「そうッスよね。川も近くにありませんし・・・」

「ちっちっち。違うんだよ」

「どういうことですか、北郷さま」

「これは、空を飛ぶんだ」

一刀がそういったと同時に、兵士たちが絶叫する。
以前一刀もそんな感じの反応をしていたのを思い出す。

「龍は空を飛ぶからな。こちらも同じ土俵に立たなければならないだろう。」

「す、すげーっ！」

「どこで手に入れたんですか、こんなもの！」

「実はな・・・」

兵士たちに他言無用だと前置きして、俺の秘密を話す。
英霊という人間を超えた存在であること、その英霊を英霊たらしめるものが『宝具』と呼ばれるもので、俺の宝具である蔵から取り出したものであることを話した。

「・・・す、すげえ・・・。」

「そんな人と、一緒に戦ってたんですね・・・」

「ま、それ以外は人間と同じだから、気にしすぎるなよ？」

「了解ッス！」

「よし、じゃあ乗り込め！龍のいる山まで、一直線だ！」

「おーーっ！」

・・・

高速で飛ぶ飛行船。

雲が渦巻き、雷が轟いている山まで一直線に飛ぶ船の中で、最終確認をしていた。

「いいか、この飛行船には戦闘能力は無い」

「じゃあ、どうやって・・・」

「おいおい、あせるなよ。・・・無いなら、付け足せばいいんだ」

「おおっ！」

「なんと・・・」

そう思いついた俺は、雷を操る宝具やら砲弾を発射する宝具やらを組み込み、この飛行船を戦闘船に仕立て上げた。

「だから、みんなには砲撃を担当してほしい」

「分かったッス！」

「ここに全員の担当を書いておいた。それぞれの場所に説明書は置いておいたから、到着までに見ておいてほしい」

と言っても、引き金を引く、とか簡単なものなんだけど。

後は少し注意事項を書いておいただけだ。

・・・

「ギル！見えたぞ！龍だ！」

外の様子を見ていた一刀が、操縦している俺に向かって叫ぶ。

「分かった。総員、戦闘準備！龍が見えた！」

悠々と空を飛ぶ龍へと接近すると、龍もこちらに気づき、この船に匹敵する速度で迫ってくる。

「ちっ、流石に早いな・・・！」

だが、幻想種の龍とは少し違うようだ。

やはり、世界が違うからか、一般の人間でも数十人集まれば倒せる。

「とりあえず様子見だ！呉の！砲弾を発射してくれ！」

「応！」

魔術によってそれぞれの部屋と会話ができるようになっており、俺の目の前にはそれぞれの国の兵士たちと通信するための宝石がある。
そのうちの赤い宝石から呉の兵士の元気な応答が帰ってくると同時に、龍に向かってミサイルのような砲弾が放たれる。
これは宝具ゆえの威力であり、砲弾も魔力で構成されているため、龍の体でも効果はあるだろう。

「ギャオオオオオオオオオオッ！」

龍はその弾丸をいとも簡単によけた。

「やっぱり一筋縄ではいかないか・・・」

皮に傷をつけない様にしつつ、きちんとダメージを与えないといけないとは・・・。
龍は黄金の船の隣をすれ違うように通り過ぎると、すぐに転進し、船の後ろについた。

「ギル様っ！龍が後ろにつきました！」

「ああ、見えてる！蜀の！目くらましを！」

船の後部に取り付けたのは目くらましようの閃光弾のようなものだ。
急激に発光する火薬やらを配合した弾を、いくつか背後で爆裂させる。
背後で爆裂するので、自分たちにはあまり影響が無い、というのが利点だ。

「やりました！」

目くらましを食らった龍は、雄たけびを上げながら暴れだす。

「よし、袁紹の兄弟は龍に向けて電撃を発射しろ！」

「了解だ！兄者！」

「分かっている、弟者！」

金色の宝石から聞こえてくる会話の後、龍へ向けて雷が発射される。
袁紹の兄弟が担当しているのは、雷を起こす宝具を利用した雷発射装置だ。
一人が標準を定め、もう一人が鎚のようなものでスイッチを刺激する。
すると、宝具から発生した雷が金具に先導され、標準の方向へと電撃を発射できるのだ。
龍の皮に傷をつけないようにと取り付けたものだったが、何とか機能しているようだ。よかったよかった。

「兄者、当たったぞ！」

「ああ、弟者、直撃だな」

さらに混乱し、高度を下げた龍へと追撃をかける。

「魏の！網を落とせ！」

「了解ッス！」

船の下部に取り付けたのは、網である。
ただの網ではない。王の財宝（ゲートオブバビロン）に入っていた貪り食う（グレイプニール）ものを、漁師に

頼んで網にしてもらったものである。
人間以外、特に四足歩行の存在に対してかなりの捕縛力を誇る縄だが、龍には効果が薄いようだ。
もがきながら高度を落とすものの、拘束には至らない。
だが、これだけ行動を妨害すれば、安全に倒せるだろう。

「董卓の！光線を！」

「おうともさ！」

ヴィマーナには、元々太陽光をエネルギーに転換する装置がついていた。
それを攻撃用に転用したのがこのレーザー発射装置だ。

「よし、あたったぞ！」

光線は見事に龍を直撃した。
顔面を焼かれた龍は地面へと墜落し、しばらくじたばたとした後、動かなくなった。

「よ、よっしゃあああ！」

俺の隣で支援をしていた一刀が歓声を上げる。
宝石からも、兵士たちの喜びの声が聞こえる。

「よし、船を下ろして龍から素材を剥ぎ取るぞ」

水着に必要な皮と、華佗に頼まれた龍の肉。頼まれてはいないが、華佗に対する感謝の気持ちとして龍の内臓も持って帰ろう。雷で焼け焦げてないと良いんだけど。

そんなことを考えながら、船を地面ぎりぎりに下ろす。そこからはしごを下ろし、全員で龍の元へと向かう。
みんなの手には、龍を解体するための道具が握られている。

「皮は丁寧に剥ぐんだぞー」

「部位ごとに分けてくれよ。そうすれば、蔵に入れられるから」

「・・・ギルがいてくれてよかったなぁ。」

「どうしたいきなり」

一刀が遠い目をしながら泣き始めたので、あわてて理由を聞く。

「いや、ギルがいなかったらたぶん道中で三人はいなくなってただろうし、龍と戦ってる途中で暴露大会が開かれただろうし・・・」

「・・・頭でも打ったのか?」

「失礼な。まぁ、とにかく感謝してるってことだよ。」

「ありがとさん。・・・お、皮はそこの風呂敷にまとめて・・・そうそう。天の鎖(エルキドゥ)!」

王の財宝(ゲートオブバビロン)から伸びた鎖が、皮の入った風呂敷を宝物庫へと収納した。
肉も台車に載せ、宝物庫へ。・・・そろそろ、天の鎖(エルキドゥ)も怒るころだと思う。でも、便利なのでやめられないとまらない。
内臓は部位ごとに分けて箱の中へ。一つ一つが大きいので、箱もそれなりに大きくなる。
・・・まぁ、宝物庫はかなりの容量を誇るから、問題は無いだろう。

「よし、全部乗せたな。帰ろうか」

「おう！」

「・・・日帰りで龍を倒すことの恐ろしさにいまさら気づいたんですが、どうしたら良いでしょうか」

「？何ぶつぶつ言ってるんスか？」

「いえ、何でもありません。」

そういって黄金の船へと戻る途中で、真横からタックルされた。恐ろしくすばやい上にありえないほど気を抜いていたので、ずざざー、と面白いぐらいに地面を横滑りした。恥ずかしい。

「兄なのにゃ！どうしたのにゃ？」

「・・・それは俺のせりふなんだが・・・なんで俺に突撃してきた。」

「兄をみつけたからなのにゃー！」

よく見てみると、ミケトラシャムの三人も俺に引っ付いていた。

「そうか、よく考えたらここ、南蛮の近くだ。」

美以たちは帰省しているはずだったしな。ここにいても不思議じゃない。

「ま、ついでだ。美以、これから蜀に帰るけど、ついてくるか？」

「にゃ！当然なのにゃ」

何が当然なのかは分からないが、いつまでも倒れているわけにも行かない。

四人娘を引っ付けたまま、立ち上がる。歩きづらいがしょうがない。

この子達と接する上で大切なのは、あきらめることだ。

「・・・大将。あの人、四人の女の子を引っ付けたまま立ちあがったんだが・・・」

「ギルについては、話を聞いただろ？・・・超人なんだって」

後ろから諦めがたぶんに含まれたため息が聞こえたが、そっちに反応するより美以たちをかまうほうが大変なので、無視した。

「・・・みんな、帰るぞー」

帰りの船の中では、はやいのにゃー！とはしゃぐ美以たちをなだめるのに気をとられ、何度か山に船をぶつけた。

・・・

第二話　水着の素材のために（後書き）

ヴィマーナ大活躍。
グレイプニールで作られた網・・・宝具の無駄遣いとはこのことですね。
改造ヴィマーナは魔力の消費が激しいので、主人公は帰った後戦闘があったと勘違いした月に少し怒られました。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第三話　サーヴァントたちの日常を知るために（前書き）

今回はちょっと長いです。
区切ると少し短くなってしまうため、長いままで投稿させていただきます。

それでは、どうぞ。

第三話　サーヴァントたちの日常を知るために

龍の討伐から帰ってきた後、華佗の根回しのおかげで俺たちは「暑気あたりの民のために、龍の肉を手に入れてきた」ことになっており、半日ほど街を離れていたことについてはお咎めなしだった。
華佗が街のみんなへの分配計画を作っているはずなので、後は華佗と朱里たちに任せてきた。
俺たちは俺たちでやることがあるのだ。

「・・・ギル、皮は？」

「おいおい、英雄王の宝物庫をなめるなよ？鮮度も品質も一切落ちてないぞ。むしろ上がったといってもいい。」

「さっすが、ギルの兄貴！」

兵士たちからの変な呼び名が定着していることをスルーしつつ、服屋へと急ぐ。
皮と注文書を手渡し、職人たちに腕を振るってもらうためだ。
すぐに服屋へと到着し、宝物庫から取り出しておいた皮を渡す。
一刀は一度城に戻って注文書を取りに行っているから、後で酒屋で合流する手はずとなっている。

「・・・水着か」

蜀や呉の将たちの水着のデザインも一刀に一任したため、どんなのが出来るかは見てからのお楽しみというわけだ。
兵士たちもよく頑張ってくれたということで、水遊びの際の警備兵に任命することを、俺と一刀が約束した。

さて、後は酒屋へ向かうだけか。

・・・

「かんぱーい！」

八人の男が、杯をぶつけ、一気に酒を飲み干す。

「っかー！この一杯のために生きてるッス！」

「ははは、おいおい、俺たちはこの一杯のためなんかにあの激戦を潜り抜けたんじゃないぜ？」

「そうですよ！大将、ギル様、あの約束、忘れないでくださいよ？」

「大丈夫だ。・・・というか、すでに根回しは終わってる」

「なんと！？」

「ふっふっふ。俺の無駄な文官スキルをなめるなよ！」

「すきる？・・・よく分からないが、ギルの兄貴がすごいのは分かったぜ！」

みんな酔っている所為かテンションが高い。

すっかり出来上がった兵士たちと騒いでいると、華佗がやってきた。

「お、やってるな」

「ん？・・・華佗か。配給は終わったのか？」

「ああ。暑気あたりの人たちの分はもちろん、他の人たちの分まで確保できた。よくあんなに大量の肉を持って帰れたな。」

「あ、あはは。街の人たちのためを思えば、あんな量、どうってこと無いさ！な、ギル！」

「そうだな！」

流石に王の財宝（ゲートオブバビロン）に入れてきたからほとんど全身持って帰れたとはいえない。

それから華佗が龍を倒したときの話を聞いたり、華佗からこっそり龍の唾液から作ったという古の秘薬をもらったりと騒がしいまま夜は更けていった。

・・・とりあえず、月に使ってみるかな。

・・・

朝。暑さで目が覚める。

「・・・こう暑いと、仕事する気力も無くすなぁ。」

まぁ、あまり仕事は回ってこないし、三国同盟の要という立場なので、忙しいことも無いんだけど・・・。

それもこれも、俺の分の仕事をギルが代わってくれているからなんだよなぁ。

あいつは「お前にそんな立場を押し付けたお詫びだと思ってくれ」とか言ってたけど・・・。なんだか申し訳ない気持ちで一杯だ。

「街を巡回するか。」

以前俺の役職だった警備隊長のころを思い出してみるのも良いかもしれない。
そう思いながら、服を着替え、扉を開ける。
そうだ、サーヴァントが日常で何をしているのか見て回るのも面白いかもな。

「よし、そうと決まればまず・・・」

セイバーだな、ここからセイバーの巡回ルートに行くのが一番近い。
ギルは一番どこにいるか予想できないから最後にして・・・そういえば、ランサーのマスターも俺と同じ日本人なんだよな・・・。
あの二人は大体家にいるらしいし、二番目はそこに向かうかな。

「えーと、この時間はこのあたりをうろついてるはずなんだけど・・・」

街へ出てきょろきょろとセイバーを探す。
いつもより過ごしやすいとはいえ、まだまだ気温は高い。
服屋の親父が水着を完成させてくれれば、この暑さも吹っ飛ぶんだけど。

「おい、マスター。これで休憩は何度目だ?」

「っせーなー。こう暑いと鎧着てるだけで死にそうだってのに。何でお前平気なの?馬鹿なの?」

「・・・すごい言われようだな。おそらくだが、それは私が英霊だからだろう。人を超えた存在である私は、外気温の変化にも少しは耐性があるのだと思う」

「本気でうらやましいな。ちょっと俺も英霊になりたいんだけど」

「無理じゃないか？」

「だよなー」

会話の聞こえてきた方向を見てみると、セイバーとそのマスター、銀がいた。

セイバーは余裕綽々と言った表情をしているが、銀は木陰に座り込んでだるそうにしている。

「む？・・・これはこれは、天の御使いさまじゃねーか。あんたもくそ暑そうなカッコしてんなー。」

銀が俺に気づき、片手を挙げつつやはりだるそうに声をかけてくる。

「やぁ。まぁ、これが俺の制服だしな。」

「一刀か。今日はどうしたんだ？」

セイバーも俺に話しかけてくる。銀とは対照的に、涼しそうな顔をしている。

「巡回ついでにサーヴァントのみんなの様子を見学しようかなーと」

「ほう。それならばいい情報をやろう。先ほど向こうへギルが歩いていったぞ」

「本当か！？」

思わぬ情報に、大声を出してしまう。
一番見つけづらいと思っていたギルの情報がこんなに早く手に入るなんて。

「うむ。妙に上機嫌だったから声をかけたんだが、ちょっとな、とはぐらかされてしまった。」

「何かあったのかな・・・」

「けっ。ギルもすずしそーな顔してよー。まったく」

そう愚痴る銀に激しく同意する。サーヴァントってずるいよなー。
とりあえず、セイバー組の様子は十分分かったし、次はギルを追ってみるか。

「それじゃ、巡回頑張ってくれよ。俺はギルを追ってみる」

「ああ。暑さで倒れたりするなよ」

「大丈夫だって。それじゃな！」

そういってセイバーたちの元を離れる。ギルの歩いていったという方向は・・・市場だな。

・・・

「いないなー」

人が密集するのでかなり暑い。

密集している人の海の中でも、ギルは特別目立つ。
だからすぐに見つかると思ったんだけど・・・。

「おや？御使いじゃないか。」

そんな時、声をかけられる。

「あんたは・・・えっと、キャスター」

「いかにも。どうしたんだい、こんなところで」

「ギルを探してたんだ。見なかったか？」

「ギル？ギルならついさっき何か買って市場を出て行ったけど。妙に機嫌がよかったから、ちょっと引いたけどね。危うくパワータイプホムンクルスを出すところだった」

「どれだけびっくりしたんだよ・・・。で、その話、本当か？」

「ああ。私が嘘をつくメリットなんか無いからね」

「そっか・・・。ありがとう、キャスター！」

俺がそうお礼を言うと、いやいや別になんてことは無い、と謙遜してから

「それと、君はもう少し気をつけたほうがいい。君のように立場が高い者が、警備もつけずにこんなところを歩くべきじゃないよ」

「あ、ああ。忠告ありがとう。それじゃっ」

「気をつけなよ」

背後からの声に手を振って答えつつ、市場を抜ける。
ええっと、分かれ道か・・・。
右に行こう。
・・・しばらく道を歩いていると、メイド服を着た少女と出会う。
三国統一後に蜀でメイド服を初めて見たときは驚いたが、どうやらメイド服はギルが最初に広めたらしい。
それからというもの、服装のかわいさから、侍女になりたいという少女が増え、ギルから俺にメイド服のデザインをしてほしいと頼まれたこともある。
そのときは全身全霊を尽くして可愛いメイド服をデザインした。政務でもあんなに本気を出したことは無いと思う。

「あれ、一刀さんじゃん。どしたの？」

半そでにミニスカートという夏用メイド服に身を包んだ響が小首をかしげながらそういった。
隣にはアサシンも控えているようだ。・・・ようだ、表現したのは気配遮断によって認識しづらくなっているからである。

「いや、ギルを探してるんだけど・・・こっちには来なかった？」

「うーん。私もずっとここ歩いてるけど、ギルさんは見てないよ」

さっきの分かれ道から響の元へは一本道なので、響が見てないというのならこっちには来てなかったんだろう。

「そっか、分かった。ありがとね」

「良いってことよ。あ、ギルさんに会ったら桃香さまが呼んでたって伝えておいてー」

「了解。それじゃね」

「ばいばーい」

手を振る響とアサシンに別れを告げ、さっきの分かれ道へと戻る。

・・・アサシンって意外にフレンドリーなんだな。仮面で隠れて表情は分からないけど、手を振ってくれるなんてなかなかいい奴じゃないか。

再び分かれ道へと戻ってきた俺は、左の道を選んで進む。いつもみんなと飲む酒屋はこの通りにある。

「・・・」

「・・・あれー？」

その通りにある建物と建物の間。裏路地への入り口に、バーサーカーが立っていた。

「何でこんなところにバーサーカーが・・・。尚香ちゃんはどこいったんだ・・・？」

「・・・」

「・・・もしかして路地裏で何かしてるのか？」

そういってこっそり覗こうとすると

「おおおお

扉をノックすると、とたとたと規則正しい足音が聞こえ、扉が開かれた。

「おや？これは天の御使い殿ではありませんか！何か御用でしょうか！」

直立不動で敬礼をするランサーに事情を話し、手を下げてもらう。

「なるほど、ギル殿をお探しですか。奇遇ですね。先ほどまでここでお茶を飲んでいらしたんですが」

「ここに来てたんだ」

「ええ。ギル殿はマスターに生き方を教えてくださった方ですから、たまに様子を見に来てくれるのです。」

「おい、ランサー。長引いているようだが、誰が着たんだ？」

ランサーの背後から渋い声が聞こえてくる。男の生き様というか、よくテレビで見るようなハードボイルドな探偵のような重みを感じさせる声だ。

「はっ！ただいま、天の御使い殿がご来訪しております！」

「ほお、なんだ、依頼か？」

「いえ！ギル殿をお探しのようで」

「ああ、ギルか。さっきまで茶を飲んで煎餅食って帰ったが」

「煎餅・・・」

煎餅は、食べたいと言い出したギルが開発し、俺がそれを改良し、甲賀が大陸へと広げたお菓子の一つである。
甲賀の家の内装は古い日本家屋といった内装で、常に煎餅や緑茶などが常備されている。
忍者の活動中に寄った倭国からもいろいろと持ってきているらしい。

「どこに行く、とか言ってなかったか？」

「そうだな・・・そんなこと言ってたか、ランサー」

「ふぅむ・・・いえ、どこに行く、とは言っていなかったと思います。妙に上機嫌ではありましたが。」

・・・やっぱり、機嫌よかったんだな。

「で、どうするんだ、御使い。茶でも飲んでくか？」

「いや、ギルを追うから、また今度で」

「あいつがここを出て行ったのは十分ほど前だ。それじゃあな」

「ああ！ありがと！」

「では！」

びしっ、と敬礼してくれるランサーに手を振りながら、甲賀の家を後にする。

今までに手に入れた情報をまとめると、上機嫌で、市場で何か買い物をして、どこかへ向かっている、と。
・・・うーん、ぜんぜん分からない。

「取り合えず、このまま進んでみるか。」

この先には・・・川に作られた港と、森しかないけど・・・。

・・・

「お、御使い。元気か」

軽い調子で声をかけてきたのは、ライダーのマスターである瀧だった。

「元気っちゃあ元気かな。暑いけど」

「あー、あっちぃよなぁ。でもよ、ライダーとかはあの全身スーツで暑くねえとか言い始めるんだぜ。・・・やってらんねーなー」

ああ、それはとても同意する。

「あれ?ライダーは?」

話題に上りながらも、いつもは瀧と行動をともにしているライダーがいないことに気づいた俺は、瀧に聞いてみる。

「ライダーなら、森ん中で修行中だぜ」

「修行・・・?」

「新しいライダーキックのために、特訓するんだって」

「・・・流石は仮面ライダーだな」

妙に納得してしまうのが、仮面ライダーの恐ろしいところだ。

「月に一回くらい、こうして森の中とかで特訓してるぜ。御使いもどうだ？鍛えられるぞー」

特訓かー。ちょっとあこがれるよなー。

考えておくよ、と言おうとした瞬間、森からずずん、と地震のような振動を感じた。

「おー、派手にやってんなー。・・・で、どーするよ」

「い、いや、遠慮しておくよ」

流石にまだ死にたくないです。

「そか？・・・ま、良いけどよ」

そういえば、瀧も真っ黒なスーツに身を包んでいるのにそれほど暑そうじゃないな。

「なぁ、そんな真っ黒なスーツ着て、暑くないのか？」

「あ？ああ、素駆流守有通（すかるすうつ）のことか？」

・・・スカルスーツ？

そういう名前なのか。・・・ああ、髑髏をモチーフにしてるからか。

「そうそう」

「ああ、実はな」

そういって取り出したのは、青い石だった。

「キャスターから貰ったんだけどよ、これ、一定の風を送ってくれる石なんだ」

そう言って瀧は石をこちらに向ける。確かに、そよそよと風が送られてくる。

なるほど、ミニ扇風機か。

「いやー、これがあるだけで変わるもんだな。あっちぃのはかわらねえけどさ」

「便利だなぁ・・・。後で俺もキャスターに貰おうっと。」

「そうしろそうしろ。あると無いとじゃ大違いだ。」

「・・・あ、そうだ。なぁ瀧、ギル見なかったか？」

「ギル？」

「ああ。妙に上機嫌で森か川に向かってったみたいなんだけど。」

「んー。少なくとも森には来てないと思うぜ。街から森に行くにはここ通らないといけないけど、ギルが通ったのはみてないしな」

「・・・そっか。なら、港のほうかな」

「そうかもなー。」

「分かった。ありがとな」

そう言って瀧に手を振りながら川へと向かう。
瀧は石から送られてくるそよ風を受けながら、ぷらぷらと手を振り返してくれていた。

・・・

「・・・港までやってきたけど・・・」

特に変わったところは無いな。

「でも、水辺だからか涼しいなぁ」

しばらくここで休むのも良いかもしれない。
俺は港の端に腰掛け、足をぶらぶらとさせながら目をつぶった。
この大陸の川は対岸が見えないくらい広い川があるから、一見海と区別がつかないときがある。
子供たちも暑さを嫌ってか涼しいここで遊んでいるようだ。楽しそうな声が聞こえてくる。

「おー！三匹目だ！ギルすげーなー！」

「ねーねーギル、二番の竿引いてるよー。私がやってもいい？」

「なーギルー。まだ読み終わらないのかよー」

「ギルギルー、暇ー」

「浩太、三匹程度なら別にすごくないって。まだまだ釣るから、後で持って行け。魅々、何だって挑戦が大事だ。引いてみるといい。司、そっちの雑誌は読み終わったから読んで良いぞー。幸、後で遊んでやるから、あまり引っ張るな。」

・・・聞き覚えのある名前と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。ちょうど港の先端で、子供に囲まれる金色の男が、黄金の竿を四本立てながら、仁王立ちしていた。
間違いない。あそこにいるのが、この暑い中捜し求めていた人物だ。
・・・だが。

「・・・なんで釣り・・・？」

疑問に思いつつ再びギルの様子を見る。
数人の子供に囲まれて、当たりのきた竿を子供に引かせたり、釣った魚をあげたりと、いつも優しいギルがさらに優しくなっている。
子供には特別優しいのか、釣りの時は上機嫌になっていろいろとはっちゃけているのか・・・。

「この川は結構な魚が釣れる。もう少し中央に近づけば、もっと大物がいるだろうな。今度は船でも持ってくるか。」

「船ー！乗りたい！」

「船釣りかー。ギルー、父ちゃん呼んでもいいかー？」

「ギルギルー、船のそうじゅうしたーい！」

「船って面白いー？」

再び子供に囲まれるギル。ギルが何か言うたびに、子供たちから引っ付かれたり絡まれたりしているようだ。

・・・すごい人気だな。やっぱり民の中で人気ナンバーワンの将なだけある。

「・・・とりあえず、今日は帰ろう。」

なんだか、あのテンションのギルとはかかわりあいたくない。

はっはっはー！と大笑いしているギルを尻目に、俺は港を後にした。

・・・

最近、とてつもなく暑い。

サーヴァントである俺にはあまり気にならないのだが、月たちは夜寝苦しいらしい。

俺も生前の経験からその気持ちがとてつもなく分かる。この体を手に入れてなければ、暴れていたかもしれない。

しかし、月はこの暑い中俺の隣ですぅすぅと寝息を立てている。何でも、俺を隣に感じていたい、とのことだ。

たまに、だが、月とは逆の方向に詠がいることもある。今日はいないようだが。

「・・・すごい汗だな。」

暑さの所為か、月の額には汗が浮かんでいた。

それを拭いながら、寝台から降りる。

その際、布団がめくれて何も身に着けていない月の身体が見えてしまったので、そっと布団をかけなおす。
最近月は響や孔雀に変なことを吹き込まれているらしい。以前下着姿で布団に包まり待機していたのも、孔雀の入れ知恵らしい。
後で孔雀を問いただされねばならないだろう。
そんなことを考えながら着替えていると、扉が開かれた。

「ギル、今日の政務のことなんだ・・・け・・・ど・・・」

「ん？何か問題でもあったか？」

「ば、ばばばばばば・・・」

「ば？」

「バッカじゃないの！？着替えてるなら着替えてるって言いなさいよ！」

「・・・んな無茶な」

「うっさい！ヘンタイ！」

詠は大きな音を立てながら扉を閉める。相当恥ずかしかったらしく、耳まで真っ赤になっていた。
うーむ、やっぱり詠は照れてる姿が可愛いよなぁ。

「へぅ・・・ギルさん、おふぁようございます・・・」

詠が照れながら強がっている姿を妄想しながら服を着ていると、月が目をこすりながら寝台の上で体を起こした。

「おはよう、月。起こしちゃったか？」

「いえ・・・。あ、あの・・・」

「ん？」

「きょ、今日は何かご予定がありますか？」

「予定？・・・さっき詠が来て、何か用があるみたいなことを言ってたから、それ次第かな」

「そう・・・ですか・・・」

明らかにしょぼん、とした顔で自分に掛かっていた布団をくしゅくしゅと弄る月。
何かお気に召さないことがあったらしい。

「？・・・まぁいいや。なんにせよ仕事は午前中に終わるだろうし、一緒に昼でも食べるか」

月の昼休みまでに終わらせればまったく問題は無いな。
どうだ？と月に聞いてみると、月はさっきまでのしょんぼりした顔と打って変わって一瞬で嬉しそうな顔を浮かべた。

「はいっ！是非、ご一緒させてください！」

あー・・・なんだか、月に犬耳と犬の尻尾をつけたくなってきた。
どう見ても今の月は尻尾を振る犬である。こう、撫で回してから抱きつきたくなる感じとかそっくりだ。

「よかった。それじゃあ、昼休みになったら迎えに行くよ」

「はい」

微笑む月にそれじゃあ、また後でと声をかけてから、部屋を出る。
部屋の外では、壁に寄りかかった詠が腕組みをして待っていた。
とんとんと腕を叩いている指が詠の苛立ちを表現しているようだ。

「遅い」

「悪いな。ちょっと手間取ってた」

「ふん。・・・ほら、行くわよ」

「ん。そうだ、手つないでいくか」

俺がそう言って詠の手をとると、詠は全身をびくりと震わせて驚きをあらわにした。

「な、なに勝手に手繋いでるのよ！」

「まぁまぁ。あまり大声出すと暑くなるぞ」

「うぅ～・・・。」

恨めしそうな声を出しつつ、それでも手を離さないのはやっぱり詠らしいと思う。
政務室へ向かう途中、俺の顔を見つめるくせに、俺と目が合うと慌てて視線をそらす詠を存分にからかった。

今日も良い一日になりそうだ。

・・・

「ふんふんふふーん」

「んにゃ？月ちゃんご機嫌だね。なんかあったの？」

「え？・・・あ、えっと・・・」

「・・・なんかあったみたいだね。その様子を見るに・・・ギル関係か。」

「へぅっ！？」

「そういえば最近は月と詠でギルの部屋に入り浸ってるみたいじゃないか。いやはや、この暑いのによくやる。」

「ばっ！ぼ、ボクはそんなことしてないわよ！」

「ほっほう？」

慌てて反論した詠に、孔雀が詰め寄る。

「『ボクは』？気になるなぁ。じゃあ月は何してるのかなぁ。何で月がしてることを詠が知ってるのかなぁ・・・？」

「あ、あう、し、ししし・・・知らないっ！」

「あ。・・・いじめすぎたか」

いやー、ついやりすぎちゃうよね、と後頭部をかきながら響に向かって笑いかける孔雀。

「んまぁ、詠ちゃんの慌てる姿って可愛いからねー。分からないでもないよ？」

でもま、やりすぎだよねー、と冷静に響に責められ、うっ、と言葉に詰まる孔雀。

そんなやり取りに月は苦笑を浮かべるしかないが、自分の話題から外れて少しほっとしていた。

「・・・ま、それはそれとして」

「そうだね。それはそれとして」

先ほどの雰囲気から一転、にやにやと笑う響と孔雀。

「この暑いのに、夜な夜なギルと何をしてるのか、聞いてみたいなー」

「この暑いのに、詠ちゃんと一緒になってギルさんと燃え上がっちゃってるのかなー？」

「あ、あはは…。へぅぅ、助けて、ギルさぁん・・・」

休憩時間のほとんどを使って、月は最近アーチャーの部屋で何をしているのか、大部分を白状させられた。

・・・

「月ー？」

月が昼休みに入ったのを確認してから、昼飯を食べるために迎えに来たのだが・・・。

「あ、ギルさーん！」

「レディを待たせるものじゃないよ、ギル」

「お、遅かったじゃない！」

「へぅ、ごめんなさい、ギルさん」

侍女組が全員集合していた。なんじゃこりゃ。

「・・・どういうこと？」

「あの・・・」

おずおずと前に出た月からの説明によると、最近俺の部屋に入り浸っていた月と詠のことを根掘り葉掘り聞かれ、さらについでに今日の昼の予定も聞かれてしまった。

孔雀はその昼食について行こうと言い出し、響もノリノリで賛成。

後でその話を聞いた詠も参加することになり、こうして侍女組四人が集まったらしい。

「そっか。ま、たまにはこういうのもいいだろ。」

また今度、埋め合わせするからな、と言いながら頭を撫でる。月が

残念そうにしているのは、たぶん二人っきりじゃなくなったからだろう。
それくらい、俺にだってわかるのです。もう誰にも鈍感とは言わせない！

「は、はい・・・！」

案の定、嬉しそうにする月。よしよし、俺の判断に間違いは無かったようだ。

「さて、それじゃ昼食に行こうか。どこで食べようかなぁ」

「んー、そういえばお城出てちょっといったところに新しく出来たお店あるんだけど、そこ行ってみない？」

おや、そんな情報知らないぞ。
新しい店なんか出来てたんだな。

「じゃあ、そこにするか。」

「おー！」

メイド服を着た少女三人と執事服の少女に囲まれながら、日差しの下を歩く。
今日はまだ風があるので過ごしやすい。熱中症で倒れることも無いだろう。

・・・

「あれ？」

「どうかしましたか、隊長」

「いや・・・あっちから歩いてくるの、ギルじゃないか？」

「ギルの兄さんやて？・・・なんか、すごい光景やな」

「・・・なんていうか、すごい王様っぽいのー・・・」

沙和や真桜の言うとおり、通りの向こうから歩いてくるギルの姿は半端じゃなかった。

メイド服の少女三人と執事服を着た少女一人の計四人に囲まれながら歩いてくるギルは、身にまとう王気（オーラ）の所為で、人ごみをモーゼのように割って歩いてくる。

ギル自身は四人と談笑しながら歩いているため気づいていないのだろうが、将の散歩、というよりは王の凱旋といった雰囲気をかもし出している。

・・・昨日見た釣りしているギルとは似ても似つかないな、と思いながらギルを見ていると、ギルもこちらに気づいたらしい。

気さくによお、と手を上げながら近づいてくる。

「一刀じゃないか。巡回か？」

「ん、あ、ああ。」

少し緊張してしまったようだ。言葉がうまく出てこない。

・・・なんでいつもと違うんだろう、ギル。

「今日はなんかあったのか？その・・・王気（オーラ）が出てるけど」

遠まわしに聞くのも変なので、直球で聞いてみた。
ギルは首をかしげながら、何か変か？と逆にこちらに聞いて来る始末。

「・・・いや、ほら、いつもは一人なのに、今日は大勢連れてたり、人ごみを割って歩いてきてたし・・・」

俺がそこまで説明してようやく気づいたのか、ギルはきょろきょろと周りを見渡して、しまった、とつぶやいた。

「カリスマ切るの忘れてた。みんなと出かけるからって浮かれてたなぁ」

そう言って目をつぶり、ふぅと短く息を吐くと、先ほどまであふれ出ていた重みのようなものが和らいだ。
完全に無くなった訳ではなく、ギルからは依然として人知を超えた存在であると証明するかのような『何か』が漏れていたが。

「教えてくれて助かったよ。」

にこりと笑いながらそう言ってくるギル。
うーん、こういう人当たりのいいところとかがモテる秘訣なんだろうか。
メイドと執事少女を侍らせるなんて正直羨ましいぞ、と思っていたが、うん、ギルぐらいの器量がないと無理なんだなぁと再認識した。
俺も、凪たちに愛想をつかれないような隊長でいないとな、なんて気合を入れなおしてみる。

「いやー、通りで道が通りやすいわけだ。そりゃ人がいなきゃ通りやすいよな。」

少しだけ恥ずかしそうに笑うギルに俺も笑いを返しながら、さっきの言葉を思い出した。
みんなと出かけるといっていたが、どこかへ行くのだろうか。
聞いてみると、ギルはああ、そうだぞと言って

「これからみんなで昼飯だ。一刀たちも一緒にどうだ？奢るぞ」

一瞬、心を揺さぶられた。
最近沙和や真桜、たまに凪に昼飯を奢ってあげている所為か、俺の懐はすでに若干寂しい。
その点、ギルは黄金率というスキルで特技が金持ちとかふざけたことを言い出すくらいに金がある。
以前数え役満姉妹に気前良くおごっていたのを見て、やっぱり真似できないなとギルを見直したことさえあるのだ。
そんなギルからのお誘い・・・。

「そ、そんな・・・。ギル様に食事を奢っていただくなんて恐れ多いこと・・・！」

「でもでも、お腹空いたのー」

「そやなぁ。そろそろ昼時やしなぁ」

「おい、沙和、真桜。お前たち・・・」

そこまで言って、凪のお腹からくぅ、と可愛い音がした。

「――っ！」

顔を真っ赤にしてお腹を隠すが、たぶんそれじゃ意味が無いと思う。
ギルは柔らかく笑いながら、遠慮するなよ、と凪を説得する。

「ま、今日はお言葉に甘えようぜ、凪」

「た、隊長・・・。うぅ、それじゃあ、ごちそうになります・・・」

「おう、任せろ」

それからギルは侍女の少女たちにいいだろ?と確認を取っていた。
もちろん、と即答してくれたのは少し嬉しかった。

「で、どこに行くんだ?」

隣を歩くギルに聞いてみる。隣と言っても、ギルの周りにはすでに
四人の少女がいるので、少し離れているのだが。

「ん?響が新しい店を見つけたとか言ってたから、そこに行ってみ
ようかなって」

「へえ。新しい店かぁ」

「あ、あれだ!」

ギルの一歩前を歩いていた響が指を指した。
そこには、大きな文字で泰山、とだけ書かれていた。

「・・・俺、すごくいやな予感がしてきたんだが。」

「?どうしたんだよギル」

「いや、うん、俺の勘違いだよな、たぶん」

顔が強張り、変に汗をかき始めたギルに首を傾げつつも、泰山へと入店した。

「いらっしゃいませー」

店員さんに人数を告げると、すぐに案内してくれた。
案内された席は二つ机が並んでいる所で、やはりというかなんと言うか、ギルの周りには四人の少女が集まっていた。
ギルの隣には月ちゃんと詠ちゃん。対面には響と孔雀ちゃんだ。
いまだこわばった顔で、ギルは採譜をめくる。

「お、凪、これ見てみ。激辛マーボーやて。」

「おお・・・。じゃあ、私はこれで」

そう言った凪を、ギルはありえないものでも見るかのように見つめていた。
その後何かぶつぶつつぶやいていたが、俺には外道とか今後ともよろしくといった断片的な言葉しか聞き取れなかった。

「うーん、俺はチャーハンで良いかな。月たちは?」

「んー。じゃ、私もチャーハン!」

「ボクはこの日替わり定食っていうの貰おうかな」

「ええっと、私はギルさんのチャーハンを少し貰えれば大丈夫です。

」

「なんだ、あーんしてほしいのか？」

「へぅっ！？」

にやにやと笑うギルが、月ちゃんをからかう。
顔を真っ赤にした月ちゃんが両頬に手を当てて恥ずかしがる姿を見て、ギルは楽しそうに笑いながら月ちゃんの頭を撫でた。

「ぼ、ボクも」

「ん？」

「ボクも・・・ギルから、貰いたいな。・・・ダメ？」

「駄目な訳ないだろ。ふむ、じゃあ俺のチャーハンは大盛りにしたほうが良いかな」

少し考え込んだギルだが、すぐに顔を上げてこちらに顔を向ける。

「で、一刀たちは決まったか？遠慮せずにじゃんじゃん食べてくれよ」

「えーっと、じゃ、俺は普通の麻婆豆腐に青椒肉絲。」

「私は先ほどの激辛麻婆豆腐で。」

「んじゃうちは・・・焼売と・・・」

こうして遠慮を知らない真桜と沙和が結構な量を頼んでいたが、ギルは良く食べるなぁ、と笑うだけだった。
・・・いやー、あれが余裕っていうやつか。すごいなぁ・・・。
しばらくして、みんなの前に料理が並んでいく。
おお、良い匂いだ。食べなくてもおいしいと確信できる。

「よし、じゃあいただこうか。」

ギルの音頭で全員が食べ始める。
大量に並んだ料理を前に嬉しそうな顔をする凪たちと、ギルにあーんされて嬉しそうにしている月ちゃんと詠ちゃん。
・・・詠ちゃんがあんなに乙女チックな表情をするのを、はじめてみた。

「ギルさんギルさん、私にもあーん」

「まったく、響もか。ほら、あーん」

「えへへ・・・あーん。はむっ」

テーブルに乗り出すようにしてギルからチャーハンを貰った響は、ギルの両隣にいる二人と同じように幸せそうな顔をして席に戻る。
それを見て母親のように微笑んだ孔雀ちゃんが・・・。

「よし、次はボクだね。あーん」

「孔雀も?珍しいこともあるもんだ。ほら、あーん」

「あむっ」

響と同じようにしてギルからチャーハンを分けてもらった孔雀は、いつも浮かべている微笑みからさらに少しだけ口角を上げて席に戻った。
もぐもぐと口を動かす孔雀はいつものようなクールさが抜けて、少女らしい表情を浮かべていた。

「うん、おいしいな」

それを見届けたギルは、自分でもチャーハンを掬って口に運ぶ。
そんなやり取りを見ていた真桜が、怪しい笑みを浮かべ、自分の目の前にある皿から焼売を取ってギルの方を向く。

「ギルの兄さん、焼売も良い感じや。食べてみ？」

そう言って真桜はほら、あーん、とギルに迫る。
両隣・・・さらには対面からの恨めしそうな視線に気づかないまま

「お、本当か？」

なんて言いながら真桜から焼売を貰っていた。
その瞬間の威圧感の増加は、食事を取りに来てたのにいつの間にか戦場に迷い込んだようだった。

「た、隊長！」

「ん？どうしたの、凪」

「え、えっと、その・・・あ、あーん・・・」

それに触発されたのか、凪までそういいながら麻婆豆腐を乗せたレ

ンゲを差し出してきた。
照れながら差し出してくれる凪の可愛さに和みながら、その麻婆豆腐をぱくっ、と食べる。

「おー、辛いのもなかな・・・か・・・？」

最初はピリ辛程度だった辛さが、口の中で爆発する。

「か、らっっ！？」

ありえないほどの辛さ・・・いや、痺れが舌を攻撃してくる。
こんなもの、凪は涼しい顔で食べてたのか・・・！？

「一刀！？・・・全く、外道麻婆を食べたのか。仕方ないな・・・」

ばたばたと暴れ始めた俺に一瞬驚いた声を上げたギルも、すぐに状況を把握してくれたらしい。
宝物庫の中から瓶入りの牛乳を取り出し、手渡してくれる。
辛い料理を食べた後には牛乳がよいでしょう。

「んぐ、んぐ、んぐ・・・ぷはーっ！」

俺の反応がすごかったからか、他のみんなも凪の頼んだ麻婆豆腐に興味を持ってしまい、全員が一度ずつ悶絶して、ギルの牛乳のお世話になった。
まぁ、なんだかんだ言いつつも楽しい食事会になったと思っている。

・・・

第三話　サーヴァントたちの日常を知るために（後書き）

川に港や泰山のお店はホロウネタを書きたいがために創作したものであり、実際にはたぶん無いものだと思います。

あーん、ってたぶん全男の夢とか浪漫だと思っています。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第四話　蜀での水泳大会に行くために（前書き）

長いです。切ると短く、中途半端になるため、長いままで投稿させていただくことにしました。

それでは、どうぞ。

第四話　蜀での水泳大会に行くために

いつもの政務中、桃香からこんなことを言われた。

「久しぶりに、ご飯を一緒に食べに行かない？」

「・・・そうだな、久しぶりに一緒に街へ行ってみるか」

「やったっ。それじゃ、がんばって終わらせようねっ」

「おお、やる気だな。」

「もっちろん！」

そう言って先ほどよりも早く筆を動かす桃香。
よほど街で息抜きできるのが嬉しいらしい。
これは、俺がしっかりとリードして、桃香に楽しんでもらわないとな。
俺も桃香に負けないように筆を動かしつつ、どこに行こうかと頭の中でプランを組み立てていった。

「・・・よしっ、終わったよ、お兄さん！」

「ん、俺もだ。じゃあ、行くとするか」

「はーいっ」

元気に返事をする桃香を見て自然と笑みが浮かんでしまう。
さて、どうするかなぁ。

・・・

「桃香はどんなものが食べたいんだ？」

「ん？んー、ちょっと暑いから、軽いものが食べたいかなぁ。」

「ふむ・・・じゃあ、饅頭にするか。アレくらいなら、ちょうどいいだろ」

「うんっ」

そんなことを話しながら目的地まで歩いていく。
最近暑いねー、とか、他愛も無い話題でも、桃香は嬉しそうに話す。

「お、ここだ。すいませーん」

「はいよ！おや、ギル様じゃないか。今日は劉備様と一緒なんだね。」

「へー、お兄さん。今日『は』ってどういうことなのかなぁ。」

にっこりと笑顔でこちらを振り向く桃香。

「どういうことなんだろうなー。と、桃香は何にするんだ？」

「・・・じゃあ、肉まんにしようかな」

「分かった。肉まん二つください」

「はいはい、ちょっと待っててくださいな」

そう言って奥へと引っ込むおばさん。
いつも大量に買うときにはお世話になっているので、顔も覚えられていたのだろう。
・・・いつも、鈴々とか恋たち大食いの将とくるからなぁ。タイミングが悪かったな。

「はい、肉まん二つ。お待ちどうさま」

「ありがと。代金は・・・っと」

こっそり宝物庫を開き、お金を取り出す。
それを渡すと、おばさんはうん、ちょうどだね。まいどありー、と大きな声をあげた。
俺と桃香は饅頭屋を後にして、歩きながら肉まんを食べる。

「あ、あそこの木陰に座ろ、お兄さん」

「おお、いいな。涼しそうだし。」

そう答えると、桃香は俺の手を引いて小走りで木陰へと連れて行く。
そのまま木の根元へ座り込んだ桃香に習うように、俺も腰を下ろす。

「ふえー・・・。涼しいねえ」

「年寄りみたいだな」

「むー！女の子にそういうこと言ったらだめなんだよ、お兄さん！」

そう言って肉まんを持っていない手で俺の頭をぽかぽかと叩いてくる桃香。
ごめんごめん、と謝るが、心が篭ってなーい！と機嫌を直してくれない。

「ちょっとした冗談だよ。ほんとにそんなことは思ってないから」

「・・・ホント？」

「ああ。」

「なら、いいよ。」

「ありがと」

そう言って桃香の頭を撫でる。前に撫でてほしいって言ってたしな。
突然のことに驚いたみたいだったが、すぐにこちらに頭を寄せてきた。

「ん～・・・。お兄さん、頭撫でるの上手だね」

「慣れてるからかな。」

「ふふ。・・・ん、なんか、ねむ、く・・・」

桃香は呟く様にそういうと、俺に完全に体を寄りかからせてきた。
寝息が聞こえるので、眠ってしまったんだろう。

「全く、また睡眠時間削って勉強してるのか？」

以前も桃香は他の王に負けないように、と政務の勉強をしていたことがあった。
その時は睡眠時間を削って勉強していたためか、常に眠そうな顔をしていたのを思い出した。

「・・・にしても、こっちのほうが肉まんっぽいよな」

俺の腕を抱きこむようにして眠ってしまったので、桃香の二つの凶器が腕に押し付けられているのだ。
全く持ってけしからん。

「ふにゅう」

奇妙な声を上げながら、桃香がさらにこちらに密着してくる。

「全く、可愛いなぁ、うちの王様は」

ゆっくりと腕から離れさせて、胡坐を掻いている俺の脚に桃香の頭を乗せる。
女の子が男に膝枕をされて嬉しいのかは分からんが、座ったまま寝るよりはましだろう。
幸いにも木の周りは芝が生い茂っている。体を痛めることは無いだろうが、あまりにも寝すぎるようだったら城に行って寝かせないとな。
桃香の前髪が額に張り付いていたので、撫でるついでにかき上げる。
さらさらとした手触りが心地良い。

「昼休みが終わるまでは・・・んー、体感的に三十分くらいかな。
それまでは、しばらく寝顔を楽しむか」

桃香は午後からは何もないはずだし、部屋で寝かせたほうがいいだろう。
通りがかる人たちの暖かい視線を受けながら、俺はしばらく桃香の寝顔を楽しんだ。

「お兄さん・・・だいすきぃ・・・」

「ありがとう。俺も大好きだ」

「えへへぇ・・・」

寝言を言う桃香も、とてつもなく可愛い。
これが・・・癒しか。

・・・

「お兄さん、大好きだよ」

「ああ、俺も大好きだ。」

確実に夢だと分かる夢ってあると思う。
たぶん、これはそんな夢。
でも、なんだか暖かいものが胸に広がるこの感覚は、夢じゃなきゃいいのになぁって思う。

「ほんとに、私のこと好き?」

「疑り深いなぁ。じゃあ、証明しようか」

そう言ってお兄さんの手が私の頬をさらりと撫でて、私は瞳を閉じ

る。
うっすらと開けたまぶたから、近づいてくるお兄さんの唇を捉えて、あと少しで触れる・・・。

「っはうっ!?」

「おおう!?びっくりした・・・」

・・・なーんてところで、目が覚めてしまいました。
突然奇声を上げた私に驚くお兄さんは、変な夢でも見たか?と言いながら私を背負いなおしました。
って、おんぶされてる!?

「な、なんでおんぶ!?」

「え?いやほら、桃香途中で寝ちゃったろ?俺の昼休みも終わりそうだったから、城で寝かせたほうが良いかなぁって。」

いやぁ、気持ちよさそうに寝てたから、起こすのも可愛そうだなと思って、と言うお兄さん。
ここからだと後姿しか見えないけど、きっと優しい笑みを浮かべてるんだろうなぁ。
・・・お兄さんの背中、広いなぁ・・・。また、寝ちゃいそう。

「まだ眠かったら寝てていいぞ」

「・・・ふぇ?でも、重くない?」

眠気でちょっと反応が遅れた上に変な返事になっちゃったけど、お兄さんは気にした風も無く

「重くなんか無いぞ。むしろ軽いくらいだ。ほら、俺ってサーヴァントだし」

「むぅ、それじゃあ、一般の人からしたら重いってことー？」

なんだかちょっとお兄さんのことを苛めたくなって、そんな意地悪なことを言いつつ首に回した手をきゅっと締める。

お兄さんとさらに密着しちゃって、ちょっと恥ずかしいけど、それ以上に嬉しいと感じる。

「うお、苦しい苦しい。大丈夫だって。普通の人が背負っても、桃香は軽いから」

「ふーん。そーなんだー」

「うむむ、これ以上はまずいぞー」

「知らないっ。もう寝るっ」

「おう、おやすみー」

こんなに自分勝手に振舞っても、お兄さんはさらっと受け入れる。

・・・んもう、そういうの、反則なんだから。

・・・

再び寝息を立て始めた桃香を背負って城へと戻る。

いつぞや共に戦った兵士たちがさすが兄貴ですっ！とか良く分からないことを言っていたが、気にしないことにした。

「あれ?ギルじゃない。」

「お、詠。ちょうどよかった。桃香の部屋ってどこだ?」

「へ?桃香の部屋?・・・って、何であんたの背中で寝てるわけ・・・?」

「まぁまぁ。とにかく、部屋に案内してくれよ」

はぁ、仕方ないわね、付いてきなさい。と歩き始めた詠の隣に並ぶ。すると、詠はもじもじとしながら話しかけてきた。

「・・・もしかして、桃香と・・・その、なんかしてきたの?」

「んー、まぁ、いろいろと」

「っ。・・・そう、なんだ」

「ああ。よっぽど疲れてたんだろうな。」

「疲れるようなこと、したんだ」

詠は何かぼそりと呟いたが、俺の耳には届かなかった。
何て言ったんだ?と聞く前に、詠は立ち止まって口を開く。

「ここ、桃香の部屋よ」

「お、ありがと。開けてくれるか?」

「・・・仕方ないわね」

そう言って扉を開けた詠の後ろに続いて、桃香の部屋へと入る。
桃香の部屋では香を焚いていたのか、甘い香りがする。
優しく、ゆったりと包み込むような甘い香りを感じながら、詠が案内するとおりに寝台へと向かう。

「よ・・・っと」

桃香を寝台に横たわらせると、薄い布団をかけておく。
いくら暑いといっても、布団を全くかけないでおくと体を冷やしてしまうからだ。
女の子が体を冷やすと良くないと前に何かの本で読んだことがある。

「ねえ、ギル？」

「なんだ、どうかしたか？」

「・・・今日の夜、あんたの部屋に行ってもいいかしら」

「構わないぞ。ただ、午後から政務があるから、少し遅くなるかもしれない」

「ん、大丈夫。待ってるわ」

その後、ほら、政務室まで行くわよ、と言って俺の手を引く詠。
おお、詠から手を握ってくれるなんて。

・・・

日も沈み、夜空には星が輝きだした頃。
政務を終わらせた後、手伝ってくれた朱里と愛紗に礼を言ってから、帰路へとついた。
すでに詠は部屋で待っていることだろう。
自分の部屋へとたどり着き、扉を開く。

「遅れた、ごめんな」

「べ、別に、気にしてないわ」

俺が入ってきたことに気づいた詠は、肩をびくりと震わせた。
灯りも点けず、寝台の上に座って待っていたらしい。

「ありがと」

そう言って俺は詠の隣に腰掛ける。
それで、何かあったのか？と聞くと、詠は俯いたまま

「・・・あんたってさ、月とはもう・・・し、したの？」

「したって・・・ああ、そういうことか。ああ、したよ」

それを聞いた詠は、そう、と一言つぶやいてから、顔を上げた。
潤んだ瞳で俺の顔を見上げながら、詠は口を開く。

「その・・・ボクのことも、抱いてほしいの」

・・・なるほど、あのちょっと追い詰められていたような顔はそのことを考えていたからか。
思えば、月も下着で布団に包まっていた日、同じような顔をしてい

たように思う。

「いいのか？・・・痛いらしいぞ」

「だ、大丈夫よ！あんたくらい、受け入れてやるんだから！」

それならいいけど、と言いながら、俺は詠を抱き寄せる。

んひゃ、と可愛い悲鳴を上げながら胸へと飛び込んできた詠と一緒に、寝台に倒れる。

俺の上に乗っかった詠に口づけをして、ゆっくりと服に手をかけていく。

「途中で怖くなったりしたら言うんだぞ？」

「そんな事言わないわよ！」

憎まれ口を叩きつつも、詠の顔は真っ赤に高潮していた。

・・・

鳥の鳴き声で目が覚める。なんて清々しい目覚めだろうか。

隣に眠る詠を起こさないように気をつけながら、体を起こす。

ぎっ、と寝台が音を鳴らし、その音を聞いたからか、詠がんぅ、と声を上げる。

少しの間のあと、寝息が聞こえてきたので、起こしたわけではないようだ。

寝台から降りて、服を着替える。

・・・ちなみに、だが、俺の体の汚れはほとんど無いといってもいい。

なぜなら、鍛錬の末取得した魔力放出Ｅがあるからだ。

「よっと」

効果としては、『自身の魔力を外に放出し、若干の衝撃を発生させられる』程度だが、体の汚れを吹っ飛ばすにはちょうどいい威力だ。

「ん、大体取れたな」

しかし、服を着た状態から、もしくは裸からの鎧の脱着は一瞬なのに、裸から服を着るまでは自らしなければならないとは。

・・・いや、そこまでずぼらになる気は無いのだが、若干の疑問はある。

まぁいいや。とりあえず、詠の体を拭くための水とか持ってくるかな。・・・かなり、べとべとだし。

ああ、シーツも変えないといけないな。血とかって落ちないしなぁ・・・。

「さて、今日も頑張りますか」

朝食の時間まではまだ少しある。水を汲んできて、詠を起こして、体を拭けばいいか。

そうと決まれば行動しよう。

桶を片手に、扉を開く。ここから一番近い水汲み場はどこだったかなぁ。

・・・

あの後、恥ずかしがる詠の身体を隅々まで拭いてやり、朝食を食べた。

今日は街の巡回と称して、服屋の職人から水着を受け取りに行かな

ければならない。
後で一刀と合流して、服屋へと行くべきだな。
そんな事を考えながら一人城の中を歩いていると、一刀が壁に寄りかかって腕組みをしていた。

「・・・ギル」

きらり、と白い歯を光らせながら、一刀は俺を呼ぶ。
俺は一刀の前で立ち止まり、一刀のほうを見ないまま口を開く。

「服屋はなんと？」

「完成させた、と言っていた」

使いの人から受け取ったと思われる竹簡を一刀から手渡される。
ざっと中に目を通すと、おおむね一刀の言ったとおりのことが書いてあった。
完成したので、受け取りに来て下さい、という旨の内容だ。

「ならば、今日にでも受け取りに行こうか」

気分は怪しい取引をしている業者だ。
にや、とニヒルな笑みを浮かべた一刀が、無言でサムズアップする。
こつこつと二人分の足音を響かせながら、俺たちは服屋へと向かった。
・・・後で聞いた話によると、あまりにも鬼気迫る雰囲気を纏っていたため、兵士たちはドン引きしていたという。

「ごめんくださーい」

一刀が服屋へと入っていくのに続いて、入店する。

「おお、これはこれは、いらっしゃいませ、お二人とも。」

「こんにちわ。例の品は？」

「出来ていますとも。・・・量が多いのですが、大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だよ。・・・なぁ、ギル？」

「もちろんだ。俺の蔵に限界の文字は無い」

「はぁ、そうでございますか。それでは、こちらへ」

そう言って、店主は俺たちを裏へと通してくれた。

そこには、ずらりとならぶ水着の列。

「おお・・・すばらしい・・・！」

一刀が立ち並ぶ水着を見て感嘆の声を上げる。

「完璧だよ！ありがとう」

「いえいえ。こちらも、龍の皮を裁縫するという経験をさせていただき、嬉しく思っていますよ」

その後、一刀には店主への支払いをするという事で表に連れて行ってもらい、その間に俺は宝物庫を開ける。

「王の財宝（ゲートオブバビロン）」

真名を開放すると同時に、水着たちが地面へと沈むように消えていく。

きちんと宝物庫の中へ収納されたのを確認してから、俺も表へと戻る。

事前に確認した作戦通り、一刀が店主相手に時間稼ぎのための世間話に興じていた。

「一刀、終わったぞ」

「お、そうか！じゃあ、俺はこれで」

「あ、はい！毎度あり！」

服屋を出て、城へと戻るまで、俺たちは無言だった。

だが、そこには確かに男の友情があった。

「・・・それじゃあ、今夜、いつもの酒屋で」

「了解。それまでに、予定をつめておく」

「ああ、頼んだ」

そう言って、俺たちは拳をぶつけ合い、分かれた。

「・・・よし、後は・・・っと」

・・・

俺の財力によって貸切になった酒屋で、俺は黒板（のようなもの）を前に口を開く。

「・・・これで全員か？」

「ああ」

「よし、それでは、これから計画を発表する。」

俺以外の男が、わずかに首を縦に振る。
その視線は、期待に彩られており、どれだけ楽しみにしていたかが伺える。
黒板にチョーク（のようなもの）で文字を書き記す。

「まず、川へ行く順番だ。まずは鈴々や朱里、雛里といった暑さに強くない小さい子が多い蜀からいこうとおもう」

数日前に暑さで雛里が倒れたばかりだし、緊急性が高いのは確かだ。

「それから、魏。最後に、一番暑さに耐性がある呉を連れて行こうと思っている」

うんうん、と男たちが頷く。

「そして重要なのが、見張りの兵の位置だ。」

ざわ、と雰囲気が変わるのを感じる。
俺は全員の性癖や所属する国を考慮しながら立てた兵の配置図を黒板に張って説明を始めた。
兵たちは納得してくれたようで、露骨に喜びをあらわにするものや

こっそりとガッツポーズをとるものなど、さまざまな反応をしていた。

「後、一刀の事なんだが・・・」

ごくり、と一刀がつばを飲み込む音が聞こえた。

「一刀には、水着の発案者として、これからの水着の有用性を確認するため、として俺と一緒に前線に出る事になる」

「そ、それってつまり・・・！」

「ああ。水着の有用性を確認するためには観察しないといけない。・・・そう！じろじろと水着姿を見ても、文句を言われない立場なのだ！・・・あ、月と詠のをじろじろ見たら王の財宝（ゲートオブバビロン）な」

「あ、ああ。大丈夫だ。節度を持って、怪しまれない程度にチラ見するから。」

「ならいい。総員、節度を持って楽しく見ようじゃないか！」

「応！」

俺と一刀のことについては、兵士たちから文句が出ると思ったが・・・特に反発もなく決まったな。

「俺と一刀だけみんなに近くなるが、お前たちはいいのか？」

俺が単刀直入に聞いてみると、兵士たちはなに言ってんですか、と笑い

「そもそも、大将が言い出して兄貴が船を出してくれなかったら、俺たちは水着を見ることすら出来なかったんだぜ？」

「そうッスよ。遠くから見られるだけで満足ッス！」

「お前ら・・・」

一刀の瞳が、感動で潤む。俺も、少し感動してきた。

なんて・・・なんていいやつらなんだ・・・！

一刀・・・お前、いい仲間（とも）を見つけたな！

「よし！計画の開始は明日！みんな、体調を整えておけよ！」

「応！！」

その後、俺たちは翌日に響かないように自重しながら酒を飲み、騒いだ。

おかげで程よく疲れる事が出来て、ぐっすり眠れるだろう。

俺も明日の天気がよくなることを願いながら眠り、翌朝、まぶしい日差しを感じて目を覚ました。

「おお・・・！」

天気は快晴。じりじりと肌を焼くような日差しは、今日も猛暑になる事を示していた。

これならば、水浴びは確実に受け入れられる事だろう。

「よし、早速動こう。」

いてもたってもいられず、俺は政務室へと急いだ。

・・・

「あーつーいー！」

桃香がへたれ、机に突っ伏した。

ふふふ、いい感じに気温が上がってきている！

「へぅ、大丈夫ですか、桃香さま・・・」

月も暑さでふらふらしているようだ。

・・・うーむ、弱っている月も良いな。

「月、大丈夫か？」

「はい、まだ、大丈夫れす」

ああ、暑さで月の呂律がわやわやに・・・

「・・・桃香、一つ提案があるんだが」

ここは、月の体調を一番に考え、少し早めに計画を発動するとしよう。

「ふぇ？なーに、お兄さん」

「実はな・・・？」

俺は桃香や朱里、愛紗に水浴びをしてはどうかと持ちかけた。

「ギル殿が以前話していた暑気払いの話ですね。ですが・・・」

当然彼女たちは服を濡らすのはどうか、と言ってきたが、それについてはこちらに解決策がある、と伝える。

「解決策、ですか・・・？」

「ああ。だから、後はみんなが行きたいかどうか、何だけど」

「お兄さんが服の問題は何とかしてくれるみたいだし、行こうよ、愛紗ちゃん。このままじゃ、みんな仕事にならないよ？」

「・・・そうですね。確かにこの暑さでやられているのも事実・・・分かりました、将達を集め、川へと行きましょう」

「それじゃあ、いろいろと準備が必要ですね。」

「そうだ。朱里、これを」

「ふぇ？これは・・・。見張りの配置図ですか。なるほど、そういうのも必要ですね。使わせていただきますね。ありがとうございます」

よし、以前話を通していたからか、唐突にこんなものを出しても怪しまれない。
これは事前準備が功を奏したな。

「それでは、愛紗さんは将の皆さんを集めてくださいますか？ギルさんは見張りの兵の人たちの招集をお願いします。」

「分かった。すぐに向かおう」

「了解だ。それじゃあ、後でな、桃香」

「うんっ。二人とも、いってらっしゃーい」

「いってらっしゃいませ、ギルさん、愛紗さん」

元気を取り戻した桃香と、少し回復したもののまだふらふらしている月に見送られながら、俺は一刀の部屋へと急いだ。
部屋に着くと、決められたタイミングで扉をノックする。

「ギル、成功したのか」

扉を開けるなり、そう聞いてくる一刀に、サムズアップすることで答える。
その後、俺たちは兵士たちが集まっているであろう中庭へと歩き出した。

「兄貴！大将！」

中庭に着くと、兵士たちが出迎えてくれた。

「その表情・・・成功したみたいですね」

「兄者、楽しみだな」

「そうだな弟者。」

「そう考えると、この暑さも気にならなくなってくるッスね！」

「ああ、むしろ暑さに感謝したくなってくる」

「よし、将達は後少しで門の前に集まるはずだから、先に向かおう。」

全員が頷いたのを確認して、俺たちは門へと向かう。

宝物庫に入っている水着のすべては頭の中で管理できていて、すぐにでも取り出せるようになっている。

「・・・お、集まってきてるな」

「あ、お兄さん！」

「ギル殿、ご苦労様です。」

いやいや、全然だよ、と答えると、それでどうするのだ？と鈴々に聞かれた。

「川で水浴びはいいけど、服が濡れるのはいやなのだー」

「ああ、それは大丈夫。・・・王の財宝（ゲートオブバビロン）」

警備の兵士のおかげで人払いは出来ているので、人目を気にせずに宝具を展開できる。

地面から、服屋にあったままの姿で水着が出現する。

頭と手足が無いマネキンのようなものに着けられた水着たちは、まるで荒野に突き立つ無限の剣のように並び立つ。

「はわわ・・・地面から、下着が生えて来ました・・・・！？」

「ギル殿っ！？いきなり何を・・・・！？」

「ああ待て待て、これはだな・・・・」

一刀と一緒になって、水着の説明をする。
最終的に水を掛けて機能の説明をして、ようやく納得してもらった。
さらに、一刀が発案者であり、水着の有用性を確かめるためについてきてもらう事を話した。

「・・・なるほど。・・・というか、その蔵を水着の収納場所に選ぶなんて・・・・」

神秘の塊である宝具の使い道について若干首を傾げられたが、まぁそこはスルーしてくれ。

「好きな水着を選んでいいぞ。着替えてから向こうの川まで来てくれよ？警備の兵士たちには道案内の役を任せてあるから。」

俺の言葉に、兵士たちが驚いた顔をする。
最初はそんな話なかったからな。だが、兵士たちにも眼福があってしかるべきだろう。
みんなにばれないように笑いかけると、兵士たちは嬉しそうな視線を向けてくれた。

「それじゃあ、俺と一刀は先に行って準備してるよ。頼んだぞ、みんな」

「はいっ！お任せください、ギル様！」

蜀の兵が元気な声を上げる。

「さて、一刀、行くぞ」

「ああ！」

・・・

先に川に来て、日よけのための場所を作ったり、みんなが休むスペースを作ったり、お菓子を置いておいたり。
後は、酒だな。桔梗辺りが飲むだろう。
しばらくすると、みんなやってきた。案内してきた兵士たちは、何人かがくがくしている。大丈夫か、あいつら。
それから、みんなは川の中へ飛び込む。
つめたーい、とか、気持ちいいですね、とかいろいろな声が聞こえてくる。

「おお・・・！」

一刀が感動の声を上げる。
水の中に入って戯れるみんなを見ていると、それだけで報われた気がする。

「あれ、お兄さんは水着、着ないの？」

「ん？ああ、俺は着なくても大丈夫だしな。」

魔力放出で水くらい弾けるし。

「そうなんだ。なーんだ、お兄さんの水着姿も見たかったのになぁ」

「また今度な。」

「うんっ。・・・でも、この水着ってやっぱり布の面積が少ないように感じるんだけど」

「それでも多いほうだぞ。なぁ、一刀？」

「え？あ、ああ。そうだな。・・・もっと、小さい水着を着てるやつだっているしな。」

その言葉で脳内に浮かぶのは、ある漢女。
うっふぅぅぅんとかぶるぁぁぁぁとか吼えるあの化け物だ。

「うっ・・・」

「くっ・・・」

「え？え？どうしたの、二人とも」

心配し始めた桃香になんでもない、と告げて、ヒモビキニの話をする。
天の衣装には不思議が多いんだねぇ、なんていう桃香たちに苦笑を返しながら、周りを見渡す。
すごいな。ここまで水着の美女美少女が集まるのは、この大陸だけなんじゃなかろうか。
一刀も恥ずかしそうにしながら、ちらちらと水着姿の少女たちを見て楽しんでいる。

「・・・あの、ギルさん」

そんな時、くいくいと俺の服のすそが引かれる。
誰だろうか、と引っ張った人物を見ると・・・。

「へぅ、あの、この水着・・・似合ってますか？」

「そ、その、この水着・・・どう？」

月と詠の二人が水着姿で立っていた。
月の水着は白一色でひらひらとした装飾が特徴的な水着。
詠の水着は白い生地の中に黄色がアクセントとして使われている水着だった。
こうしてみると、二人の白い肌がかなり露出している。いや、水着だから当たり前なんだけど。
いつもは長袖のメイド服着てるし、さらにハイニーソックス穿いてるから生足なんて見る機会はほとんどない。

「二人とも、綺麗だよ。」

正直それしか浮かばなかったので、恥ずかしがらず、きちんと伝えた。
二人は嬉しそうに笑みを浮かべると、一緒に涼みませんか？と誘ってくれた。
喜んで、と返すと、桔梗が酒盛りをしている場所の近くの岩場までつれてこられた。
ここなら、みんなの楽しむ様子が見られるし、水にも近いから涼しいし、と詠に説明される。

「一番は、ギルさんと密着できるから、なんですけど」

確かに、今座っている岩は三人が座るには小さく、かなり密着しなければならない。
今の俺の服装は、いつもの暑苦しい姿ではみんなも暑く感じるだろうという事で上は白いTシャツにしているのだが・・・二人の肌が直接触れて、俺は今大変な事になっている。
何だこのすべすべな肌。うおお、寝台の上で触れるのとは違う健康的な肌の感覚が、俺をだめにするぅぅぅ・・・。
救いを求めて一刀を見てみるが、一刀も一刀で水辺でぽーっとしている。どうやら、みんなの水着姿にあてられたらしい。なんだそりゃ。ピュアボーイ過ぎやしませんか。

「ううぅ、なんかどきどきするよぅ・・・。」

「えへへ、私もだよ、詠ちゃん」

そういって笑いあう二人を見て、なんだかほんわかとした瞬間。

「いっくのだーっ！」

「てぇい！」

「ぬおう！？」

「きゃあっ！？」

「ギルッ！？」

鈴々の手からすっぽ抜けた木の棒が、俺の顔面にヒットする。
神秘の篭っていない攻撃のため俺には通用しないが、衝撃まで無効

化できるわけじゃない。
こぉんっ、と甲高い音を立てて、俺の額に当たった木の棒は、俺を後ろへ倒れさせた。

「いつつ・・・」

実際そこまで痛くはないが、そこは癖である。
俺に当たった後空中に跳ね返った木の棒が、俺の横に落ちてからんからんと情けない音を立てる。

「だ、大丈夫なのか、お兄ちゃんっ！」

「大丈夫かよ、ギルっ！」

岩の向こうから鈴々と翠の心配そうな声が聞こえる。
木の棒をつかんで起き上がり、岩の上へと上る。

「大丈夫だー。ほら、鈴々」

ぺいっ、と木の棒を投げて渡す。
見事にキャッチした鈴々は、ごめんなのだー、と少し気落ちした様子で謝って来た

「いや、俺でよかったよ。詠や月だったら、こんなのじゃ済まなかっただろうし。だから、鈴々はある意味上手に飛ばしたって事で。」

「えへへー、そうなのかー？」

「そうだよ。ただ、玉をちゃんと打ち返して、すっぽ抜けなかったらもっと上手だな」

「分かったのだ！今度は、玉を打って飛ばすのだ！」

危ないから、飛ばす方向も気をつけるんだぞー、と注意してから、岩に座りなおす。

「ふふ、ギルさんは将来良いお父さんになりますね」

俺たちの目の前で遊んでいた紫苑が、そんな事を言ってきた。

「そうか？」

「ええ。鈴々ちゃんに危ない事を教えてあげたり、上手に誘導したり。そういうことが出来る人は、良い親になるんですよ」

「へえ。紫苑に言われると、真実味が増してちょっと嬉しいな」

「ギルお兄ちゃんはおとーさんになるのー？」

「そうね。もしかしたら、璃々のお父さんになるかもしれないわよ？」

「ぶっ！」

「ちょ！」

「ふぇっ！？」

紫苑の言葉に、俺と月、詠がそれぞれ驚きをあらわにする。

そんな俺たちの様子を見て、紫苑はくすくすと上品に笑うと

「璃々の相手もしてもらっていますし、私はギルさんのこと、とても好きですよ？」

「そう直球で言われると、照れる前に嬉しく思っちゃうな。ありがとう、紫苑」

「いえ、どういたしまして。」

そんな中、璃々が蟹を捕まえたらしい。嬉しそうにこちらに報告してきた。

「おかーさん、お兄ちゃん、カニさん捕まえたー！」

「あらあら、小さなカニさんね」

「んー」

璃々はカニをまじまじと見て、何か考え込み始めた。
その様子をほほえましく見ていると、ぎゅう、と両手の甲をつねられる。

「ギルさぁん？まさか、紫苑さんだけじゃなくて璃々ちゃんも一緒にいただいちゃうんですか？」

「ギールー？璃々はまだあんなに小さいんだから、無茶しちゃ駄目なんだからね！？」

「なんだと！？違う、そういう目で見ていたんじゃないぞ！？」

「だって、紫苑さんと璃々ちゃんを見て鼻の下を伸ばしてました」

「璃々をそのケダモノみたいな視線で見てたくせに」

すごい勘違いをされているぞ・・・。

それから、二人の勘違いを正すためにしばらくの時間を要した。

最終的に、璃々がもう少し大きくなってから手を出すのは良い、という事になった。

・・・全く勘違いは直らなかったようだ・・・。

もう勘違いを正すのはあきらめる事にして、目の前のみんなに視線を戻す。

そこでは、朱里と雛里が水を掛け合っていた。・・・スク水で。

「それっ」

「ひゃっ。・・・朱里ちゃん、やったなぁ・・・！」

「雛里ちゃんこそ、やりましたね～！」

うわ、何あの空間。飛び込んでいいの？すごい癒されそうなんだけど。

今のこの傷心を癒すのはあの空間しかないと思うんだ・・・。

「きゃっ、もう、冷たいよぉ・・・あ、ギルさーん」

「えへへ・・・。え？あ、あわわっ。ぎ、ギルさんっ」

ずっと見ていたのに気づいたのか、朱里と雛里がこちらに手を振ってくる。

手を振り返すと、二人は水掛けを中断してこちらにやってきた。

「ギルさん、この水着というのは機能的でいいですね。水が掛かっても透けませんし、何より動きやすいですっ」

「それはよかった。・・・二人はみんなと遊んでこないのか？」

あっちで野球っぽいことやってるのとかいるけど。

「いえ・・・その、皆さんの本気の遊びにはついていけないというか追いつけないというか・・・」

「あー・・・」

そうだな、文官の二人に本気で遊ぶ鈴々たちに追いつけというのは無茶だったな。

「あら、それなら璃々と遊んであげてくださいませんか？鈴々ちゃんたちには流石に璃々の力が追いつかないので・・・」

「はいっ」

雛里が元気に返事を返す。いつもは帽子で隠れる事が多い雛里の表情も、こうして水着だけになると隠される事なく見ることが出来る。笑顔も照れた顔も楽しそうにはしゃぐ顔も、すごく新鮮に見える。

「璃々ちゃん、よかったら、私たちと遊びませんかー？」

新鮮といえば、朱里もなんだか新鮮な感じがするな。

水着に着替えてはっちゃけているのか、やはり帽子がないから印象が代わるのか、とても楽しそうに遊んでいる。

「わーい！遊ぶ遊ぶー！」

こうして璃々と遊んでいるときも、実に楽しそうな表情で水と戯れている。

・・・水着の力、恐るべし・・・。

「桃香さま！周囲に怪しいものはいませんでした！」

そう言って一刀の近くの茂みから出てきたのは、いつもどおりの服装をした焔耶だ。

焔耶も水着を着ればいいのに、お前たちがかかわったものを着れるか！と断言されてしまった。

・・・まぁ、桃香至上主義の焔耶は、同時に少し男嫌いでもあるからなぁ。

目の前で蒲公英にからかわれて真っ赤になっている焔耶を見ながら、でも、もったいないなぁ、と思ってしまうのである。

で、十分に焔耶をからかった蒲公英は、杯を傾けて酒を飲んでいた。

「・・・蒲公英って結構飲むんだな。」

先ほどから桔梗と同じペースで飲み続けているような気が・・・。

「おう、ギル。こやつ、なかなかいけるクチだぞ？」

「えへへー、いけるくちだぞー！」

「へえ、意外だな。月なんか、三杯くらいでふらふらするのに」

「ぎ、ギルさんっ」

慌てた様子の月が恥ずかしそうに変なこと言わないでくださいっ、とちょっと怒ったように言ってきた。
そんな月も可愛いなぁ、と思いながら、ちょうど酒を飲みきった桔梗の杯に、ワインを注いだ。

「ぬおっ？」

いきなり空中から注がれたワインに驚き、杯を落としかけていたが、すぐに持ち直した。

「いきなりごめんな、桔梗。それ、俺のお勧めのお酒だから飲んでみて」

「なんじゃ、ギルの仕業か。酒を貯蔵して置けるとは、便利じゃのう」

そう言ってくいっと杯を傾ける桔梗の向こうで、蒲公英が桔梗だけずるーい！と騒ぐ。

「大丈夫だって、蒲公英にもあげるから。」

ぱちん、と指を鳴らし、蒲公英の杯にもワインを注ぐ。
わーい、と喜んだ蒲公英は一気にワインを飲み干した。

「ふぇー、なんだろこれ、果物みたいな味がするー」

「ああ。ブドウっていう果物から出来た酒なんだ。」

「ほほう。・・・これは、一気に飲み干す類の酒ではないな？料理

と共に楽しむような酒であろう」

「おお、すごいな桔梗。肉料理とか、魚料理とか、料理に合わせて白と赤を分けて飲んだりするんだよ、それ。今はお菓子しかないから、それで我慢してもらうほかないけど」

「ふむ。ならば、今度は食事のときに貰おう」

まぁ、ワインだけでもおいしいんだけどね。
料理と一緒に飲むと、さらにおいしいというかなんと言うか。

「そうしてくれ」

おーいしー！と絶賛する蒲公英を見て楽しんでいると、桃香と愛紗、星がこちらに向かって歩いてきていた。

「ギル殿、愛紗を見てくれ。こいつをどう思う？」

「すごく・・・可愛いです。・・・って、何を言わせるんだ。」

「いやなに。やはり愛紗のこの姿を見ないのは損だろうと思ってな」

先ほど天の御使いにも見せたのだが、鼻血を出して倒れてしまった。
と星は続けた。
急いで一刀を見てみると、幸せそうな顔をして倒れていた。
・・・アレはアレで、良い逝き方なのかもな。

「は、離せ星！ギル殿の前でこんな事・・・恥ずかしいではないか！」

「ほほう？先ほど、ギル殿はどう思うだろうか、と言っていたのはお主ではないか」

「そ、それはっ、ギル殿が用意してきた水着だからであって・・・」

「遠慮するな、愛紗。ほうら、見てみろギル殿。この育ちに育った果実を」

そう言って、星は背後から愛紗の胸を鷲掴み、むにゅむにゅともみ始めた。

「な、なにをっ！？」

「おー」

「へぅ、すごいです・・・」

「アレが・・・巨乳の威力・・・！」

愛紗も桃香に負けず劣らずすごいもの持ってるなぁと感心していると、両隣からも驚いたような声が聞こえる。

いやー、女の子から見てもすごいだろうね、アレ。

「ちょ、やめ、星っ！」

「ははははっ。どうですギル殿。ご満足いただけたか？」

「ああ、大満足だ。ありがとうな、星、愛紗」

「ほら、愛紗。ギル殿がありがとうと言っているぞ？」

「うぅっ、嬉しいような恥ずかしいような・・・」

ぼそっと何かを言いつつ、愛紗は桃香に慰められていた。
あの二人が一緒にいると、威力が四乗になるよなぁ。

「お、星も水着似合ってるじゃないか。綺麗だよ」

先ほどまで愛紗の後ろにいたために見えなかった星の水着姿がはっきりと見えた。

「む？・・・ふ、ギル殿は正直に者を言う御仁だな。少し恥ずかしいくらいだ。」

おお、照れてる星が見れるとは。可愛いじゃないか。

「まぁ、ありがとうと言っておこう。それでは、愛紗でも慰めてくるかな。」

そう言って愛紗のほうへと歩いていく星。
そういえば二人がおとなしいな、と両隣の少女を見てみると

「やっぱり胸なのかしら・・・。むむぅ」

「へぅ・・・胸が無くても、ギルさんへの気持ちなら負けません・・・」

・・・二人とも、胸が小さいの気にしてるのかな。
それとなくそんな事関係なく好きだと伝えるべきか。

「どうしたの？お兄さん」

「ん？桃香か」

「なんか悩んでるみたいだったから」

「いやぁ、みんなでこうやって水浴びが出来るのは良い事だなぁって思ってたんだよ。」

貧乳の娘をどうフォローしようか考えていた、何ていえないため、当たり障りの無いことを言っておく。

「そだね。少し前じゃ、考えられなかったけど」

「また、こうしてみんなで来ような。」

「うんっ。そのためにも、平和な今を続けていかないとね」

「そうだな。俺も、微力ながら協力させてもらうよ」

「うん、ありがとう。・・・でもたまには、こうしてお休みしながら、ね」

桃香の言葉に、そうだな、と答える。
なんだかしんみりしちゃったな。

「よし、俺も鈴々たちと遊ぼうかな」

「あ、じゃあ、私もー！」

「ギルさん、頑張ってくださいね？」

「また棒にあたるんじゃないわよー」

「分かってるって。」

こうして、月たちと楽しく水遊びが出来るなら、こうして平和を維持してきた甲斐があったというものだ。

もしかしたらまたなにか問題が起きるかもしれないけど・・・そのときは、七体のサーヴァントが相手になる。

ま、そんな事がこない事を願うばかりだけど。

・・・こうして、暑い夏の一日はゆっくりと過ぎていく。

・・・

第四話　蜀での水泳大会に行くために（後書き）

というわけで、蜀の水泳大会のお話でした。
・・・画像がないと、誰得なイベントですが・・・。
しばらく水着回が続くかと思います。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第五話　魏と仲良くなるために（前書き）

五話目です。
魏の誰と仲良くさせるか、結構悩みました。

それでは、どうぞ

第五話　魏と仲良くなるために

「次は魏か。」

華琳たちをどう説得して川へと連れて行くか、が問題だな。
とりあえず説得してみる、と玉座の間へ入っていった一刀に取り残されるように、扉の前で待ちぼうけ。
見張りの兵と雑談しつつ時間をつぶしていると、一刀がひょっこりと顔を出した。

「水着を見せたいんだ。来てくれ、ギル」

「おう。・・・それじゃ、仕事がんばって」

「ええ。ギルさまも」

兵士に別れを告げ、玉座の間へと入る。

「あっ。あんたは、前に私のことを抱きかかえた金髪男！」

「・・・第一声がそれか。」

猫耳軍師、荀？にびしりと指を指され、大声で糾弾される。
前に、というのはたぶん赤壁のときに沈みかけた船から助けたことだろう。
というか、それ以外に荀？と接触したことは無い。

「うう、北郷がそいつを連れてくるなんて、いやな予感しかしないわ・・・」

「一刀、俺ってなんかしたかな」

「生まれてから、あんなに男に密着されたことなんか無いのに！ってしばらく騒いでたぞ、あの後」

「・・・あー」

そりゃ嫌われるか。

「だけど、この暑いのを何とかするにはギルの協力が不可欠なんだよ。頼む」

「おう。王の財宝（ゲートオブバビロン）」

「ちょっと、こんなところで宝具を・・・って、なにこれ」

一瞬焦りを見せた華琳だが、出てきたのが聖剣や魔剣のような宝具ではなく、水着を着けたあのマネキンもどきであるのを確認すると、訝しげな表情になった。

「下着ではないか！こんなところで、そんなものを出すとは・・・！」

しゃきん、と七星餓狼を構えた春蘭を慌ててとめる。

その間に、一刀に説明してもらう。これは下着ではなく水着と言って、水遊びのときに着るものである、とか熱弁する一刀を守るように春蘭を押しとどめる。

なんだろうこの威圧感・・・この娘、英霊じゃないよね？

「・・・ふぅん、なるほど？」

華琳が納得したように鼻を鳴らす。説得は成功か。

・・・納得したんなら、華琳、この暴走猪とめてほしいんだけど。

・・・

川へと移動した後、魏の将たちが着替えるのを待つ。

今回は一刀のほうが親しい将が多いので、俺は騒ぎから離れたところで見学することに。

「行くぞ北郷ーっ！」

「うわ、ちょ、春蘭っ！？」

ざっぱーん、と暴れる春蘭に巻き込まれ、一刀が川の中に消える。

・・・まぁ、一刀も水着を着てるし、濡れても大丈夫だけど・・・。

「おにーさんは、遊ばないのですかー？」

いつの間にか俺の隣で寝転がっていた風がのんびりと口を開く。

「そだな、今日は良いかなぁ」

「そなのですかー。それじゃ、風と一緒に日向ぼっこですねー」

「そうさせてもらうかな。・・・なぁ、風？」

「はい？なんでしょうかー」

「・・・凛が川に沈んだんだが、アレは大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。いつもはあれより死にそうな目にあってますからー」

鼻血とか鼻血とか鼻血のことだろうか。

まぁ、いつも一緒にいる風が大丈夫だというなら大丈夫なのだろうか。

春蘭も、流石に死なせはしないだろうし。

「にーいーちゃーんっ！」

「季衣っ！？ちょ、今は無理・・・わーっ！？」

小柄でも力が強い季衣に飛び込まれて、一刀はしりもちをつく。

跳ねた水が涼しそうだ。

「あららー、お兄さんも大変ですねぇ」

「にーさま、風さま。」

一刀をほほえましい視線で見ていると、流々が話しかけてくる。

流々とはたまに厨房で出会って食材を提供して食事を作って貰ったりしているため、魏の将の中でも仲が良い。

「ん？・・・流々か。どうかしたのか？」

「いえ、どうかした、というわけではないのですが・・・お二人とも水の中に入っていないようでしたので・・・」

「あー、俺は水着ないし。今回は見学ー」

「風はこうしてるだけで満足なのですよー」

「そうなんですか・・・」

ちょっとがっかりした様な顔をする流々。

どうかしたのだろうか。

「流々はあなたと遊びたいのよ。察してあげなさいな」

いつの間にか近くまで来ていた華琳が呆れたようにそう言った。

あなたって・・・俺か？

確認するように流々を見てみると、俯き加減にこちらを見つつ、こくりと頷いた。

「そっか、なら俺も参加してこようかな。風、華琳、どうする？」

「風は寝てるのですよー」

「私は・・・そうね、水着姿の桂花でもからかってこようかしら」

ざぱざぱと水の中を移動して華琳は荀？の元へと向かっていった。

「にーさま、こっちですよっ」

その後ろ姿を見送りながら、俺は流々に手を引かれて秋蘭の元へ。

なにやら秋蘭と流々、俺対春蘭と季衣、凛と一刀、で対戦するらしい。

「負けないよ、にーちゃん！」

「ギルがそっちかよ・・・」

「ふはは！ギルなどおそるるに足らず！いっくぞー！」

「よし、行くぞ、ギル。」

「にーさま、がんばりましょうね！」

「おっけー、がんばるかな。」

魏のみんなとはまだ付き合いが浅いからな。
こうやって、ちょっとずつ仲良くなっていけるのは嬉しい。

「よーし、まだまだいくよー！」

季衣の元気な声が、空へと響いていく。

・・・

その後、呉にも水泳大会のことを伝えようとしたが、折り悪く暑い日が来ず、しばらく過ごしやすい気候が続いた。
まぁ、まだまだ夏が終わるようなことは無いので、すぐに暑くなると思うが。
それに、連日みんなを水浴びに連れて行くのも変だしな。ちょうど良い休みになるだろう。

「・・・はぁ？」

「・・・いや、だから春蘭と秋蘭が喧嘩しちゃったんだって。」

「何とまぁ、珍しいことで」

あの二人が喧嘩したところなんか見たこと無いぞ。
まず、秋蘭が春蘭をいないもののように扱うところから始まり、部屋にある春蘭の家具を片付けるのを手伝って欲しいとまでいわれているらしい。

「・・・とりあえず、ギルの蔵に家具を入れて、適当な部屋に春蘭を移動させておきたいんだ」

「りょーかい。手伝うよ」

秋蘭のところへいくと、隣に立つ春蘭を見えないもののように扱いつつにこやかに家具を片付けるように頼まれた。

「王の財宝（ゲートオブバビロン）」

地面に沈むように収納されていく家具。
うーん、しかし、実際に見るとすごい怒りっぷりだな。
露骨な無視じゃなく、本当に春蘭がいなかったかのように振舞うんだから。

「うむ、これでさっぱりとした。ありがとうな、ギル」

「いやいや、構わないよ。な、一刀。」

「ああ！・・・ほら、行くぞ、春蘭」

小声でそういうと、一刀は春蘭の手を引いて歩き出した。
うぅー、と唸りながら春蘭は引かれるままに別の部屋へ向かっていった。

「それじゃな、秋蘭。」

「ああ。ギルと北郷も、わざわざ済まないな」

・・・これは、手ごわいぞ・・・？

「・・・で、どうするんだ？」

翌日、一刀と荀？と歩いていると、秋蘭に出会った。
秋蘭はいきなり弓を構えると、城の通路を曲がってきた春蘭に向けて矢を放った。

「うおっ！？」

「秋蘭！？いきなり何してるんだよ！」

「いやなに、急にここからあそこの壁際まで矢が届くのか試したくなってな。」

・・・まぁ、当てる気はないみたいだし、春蘭も矢を弾き始めたので大丈夫だろう。

「何とかしなさいよ！あんた、超人なんでしょ！？」

こちらを睨む荀？にそう言われるが、いやぁ、それは無理ってもんですよ。

・・・

「ギル、何とかならないの？」

「・・・なんでみんな、俺のところに来るかね」

その日の夜、華琳にまでそういわれた。
まぁ、魏の中でも華琳に告ぐ実力者である二人が喧嘩したままというのはまずいことなのだろう。
うーん、一刀に聞いたところによると、杏仁豆腐のさくらんぼを食べてしまったのがいけないのだと聞く。
だが、その前にもいくつか春蘭は秋蘭のおかずをつまんでいたらしい。好物だから、という理由があったとしても、さくらんぼだけで怒るような人間じゃないはず。
・・・なら、何か他のものと違う出来事があったはずなんだが・・・。

「まぁ、いろいろと話を聞いて解決してみるよ」

「ええ。一刀の手にも余ってるみたいだから、協力してあげて」

「おうさ。じゃあ、失礼するぞ」

「構わないわ。それじゃあ、頼んだわよ」

「任せろって。」

そう言って玉座の間を後にする。
・・・うーん、とりあえず一刀にその時の状況を詳しく聞いてみる

かな。
うんうんと考えこみつつも、足は一刀の部屋へと向かっていった。

「一刀ー、いるかー」

こんこん、とノックしながら声を掛けると、おー、いるぞー。入れーと返ってきた。

「邪魔するぞ」

「ギル、何か進展はあったか？」

「いや、華琳にも何とかしてくれって言われたところだ。だから、一刀から起こったときの状況を詳しく聞きに来たんだ」

「そっか。それくらいなら、お安い御用だ。ええっと、あの時はだな・・・」

一刀から、詳しい話を聞いていく。
ふーむ、それだけ聞いてると、やっぱり好物を取られたから、としか考えられないなぁ。
・・・ふむ、ちょっと確かめてみるか。

「怒った理由は分からないが・・・何とか秋蘭から聞き出してみよう。」

その日は流々にある頼みごとをしてから眠りについた。
・・・これで何とか仲直りしてくれればいいんだけど。

・・・

翌日、流々にお菓子を作ってもらい、秋蘭と一刀、季衣、そして俺の五人で食べようとしていたとき、春蘭がやってきた。

「おー、良い匂いがすると思ったら！」

ここまでは計画通り・・・ってうお！？秋蘭の顔に怒りのマークが！？

ぴくぴくと怒りに震える秋蘭に、あと一人人を呼んでいいかと聞いてみる。

「構わんぞ。誰だ？華琳様か、桂花か？」

「えぇ？」

「風を呼ぶなら凛も呼ばねば拗ねるしな。」

「ちょ、秋蘭様・・・？」

・・・こりゃ、理由を聞くどころじゃないな・・・。

俺の作戦としては、春蘭がいる前で秋蘭の怒っている理由を話してもらえば、理由も分からずに謝れるかと言い張る春蘭も理由が分かるだろうと思っていたのだが・・・。

しかし、そこで思い切って一刀が口を開いた。

「な、なぁ、秋蘭？」

「なんだ、北郷？」

「その、俺の知り合いの姉妹の話なんだけど、姉が妹を怒らせちゃ

ったんだ。だけど、姉は何で妹が怒っているか分からないって言ってるんだけど・・・」

一刀がそういうと、秋蘭は良く分からないといった顔をして

「私に姉妹はいないぞ？」

「それでもいいから、意見が欲しいんだよ」

「ふむ・・・察するに、好物を黙って取られでもしたんじゃないのか？流石に、許可も無く好物を取られては、その妹も怒るだろう」

「・・・！」

なるほど、上手いな、一刀。

そういう風に聞き出せば、秋蘭も話しやすいし、春蘭もきちんと理解できるだろう。

実際に、その後はとんとん拍子に進んでいった。

もう黙って人のはとらないし、麻婆茄子一つに対して餃子を二個渡すようにするだとか言いながら、二人は仲直りをしていた。

「ふふ、それでは姉者、お菓子を取る皿を持ってきてくれないか」

「ああ！ちょっと待っていろ！」

そう言ってだだだっ、とどこかへいき、だだだっ、と帰ってきた。

その手には皿を抱えており、嬉しそうな顔をしている。

「持ってきたぞ！」

「よし、それでは食べようか。」

「おう！・・・む？秋蘭、これをいただくぞ！」

「・・・！？」

「・・・あー、流々」

「・・・えと、季衣」

俺は流々の手をつかみ、一刀は季衣の手をつかむ。

「逃げるぞ」

二人同時にそう言って、全速力で駆け出した。

もう、面倒見切れん！

・・・

ある日、中庭を何気なく歩いていると、急に地面が消えた。

「うおっ！？」

急いで天の鎖（エルキドゥ）を上から張り巡らせ、落下を阻止する。

・・・ふう。地面が消えたと思ったのは、落とし穴に落ちたからか・・・。

「全く、こんなところに落とし穴を作るなんて。」

誰だろうか。一瞬で浮かんでくる候補は蒲公英と荀？だけど。

・・・下には蠢く爬虫類。こういうタイプの精神的にくる罠を仕掛けるのは、荀?のほうか。

「はぁ・・・とりあえず、下の爬虫類たちは逃がして、穴は埋めておくか・・・」

ふむ、これはまた、たくさん集めたなぁ。

とりあえず落とし穴を一つ埋めることに成功し、ふぅとため息をついて歩き始める。

・・・二歩目を踏み出した瞬間、地面が消えた。

「またかっ！」

天の鎖（エルキドゥ）にお世話になりながら、全く、とつぶやく。

次はただの落とし穴だ。・・・うーむ、いくつも落とし穴を作る手口は蒲公英のものだが、これはどちらのなんだろうか。

宝具をフル活用して穴を埋めて、再び一歩を踏み出す。

瞬間、無重力かの様な感覚にとらわれる。

「・・・」

無言で鎖に引き上げられつつ、ぷつんとどこかで何かが切れた。

「王の（ゲートオブ）・・・」

右手を上げる。宝剣聖剣魔剣聖槍魔槍・・・さまざまな宝具の原典が空中に待機する。

「財宝（バビロン）ッ！」

地面に突き刺さっていく宝具たちは落とし穴を隠すカモフラージュを吹き飛ばし、落とし穴を白日の下へ曝け出す。

「・・・こんなに作ってたのか。全く、二人とも懲りないんだから・・・」

落とし穴を埋めつつ、地面を平らに整地していく。
後で、それとなく注意しておくか。

・・・

「ギルさんっ、大変なんですっ」

「どうした、月」

慌てた様子でこちらに走ってきた月を落ち着かせて、話を聞いてみる。
何でも詠についての話らしいが・・・。

「あの、信じられないかもしれませんが・・・詠ちゃんは、不幸を溜め込む体質なんです」

「・・・ほほう」

周りの不幸を肩代わりしている、ということだろうか。
おおむねそんな認識で間違っていないらしい。
そして、その溜め込んだ不幸が辺りに撒き散らされることがあるらしい。

「で、それが今日だと？」

「・・・はい。」

もうすでに、それらしき現象がいくつか起きているらしい。
空腹で倒れた恋を介抱していた詠と響が、ねねの持ってきたお茶を掛けられ服をびしょびしょにされたこと。
その後、着替えた詠が紫苑とぶつかり、メイド服が少し破れてしまったこと。
それを紫苑に直してもらった後、部屋から出るときに璃々とぶつかりそうになり、紫苑の手を掴もうとして服を掴み、びりびりに破いてしまったこと。
その余波で、璃々のお菓子が抜きになったこと。

「・・・なるほど」

詠から月が聞いた話はそれだけらしいが、今また何か不幸な現象を起こしているのかもしれない、と月は締めくくった。

「それで、ギルさんにお願いなんですけど・・・」

「ん？」

「ギルさんの能力で、幸運って高いですよね？」

「・・・ああ、そういうことか」

不幸が溜まり、詠の近くに降りかかるなら、それを相殺するように幸運の高い人が一緒にいればいい。
月はその考えに至り、俺に詠の手助けを頼むために探していたらしい。

「いいよ。他でもない詠のためだ。そのくらいならお安い御用だ」

「・・・気をつけてくださいね」

・・・え、そこまで覚悟が必要なこと!?

・・・

詠を見つけるために人づてに目撃情報を聞いていると、荀?が新しく掘っていた落とし穴に春蘭が落ちたとき、近くに詠がいたり、荷物を届けにきた業者が荷台を引かせていた牛が倒れてしまったときに詠が近くにいたり・・・。

何か不幸な出来事が起きた場所をたどっていけば、必ずと言ってもいいほど詠の目撃情報があった。

とりあえず、詠には近づかないようにすること、と軍部に通達し、将や兵に近づかせないようにした。これ以上、犠牲を増やすことは無い。

一刻も早く合流して、詠の不幸を何とかしないと・・・。

「あわわ、ギルさん、大変ですっ。軍師会議で、皆さんが・・・!」

城の通路の向こうから走ってきた雛里があわあわと慌しくまくし立ててきた。

「落ち着いて、雛里。深呼吸をしてくれ」

「は、はひっ、す、すぅ、はぁ・・・すぅ、はぁ・・・」

数回の深呼吸で落ち着いた雛里は、ゆっくりと離し始める。

さして重要な軍議ではなかったため、お菓子でもつまみながら話し合おうということになったらしい。
ところが、そのお菓子やお茶がまずいことになっていた。
お茶はめんつゆに、肉まんは中身が入っていないスカスカなものになっており、煎餅はかなり古くカチカチになったものだった。
雛里は小腹が空いていたため、事前に少し食事を取っていたらしい。
そのため、お菓子に手をつけることなく無事だったのだが、他の軍師は軒並みノックダウン。
なぜか放心しているという詠を残して、助けを求めに雛里は走っていたとのことだ。

「分かった、会議をしていた場所へと案内してくれ」

「はいっ。こちらです」

そう言って走る雛里の後ろについていく。
そのまま軍議を開いているという部屋の前に着くと、声が聞こえてきた。
先に月が何人かを連れてここに来ていたらしい。

「近づかないほうがいいわよ。あんたたちもこうなりたくなければ・・・ね」

なんだ、立てこもりの犯人みたいな事言ってるぞ、詠。

「詠ちゃん、もしかして・・・」

「ええ。やっぱり、あれみたいね。久しぶりだから、かなりやばいかも」

「ふむ・・・詠よ、不幸体質とは本当なのか？」

月に続いて、星が詠に質問する。

詠はもうあきらめた、とでも言うような口調で

「これを見たら分かるでしょ。これが不幸体質なのよ」

扉を開け、中に入ると、自嘲するかのような表情をしてそう言っている詠がいた。

・・・

あの後逃げるように去って行った詠。

それを追うより先に、軍師たちの介抱をする必要があった。

武官と違って体が弱いからな。もしかしたら長引く可能性もありうる。

「華佗からいろいろと貰っておいてよかった」

龍を素材とする薬を飲ませつつ、月に話しかける。

「月、詠のこれからの予定は分かるか」

その問いかけに、月ではなく星が答える。

「む、それならこれから私たちと訓練だったはずだが・・・」

「・・・星、急いで訓練の中止を伝えて来い。」

「了解した」

そういうと、星は軽い足取りで走り去っていく。
あの速さなら、詠を追い抜いて先に撤収させる事も可能だろう。

「よし、大体大丈夫だな。後は任せたぞ、月、荀?、雛里」

「はい」

後は三人に任せて、俺は詠を追う。

・・・

・・・体質の事を完全に失念してたわね。

「ふぅ、しばらく無かったからなぁ。」

いつからだろう。確か、最後に溜まった不幸が降りかかってきたのは・・・ギルがくるちょっと前ね。
という事は、かなり溜め込んでるんじゃないかしら。
でも、あれだけの数の軍師に不幸が降りかかったわけだし、おそらくアレは終わったわね。

「・・・他の軍師たちの代わりに訓練を見に行かないと」

みんなの分まで働いて、汚名返上よっ。

「なに、朱里がっ!?・・・それは恐ろしいな」

「うむ。私も最初は笑っていたのだが、あの惨状を見ると、流石に眉唾とは思えん。」

訓練をしている場所へと着くと、愛紗と星がなにやら話し合っていた。

「何やってるの。訓練中に兵士を放っておいて雑談なんて」

「こ、これは詠!?ど、どどどうしたのだ?」

「噂をすれば影。・・・なるほど、恐ろしいな」

「なによ。何の話?」

私が聞くと、二人は顔を見合わせていや、なんでもないぞ、と口を合わせたように答えた。

・・・二人が後ずさりしているように見えるんだけど、それは気のせいなのかしら。

ためしに一歩近づいてみる。

「・・・」

ずざっ、と近づいた分だけ離れる二人。

「・・・」

もう一歩近づく。同じ分だけ二人は離れる。

「ははは、どうした、詠。そんなに怖い顔をしていると、鬼も逃げてしまうぞ?」

「うむ。娘はやはり笑顔が一番だと思うのだがな。」

「ええ、ボクもそう思うわ。・・・ねえ、何でさっきから距離が縮まらないのかしら」

良く見ると、ボクが近づくと、将軍である二人だけじゃなく後ろの兵士たちも同じ分だけ後ずさっている。

・・・どう見ても避けられてるわね。

「あ、あいたたた。急にお腹の調子が・・・」

「む、大丈夫か星。これはいかん、訓練どころではないようだな」

「・・・ちょっと。将軍が仮病でずる休みなんて士気にかかわるわよ?ちゃんとなさい!」

「む、兵の皆も腹の調子がおかしいらしい。先ほど食った肉まんにあたったのだろう」

そう言って星が目配せすると、兵士たちもお腹を抱え始める。

仮病だって言うのがばればれで、バカバカしくなってくる。

「む?・・・う、うぐ、何だこれは・・・まさか、本当に・・・?」

「これでは訓練にならないな。今日はこれにて終了とする!」

そう言って兵士たちに解散を宣言すると、蜘蛛の子を散らすように走り去っていく。

・・・馬鹿ね、もう不幸は終わったのに。って、知らない人には分かるわけもないか。

「はいはい。邪魔者は消えるわよ。ふんだ！」

そう言って背中を向けた私は、演技ではなく、本当に腹痛に襲われている二人を見る事はなかった。

「う、うぅ・・・っ。愛紗、私はこれで失礼するっ」

「え？・・・ちょ、ちょっとまて、私もお腹が・・・！」

・・・

お腹を抱えながら疾走する星と愛紗を見つけた。

「星、愛紗！詠は！？」

「分からん。どこかへ去っていった。・・・いつつ・・・！」

「すみませんギル殿、失礼しますっ」

そう言って、二人は走り去っていった。

・・・詠、まだ不幸が残ってるのか・・・。

とりあえず、詠の性格からして城から出ているはずだ。

城の中には詠の体質の事を知っている人たちばかりだからな。

って、街に出たらさらに被害が広がらないか・・・！？

「まずいな・・・間に合えよ！」

街へ出て大きい通りを走ると、詠と凪が話しているのが目に入った。

周りには・・・頭上の籠から・・・蛇が落ちそうになってる！？

「おっちゃん、この籠借りるよ！」

「ええっ！？ギル様、いったい何を・・・！」

『幸運にも』近くにあった空の籠を引っつかむと、凪の頭上に構える。

どさどさ、という感覚と共に、落ちてきた蛇が籠へと入ってくる。

「すいませーん！食用の蛇を落としちまいましたー！」

「ああ、こちらで受け止めた！気をつけてくれよー」

「ギルっ！？」

「ぎ、ギル様っ！？」

「ふー。危なかったな。」

驚く二人を尻目に、持ち主に蛇と籠を返す。

「悪いな、いきなり。凪は街の巡回に戻ってくれ。ほら、あっちから沙和と真桜が着てる。」

「は、はいっ。それでは、失礼します、詠さん、ギル様！」

少し緊張した面持ちで去っていく凪を見送り、詠のほうに振り向く。

「ようやく見つけた。全く、探したんだぞ」

「ボクの事、聞いてないの？」

「聞いてる。不幸が降りかかる一日があるんだって？」

「・・・なら、離れてなさいよ。あんたも、不幸になるわよ」

「ならん。なぜなら、俺の幸運ランクはＡ＋＋だからな」

「なにそれ。」

くすり、と笑みを浮かべる詠

「とりあえず、城に戻るわ。まだ不幸が終わってないなら、町にいるわけにはいかないもの」

「ああ、そうしようか」

城へと戻り、東屋で休憩しようとすると、兵士から声を掛けられる。

「ギル様ー！」

「ん？」

声の聞こえてきた方向に身体を向けようと立ち止まると、べちゃっ、と何か液状のものが落ちた音がした。

恐る恐る視線を向けてみると、目の前に鳥のフンが落ちていた。・・・危ない。『幸運にも』呼び止められてなければ、直撃してたな。

「・・・どうした。って、蜀の」

「はい。これを渡すように、と諸葛様から・・・」

「あ、ああ。ありがとう。」

「それでは！」

そう言って去っていく蜀の兵士。

「なに、それ」

「ん？分からない。たぶん、町の整備がらみだと思うんだけど」

「ふぅん・・・」

詠からの質問に答えながら、東屋を目指す。

・・・近くにみんなの気配を感じる。

たぶん、巻き込まれないようにしながら詠の不幸が終わるのを確認するつもりだったんだろう。

「あ、着いたぞ、詠。」

「そうね。なんだか、今日は朝から慌しかったから座るのが久しぶりな気がするわね・・・」

そういいながら、ベンチのような椅子に座る詠。

俺も詠と卓を挟むようにして背もたれの無い長いすに座る。

「それにしても、助かったわ。あんたみたいなのがいれば、不幸も何とかなりそうだし。」

「そうか？詠にそう言ってもらえるなら、助けにきた甲斐があった

な」

「・・・全く、そういうこと、真顔で言うんじゃないわよ。馬鹿」

「ははは、ごめんごめん」

それから、詠の不幸体質がいつから始まったのか、なんて話をしながら時間をつぶしていると

「ギールーさーんー！」

「どうっ！？」

背後から誰かにタックルされた。
それによって机に突っ伏すように倒れこむ。
強かに顔面を打つが、全く痛くない。・・・でも、びっくりしたぁ。

「危ないのだー！」

そして、その直後。
先ほどまで俺の頭があったところに、何かが飛んできた。
ずどん、と鈍い音が聞こえるが、何があったのかは分からない。

「ねーねー、なんか今日私お茶被ってから微妙に不幸なんだけど！さっきも水汲みの途中で転んじゃってー！」

「きょ、響か？ああ、うん、わかったから、とりあえずどけてくれ！」

何だこのカオス空間。

鈴々がごめんなのだー、と謝って近づいてくる足音が聞こえる。
そんな中、ようやく身体を起こすと、次は思いのほか背中の響が引っ張る力が強く、仰け反るように後ろに傾いた。

「おっとっと」

何とか倒れないように耐えていると、目の前を高速で何かが通り過ぎていく。

「・・・ボク、今すごいものを見たわ・・・」

「ふぅ、ほら響、どうしたんだ?」

何とか体勢を建て直し、呆然としている詠を尻目に響から話を聞く。

・・・

「・・・ねえ、今のって・・・」

草むらの影から、桃香が半ば呆然としながら口を開く。

「・・・ええ、響がギル殿に飛び込んだ瞬間、ギル殿の頭があったところに鈴々の蛇矛が吹っ飛んできて、柱に突き刺さりましたね」

「しかも、その後後ろに引っ張られて仰け反ったときに、鈴々ちゃんが振り回した蛇矛がお兄さんの目の前通っていったよね・・・」

「あれは、仰け反っていなければ直撃していましたね。」

「・・・『幸運にも』、響が飛んでこなければギル殿は・・・」

「へぅ、ギルさんの幸運は、やっぱりすごいです・・・」

「えーっと、らんくえーぷらすぷらす、っていうのだったよね。それってどのくらいなの？」

「ええっと、確か基本の値をを1としたら、えーぷらすっていうのは、ええっと、えーが５０で、ぷらすぷらすの効果で三倍まであがりますから・・・」

「普通の人の１５０倍の幸運!?」

「袁家ですら勝負にならない位の幸運ですね・・・」

全員が驚きながら再びアーチャーを見る。

「・・・まぁ、納得だよね。」

「月、もしよければ、今度ギル殿のすべての能力値を教えてくれないだろうか。」

「ええっと、ギルさんに許可を得るなら、全然大丈夫ですけど・・・」

ほんとに聞くんですか？と視線で訴えてくる月に、愛紗はゆっくりとつぶやく。

「・・・うむ、覚悟して聞くとしよう」

・・・

「でねでね、もうハサンがいなかったら私今頃六着ぐらい着替えてたんだよー・・・」

背中に飛び込んできた響は、それからというものマシンガントークを続けていた。
俺と詠は時たま笑いながら話を聞いていくんだが、さっきの鳥のフン以来不幸は起きていないようだ。

「・・・詠」

「うん、もう終わったみたいね」

安心したように笑う詠に笑顔を返しながら、俺は響を慰める。

「ほら、響。そろそろ部屋に帰ろうか。日も暮れてきたし、身体も冷えるぞ？」

「・・・うん。もう帰るぅ」

すっかり凹んでしまった響をつれて、俺は詠と共に城の通路を歩く。
さて、いろいろあったが、これで詠の不幸な一日は終わったと思っていいだろう。

「詠、これからは不幸の日になったら俺のところに来るんだぞ？」

「ええ、もちろんそうするわ。あんたの幸運、馬鹿に出来ないってわかったしね」

・・・

第五話　魏と仲良くなるために（後書き）

詠の不幸はギルには効きません。
『幸運にも』、回避できてしまいますから。
ランクの数値化は、以前どこかでみた数値表を元にしています。
＋一つで二倍か三倍か思い出せなかったので、二倍にしていますが、ソースがあってのものではありません。
どなたか、正しいランクの数値変換が分かる方はご一報ください。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第六話　将との出会いと戦いに（前書き）

今回はいろいろな将が出てくるので、若干まとまりが無いかもしれません。
ですが、久しぶりの戦闘描写などいろいろと詰め込みましたので、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、どうぞ

第六話　将との出会いと戦いに

「ねえお兄さんっ」

「お、桃香か。どうした？」

蜀への屋敷へ行く道中、桃香に出会った。
桃香は嬉しそうに笑うと、俺の腕に抱きつき、お出かけしよーよ！と上目遣いで誘ってきた。
出会うたびにこうして腕を組まれ、二つの凶器を押し付けられてきて大変だったのだが、最近ようやく慣れてきた。

「んー、それも」

「ギル殿！」

それもいいが、仕事が、と続けようとしたとき、後ろから愛紗の声が聞こえる。
・・・しかも、若干ご立腹気味だ。

「あ、愛紗ちゃん！」

「おはようございます。・・・ギル殿、どこかへお出かけですか？」

「い、いや、違うよー？大丈夫、ちゃんと訓練のことは覚えてたから」

「・・・本当ですか？桃香さまのお誘いに、ずいぶんと乗り気のようでしたが？」

・・・聞いてたんですね、愛紗さん。
でもそれ、まだ答えの途中だったんですよ。いや、本当に。

「ほ、本当だって！」

おそらく怒っている理由は勘違いからによるものだが・・・今は逃げの一手だ。
この世界の将たちは、宝具さえあれば英霊と打ち合えそうな娘が何人かいるから困る。
愛紗もその中の一人で、青龍偃月刀の一撃はこのサーヴァントの身体でも痛みを感じるときがあるほどだ。
なので、怒らせてこの場で仕合になるよりは平和的に逃げる方が良い。

「・・・そうですか。では、訓練場まで行きましょう」

「あ、ああ。でも、俺屋敷にとりに行くものあるんだ。先に行ってくれないか、愛紗」

俺がそういうと、愛紗は俺を見た後、ちらりと桃香を見て、少し目を伏せた後

「分かりました。急いでくださいね」

きりっとした口調でそう言ってきびすを返し、城へと向かっていった。
その愛紗の後姿を見ていると、急に桃香が

「お兄さん、私、ちょっと愛紗ちゃんとお話してくるね？」

「おう。・・・悪いけど、ちょっと説明しておいてくれるか？」

「ふふ、りょーかい。あ、そうだ。お兄さん、用事があるのに誘っちゃってごめんねっ」

両手を合わせ、謝意を表す桃香に、大丈夫、気にしてないよ、と返すと、桃香はもう一度ごめんね、と謝ってから城へと走っていった。少しして愛紗に追いついた桃香が呼び止めるのを見てから、俺も蜀の屋敷へと向かう。

「・・・今日の訓練、ちょっと厳しくなりそうだなぁ・・・」

全力で振るわれる愛紗の青龍偃月刀を必死にさばいている俺の姿が容易に想像できた。

・・・うん、良い稽古になると思おう。

・・・

その後、覚悟して訓練場まで顔を出すと、すでに兵士たちは訓練を始めていた。

愛紗はというと・・・。

「・・・あ、あの、ギル、殿」

・・・あれ？

あまり怒っていないように見える。

「どうかしたのか？愛紗」

「い、いえ。・・・先ほどは、すこし早とちりをしてしまったようで・・・」

ああ、なるほど。さっき追いかけていた桃香に事情を説明されたんだろう。
誤解が解けたんなら良いや。元々そんなに気にしていたわけじゃないし。

「はは、誤解が解けたんなら何よりだよ、愛紗。・・・よし、これでこの話は終わりだな。」

「そう言っていただけると助かります。」

そう言って微笑むと、愛紗はすぅ、はぁ、と深呼吸を一度してから、先ほどまでの目じりが下がったような弱気な顔ではなく、いつもの凛々しい表情を浮かべる。

「では、久しぶりに手合わせをお願いします」

「・・・ああ、お手柔らかにな」

「それはこちらの台詞・・・ですっ！」

言い切ると同時に青龍偃月刀を低く構えこちらに突っ込んでくる愛紗。
地面すれすれを低空飛行する龍のように迫る切っ先は、大戦が終わる前の俺なら視認すら難しかっただろう。
だが、今は違う。
青龍偃月刀の軌道の予測すら出来るようになった俺は、半歩だけ引いて、エアを横薙ぎに振るう。

ちょうど下から切り上げるように迫っていた偃月刀にぶつかり、甲高い音と共に偃月刀は横に弾かれ、一瞬の隙が出来る。

「なっ・・・！？」

弾かれたことが予想外だったのか、愛紗は目を大きく開いて驚きをあらわにする。

だが、そんな動揺も一瞬で無くなり、横に弾かれた勢いを使って独楽のように一回転。

勢いをつけた高速の一撃を、エアを振った後のがら空きの右半身に叩きつけるように振るう。

「食らうかっ！」

速度が最高速になる前に、自分から青龍偃月刀にぶつかりに行く。

鎧の肩の部分にあたるようにして、衝撃を弱める。

ぶつかり合った鎧と偃月刀が火花を散らし、俺と愛紗が同時に顔をしかめる。

俺は言わずもがな、鎧に偃月刀が当たった衝撃で。流石にすべての衝撃をなくすことは出来なかった。

愛紗は、たたきつけた偃月刀からの反動が思いのほか強かったのだろう。俺も槍なんかの長物に慣れないときは良くそれに苦しめられた。

「は、あっ！」

「お、りゃあっ！」

再び振るわれた武器が、火花を散らす。

どちらも、相手に当てることを考えたものではない一撃だ。

牽制程度にぶつけた一撃の後、お互いに距離を取る為、後方に跳んだ。
ざり、という土を踏みしめる音がやけに大きく聞こえた。

「・・・流石です、ギル殿。あの戦乱を戦い抜いただけはありますね」

「いやいや、それはこっちの台詞だよ、愛紗。大戦のときはその力を振るっていたと思うと、改めて敵じゃなくて良かったっておもうぜ」

「ありがとうございます。」

「どういたしまして」

腰に手をつけ、ふぅ、と一息。
右手にはエアを持ち、警戒も緩めてはいないが、今の攻防で結構精神をすり減らした。
一息つかないとやってられない。

「やはり、あなたのような方には、私のような無骨者よりも――」

愛紗は小さな声で何か呟いたが、離れていて何も聞こえなかった。
再び暗い顔をした愛紗が心配になってきた。悩みでもあるのだろうか。

「・・・どうかしたのか、愛紗？何か、悩み事でもありそうな顔だけど」

「い、いえっ。何もありません！」

慌てて顔を上げた愛紗がそう答えるが、何もないようには見えない。
・・・今は、無理に聞かない方が良いかな。

「そう？」

「ええ。お気遣い、ありがとうございます」

「どういたしまして。でも、何かあったら言ってくれよ？愛紗がそんな様子だと、俺も元気なくしちゃうぜ」

だから、いつでも相談してくれよ、と笑顔で伝える。
笑顔は人との潤滑油。暗い顔で元気を出せといっても説得力は無いのです。

「・・・ええ、分かりました」

愛紗も笑顔を返してくれる。
うん、やはり――

「笑顔のほうが、愛紗は綺麗だよ」

「っ！？」

「はは、照れてる愛紗は可愛いなぁ。・・・ほら、続きと行こうじゃないか、愛紗」

「ギル殿はずるいです・・・」

「ほめ言葉にしか聞こえないよ」

「・・・ふふっ。行きますよ?」

「おう!ドンと来い!」

「はいっ!」

偃月刀を握りなおした愛紗が、一瞬のタメの後弾丸のように飛び出す。

愛紗の攻撃は激しくなったが・・・少し、すっきりした表情をしているのを見て、まぁいいか、と思ってしまった。

・・・

結局決着はつかず、兵士たちの休憩に合わせて俺たちも手合わせを終了させた。

木陰の近くにあるベンチに腰掛けると、疲れがどっと押し寄せるようだった。

あー、もう一週間くらい動かなくていいんじゃねえかなぁ、とか思うくらいには疲れた。

「お疲れ様です、ギル殿」

「愛紗もお疲れ様・・・ってほどには疲れてなさそうだな」

「ええ、いつもは鈴々や恋、星と共に手合わせをしているので。まだまだいけますよ」

もう一戦しますか?と視線だけで聞いてくる愛紗に首を振って断りを入れる。

少し残念そうにそうですか、とつぶやいた愛紗は、俺の隣に腰掛ける。

「ですが、ギル殿もあまり疲れているようには見えませんよ？」

「んー、意識的に力を制限してるからかな。その精神的な疲れなのかも知れない」

流石に英霊の力を全力で振るうわけにも行かず、意識して魔力の循環を抑えることによって、ステータスのランクをいくつか落としている。

いやはや、そのやり方を身に着けるまでが大変だった。

まぁ、そのおかげで力押しではなく、きちんとした技術を身に着けていくことが出来ているのだが。

ステータスはたぶん全体的に2つ1つくらい落ちてるんじゃないだろうか。

それ以上下げると、愛紗や恋に力で押し負けるため、そこがギリギリの妥協ラインだ。

というか、ステータスのランクCとかDに生身で追いつくとかこっちからしたら驚き以外の何物でもないんだけど。

「・・・制限してアレですか」

「まぁ、人間とは一線を画してるのが英霊たちだからなぁ」

「実際に戦うと、その言葉が身にしみますね。そのおかげで良い訓練になるのですが。」

愛紗と話していると、休憩が終わった。

「さて、次は兵士の訓練だな」

先ほどまで走ったり組み手をしていた新兵を、俺と愛紗で集め、別々に手合わせしていく。

数合も持たずに吹き飛ばされるのがほとんどだが、慣れてくると持ちこたえるようになってくる。

それから、だんだんと手加減を弱めていけば、そのうち戦える兵になっていく。

「よいしょっと。はい次っ！」

こうして、午前中は兵士を吹き飛ばして過ごした。

・・・

昼の休憩に入ったので、厨房へと向かう。

「あ、にーさま！」

エプロンをつけ、鍋や包丁を用意している流々に出会った。

食材から見るに・・・チャーハンだな。

「流々か。今から調理か？」

「はいっ。あ、にーさま、お昼は食べましたか？」

「いや、まだだけど」

「良かった。なら、今からおつくりしますね！」

「本当か?助かるよ。」

「えへへっ、それじゃあ、座って待っててください」

「了解。あ、なんか手伝うことあったら遠慮なく言ってくれよ」

「はい」

嬉しそうにそういうと、鼻歌でも歌いそうなくらいに上機嫌で調理を始める流々。

「ん~ふふーん」

訂正、鼻歌を歌うぐらい上機嫌に料理し始めた。
手際は華琳が認めるほどのものなのでもちろん早いし丁寧だ。
俺はそんな流々の後ろ姿を見ながら、妹がいればこんな感じなのかなぁと微笑ましく思っていた。

「よしっ、良い出来」

味見をした流々が、頷きながらそう言った。
料理が出来たらしい。さらにチャーハンを移すと、卓へと運んでくる。

「はいっ、どうぞ、にーさま」

「ありがとう。いただくよ」

「どうぞっ」

レンゲですくって口へと運ぶ。
・・・うん、やっぱりおいしい。

「ど、どうですか・・・？」

「おいしいよ。流々も食べたらどうだ？」

さっきから拳を握って俺がチャーハンを食べる一挙一動を見ている流々にそう促すと、そうしますっ！と元気に返事をしてくれた。
二人で他愛も無いことを話しながら食事をしていると、チャーハンはすぐになくなってしまった。

「ごちそうさま。」

「お粗末さまです。お茶、飲みますか？」

皿を片付けた流々が、茶葉を手に持ちながら聞いてくる。
欲しいな、と答えると、ちょっと待っててくださいね、と準備に取り掛かる。

「はい、お茶です」

ことり、と湯飲みが置かれる。
お礼を言ってから一口飲む。・・・当然のことながら美味い。

「あ、そういえば、華琳様がにーさまのこと探してましたよ」

「え？華琳が？」

「はい。急ぎの用事ではないとおっしゃっていましたが・・・」

「そっか。なら、落ち着いたら行ってみるかな」

ずず、とお茶を飲みながらなんで呼ばれたのか、と考える。
んー、別に華琳の機嫌を損ねるようなことしてないし・・・。
それとも、前の会議の時に話していた経済支援のことだろうか。

「むむー」

「どうかしたんですか、にーさま」

「いやぁ、なんか華琳に呼ばれるようなことしたかなぁと」

「・・・確かに、そうですよねぇ」

というか、華琳が直接呼ぶなんて相当なことなんじゃなかろうか。
まさか、第八のサーヴァント呼び出したとか？
・・・本当にそうだったらすぐに呼ばれるよな。
全く予想がつかないぞ・・・

「ふぅ・・・。ま、行けばわかるか」

流々の入れてくれたお茶を飲み干し、再びお礼を言ってから厨房を後にする。

・・・

道行く兵士に華琳の居場所を尋ねると、玉座の間にいると聞いた。
玉座の間ということは、何か政務での話だろうか。

「華琳ー？いるかー」

「いるわよ。」

珍しく一人のようだ。

春蘭とか秋蘭とか荀？とか凛とか側近がいないのは珍しい。

「何か用だって？」

「ええ、あなた、これから時間はある？」

「有り余ってる」

「そう。なら、ちょっと来なさい」

そう言って先に歩いていってしまう華琳。

・・・何の用かはいまだに分からないが、とりあえず着いていかないと。

「・・・この辺でいいかしら」

あまり人の来ない中庭へやってきた。

セイバーと一緒に宝具を使って戦う時なんかにここは良く使うので、ここにあまり近づかないのは暗黙の了解みたいになっている。

「で、何のようなんだ？そろそろ教えてくれよ」

「ええ、もちろん。用というのは簡単よ。あなたの宝具を見せて欲しいの」

「・・・はぁ」

今のは呆れた、というはぁでは無く、そうですか、というニュアンスのはぁ、だ。

「以前見た時は唐突だったし、混乱もしていた。落ち着いてきた今、あなたの力を少し見ておきたいのよ」

あなた、三国の中で一番ありえない存在だから、と締めくくった華琳。

それは俺も思う。英雄王の能力というのは本当にありえないくらいに反則（チート）だ。

・・・まぁ、本気で全力を出した場合は、という前提があるが。

「ええっと、あなたの宝具は宝物庫と乖離剣の二つでいいのよね？」

「ああ。その二つが俺の宝具だと思って良い」

厳密には王の財宝（ゲートオブバビロン）と天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）だが、わざわざ今言うことでもないだろう。

それに、横文字は華琳たちには難しいみたいだし。

「宝物庫の能力は、大量の剣を発射すること、でいいのかしら？」

「んー、それはちょっと違うかな。宝具の原典がすべて入っていて、それを発射したり使用したりすることが出来るってところだな。」

「宝具の原典？」

「そう。英霊を英霊たらしめるものが宝具。で、その宝具の原典に

なったものがこの宝物庫には入ってる」

だから、剣だけじゃなくて槍も斧も鎌も縄も鎖も発射するぜ、と補足する。

何よそれ、反則じゃないの。と呆れる華琳に同意する。

「すべての英霊の宝具の原典がこの中には入ってる。だから、もちろんすべての英霊の弱点となる宝具も入ってる。」

「・・・なるほど？ならば、あらゆる英霊に対して常に弱点をつける、というわけね」

「そうだ。そもそもギルガメッシュという英霊は『戦争そのもの』とまで呼ばれる力を持っている。ほら、兵や将や軍には勝てるだろうけど、戦争という概念には勝てないだろ？」

まぁ、原作の英雄王さんは油断と慢心のおかげで勝つ可能性が存在してるんだけど。

俺？俺は言わずもがな、精神的に付け込む隙もあるしまだまだ鍛錬不足だ。『戦争そのもの』には遠い。

「ならば、乖離剣のほうは？私は見たことが無いけれど、刀身の回転で旋風を巻き起こしたと聞いたけど」

「えーっと、乖離剣の説明は難しいな。・・・この世界がまだ、あらゆる生命の存在を許さなかった頃の生命の記憶の原初。その光景を再現する宝具、って言って通じる？」

「・・・ちょっと待ちなさい。」

少し俯いた華琳は、頭に指を当てて考え込むそぶりを見せた。

「あらゆる生命を許さなかった頃、というのは？」

「えーと、それの説明は長くなるんだけど」

「構わないわ。今日は珍しく仕事が無いの」

「・・・なら、華琳はこの大陸が巨大な球体・・・地球、というものに張り付いてるって言ったら信じる？」

「はぁ？・・・そんなの、裏側の人間が落ちるじゃない」

「ええっと、球体の中心が下なんだよ。重力っていうのがあってだな・・・」

それからしばらく、重力や引力についての話になる。
数十分をその説明に費やしたからか、華琳はきちんと理解してくれたようだ。

「・・・ふむ、地球の概念については大体理解したわ。で、それが何か関係するの？」

「地球って言うのは、最初、人間どころかどんな動物も植物も無かった。ただ、地獄が広がっていた」

「ああ、だから『あらゆる生命を許さない』のね」

「そ。だから乖離剣は別名『地獄を識るもの』とも呼ばれる」

「・・・はぁ、反則反則と言ってきたけど、ここまでとはね」

「そういわれると言い返せないな」

なんともまぁ、ありえない能力を貰ったよなぁ。

使いこなすのも大変だったが、隠しておくのはもっと大変だった。

「あ、宝物庫がどうなってるのか、実際に見せてちょうだい」

「構わないけど・・・どうすればいい？」

「あそこにちょうど良い人形があるわね。アレを目掛けてみて」

あの人形は・・・ちょくちょく宝具の標的となっている人形か。

基本この場所に置きっぱなしだもんなぁ。

「分かった。王の財宝（ゲートオブバビロン）」

少しだけ扉を開き、十数本の宝具が人形を串刺しにする。

「これでいいか？」

「ええ、十分よ。そういえば、鎖も出せるのよね？」

「一応。天の鎖（エルキドゥ）！」

串刺しになった人形に、四方八方から拘束するように鎖が巻き付く。

宝物庫の扉はある程度離れた場所にも出現させることもできるので、

そのまま鎖を戻すことによって相手を引きちぎることも可能だ。

・・・まぁ、英霊相手だと引きちぎる前に拘束から抜けられちゃう

んで、対人間用だ。未だ引きちぎったことは無いけど。

「ふぅん、それ、べんりねぇ」

背筋が冷えるような笑みを浮かべた華琳が、嬉しそうにつぶやく。

「ねえ、あなたに頼みたいことがあるんだけど」

「ん？構わないぞ。なんだ？」

この頼みの内容を聞かずに頷いてしまったことは、ここ最近でもっとも後悔したことである。

・・・

「ぎる、ちょっときて」

ある昼下がり。恋が現れ、俺をちょいちょいと呼ぶ。
手には軍神五兵（ゴッドフォース）。まさか、手合わせのお誘いだろうか。

「どうしたんだ、恋」

「ぎる、恋と・・・本気で、戦って欲しい」

「・・・えーっと？」

「恋も、今ある全部の力使う。ギルも、ほーもつこと、乖離剣使う」

「それ、本気で言ってるのか？」

「ん」

こくり、と首肯する恋。
いったい何がどうしてそんな結論に至ったのか・・・。

「・・・恋、天下一品武闘会出れなかった」

「え？なんでだろ。恋はかなり強いのに。」

怪我するから出ちゃだめ、みたいな理由での出場拒否じゃないと思うんだが・・・。
ちなみに、麗羽が出ようとしていたのだが、怪我するとうるさいしたぶん初戦で負けるのが目に見えてるため、と出場拒否されていた。

「わかんないけど、みんなにお願いだから出ないでって言われた。」

「・・・あ、そういうことか」

少し考えて答えにいたる。
恋が強すぎて仕合にならないからだ。
軍神五兵（ゴッドフォース）を使っている時はもちろん、方天画戟を使っている時でさえサーヴァントを圧倒する飛将軍呂布だ。
そりゃあストレートに勝ち抜くに決まってる。

「だから、出れない分をぎると戦って何とかする」

「なんとかって・・・愛紗とか鈴々とかと手合わせすればいいじゃないか」

愛紗たちも武闘会前の良い訓練になるだろうし、恋もストレス（？）

を解消することもできるだろうし・・・。

「んーん。思いきり、身体動かしたい。ぎるじゃないと、恋は受け止められない」

どれだけ本気で動く気なんだろう、この娘。

場合によっては城を半壊させるくらいまで覚悟しないといけないぞ、これは・・・。

「・・・いい？」

いつもならやんわりと断っているところだが、先日の華琳の頼みの内容を聞いてもうどうにでもなれー、となっていた俺は頷いてしまった。

俺もいろいろと溜まっていたんだろうか。今思い出しても恋との手合わせを承諾したのが信じられなかった。

「じゃあ、やる」

手に持った軍神五兵（ゴッドフォース）を構える恋。

形態は矛だ。ならば、スキルの絶武無双（ほこ、まるでかあたわず）が発動していると思っていいだろう。

防御に圧倒的に有利な補正を受けるスキルで、相手の防御行動に一定の妨害効果がある。

距離を取って戦うのが一番だが、それだと必中無弓（ゆみ、きそうかちなし）で打ち抜かれる。

下手すると打ち抜かれ、隙を無理やり作らされることになる。

一瞬とはいえ、スタン状態は絶体絶命のピンチだ。

しかも、赤兎無尽（せきと、いまだしなず）のおかげでダメージの自然回復までこなす万能武器となっている。

さらに恋自身の戦闘のセンスも合わせて考えると、勝率が見えない。

たぶん王の財宝（ゲートオブバビロン）の宝具の雨すら何とかするんじゃなかろうか。

「・・・こないの？」

「どうやって戦おうか考えてるんだよ」

とりあえず鎧は着て、エアを手に持っているものの、どう戦おうかという点については全く思いつかない。

「こないなら、恋から行く。」

そう言って恋は肩に乗せていた軍神五兵（ゴッドフォース）を両手で構え、こちらに走りこみながら振り下ろす。

こうやって説明しているだけだとゆっくりに思えるが、恋がいく、と言い終わってからこちらに軍神五兵（ゴッドフォース）を振り下ろすまで、二秒も掛かっていない。

「ちょっ！」

慌ててエアを当て、軍神五兵（ゴッドフォース）を弾く。

危ない。とっさに防御行動を取りそうになったが、恋の攻撃に合わせるように攻撃して何とか相殺した。

・・・ステータスをセーブしてる場合じゃないな。

俺は急いで魔力を身体に循環させ、ステータスを元に戻す。

「ん、ぎるも、本気出した。」

・・・最初の一撃を防げたのは奇跡みたいなものだ。

これは、全力で行かねば負ける。

「回れ、エア。恋も本気みたいだし、こっちも出し惜しみなしだ。」

エアを回し、背後には宝物庫への扉を開けておく。

「恋は、こういう風に戦って欲しいんだろ？」

「そう。」

ゆけ、と宝具たちに命ずる。

その瞬間、発射待機状態だった宝具たちが恋目掛けて飛んでいく。

「っ」

短く息を吐いた恋は、踊るようにステップを踏んで宝具の密度が少ないところへと移動する。

そこでしばらく宝具を弾いた後、また密度が少ないところへ・・・と何度か繰り返す。

いくつか恋の身体を掠る宝具もあったが、赤兎無尽（せきと、いまだしなず）によって軽症ならほとんどタイムラグ無しで修復する恋にはほとんど無視していいものとなっている。

改めて思うが・・・呂布に軍神五兵（ゴッドフォース）は鬼に金棒と同じかそれ以上の相性だ。

「は、はは・・・」

だが、滾る。

目の前の宝具の雨を凌ぐ英雄を見て、エアを握る手に力が入る。

「・・・止まれ」

降り注いでいた宝具の雨がぴたりと止まり、地面に突き刺さっていたものも、今にも発射されそうになっていたものもすべて宝物庫の中へ引っ込む。

「どうしたの？疲れた？」

恋は軍神五兵（ゴッドフォース）を肩に担ぐいつもの格好で、息も切らさずに聞いてくる。

そんな恋に、違うよ、と答え

「発射しても意味無いから、止めたんだ」

回転するエアの刀身は、風を巻き起こし、木々を揺らす。

この状態のエアは、全力ではないにしろ天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）を放てるようになる。

その風で宝具が散ってしまうため、俺は宝物庫を閉めたのだ。

「行くぞ、恋。俺も今、すごく恋と戦いたくなった」

・・・

「あ、その洗濯物はそっちに干しておいて、詠ちゃん」

「了解。・・・にしても、洗濯するには良い天気よね」

「そうだね。すぐに・・・きゃっ！？」

「な、なによこれ！？」

洗濯物を干していた月と詠の二人は、突然の地震に慌てる。

すぐに収まったが、間隔を置いて何度か地面が揺れる。

「魔力反応・・・まさか、ギルさん！？」

「じゃあ、まさか・・・ギルが全力出すような相手が出たってこと！？」

アーチャーが全力を出せば、世界が揺れることはすでに知られていた。

ならば、今こうして地面が揺れているのも、アーチャーが全力を出しているからだろう。

そう判断した二人は、洗濯物を干すのも放り出し、魔力の反応があるところへと走った。

「全くもう、平和になったと思ってたのに！」

「ギルさん・・・！」

アーチャーの元へと向かう途中、響と孔雀が合流する。

「月ちゃん、これってやっぱり・・・？」

「たぶん、そうだと思います・・・！」

「・・・そっか、ハサン、先に行ってて！もし何かあるようだったら、ハサンが判断して」

響が虚空に話しかけるようにアサシンに話しかける。

気配遮断でいないように感じるだけで、アサシンは常に響の周りを警戒しているのだ。

「キャスター、何か異常は感知できた？」

「いいや、何も。セイバーと本気の手合わせでもしてるのかと思ったけど、この魔力はセイバーじゃないね」

「バーサーカーとかランサーとかは？」

「どれとも違う。既存の七つのサーヴァントのどの魔力にも当てはまらない」

「え・・・？じゃあ、八体目のサーヴァント！？」

孔雀が珍しく驚きをあらわにする。
キャスターはなにやらうんうん唸りながら、何が起こっているのかを把握しようとしているらしい。
途中で、後ろからセイバー組が追いついた。

「・・・やはり、ギルか」

セイバーは諦めたようにつぶやく。
やはり、の部分にはいっそう呆れのようなものが篭っていた。

「あ、あははー。ギルさんって罪な男だよねー」

「そうね。天変地異が起こったらまずあいつが真っ先に浮かぶものね・・・」

はぁ、とため息をつきながらも、走る足は緩めない詠。

「いたっ！あそこ！」

「あれ、ハサン・・・？何で突っ立って・・・え？」

「ギル、誰と戦って・・・おや？」

「ん？おー、みんなそろって。どうした？」

「みんな、見に来た？」

全員がぽかんとした顔になる。
そこには、アーチャーと恋が武器を持ってたっていたからだ。

「え、えーと、ギル？何をやってるのかな・・・？」

孔雀が少し引き気味に質問する。
地面はところどころ抉れ、木の葉は散り、壁には穴があいていた。

「何って・・・手合わせだけど。なぁ、恋」

「うん。全力の手合わせ。」

「ば、ば、ば・・・」

「ば？」

「ば？」

詠の言葉に首をかしげる二人。
次の瞬間。

「馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー！！」

詠の絶叫が、中庭にこだました。

・・・

「あんたね、自分が何振り回してたか分かってんの！？」

「・・・はい」

「恋、あんたも！こんな状況で宝具振り回したら騒ぎになるって分かるでしょ！？」

「・・・ごめんなさい」

先ほどまで暴風吹き荒れ火花散る戦場だった中庭で、ギルさんと恋ちゃんの二人は正座させられていました。
その目の前では、詠ちゃんが仁王立ちでお説教中です。

「大体、何でこんなことになったのよ」

「それは――――」

かくかくしかじか、とギルさんが詠ちゃんに説明を始めました。
・・・恋ちゃん、武闘会から外されて寂しかったみたいですね。

「・・・そう。確かに、今の恋じゃギルくらいしか相手できないわね」

「ぎる、悪くない。恋が無理やり誘った。」

「いやいや、途中で自重を忘れた俺のほうが悪い。」

「はいはい、分かったわよ。全く」

むすっとした顔で詠ちゃんは二人の言葉をさえぎりました。

「・・・とりあえず、この中庭何とかすること。いくわよ、月」

もう、走ってきたのが馬鹿みたい、とつぶやいてきびすを返す詠ちゃん。
慌てて後ろを追いかけます。

「あちゃー、改めてみるとやりすぎたなぁ」

「・・・頑張って直す」

「そだな、頑張るか」

・・・あの二人を二人っきりにするっていうのに若干の抵抗はあるけど、今は詠ちゃんの機嫌を何とかするのが先です。
暴れちゃったギルさんも悪いけど、詠ちゃんも詠ちゃんで心配したんだから、って素直に言えばいいのに。詠ちゃんはやっぱりツン子だなぁ。

「まぁ、そこが可愛いんだけど」

「月、何か言った?」

「んーん、なんでもないよ、詠ちゃん」

振り向いて質問してきた詠ちゃんに首を振りつつ答えます。

「ぎる、恋の所為で仕事増やしてごめん」

「気にしてないよ。だからそんな風に暗い顔するなよ」

ちらり、と後ろを見ると、恋ちゃんの頭を撫でているギルさんが見えました。

恋ちゃんも嬉しそうにして・・・とっても仲睦まじいですね。

・・・何故かは知りませんが、ちょっと戻って二人の作業のじゃま・・・げふんげふん、お手伝いしてあげたくなっちゃったなー。

「ふ、ふふふ、ふ」

「ゆ、月？ちょっと、目が怖いわよ？」

詠ちゃんに声を掛けられて顔を戻すと、詠ちゃんが変にこわばった顔をしていました。

「え？どうかしたの、詠ちゃん」

「・・・ううん、なんでもないわ」

変な詠ちゃん。

・・・

第六話　将との出会いと戦いに（後書き）

おそらく魏からは流々がハーレム入りするかと思います。
華琳は・・・どうしましょうか。悩んでおります。

あえてステータスを下げていた云々の話は完全に捏造設定です。原作でサーヴァントたちが実際にできるのかはわかりません。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第七話　勘違いの後に（前書き）

今回は長いと思います。そして、なんだかラブコメっぽい内容となっておりますので、ご了承下さい。

それでは、どうぞ

第七話　勘違いの後に

「水泳大会？」

本日は晴天なり。気温はかなり高く、政務室にいる雪連やシャオが暑い暑いと騒ぎ、連華が暑いわねとため息をついていた。
あ、ちょうどいい、と思った俺は、説得しやすそうな雪連に水浴びでもしたらどうだと持ちかけた。

「・・・ふぅん、水着、ねえ」

宝物庫から取り出した水着の中から一つ選びいろいろ弄っている雪連。
水を掛けたり引っ張ったりして水浴びに使えるのかどうかを確認しているようだ。

「いいじゃない、これ。幸い今日は急ぎの仕事もないし、暇そうな子を何人か誘って行きましょうか」

「よしきた。準備はこっちでしておくから、雪連は人集め頼んだ」

「あら、張り切ってるじゃない」

「当然だろ。龍を倒しに行ってまで作った水着だぜ。着てるところを見ないと倒した甲斐がないからな」

「そう？じゃあ、目の保養になりそうなのを何人か連れて行こうかしら。・・・あ、シャオは確定ね」

「ん、まぁそりゃあそうだろうな」

誘わなかったら後が怖いし、シャオがどんな水着を選ぶのかも気になる。

「意外ね。嫌がるかと思ったけど」

嫌がる？・・・ああ、いつもシャオに迫られ絡まれてるからか。

「別にシャオのことは嫌いじゃないしな。ああやって好かれるのは嬉しいし。・・・ちょっと押しが強すぎるからこっちも引いちゃうっていうのはあるけど」

「でも、お淑やかなシャオとか想像できないでしょ？」

「・・・なるほど、確かに。あれもシャオの良い所なんだなぁ」

俺がそう答えると、雪連はにぱっ、と笑って

「そうよ、あの子は少し感情を素直に出しすぎるだけなんだから」

だから、きちんと受け止めるのよ、と雪連はどこか嬉しそうに言った。

「了解。分かったよ。それにしても・・・やっぱり雪連もお姉さんなんだな。」

「ん？」

「いや、シャオのことキチンと分かってるみたいだし、妹の誤解解

く思いやりもあるし」

「な、なーに、急に褒めて。何もでないわよ？」

いつものようにおちゃらけつつ、恥ずかしそうに苦笑いを返す雪連。
そんないつもとは違う雪連を見れて嬉しいみたいだ。雪連を見て、
俺の顔には微笑が浮かんでいる。

「俺もシャオを見習って素直になってるんだよ。雪連も、素直に受け取っておけ」

「・・・ふふ、分かったわ。ありがとね、ギル」

「いえいえ。さて、じゃあそろそろ行くか」

「ええ。みんなも誘わなきゃだし。・・・あ」

「大丈夫。お酒も用意してある」

何かを思い出したとばかりに手を叩く雪連が何か言う前に答える。
俺の言葉を聞いた雪連は一瞬きょとんとしたがすぐに笑みを浮かべ

「あら、分かってるじゃない。それじゃ、楽しみにしてるわよ？」

「おう、期待しててくれ」

そう言って、雪連の部屋の前で俺たちは別れた。
さーて、一刀呼んで、兵士かき集めて・・・。ちょっと急ぐかな。

・・・

少し上流に行った川へとやってきた。
瀧があったりといつもより起伏に富んだ地形となっている。

「ギールっ、お待たせー！」

「おおっと。シャオか。どうだ、水着は」

「えへへ、ぴったりだよ。どう？悩殺されそう？」

背中に抱きついてきたシャオが俺の目の前まで移動してくる。
おお、紐じゃないですか。この子、三姉妹の中でも一番セクシー路線を突っ走ってるんじゃなかろうか。ロリぃのに。

「すごいな、シャオ。ここまでこの水着を着こなせるなんて」

できればスク水着て欲しかったけど。・・・っと、危ない危ない。
口が滑った。

「んふふっ。こーんな風に、くっついてみちゃったりー・・・」

「こ、こら！シャオ！？ギルにそんな破廉恥なこと・・・！」

俺に背中を預けたまま艶かしい動きをするシャオに、とうとう連華が怒った。
だがシャオはそんなもの聞こえていないかの様に振舞う。

「どうどう？シャオのこと、お嫁さんにしたくなっちゃった？」

改めて考えると、こうやって堂々と気持ちを言えるっていうのはす

ごいよなぁ。

「しゃ、シャオ！もう、離れなさいって！」

「えー？お姉ちゃんもくっついちゃえばいいのに。ギルの背中、あいてるよ？」

「うっ・・・せ、背中・・・直接肌に・・・触れ・・・っ！」

シャオの言葉を聞いてからぶつぶつ言い始めた連華だが、すぐに川へと顔を突っ込んだ。
少しすると顔を上げてこちらを見据え・・・

「え、えいっ」

俺の背中に、少しだけくっついてきた。

「うおっ、連華冷たいなぁ。びっくりした。」

まぁ、さっきまで川に入ってたしなぁ。そりゃ冷えるか。

「ふ、ふふふふ。こここのくらい、どどどうってことないわね」

「お姉ちゃん、声、すっごいどもってるけど・・・」

「気のせいよっ」

「ふぅん？」

「なによ？」

・・・どうでもいいんだけど、俺の身体を挟んでにらみ合うのやめてもらっていいですかね・・・？
というか、連華といえば尻に目が行きがちだけど、胸もなかなか・・・。
だめだ。意識するといらんところに血液がいってしまう。何か別のことを考えないと。

「亞莎ちゃん、それ～！」

「きゃっ！？の、穏さまっ！やりましたね～」

「えへへ～、先手必勝なのですよぉ？」

きゃっきゃと戯れる亞莎と穏に目を向ける。
亞莎はスク水着用だ。あの野暮ったい感じと亞莎の鋭い目がちょうど良くマッチしていると思う。
穏は・・・あ、駄目だ。また血液が・・・。あの胸、桃香と良い勝負・・・いや、穏の方が攻撃力は上か！？
とにかく、あの二人は駄目だ。他には・・・。

「んー、このお酒、おいしいわねぇ」

「何でも、ワインと言うらしいが・・・」

「ぷはぁ～！何杯でもいけるわね！」

パラソル（のようなもの）の下で酒を飲みつつ涼む雪連と同じく酒を飲みつつ本を読んでいる冥琳が視界に入った。
雪連は赤、冥琳は黒の・・・って、あっちも駄目じゃないか。何で

呉には巨乳が多いんだ。全く、けしからん。
最後の砦、滝行をしている思春と明命に目を向ける。

「・・・ほわぁ」

「どこを見ている、明命。今は集中しろ」

「は、はいっ！」

「・・・穏の胸か」

「思春さまも気になりますか！？」

「いやでも目に入る。・・・ちっ」

「おっきいですよね～・・・もげればいいのに」

「？何か言ったか？」

「いいえ、なんでもないです」

・・・なんであんな競泳の水着みたいなものまであるんだろう。
一刀、お前・・・ストライクゾーン広いなぁ・・・。
それとも、先見の明があるというべきか・・・。

「・・・ふぅ」

しかし、あの二人を見ていると自然と落ち着いた。これならば、冷静に対処できるだろう。
そう思っていた矢先・・・。

「ギル、この水着、というものはなかなかよいな」

祭が黒いビキニとパレオを装備して近くに立っていた。

・・・しまった、忘れてたぞ、この穏と双璧を成す巨大な敵の存在を・・・！

「どうしたのじゃ、ギル。急に固まって」

そっちこそどうしたんですか。胸、こぼれそうになってますよ？

・・・しまった、思考回路にバグが。あまりの衝撃に碌な事考えられん。

「い、いや、どうもしてないよ？祭が綺麗過ぎたから、驚いてたんだ」

「そう褒めるな。年甲斐も無く嬉しくなってしまうじゃろう」

かっかっか、と笑う祭は髪をかき上げながら雪連のほうへと歩いていった。

・・・何とか、凌いだか。

さて、そろそろこっちの二人の相手をしないとな、と思いながら口を開く。

「よし、シャオ、連華、せっかく水遊びしに来たんだ。遊ぼうぜ」

「ほんと!?じゃあ、シャオはギルとおいかけっこしたい！」

「そ、それより、ギル。私と向こうで涼まないか・・・？」

「えー！？ギルはシャオと追いかけっこするの！お姉ちゃんは一人で涼んでれば！？」

「な、まだそう決まったわけではないでしょう！？シャオこそ、一人で走ってきなさいよ！」

「まぁまぁ、とりあえず川にいる魚でも探しながら涼むとしよう」

もちろん、三人一緒にな、と付け加えるのを忘れない。
姉妹は仲良くしないと。
連華とシャオの相手をしているうちに穏や雪連に絡まれたりもしたが、とてつもなく充実した時間だったといえるだろう。
・・・あと、雪連酒飲みすぎ。

・・・

呉の水泳大会の翌日。
さて政務でもするかと思っていたとき

「ギルおにーちゃーん！」

扉の向こうから璃々の声が聞こえた。

「璃々か。どうしたー？」

扉を開けると、小さいメイド服を着てお盆を持っている璃々がたっていた。
お盆の上には湯飲みと急須。湯気がたっていないことから、すでに冷めていることが伺える。
・・・さて、脳をフル回転させようか。

まず、何でメイド服？何でお茶？というか、何で璃々？
駄目だ。情報が少なすぎて何も推理できない。

「り、璃々、どうしたんだ？」

「あのね、月おねーちゃんに、めいどふく着たいって言ったら、璃々の分もよういしてくれたの！」

「うんうん」

「それで、月おねーちゃんのお手伝いしたいって言ったら、お茶を届けて、って言われたの！」

・・・なるほど、それでお茶が冷めてるわけか。
万が一こぼしでもしたら危ないからな。さすが月。気遣いをさせたら右に出るものはいないな。

「そっかそっか。ありがとな、璃々」

「へへー。ギルおにーちゃん、座ってっ。璃々がお茶入れてあげるー！」

「ああ。お願いするよ。」

俺は椅子に座り、璃々がお茶をいれてくれるのを見守ることにした。
璃々は近くにあった椅子を引っ張り、台にした。足りない身長の分を補完してるんだろう。

「ん、んー・・・」

とぽとぽ、とぎこちなくもお茶を湯飲みに注ぐ姿は見ていて和む。

「よし、もう十分だよ、璃々。ありがとう」

あまり続けるのもつらいだろう。そう言って手で制すると、わかったー、と急須を戻す璃々。

だが、璃々は姿勢を戻すと同時に後ろへと傾いてしまった。

「あぶなっ・・・！」

「ひゃ・・・っ！」

急いで手を伸ばして手を掴む。

・・・危ない。何とか間に合ったか。

「あ、うぅ～」

しかし、間に合ったのは璃々だけだったようだ。

湯飲みと急須に入っていたお茶がすべて璃々に掛かってしまった。

「あー・・・ごめんな、璃々。そこまでは気が回らなかった」

「だ、大丈夫だよ、ギルお兄ちゃん。」

「しかし、ぬるいお茶で助かったな。いつもどおりの温度だったらと思うと・・・。」

「えへへ、そうだね・・・っくち！」

「あー、びしょ濡れだもんな。ほら、璃々。一回服脱ごうか」

・・・いや、いやらしい意味じゃなくてね？
応急処置的対応といいますか、濡れたまま帰すわけにも行かないじゃないですか。
って、俺は誰に言い訳を・・・。

「うんっ。・・・あ、ギルおにいちゃん、脱ぐの手伝ってー！」

「はいはい。えっと、月や詠のと同じなら・・・」

万歳をする璃々の正面に回って、ボタンをはずしていく。
あーあー、結構お茶掛かってるなぁ。下着までいっちゃってるかも。

「ほら、脱がすぞー。ばんざーい」

「もーしてるよー」

「そうだったな。」

ああ、娘を持つ父の気持ちってこんなのだろうか。
そんな風に和んでいると、扉が開いた。

「ねーお兄さん、政務のことなんだけど・・・へ？」

「はわわ、桃香さま、のっくをしませんと・・・はわ？」

「ん？二人とも、何を固まって・・・っ！？」

開いた扉の向こうには、桃香と朱里、そして愛紗の姿が。
ばっちりと目が合った後、三人の視線は俺の手元に向かう。

俺の手元・・・そうだ、今璃々を脱がせてて・・・って

「ち、違う！たぶん桃香たちが思ってることはすべて間違ってる！」

「お、お兄さん・・・私や愛紗ちゃんに手を出さないと思ったら・・・」

「は、はわわ・・・これは、私たちに勝機が・・・？」

「ギル・・・殿・・・？う、嘘ですよね・・・？」

愕然とする桃香と愛紗。そして何故か軍師の顔になっている朱里。

「どーしたの、ギルお兄ちゃん。璃々、下着までびちゃびちゃだから早く脱がせて？」

「下着まで・・・」

「・・・びちゃびちゃ！？」

「違うぞ！？今のは決定的に言葉が足りなくて・・・」

「お、お・・・！」

「お？」

わなわなと震えながら桃香は後ずさる。おってなんだ。

「お兄さんの幼女趣味ー！」

そういうことかっ。
というか、なんて失礼な！

「お、お待ちください桃香さまー！？」

「っ！」

泣きながら走り去る桃香に、それを慌てて追いかける朱里。そして、深刻そうな顔をして部屋を去る愛紗。
・・・不味い。何が不味いってすべてが不味い。

「？桃香さま、どうかしたのかなー」

「・・・うん、どうか、したんだよ」

もういいや。今から追いかけても無駄だろう。とりあえず、璃々を着替えさせないと。
下着はさすがないが、俺のＴシャツでも着ていてもらうか。

「璃々、寒いだろうから寝台にいっていていいぞ」

「うん。」

てて、と走る璃々。
だが、足元に広がるお茶に気づかず、そのままお茶を踏んで

「ふにゃっ！」

すっころんだ。

「・・・ああもう、璃々ってば可愛いなぁ・・・」

おっと、和んでいる場合ではない。
下着姿で地面に転んでしまったのだ。相当痛いだろう。
急いで起こさないと。
そう思って璃々の元へと駆け寄る。・・・が

「大丈夫か璃々・・・ってうおっ!?」

しまった、俺もお茶を失念していた!?
目の前には・・・璃々!

「うおっと!」

璃々に倒れこむ直前、何とか地面に手を着くことができた。
これで俺と地面のサンドイッチになることは防げただろう。
ふう、と安堵の息を吐いた瞬間。

「あら、扉が開いてるわね。お邪魔するわ・・・よ・・・?」

「おーい、ギルー?前に言ってた新作の服のはな・・・し・・・」

声が聞こえた。しかも、すごく聞きたくない種類の。
ぎぎぎ、と油の切れたような音を出しながら、横を向く。
そこには、何かいけないものを見た、という表情をした華琳と一刀が立っていた。

「ごめんなさい。扉が開いていても、のっくはするべきだったわね」

「・・・え、えーと、ごめんな、ギル。・・・その、や、優しくし

てやれよ？」

「よし、分かった。一度落ち着こうか。説明するからこっちに・・・
あ、逃げるな！」

二人に手を伸ばした瞬間、脱兎のごとく逃げ出された。
なんということだ。これで蜀と魏の二つの国に俺が璃々を襲っている
という噂が流れてしまう！

「くそ、呉に見つかる前に何とかするしか・・・！」

とりあえず起き上がり、璃々を抱き上げ、寝台の上に。

「璃々、とりあえず下着はそのままで我慢して、これに着替えてくれ。」

今、下手に下着を脱がせたらどんな勘違いが起こるかわからないからな。

「うん、分かったー」

「あ、転んだとき怪我しなかったか？」

「大丈夫だよ。ほら！」

「ん、ちょっと赤くなってるだけだな。さ、着替えてくれ」

キャミソール（のようなもの）もショーツ（のようなもの）も無事だ。

「はーい。」

んしょ、んしょ、と璃々が着替えている間、こぼれたお茶をふき取る。

・・・さて、後は紫苑のところまで璃々を連れて行けばいいんだが・・・。

「ギルお兄ちゃん、この服だぼだぼだよー？」

「んー？・・・うわ、そこはかとない犯罪臭が・・・」

下着＋Ｔシャツなんてマニアックな服装を、よりにもよって璃々にさせるなんて・・・。

「仕方がない。ここに帯を巻いて、服っぽくしよう」

腰に布を巻き、とりあえずワンピースっぽくする。

これで少しはまともになった。ワンピースにしてはミニスカだけど。

「わー！ぴったりになったー！」

わーい、わーいと喜ぶ璃々を落ち着かせようと声を掛ける。

「とりあえず、これから紫苑のところに・・・わぷっ！？」

「ギルお兄ちゃんにどーん！」

言葉の途中で、璃々が顔面に飛び込んできた。

何とか倒れずに済んだものの、よたよたと足がふらつく。

そして、つま先で何かを踏んだ感触の後、急に前に倒れる。

あ、さっき床を拭いた雑巾ほっといたままだ・・・。

「あぶな・・・！」

「きゃーっ」

焦る俺に対し、璃々は楽しそうな悲鳴を上げる。
ぼふ、と寝台に受け止められる。よかった、床じゃなくて。

「あいたた・・・ギルお兄ちゃん、だいじょーぶ？」

「・・・一応」

しかし、視界が回復しない。
顔には、何か白くて湿っているものがくっついている感触が・・・。

「ギルー、いるー？あのワインってお酒なんだけ、どー・・・？」

「雪連、急に部屋に入るなとあれほど・・・」

目前のものが何か、を理解すると同時に、背後からの声が聞こえた。
これは、今日で一番不味い。
顔面に飛び込んできた璃々と寝台に倒れこんだとき、璃々はちょうど寝台に座るように着地。
そして、俺は璃々に引っ張られたため、顔の部分だけ寝台に着地した。
両手は衝撃を和らげるために寝台についたはずだが、細くて柔らかい何かを掴んでいる。
そして、目の前には・・・。

「――――!?」

慌てて顔を上げる。

予想通り、寝台に座りこんでいる璃々が頭に疑問符を浮かべている。

・・・しかも、手は足を押さえるようになっていたらしい。なんてこった。

間違いない。あの白い布のところに顔を突っ込んでいたのだろう。

どこ、とは明言しない。

「あ、あー・・・その、お楽しみの所・・・だった?」

「・・・ふむ。」

「や、やめろ!その苦笑いとすべてを理解したような笑みをやめろ!」

雪連と冥琳にそう叫ぶが、多分無駄だろう。

「ごめんねー?ワインについては、また後で尋ねに来るわー。・・・ねえ冥琳、これは、シャオも勝ち目があるんじゃない?」

「うむ。小連さまは璃々と同じような体型だからな。・・・なるほど、ギルは・・・」

「あああっ!変な勘違い論議をしながら去るんじゃない!」

早足でテクテクと去っていく二人を逃さないように追いかけ・・・

「へっくち」

・・・ようと思ったが、流石に璃々を放置していくわけには行くまい。
この気温で風邪を引くことは無いだろうが、暖かくするに越したことは無い。

「ほら、これも着ておけ、璃々。」

「ほわー、あったかだねー」

「多分そのうち暑くなると思うけどな」

なんちゃってワンピースの上からフランチェスカの制服を羽織らせると、俺は璃々をつれて部屋を出た。
・・・なんだろう。寒気がする。こう、全身で殺気を受けているというか、恋五人くらいに囲まれたくらいの恐怖というか・・・。

「めいどふく、濡れちゃったなー」

「紫苑に洗濯してもらえばいいさ」

「おかーさん、めいどふく洗えるかなー」

「あー・・・。分かった、月に頼んでおくよ」

「ほんと!?じゃあ、お願いね、ギルお兄ちゃん!」

「ああ」

璃々からメイド服を受け取り、宝物庫の中へ収納する。
後で月を探して洗ってもらえるよう頼んでみるか。

「お、紫苑の部屋に着いたな。紫苑ー？」

声を掛けつつノックするが、反応が無い。

「・・・璃々、紫苑はどこか行くとか言ってた？」

「えー？んー、わかんない。月おねーちゃんの所でお手伝いしてきなさいって言われただけだから・・・」

・・・まぁいい。とりあえず、璃々を部屋に帰そう。

「璃々、今日は部屋に戻って、下着を替えて、キチンと服を着るんだぞ」

「はーい。」

「それと、部屋から出ないこと。桃香とか、華琳とか、雪連とかがきても扉を開けないこと。」

「おかーさんは？」

「紫苑は例外。きちんと紫苑に今日あったことを報告するんだぞ？」

「うん、分かったー！」

「よし。じゃあ、俺はそろそろ行くな」

「うんっ、ばいばーい！」

ぶんぶんと腕を振る璃々に向けて腕を振り替えしながら、紫苑の部屋を後にする。
・・・まずは、桃香たちの誤解から順番に解いていくべきだろうか。
それとも、一番重症な勘違いをしている呉から行くべきか。

「桃香だな」

泣いてたし、一番心配だ。

・・・

桃香を探して城を歩いていると、なんだかいつもより兵士たちが騒がしい気がする。
ちょうど会話をしている兵士二人がいたので話を聞こうと近づく。
が。

「なぁ、聞いたか、ギル様の噂」

「ああ。何でも、幼子に手を出したとか・・・」

すぐに物陰に隠れた。危ない。すでに噂が拡散されている。
そんなところに噂の張本人が現れては、兵士たちが俺から話を聞こうと集まってくるに違いない。
それは避けなければ・・・。今は兵士に見つからずに桃香を見つけ出し、誤解を解く。
桃香の近くには愛紗と朱里もいるはずだ。愛紗はともかく、朱里ならば論理だてて説明すればきっと理解してくれる。

「・・・はぁ」

でも、何でこんなことしてるんだろうか。
俺って幸運Ａ＋＋じゃなかったっけ？
こんなラブコメの王道みたいなこと璃々とやらかすとは思ってもいなかった。
まぁ、どれもこれも誤解を解くまでの辛抱だ。
とりあえず、玉座の間へ行ってみるか。あそこにいる可能性が高そうだ。

「おっと」

気分は潜入任務中のエージェントだ。
兵士の目をかいくぐり、時には宝具を使って切り抜ける。

「・・・着いた」

いつもなら十分と掛からない道のりなのだが、変な手間を掛けた所為で三倍ほど時間が掛かった。

「おーい・・・桃香ー？いるかー？」

小声で呼びかけてみる。
・・・反応が無い。誰もいないのか？
扉から顔を覗かせる。玉座の間には誰もいないように見えるが・・・。

「ギル？何やってんだ？」

「っ！・・・何だ、銀か」

「なんだって何だよ」

何やってんだよ、という銀に、今日あったことを話す。
銀はまだ噂を聞いていなかったようで、お前・・・大変だなぁと肩を叩いてきた。

「なんというか・・・初めて味方を見付けた気がする」

「んな大げさな。それで？劉備さま捜してるんだっけか」

「ああ。見かけなかったか？」

「あー・・・んー・・・」

唸りながら銀はここにくるまでのことを思い出しているらしい。

「あっ」

「お、何か思い出したか！？」

「ああ。そういや、ここにくる途中に通った通路の反対側で、劉備さまが走ってるの見たぜ」

「えっと、銀はあっちからきて、その反対側を・・・どっちに走ってった？」

「西」

「じゃあ、蜀の屋敷だな」

あの方向なら、それが一番可能性が高い。

「ありがとう、銀。俺、ちょっと行って来る！」

「おーう。俺は兵士たちの誤解でも解いて回ってやる」

「すまん。恩に着る」

「ははは、良いって事よ。とりあえず、一週間の昼飯な」

「ああ、一週間といわず一ヶ月の昼飯は約束しよう」

「お、俄然やる気出てきたね」

それじゃな、と言って走り出した銀の背中を見送ってから、俺も蜀の屋敷へと急いだ。

・・・

「桃香っ！」

「・・・どうしたの？」

「恋。桃香を見なかったか？」

蜀の屋敷に入ると、恋が動物にえさをあげているところに遭遇した。セキトを筆頭に、大小さまざまな動物がえさにぱくついている。

「桃香？・・・あ、多分部屋」

「そっか、分かった。ありがと」

お礼を伝えつつ、恋の頭を撫でる。
恋も月たちと同じく頭を撫でると喜んでくれる娘だ。

「～っ」

嬉しそうな顔をして撫でられている恋を見ていると、当初の目的を忘れそうになる。

「・・・おっと、いけないいけない」

恋の頭から手を離し、手を振って別れを告げる。

「ん、ばいばい」

「ああ、またな」

小走りに屋敷の中を走る。
桃香がこの屋敷でいそうな部屋といえば・・・。

「桃香っ！？」

「お、お兄さん・・・？」

「は、はわわっ。ギルさん！」

「な、え、その、えと」

部屋の中では、小さい服を無理やり着ようとしている桃香と愛紗、そしてすでに着ている朱里の三人がいた。

朱里は別として、着替えようとしている桃香と愛紗はもちろん下着姿なわけでして・・・。
二人が俺を視認すると、耳を劈(つんざ)くような悲鳴が上がった。

・・・

「・・・なるほど、お茶をかぶってしまった璃々ちゃんを着替えさせようと」

「そうなんだ。本気で他意なんて無くてだな・・・」

「そ、そっか、そうなんだ。お兄さんがその・・・璃々ちゃんくらいの娘しか愛せない人なんじゃないかって勘違いしちゃった」

あの悲鳴の後、俺は何とか二人を落ち着かせ、朱里に状況を説明した。
どうしてこうなったのか、と説明した後の言葉が、先ほどのなるほど、だ。
よかった。やはり朱里はきちんと説明すれば分かる娘だったんだ。

「し、しかしですね！璃々だってもう一人で着替えられるじゃないですか！」

「はわ、おそらく璃々ちゃんはメイド服を着たのが初めてで、脱ぎ方が分からなかったのでしょう。月ちゃんたちも、最初は脱いだりするときに困ったって言ってましたから」

「う、そ、そうなのか。」

「はい。思い返せば、確かにメイド服は濡れていた気がしますしね」

朱里がそこまで状況を思い出すと、桃香はなーんだ、と脱力して座り込んだ。
愛紗もため息をつきつつ椅子に座った。

「うぅ、ぜーんぶ、勘違いだったんだね」

「はい・・・前回といい今回といい・・・私は早とちりばかりしていますね」

「き、気にするなよ。俺だって、ちょっと紛らわしいと思ってたし、今回はタイミング・・・機会が悪かったってことで」

「そう言っていただけると助かります・・・」

「・・・でも、ギルさんはそういう趣味じゃなかったんですね。ちょっと残念かもです」

「ん?何か言ったか、朱里」

「はわわ!なんでもないですっ」

・・・?変な朱里だな。
しかしまぁ、これで桃香たちの誤解は解けたな。

「よし、それじゃあちょっと呉と魏の屋敷に行って来る」

「え?何かあったの?」

「・・・いや、桃香たちが去ってった後にも不幸な事故があって・・・

・」

その後、華琳と一刀、そして雪連と冥琳にそれぞれ勘違いされたことを話した。
すべて話し終えた後、三人は引きつった笑いしか浮かべることができていなかった。

「・・・お兄さん、何か宝具で呪われたんじゃないの？」

「そうですね。魔術や妖術なども可能性は高いのではないですか・・・？」

「はわわ・・・幸運が高いギルさんがそんなに不運に見舞われるなんて・・・」

「まぁ、とりあえずそんなわけなんで、ちょっと行って来るよ」

「はい。御武運を」

「・・・やっぱり、そこまで覚悟しないといけないか」

愛紗の冗談にならない見送りを受けて、俺は蜀の屋敷を後にした。

・・・

・・・呉の屋敷に着いた。だが、何だろうこの気配。
俺の悪いほうにしか働かない直感が、何か起きると知らせてきている。
屋敷の門を開くのすら恐ろしい。
・・・だが、行かねばならぬ。

「こんにち」

「ギルーっ！」

わ、と言おうとしてキャンセルさせられた。
お察しの通り、シャオが突っ込んできたからだ。

「ギルギル、シャオは信じてたよ。やっぱりギルは、シャオみたいな女の子が大好きなんだよねっ！？」

「ま、まさか雪連から・・・」

「うんっ。おねーちゃんから聞いたの！ギルはぺったんこな女の子にしか興味の無い男なんだって！」

「なん・・・だと・・・！？」

噂が加速している！俺の尊厳が消えた・・・！？

「そ、それには理由があってだな・・・」

「う、うそ・・・」

何かに絶望したかのような声が聞こえた後、どさり、と重量のあるものが落ちた音がした。
振り向くと、そこには手で口を押さえてわなわなと震える連華の姿が。

「ぎ、ギル・・・あなた・・・」

何で誤解を解きに来て誤解されなきゃならないんだ・・・！

「違うぞ。良いか、シャオも落ち着いて聞いてくれ」

「えー、何々、結婚して欲しいってー？きゃーっ、どうしよー！」

「そうなのか・・・！？」

何故かはしゃぎだすシャオと、悲しげな声を出す連華。
取り合えず二人を落ち着かせないと、と思った瞬間、鈴の音が聞こえた。

「ギル。貴様・・・連華様を・・・！」

「また面倒くさいのが！」

背後から振るわれた一撃を宝物庫から宝剣を出すことによって防ぐ。

「話が進まない！悪いけど、無理やり話を聞いてもらうぞ！天の鎖（エルキドゥ）！」

「きゃっ！」

「わわっ・・・！」

「くっ、不覚っ！」

三人を拘束し、ゆっくりと説明していく。
噂は完全に勘違いだということをようやく納得してもらい、鎖を解

く。

「三人とも、わかってくれた様で何よりだ。」

「・・・ちょっとがっかりだけどねー」

「す、すまないな、ギル。私、変な勘違いを・・・」

「ちっ。」

・・・思春さん、何で舌打ちしたんすか？

「取り合えず、姉さんには私から話しておくわ。冥琳も、きちんと説明すれば分かってくれるでしょう」

「ああ、頼んだ。それじゃあ、俺はこれで！」

「ええ。」

よし、蜀と呉は何とか誤解を解くことができたな。最後は魏だ。

・・・

「あ、兄貴！」

「ん？」

呉の屋敷から魏の屋敷へと向かう途中、以前一緒に龍を倒しに行った兵士たちがそろっていた。

「やはり、兄貴はこちら側の人間だったのですね！」

蜀の兵が嬉しそうにそういうと、兵たちはそれぞれに騒ぎ始めた。

「ちょ、まさかお前ら、噂を聞いたんじゃ・・・！」

「ええ。兄貴がついに幼女趣味に目覚めたという噂を聞きまして。噂にしては信憑性があったのでとうとう、と思っていたのですが」

「とうとう、じゃない！あれは勘違いがあってだな・・・」

それから、俺は兵士たちにすべての出来事を話した。

なるほど、そうだったんスね、と魏の兵士が言ったので、納得してくれたか、と安堵の息を吐きかけたとき

「つまり、おいしい思いをしてるってことじゃないッスか！」

「どういう思考回路をしているんだ！」

「兄貴、是非そんなおいしい目に会うためのコツを教えてください！」

「というか璃々ちゃんに侍女服姿でお茶入れてもらうとかなんて羨ましい！代わってください！」

・・・そういえば、蜀のは朱里や鈴々がストライクゾーンだったか。

「だが断る！っていうか無茶言うな！」

「兄者、兄貴はとっかえひっかえ侍女を侍らせているということで

いいのか？」

「弟者、おそらくそれで大体あっているはずだ」

「あってないぞ！」

駄目だ・・・火がついたこいつらを俺じゃ止められない・・・。

「しかし、兄貴はお嬢様にどう説明するつもりなんですか？」

「は？」

「いえ、いつもの修羅場を見ている限りではお嬢様は相当に嫉妬深いようなので・・・」

董の兵士がつぶやいた一言に、一瞬で思考が固まった。
こいつがいうお嬢様・・・つまり月のことなのだが、確かに月は嫉妬深いところがある。
しかも詠まで参戦しては、おそらく俺一人では対抗できないだろう。

「・・・やばいな」

「なるほど、ざまぁということですね、兄貴」

にやり、と笑う呉の兵士。くそ、今はその笑いに反論できない！

「取り合えず、魏の誤解でも解きに行ったらどうッスか？あそこの噂の伝播、半端じゃないッスよ？」

「え、そうなのか？」

「そッスよ。俺なんか・・・あばばばばばば」

「ど、どうした！魏の！魏のー！」

「駄目だ！気絶してる！」

「・・・そんなに恐ろしいことがあったんですか」

白目をむいて倒れた魏の兵士を支えながら、呉と董の兵士が叫び、蜀の兵がつぶやく。

「特にあそこは楽進将軍たち警備隊の方たちがいるからな、兄者」

「ああ、特に李典将軍と于禁将軍はやばいな、弟者」

・・・なるほど、あの二人なら頷ける。口が軽いってレベルじゃないからな。

「・・・よし、俺、魏の屋敷に行って来る」

「手遅れでないことを祈ります」

「ありがとう、蜀の。」

間に合え、と心の中で祈り続けながら、俺は走りだした

・・・

「一刀！いるか！？」

そう叫びながら魏の屋敷へ入る。
・・・ちょうどいい。きょとんとした一刀がこちらを向いて突っ立っていた。

「ん？・・・って、ギル。その・・・もう終わったのか？」

まぁ、璃々ちゃんも疲れるだろうし、長く付き合わせるわけには行かないよな、と意味不明の納得をする一刀。

「・・・そこへなおれ。」

「殺されるっ！？」

「違う。説明する。・・・断れば」

ちらり、と宝物庫から刀身を向けると、一刀はすばやい動きで床に正座した。

「取り合えず、あれは勘違いで・・・」

しばし正座させた一刀に説明し、納得してもらうことができた。

「・・・っていうか、ギル、お前ラブコメの主人公みたいなこと・・・」

「言うな。泣きたくなる」

「やめてくれよ。俺、ギルの男泣きとか見たくないぜ」

「だろうな。・・・取り合えず、華琳にも直接伝えておいてくれよ」

「ああ、勘違いしたお詫びだ。それくらいはしておくよ」

「サンキュ。それじゃ、俺は帰るよ」

「おう、お疲れー」

なんだか、一刀と話してるとここが三国志の時代だってこと忘れかけるなー。

・・・

今日、いつものようにお仕事をしていると、信じられない噂を聞きました。

曰く、ギルさんが璃々ちゃんに手を出した、とかなんとか。

いつもなら『ちょっと』ギルさんとお話しするところなのですが、今回は何か違う気がします。

というかそもそもギルさんはきちんとしている方ですので、璃々ちゃんと・・・その、結ばれたのなら私と詠ちゃんに報告してくれるはずなんです。

それに、ギルさんがもし璃々ちゃんに手を出すとしても、紫苑さんの後のはずです。紫苑さん、張り切ってましたし。

「・・・ねえ月？」

「うん、多分・・・何かの勘違いだと思うよ」

ギルさんは女難の相とかある人なので、九割の確立で勘違いのはずです。

後でお部屋にお邪魔する予定なので、本当のことを聞いてみるとしましょう。

「お、いたいた」

「誰？・・・って、銀じゃない」

「おう。おつかれさん。」

そんな話をしていると、銀さんが普段着で声を掛けてきました。珍しく鎧を着ていなかったので、最初誰だかわかりませんでした。・・・へぅ、ごめんなさい。

「そういや、お前たち噂聞いた？」

「ギルの？」

「ああ。」

「聞いてるわよ。ま、多分勘違いだろうけどね」

「おろ、珍しいな。お前らが暴走しないなんて」

なんだ、つまんね、と言って、銀さんは去っていきました。

「何しにきたんだろ、あいつ」

「多分、誤解を解きに来てくれたんじゃないかな」

「あー・・・変に律儀ねえ、あいつも」

ま、いいわ。仕事片付けちゃいましょ、と詠ちゃんは再び手を動かし始めました。
私も早く終わらせてギルさんに会うため、詠ちゃんに続いて手を動かします。
・・・ギルさんのことを信じていても、やっぱり少しだけもしかして、という不安があるのも確かです。
早くこの不安をなくすためにも、ギルさんに会って話を聞かないと。

・・・

「・・・疲れた」

通路を歩きながら、俺はつぶやいた。本当に今日は疲れた・・・。
最初は璃々がお茶を入れてくれるという最高のイベントだったはずなのだが、何をトチ狂ったのかいつの間にかラブコメみたいな勘違いされていた。
仕事をする気もなくした俺は、政務を休むことを朱里に伝え、部屋へと帰ってきた。

「あ、お帰りなさい、ギルさん」

「お、お帰り、ギル」

「おや。月、詠。きてたのか」

部屋に入ると、月と詠が卓についてお茶を飲んでいた。

「はい。今日はギルさん、噂で大変な思いをしていらっしゃったみたいで」

「で？璃々に手を出したとかってのはただの噂なんでしょ？」

「ああ、あれはだな・・・」

初めてきちんと聞く姿勢を持った人に説明した気がする。
黒月が出てくるの覚悟してたんだけど・・・いやよかった。

「・・・なるほど、なんかボクみたいな不運に巻き込まれてたのね」

「ギルさんも、不幸を溜め込む体質なんでしょうか？」

「ギルのは、ただの女難な気もするけど」

「ふふ、そうかもしれないね」

目の前に座る二人はお茶を飲みながら楽しそうにくすくすと笑う。
あー、今日走り回った疲れも、説明に使った精神力も、これを見るためだったのならば受け入れられそうだ。

「・・・さて、と。明日は今日やらなかった分の政務も片付けなきゃならないし、早めに寝ようか」

「あ、はい。」

「仕方ないわね。」

俺が寝台の中にもぐりこむと、すでに寝巻きに着替えていた月たちは両サイドから俺の隣へとくっついてくる。

「おやすみなさい、ギルさん」

「おやすみ、ギル」

「ああ、お休み。月、詠」

小柄な二人にくっつかれながら、挨拶を交わす。
目を閉じてしばらくすると、二人の寝息が。
・・・俺も、意識、が、遠く・・・。

・・・

第七話　勘違いの後に（後書き）

いやぁ、王道ですよね、勘違い。
璃々にいろいろするのはちょっとアレかなと思ったんですが、あまり詳しく書かないことによって回避しようと思っています。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第八話　執事との夜に（前書き）

ちょっと空気になりかけてた孔雀さんメインのお話です。

それではどうぞ

第八話　執事との夜に

「ギル、マスターと添い寝してやってくれ」

「・・・はぁ？」

珍しく城にいたキャスターから声を掛けられ、大事な話があるんだと前置きされた後に、そんなことを言われた。

「いきなりすぎて意味が分からない。詳しく説明してくれ」

「もちろん、そのつもりだ。」

それから、キャスターは語り始めた。

孔雀が最近寝るときにうなされている。そうなったのはここ最近のことで、何が原因でそうなっているのか、直接聞いてもはぐらかされてしまう。

彼女はギルには特別心を許しているようなので、一緒に寝るまでは行かなくとも仕事が終わった後の孔雀に話を聞き、できれば解決してあげてくれないか。

というかめんどくさいからさっさと孔雀と一緒に寝て安心させてやってくれ。

・・・大雑把に要約すると、そんな感じのことを言われた。

「・・・ちょっと信じられないんだが、俺って孔雀に気に入られてたのか？」

「うん？ああ、もちろんだとも。ことあるごとにギルがどうだとかギルはああだとか・・・」

「そんな孔雀想像できないな」

「まぁ、君ならそういうと思ったよ。・・・でもね、工房で惚気られるこっちの身にもなって欲しいかな」

キャスターがため息混じりにそういうと、俺の肩をぽんと叩いて来た。

「そこまでなのか！？」

う、うーむ・・・クール系美少女だと思っていた孔雀に思わぬ一面が・・・。

「と、取り合えず、孔雀にそれとなく切り出してみるよ」

「頼んだよ、ギル。マスターの悩みの解決と私の研究のために！」

「・・・後半に本音が出てきてるぞ」

・・・

「孔雀、今日の夜は開いてるか？」

政務中、お茶をいれにきてくれた孔雀に思い切って聞いてみる。
最初はきょとんとしていた孔雀も、俺の言っている言葉を理解したのか、笑みを浮かべつつ

「どうしたんだい、いきなり。・・・ああ、前に言っていた一緒に寝ようって言う約束、叶えてくれようとしてるのかな？」

「あー、うん。孔雀とはもう少し仲良くなりたいなぁと思ってね」

本来の目的を隠すことには心が痛むが、孔雀が夜毎うなされているというのは心配だ。
それを解決するためなら、少し心が痛むくらい受け入れてやる。

「そ、そうなんだ。・・・まぁ、今夜は何も予定が無いよ。基本的に、ボクって仕事少ないから」

「そっか。じゃあ、今夜孔雀の部屋にお邪魔するよ」

「ん、分かった。待ってる」

入れかけだったお茶をしっかりと入れ、盆を持って退室の準備を進める孔雀。

「いきなりですまないな、孔雀。」

「気にしないでよ。・・・それじゃ、仕事頑張って」

そう言って盆を持って部屋を出て行こうとする孔雀。
俺は片手の無い孔雀のために扉を開け、外へ出やすくなるようにする。

「ありがと」

そう言って部屋から出て歩き始める孔雀。
俺はいいって事よ、と返し、その後姿を見送る。

「あ、そうだ」

そんな孔雀に声を掛けると、孔雀は背中を向けたまま顔だけこちらに振り向かせて首を傾げつつ、なんだい？と聞いてきた。
俺は先ほど入れてもらったお茶の味を思い出しながら口を開く。

「お茶、ごちそうさま。最初の頃より上達したな」

孔雀にそう伝えると、孔雀は少し照れたようにはにかみながら口を開く。

「・・・ふふ、秘密特訓してたから」

「なるほど、納得だ」

くく、と笑いが漏れる。俺の笑い声に触発されたのか、孔雀もふふ、と笑いを漏らす。
・・・いつもクールな無表情娘なのに、こうやって笑う顔を見るといつも和むんだよなぁ。

「それじゃあ、また夜に。」

「ああ。お盆、落とすなよ？」

「大丈夫さ。もう慣れた」

ホテルのウェイターのように盆を持ち、すたすたと早足で歩いていく孔雀。
なるほど、言葉の通り、すでに慣れっこのようだ。

「いらん心配だったかな」

さて、政務の続きをしなければ。
昨日ほとんど処理していないので、昨日の分と今日の分の二日分を一日で処理しなければならないんだから。

・・・

「・・・うわ」

あれって現実かな？いや、現実のはずだ。後で頬をつねって確認するとしよう。
でも、まさかギルからそんな風に誘ってくれるなんて・・・。

「最近は、嫌なこともあったけど・・・もしかしたら、この日のためにあったのかな」

ほら、いやなことの後にはいい事があるって良く聞くし？

「し、しかも・・・お茶、上達したなって・・・！」

何あの破壊力。笑顔が宝具なんじゃないの？ギルって。
・・・くっ、ボク、今日の夜まで生きていられるだろうか。

「あれ？孔雀さん、こんにちわ」

「え？・・・ああ、月。こんにちわ」

一人悶々としていると、月と出会った。
・・・いいよなぁ、月。ギルと恋仲なんだよなぁ・・・。

「何かあったのですか？嬉しそうな顔をなされてますけど・・・」

「ああ、ええっと・・・」

そういえば、ギルと夜二人っきりってこと、月に報告しておいたほうがいいんだろうか。

・・・ほら、月ってかなり嫉妬深いから。

「じ、実は・・・」

後でややこしくなるよりは、今言った方がいいよね。

かくかくしかじか、と月にさっきあった事を説明する。

すべての話を聞き終わった月は、そうですか、と笑って

「じゃあ、孔雀さんもギルさんに告白するんですか？」

「・・・はい？」

ちょっとまった。どうしてそうなった？

「え？・・・だって、孔雀さん、ギルさんのこと好きですよね？」

「・・・それは、なんというか・・・。」

月が不思議そうに質問してくる。

ボクは何でばれてるんだろう、という言葉が頭の中を埋め尽くしていって、その、とか意味の無い言葉が口から漏れるだけだ。

「もしかして、隠してるつもりでした？」

「・・・うん」

何でだろう。感情を抑えたり無表情になったりするのは得意だったんだけど・・・。

「だって孔雀さん、ギルさんの前以外で隠す気が無さすぎですから」

・・・はっ!?

そうか、なるほど。確かにボクはギルにはばれないように、と気張りすぎて他の人には特に隠していなかった気がする・・・。

・・・あああ、もしかして、最近キャスターから送られてくる変な視線とかそれが原因かな!?

「以前も、ギルさんに助けられたときのお話とかして貰いましたけど・・・その時の表情が輝きすぎてて・・・」

ちょっと気まずそうに視線をそらす月。

それが本当なら、詠とか響とかにもばれちゃって・・・

「・・・言いにくいんですけど、侍女のみんなには周知の事実というかなんと言うか・・・」

「はうっ!?」

「いつギルさんに気持ちがばれるか、という内容で響ちゃんと詠ちゃんが賭けをしていたり・・・」

「ううっ!?」

「あそこまでやってばれてないなら私もいく！と響ちゃんがノリノリになっちゃったり・・・」

「みゃうっ」

ぐ、グサグサ刺さる言葉の槍・・・！
っていうか、言ってくれればいいのに！
ボクがそういうと、月は苦笑いを浮かべながら口を開く。

「そ、その・・・ギルさんの前で気持ちを悟られまいと頑張っている孔雀さんを見ていたらとてもそんなことは・・・」

そんなに頑張ってるように見られてたのか・・・。
なんていうか、すごく衝撃を受けたよ。

「うぅ、なんかすごく泣きたくなってきた・・・」

「ああっ、孔雀さん、泣かないでください」

おろおろとしながら月がボクの体を支えてくれた。うぅ、ありがたいです。

「取り合えず、いろいろとお話をするためにお部屋にいきましょう？」

「うん」

・・・

「と、言うわけで、みんなに集まってもらったのは他でもありませ

ん」

響が黒板、という文字を書く板の前に立ち、ばん、と黒板を叩く。
そこには、頑張れ孔雀！と妙に可愛らしい文字が記されており、その下には、今日の議題・・・。

「ごくり・・・」

「我が侍女組にただ一人の執事！孔雀ちゃんがギルさんに告白するにはどうしたら良いか考える会議を開催したいと思います！」

「わ、わーっ」

月がぱちぱち、と手を叩きながら声を上げる。
盛り上げようとしているのだろう。多分、響辺りに事前に言われていたに違いない。
・・・しかし残念ながら、すごくすべっている。

「・・・月、別に響に無理やり付き合ってあげなくてもいいのよ？」

「でも、響ちゃん、孔雀さんのためにこんなに頑張ってるんだから、私も何かできないかなって・・・」

「意見を出したりとか、他の事で手伝ってやればいいのよ！」

「う、うん！頑張るよ、詠ちゃんっ」

月っていい子だよねぇ。

「はい、ちゅーもーく！」

パンパン、と手を叩いて自分に注目を集めた響は、黒板の文字をいったん消し、何かを書き始める。

「それじゃ、手順のおさらいね。まず、今日の夜は孔雀ちゃんがギルさんのお部屋に呼ばれてます」

「・・・ったく、もう他の女に手を出すのね」

「へぅ、詠ちゃん、それは・・・」

「分かってるわよ。・・・で？」

いつもどおり詠が月にたしなめられた後、詠に急かされて響は説明を再開する。

響は先ほど書いた字の下に追加で文字を書き記していく。そこに書いてあるのは・・・。

「経験者のお話！というわけで、月ちゃん、詠ちゃん、ギルさんに告白したときの状況をご説明願います」

おお、これはなかなか参考になる話が聞けるんじゃないかな。

「へぅっ。え、えーと、私がギルさんに想いを告げたとき・・・ですか。」

恥ずかしそうにしながら、月は口を開いた。

・・・内容はというと、なんと言うか・・・月らしい、正統派な告白の仕方だと思った。

でも月って以前ギルと結ばれるために下着姿で寝台に待機してたと

か言ってなかったっけ。
うーん、大胆なんだか恥ずかしがりやなんだか分からないなぁ・・・。

「えっ!?ぼ、ボクも言うの!?・・・その、恥ずかしいんだけど」

ずいぶん渋る詠だったが、響にせっつかれて渋々説明を始めた。
うわ、寝てる月の隣で告白とか・・・ずいぶん命知らず・・・げふんげふん、大胆なことを。
っていうか、告白した勢いで何度も接吻って・・・へ、変態みたいじゃないか・・・。

「えーっと、以上を総合して考えると・・・」

再び黒板の文字を消し、新しい文字を書く。

「直接!ギルさんに!ぶつかる!それだけ!」

いちいち区切って言い放った響がびしぃっ!とこちらを指差してくる。

「直接、かぁ・・・」

「だいじょーぶだいじょーぶ!月ちゃんも詠ちゃんも通った道なんだから。ちなみに、後ろには私が続く予定ですっ」

今から練習しないとねー、と言う響を尻目に、ボクは心の中で段取りを組み立てていく。
ええっと、まずは部屋に来たギルに・・・。

「孔雀さん、自分の世界に閉じこもっちゃいましたね」

「しょうがないわ、放っておきなさい。・・・ねえ、それよりも響？あんたも・・・なの？」

「ふぇ？・・・あ、うん。その、最初は月ちゃんが恋仲になったから諦めようと思ってたけど、ほら、詠ちゃんもギルさんと一緒になっちゃったじゃない。それなら、私も想いを伝えたいなー、と。」

「・・・ふん。そう。ま、頑張りなさいよ」

「ふふ、想いを伝えるだけだから、頑張ることなんて無いよ、詠ちゃん」

「馬鹿ね。その後に・・・も、求められたらどうするのよ」

「なんとっ！その可能性は考えて無かったよ、詠ちゃん！」

「ま、せいぜい頑張ることね。」

「うぅ～・・・いまさら不安になってきた・・・」

・・・

夜。俺は孔雀の部屋へと向かっていた。
さて、どうやって話を切り出すか。

「・・・直接・・・は、キャスターと同じくはぐらかされるだろうしなぁ」

間接的に、と言ってもどう話を振ればいいのやら・・・。
ああもう。悩み相談なんて受けたこと無いからなぁ。これなら、サーヴァント相手に戦ったほうがまだましかもしれんな。

「あ、もう着いたのか・・・」

考え事をしながらでも、キャスターと孔雀の部屋には迷わずたどり着ける。
なぜかと言うと、孔雀の部屋はキャスターの部屋の隣にあるのだが、キャスターの部屋からはその・・・奇妙な空気が漏れている。
その奇妙な空気をたどって歩けば、少しくらい考え事をしていてもいつの間にかたどり着けるのだ。

「・・・どうしよう。何も案が浮かばなかったな・・・」

でも、来てしまったものは仕方がない。入るしかないだろう。
こんこん、と扉をノック。俺だけどー、と声をかけると

「どうぞ」

む?なんだか、いつもの孔雀らしくない、硬い声で返事が返ってきた。
どうしたんだろうか。まさか、何か異変が!?
慌てて扉に手をかけて開く。

「お邪魔・・・」

「い、いらっしゃいませ!ご主人様っ!」

「・・・しましたー」

あまりのショックに固まってしまったが、何とか再起動。
ゆっくりと部屋から出て、扉を閉める。
よし、冷静になろうか。
俺は、孔雀が悩んでるようだから相談に乗ってくれとキャスターに言われて、ここに来た。
それで、部屋へと入ると・・・メイド服を着た、孔雀に出迎えられた。しかも妙にきゃぴきゃぴした口調で。
駄目だ。いつものクール系美少女の孔雀しか知らない俺にあの見たことの無い孔雀を相手することは不可能だ。

「あれ?どうしたんだい、ギル」

「あ、キャスター。いい所に」

騒ぎを聞きつけたのか、キャスターが部屋から出てきた。
取り合えず今見たものを説明すると、どれどれ、と言いながらキャスターが扉をノック。

「ど、どうぞ」

「お邪魔・・・」

扉を開いたキャスターが、そのままの体勢で固まった。

「えっ、きゃ、キャスターっ!?ちょ、これはその、ちがくて・・・!」

「・・・しましたー」

先ほどの俺と寸分たがわぬ反応で、キャスターは扉を閉めた。

「メイド・・・だったろ？」

「うん。・・・しかも、ポーズ付きだった・・・」

え、それは本当か。・・・ちょっと見たかったかもしれない。

「ね、ねえ！何でキャスターがいるんだい！？」

扉の向こうから、若干必死そうな声が聞こえてきた。

「・・・答えてやれよ、キャスター。」

「取り合えず・・・部屋に入ろうか」

「そうするか。」

扉を開くと、メイド服で立ち尽くす孔雀がいた。

「い、いらっしゃい」

「お邪魔します。」

「はは、いや、改めてみると可愛らしくなったじゃないか、マスター。あ、お邪魔するよ」

部屋に入って開口一番笑い始めるキャスター。

「うぅ、笑わないでくれよ。・・・全く、響め。全力で外したじゃ

ないか」

「え？マスター、何か言ったかい？」

「なんにも！・・・で、何でキャスターがいるのさ」

「いやなに、外で何やら騒いでいるようだったから、またマスターが何かやらかしたんじゃないかと思ってね。外を見たらギルがいるじゃないか。」

話しながらキャスターは椅子に座る。俺も近くの椅子に座り、背もたれにもたれる。

「で、状況を聞いたら信じられないものを見たとか言い出すから私も覗いたら、って訳。了解したかい、マスター」

「・・・大体は。」

「ならばよろしい。・・・それじゃ、私は失礼するよ。研究も残ってるしね」

「うん。お休み、キャスター」

「ああ。ギル、こんなマスターだけど、よろしく頼んだよ」

「あ、ああ。」

この状況で帰るんだ、この人。

まぁ、キャスターからの頼みとかは孔雀には伝えてないし、キャスターがいると孔雀も悩みを話してくれないかもしれないしな。

それじゃ、また明日ー、と言いながら部屋から出て行ったキャスターを見送った後、孔雀の方へと向くと、凄いジト目でこちらを見ていた。

「まさか、メイド服を着ただけであそこまで動揺されるとは思って無かったよ、ギル」

「それは謝る。ごめん」

「ふん。もういいよ。」

そっぽを向きながら不機嫌そうに言い放つ孔雀。
あー、へそ曲げちゃった。どうしようかな、ここから。

「それで?今日はなんか用なの?」

どうしようかと悩んでいると、向こうから話を振ってきた。
これに乗っからない手は無いな。

「ああ。孔雀には魔術方面でいろいろお世話になってるし、お礼ついでにちょっと話しでもしていこうかなー、と。」

「・・・そっか。まぁ、月たちに魔術を教えてるのは趣味みたいなものだし、別に気にすること無いよ」

「まぁまぁ。おとなしくお礼を受け取っておけって」

そう言ってぱちんと指を鳴らす。
宝物庫が開き、ワインが入っている状態の酒器が卓の上に現れる。

「いつ見ても凄いね。キャスターもこんなことできたらなぁ」

「キャスターにはキャスターのいいところがあるって。取り合えず、飲もうか」

「ん。」

いつも執事服を着ている孔雀がメイド服を着ていることに違和感はあるものの、立ち居振る舞いはいつもどおりの孔雀だ。
なんだか妙な感覚に囚われつつも、ワインを口にする。

「いつ飲んでも美味しいね。」

「ああ、全くだ。」

ふぅ、とお互いに一息つく。
取り合えず、何か話題を振らないとな。

「・・・ところで、孔雀」

「ん、なにかな、ギル」

「なんで・・・メイド服着てたんだ?」

俺の質問に、孔雀は少しびくつくと、諦めたようにため息をついた。

「その、響に着せられたんだ」

「響に?」

何でまた。・・・いや、でも響ならやりかねない。

「その・・・ギルは、メイド服が大好きだから、これを着たら喜ぶよ、って」

「何でそんな結論に・・・？」

「だって、月と詠はメイド服着てるじゃないか」

「なるほど、そういうことか。」

俺と恋仲である月と詠はメイド服を着ているから、俺はメイド服が好きなんじゃないか、と思ったわけだな。

・・・いや、否定はしないけど、董卓の時の服着てる月とか、軍師姿の詠とか結構良いものですよ？

「ってことは、孔雀は俺を喜ばせようとしてくれたのか？」

「っ！いや、その！・・・うん、まぁ、そうなるね」

慌てて否定しようとした孔雀だったが、すぐに思い直したらしく、素直に頷いた。

なるほど、キャスターが言っていたように、俺は孔雀に気に入られているらしい。少なくとも、喜ばせようと思うくらいには。

「そっかそっか。孔雀もなかなか嬉しいことをしてくれるじゃないか。」

「い、いつもギルにはお世話になってるからね。これくらいはしないと」

最初は少し緊張して強張った顔をしていた孔雀も、少しずつ表情が柔らかくなり、笑顔を見せるようになってきた。
それから、俺は悩み事を聞く、と言う当初の目的を忘れ、ただ普通に話をしていった。
たとえば、孔雀はいつもどんな仕事をしているのか、とかそんな日常の様子を聞いたり、今日の仕事中に響が洗濯物を持ったまま転んだだとか、そんな他愛も無い話だ。
どちらかと言うと騒がしい娘たちが多い中、物静かと言うか冷静な孔雀と話すのは、案外楽しく、時間はすぐに経ち、夜中と言って差し支えない時間となってしまった。

「・・・おっと。もうこんな時間だ。そろそろ帰るよ」

そう言って立ち上がり、扉へ向かおうときびすを返す。
・・・が、裾をつかまれる感触に足を止めた。
振り向くと、顔をそらした孔雀が、俺の裾を掴みながら立っているのが視界に入った。

「どうした、孔雀。」

「一緒に、寝てくれるんじゃないの?」

酔った所為か、恥ずかしいのかは定かではないが、耳まで真っ赤にした孔雀がつぶやくようにそう言った。
まさか本気で寝るつもりだったとは思っていなかったので、少し驚いてしまった。

「・・・いいのか?」

「だって、約束したじゃないか」

少し拗ねたように唇を尖らせた孔雀に、思わず笑いが漏れる。
孔雀の頭を少し乱暴に撫でながら

「よし、じゃあ寝ようか」

「・・・うん」

・・・

「・・・狭くない？ギル」

「大丈夫だぞ。・・・暑くないか？」

「全然。ボク、暑さには強いから」

身体、常に冷たいんだ、と続けて、俺の頬に手の甲を当ててくる。
本当に冷たいな。夏は重宝されそうだ。

「じゃあ、冬の寒さには弱いのか？」

「うん。ずっと火を焚いて、掛け布団いっぱい掛けないと寒くて眠れないんだ」

なるほど。現代で言えば、ストーブつけっぱなしで寝るようなものか。
この時代だと、布団も種類は少ないしなぁ。
・・・まぁ、真桜辺りがいろんなの開発しそうだけど。

「・・・ねえ。」

「んー？」

変に現実味のある未来を妄想していると、孔雀に話しかけられた。
考え事をしていた所為か、返事が少し曖昧になってしまった。
だが、孔雀はそんなことを気にしないで話を続ける。

「最近ね、少し腕に違和感があるんだ」

「腕に？」

「そう。切れたほうの腕に。なんか、腕があるような、変な感覚」

「痛み、とかは？」

どこかで、そんな話を聞いたことがある。
無いはずの腕が痛む。腕とか足を切断した後に、無いはずの腕や足があるように感じたり、痛み出したりする。

「たまに、かな。最近は夜になると少しだけ痛む」

幻肢痛、だったっけ。

「いつから？」

「違和感なら、切った後、少ししてからかな。痛みは最近。」

・・・なるほど、最近夜にうなされている、と言うのは孔雀が痛みを感じていたからだろう。

「実を言うと、今日一緒に寝ようっていったのは、少し不安になってきたから」

「不安に？」

「うん。一人でなくなったはずの腕の痛みを感じてると、不安になるんだ」

そういいながら恥ずかしそうに笑う孔雀。

「ごめん、変なこと言って。」

「全然変なことじゃない。・・・というか、もっと早く頼ってくれれば良かったのに」

「だって・・・無い腕が痛むなんて、変かもしれないって思って・・・」

「変じゃないって。大丈夫。」

そう言うと、孔雀はそうかな、と呟いた。

「・・・やっぱり、ギルは優しいなぁ」

「前にも言われたな、それ」

「ふふ、最初に助けてもらったときにね。・・・その時から、ボクは」

「ボクは？」

「あ・・・えと」

いきなりもじもじとし始める孔雀に首を傾げる。
いつものように冷静な表情など当の昔に消え去っており、眉を八の字にして恥ずかしそうな表情を浮かべている。
しかし、次の瞬間、孔雀の表情はいつもどおりの冷静な表情に変わる。・・・顔は、赤いままだったけど。

「・・・もう、白状しちゃうけど、ボク・・・ギルのことが、好きだ。」

「ええっと、それは・・・」

「もちろん、男の人として、ってことなんだけど・・・」

いまだに恥ずかしさが抜けないのか、表情は無表情に近いが、視線は俺に合わせようとはしない。

「ありがとう、嬉しいよ」

そう言って、孔雀を抱き寄せる。
そばに寝ていたので、抱き寄せるのは簡単だった。

「・・・うあ、恥ずかしいよ、ギル」

「いやだったか？」

「・・・全然。むしろ嬉しいよ、ギル」

「それなら良かった。」

「ね、ねえ？」

「どうした？」

「今日は、これだけなのかな？」

「これだけ・・・って？」

「・・・月とか、詠とかにしてるようなこと、しないのかなって」

なんと。

凄い積極性だな。

「俺は今すぐでもしたいけど・・・孔雀は大丈夫なのか？」

「・・・ぼ、ボクはむしろ今日するくらいの覚悟だったんだけど」

「あ、だからメイド服だったりしたのか？」

「実はそうだったり」

へへ、と悪戯が成功した子供のように笑う孔雀。

「そっか。じゃあ・・・するよ？」

「あ、改めて聞かれると緊張するなぁ・・・」

寝台に仰向けになった孔雀に覆いかぶさる。
俺が動いたからか、寝台がぎっ、と音を立てる。

「ほら、力抜いて」

「うぅ、慣れてる人の台詞だ・・・んっ」

少し落ち込んだ様子の孔雀に口付けして、メイド服に手を伸ばす。

「や、優しくお願いします・・・」

「了解したよ、孔雀」

妙にしおらしい孔雀に苦笑しながら、メイド服を脱がしていった。

・・・

「昨夜はお楽しみでしたね」

翌朝、俺とほぼ同時に起きた孔雀と共に着替えを終え、少しだけ部屋でのんびりすごしていると、部屋の中へキャスターが入ってきた。
部屋の空気が違うことに気づいたキャスターは、開口一番さっきのような台詞を吐いたのだ。

「聞いてたの？キャスター」

「聞こえたんだよ、マスター。部屋が隣の上に防音の結界なんて張ってないからね。」

「くっ・・・こうなったら、令呪で記憶をなくさせるしかないか・・

・！」

「何言ってるんだいマスター。たかが恥ずかしい声を聞かれただけで」

「き、キャスターに分かるものか！この乙女の恥ずかしさを！」

「常時執事服の乙女には言われたくないよ。」

必死に問い詰める孔雀と、のらりくらりとかわすキャスター。
何時見てもこのやり取りは面白いな、と思いながら見守っていると、孔雀が俺の手を掴んで歩き出した。

「おや、マスター、どこへ？」

「仕事！」

「そうか。頑張ってくるといい。」

そう言って笑うキャスターの隣を通って部屋を出る。

「・・・ギル、ありがとう」

そして、キャスターの隣を通り過ぎるとき、俺の耳元でそう呟いた。
俺は後ろを向かずに手を振って答える。
なんだかんだいって、キャスターも心配だったんだろう。

「もう、キャスターには気遣いってものが足りてないよね。」

部屋から遠ざかると、孔雀はそう言って立ち止まる。

「・・・ごめん、ギル。先にお城行っててくれない？」

「ん？孔雀はどうするんだ？」

「えと・・・ちょっと、休んでから行く」

「・・・ああ、なるほど」

これは、あれか。月と詠も陥ったあの・・・。

「く、こんなに違和感を覚えるものだとは思わなかった。よくこんなので歩けたな、ボク。」

下腹部を押さえながら忌々しげに呟く孔雀。

「痛むか？」

「痛くはない、けど、なんかまだ入ってる感じが・・・」

「あー、そっか。それじゃあ・・・」

よいしょ、と孔雀を横抱きに抱える。

最初は背負おうかとも思ったが、こちらのほうが負担は少ないだろう。

「ギル、いったい何を」

「いいから。今日は部屋で休んでろ」

「・・・むぅ。仕方がない。そうするよ」

孔雀が諦めたように体から力を抜いたので、俺は来た道を戻る。
キャスターはもう部屋に戻っているだろうし、孔雀がまたからかわれることは無いだろう。
なんとか扉を開けて部屋に入り、寝台に孔雀を横たわらせる。

「服は・・・まぁ、それで我慢してくれ」

「うん。しばらくはこのままで寝てるよ。」

「それじゃ、ゆっくり休んでろ」

「ごめんね、わざわざ」

「謝ることじゃないさ。好きな娘を気遣うのは当然だろ?」

「そんな台詞、よく素面で言えるね。・・・でも、嬉しいよ。ありがと」

皮肉るような口調のあと、ちょっとだけ視線をそらせてお礼を言った孔雀。
じゃあ、俺は行くよ、と伝え、部屋を出る。
すぐ隣にあるキャスターの部屋へと入ると、予想通りキャスターは机に向かって何かを研究しているようだった。

「・・・ん?おや、ギルか。どうした?」

足音で気づいたのか、後ろを振り向いたキャスター。
机にはさまざまな器具や書物が広げられている。

「お邪魔するよ。孔雀のことなんだけど」

「マスターがどうかしたのかい？」

「ちょっと調子が悪いみたいでな。部屋で寝てるんだ。何かあったら、孔雀のことは頼んだぞ」

「ほほう？昨夜やけにうるさいと思ったら、ギル、マスターに結構無茶しちゃったのかな？」

「はっはっは・・・否定はできないです」

気まずさを感じた俺は、視線を逸らしつつそう言った。

「ま、分かったよ。それとなくマスターの様子は見ておく。」

「悪いな。俺も仕事が終わったらまた孔雀のところに戻ってくるから」

「ああ、了承した。ほら、もう行くと良い」

そう言ってしっしっ、と手で出て行けとジェスチャーするキャスター。

「おう。研究の邪魔して悪かったな。」

最後にそういい残して、俺はキャスターの部屋を後にした。

さて、今日も一日、お仕事頑張りますかー。

・・・

「ギルさん、昨夜はお楽しみでしたね？」

「月・・・？」

「ギル、昨日はお楽しみだったみたいじゃない？」

「詠まで・・・」

朝食を食べようと厨房へ行くと、月と詠に出会った。
二人が作ったという朝食を食べていたのだが、ニコニコとこちらを見ている月と、じっとこちらを見つめる詠の行動に首を傾げていたのだが・・・。
朝食を食べた後にどうしたんだ、と聞いたところ、開口一番これである。何これ。流行ってるの？

「全く、一緒に来なかったところを見ると・・・まぁ、アレに苦しんでるのね」

「へぅ、翌朝気づくんですよね、アレ」

月と詠も経験済みだからか、孔雀がいない理由を悟ったようだ。
良かった、説明する手間が省けた。

「今夜は・・・私と詠ちゃんの二人でお邪魔しますね？」

いつもどおりの微笑を浮かべた月はそう言って歩き出した。

「そ、その・・・覚悟しておきなさい！」

照れながら強がるといういつもどおりのツン子を見せてくれた詠も、月と一緒に歩き出した。

「・・・今夜、死なないようにしないとなぁ」

ぼそりと呟く。割と本気で切実な呟きだと自分でも思った。
取り合えず、仕事をしないと。昼休みに孔雀の様子を見に行こう。

・・・

「あ、お兄さん、おはよー」

「おはよう、桃香。」

「おはようございます、ギルさん」

「おはよう、朱里。今日は何か急ぎの案件とかある？」

「ええっと、今急ぎは・・・あ、天下一品武闘会の開催に関係した書類の整理と、後は・・・」

ごそごそと書類を用意し始めた朱里を見ながら、俺も準備を開始する。
墨とか筆とか、政務に必要な道具は意外とあるんです。

「んしょ、これくらいですね」

どさどさと詰まれた仕事。

「うーん・・・少なめだな」

「え？・・・そ、そうですか？」

「十分多いと思うけど・・・」

俺の一言に、桃香と朱里が反応する。

・・・あれ、俺がおかしいのか？

「ごめん、気にしないでくれ。」

「うぅ、お兄さんみたいに余裕の発言をしてみたいよぉ～」

「はわわ、流石はギルさんです・・・」

「・・・取り合えず、仕事始めようか。」

変な空気を振り払うように声を掛ける。

それぞれ返事をしてくれたので、俺も筆を滑らせる。

えーっと、予算と規模は・・・っと。

「そういえばお兄さん？」

「なんだ、桃香」

始まって少ししか経っていないのに、桃香が話しかけてくる。

一応手は動いているので、少しくらい話しても大丈夫だろう。

「あのね、今日のお昼なんだけど・・・」

「昼？」

「うん。お昼、一緒に食べたいなって。」

「今から昼飯の話かよ・・・」

いまだ仕事は始まったばかり。もちろん太陽はまだ真上より低い位置にあり、さらに言えば朝食を食べたばかりだ。
よく昼飯の話とかできるな。

「えー、だってだって、お兄さんいつの間にか他の娘と約束してたりするし。だったら早めに約束しておこうかなって思って」

「な、なるほど、勉強になります・・・」

桃香の言葉を聞いた朱里が、何やらさらさらとメモを取っていた。

「で、どう？お兄さん」

「あー、悪いけど、昼は孔雀と約束があるんだ」

「えー！次は孔雀ちゃんなのー！？」

「次はってどういうことだ桃香」

「・・・だって、前に誘ったときは月ちゃんと詠ちゃんと食べるからって断られて、その前は恋ちゃんと食べに行っちゃうし・・・」

ふてくされながら桃香は筆を動かす。

「分かったよ。孔雀との用事が終わった後なら、付き合おう」

「ほんとっ！約束だよ、お兄さん！」

「ああ、約束だ。・・・さ、それじゃあさっさと終わらせちゃおうぜ」

「はーい！」

先ほどより倍の速度で、桃香は書類を片付けていく。

・・・現金な奴。さて、昼はなにを食べに行こうかな。

・・・

ただいま、とある大衆食堂で昼食をとっている最中だ。

右には、言いだしっぺの桃香が胸を押し当てるようにくっついている。

「お兄さん、はい、あーん」

差し出されるレンゲ。

そこにはチャーハンが乗っており、ほかほかと湯気を立てている。

「・・・あーん」

周りの視線のほとんどがこちらを向いているのを感じながら、そのチャーハンを食べる。

「ぎ、ギル殿！こちらも美味しいですよ。・・・そ、その、あーん・・・？」

そして左には愛紗がいて、俺へと麻婆豆腐を乗せたレンゲを差し出してきた。

「・・・あーん」

それを食べると、愛紗がほっとしたようなは笑顔を浮かべる。

・・・どうしてこうなった。

もぐもぐと咀嚼しながら、こうなるまでを回想する。

まず、仕事中に異変はなかったはずだ。

仕事が終わった後、孔雀の様子を見に行く前に桃香に「お城の門のところでまってるね」と言われて、分かった、と返したところも問題はない。

そして、孔雀の様子を見に行ったところ、すでに回復して歩けるまでになった孔雀に出迎えられ、話をした後にキャスターに礼を言いに行った。

「はは、特に問題もなかったし、別に礼を言われることじゃないよ」

とさわやかな笑顔で返された俺は、もう一度だけ礼を言って屋敷から出た。

そして、待ち合わせ場所へと到着すると、桃香が大きく手を振っているのが見えた。さらに、隣で少し恥ずかしそうにしている愛紗も見えた。

「おや、愛紗も誘ったんだ」

「うんっ。愛紗ちゃんも、お兄さんとお昼食べたいって！」

「ちょ、桃香さまっ」

「えへへー。じゃ、いこっ、お兄さん、愛紗ちゃん！」

そう言って俺と愛紗の手を取った桃香が走り出し、今いる食堂に着いた。

俺の腕を引っ張って隣に座った桃香に勧められ、愛紗は桃香の反対側に座り、もじもじと注文を決めていた。

それから注文した品が来て、三人それぞれ食べていると、先ほどのように桃香があーん、といい始めたのだ。

・・・なるほど、分からん。

「ねえねえお兄さん、この後甘いもの食べに行かない？」

桃香の声で回想から意識を引き戻される。

「ん、甘いものか・・・。桃香、太るぞ？」

「むっ、むー！お兄さん、失礼だよー！？」

「怒るな怒るな。」

ぷんすかと怒る桃香の頭を撫で、落ち着かせる。

「にしても、甘いものか。・・・愛紗はどうだ？」

「わ、私、ですか？」

「ああ。愛紗は甘いもの平気か？」

「はいっ。大丈夫です」

「そうか・・・なら、甘味処に行くのも悪くないな。」

すっかり機嫌を直した桃香を引き続き撫でながら、どこに行こうかと思案し始める。

そういえばしばらく行ってないところがいくつかあったな。

顔見せるついでに食べていくのも悪くない。

「よし、それじゃあ行くか。おばさん、お勘定」

「あいよっ」

三人分のお金を出して、店を出る。

「さて、こっちだったかな・・・」

ギル殿に払っていただくなど、申し訳ないです！と言う愛紗を宥めつつ、街を歩く。

愛紗が説明を聞いて納得した頃には、次の目的地である甘味処にたどり着いていた。

「おーい、おじさん、久しぶりー」

「んー？・・・おお、ギル様ではありませんか」

久しぶりだというのにおじさんは俺の顔を覚えていたらしい。

「いくつかお勧めのお菓子とか頼んだ。あ、あとお茶」

「分かりました。少しお待ちください」

そう言っておじさんは店の中へ入っていく。
俺たちは外に並べられた卓につき、品物が来るまで待つ。

「んー、美味しそうな甘い匂いが・・・」

「・・・桃香さま、後で私と一緒に身体を動かしましょうね」

「えー。大丈夫だよ、太らないよー？」

「いいえ、桃香さまは日ごろから運動不足ですので、少しでも身体を動かしておきませんと」

「ぶーぶー！おーぼーだよ愛紗ちゃん！」

冷静に返す愛紗と、手を大きく動かしながら何とか回避しようと頑張る桃香を見ていると、お茶が運ばれてきた。
それでいったん話は中断され、桃香と愛紗は出されたお茶を飲んでのほほんとしていた。

「おまちどうさま」

「お、ありがとう」

三人分の団子やら饅頭がやってきて、卓の上に並べられる。

「ほわー・・・美味しそうだね～」

「違うぞ、桃香。美味しそう、じゃなくて美味しいんだ」

「ふふ、ギル殿がそこまで言うのならそうなのでしょうね。」

それでは、いただきましょうか、という愛紗の声に、桃香が真っ先にいただきまーす！と反応した。

はむ、と饅頭にかじり付く姿はハムスターとかその辺りの小動物を髣髴とさせた。

「おいひぃね～」

「だろう？愛紗はどうだ？」

「はい、とても美味しいです。お茶ともあいますね」

うんうん。久しぶりにきたけど、やっぱりここの饅頭とか団子は美味しいな。

多分華琳をつれてきても大丈夫なくらい美味しいんじゃないだろうか。今度つれてきてみよう。

・・・

第八話　執事との夜に（後書き）

孔雀さんは意外と乙女だったようです。
執事服の上から白衣、なんていうマニアック極まりない姿をしている孔雀さんですが、本当はメイド服が着たかったんだとか。
ですので、響に着せられたといいつつ半分以上ノリノリで着ていたんじゃないでしょうか。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第九話　弓兵として弓を使うために（前書き）

蜀の将との好感度アップイベントや城の改装（一部）イベントを詰め込んだため、今回はなかなか長いです。

それでは、どうぞ

第九話　弓兵として弓を使うために

「風呂に常時入れるようにしたいと思う」

「・・・つってもなー。この辺、温泉なんて出ないぜ？上下水道も全然だし・・・」

ある日の昼下がり、珍しく政務で一緒になった一刀に、休憩を利用して話しかける。

内容は上記の通りだ。今のようにお湯を沸かしてためる方式ではなく、何らかの方法でいつでもお湯を出せるようにする。

そうすれば、女性が多い将も嬉しいだろうし、一番汗をかく兵士たちのリフレッシュにもなるだろう。

・・・まぁ、本音を言えば中身が日本人である俺が風呂に常に入れるようになりたいと思っているだけなのだが。

「んー・・・でもま、気持ちは分からないでもないぜ。俺もたまに風呂に入れないとき困るからな」

「だよな。取り合えず、これが終わったら甲賀のところに行くか。いろんなところに伝手があるあいつとなら、何か案が出るかもしれないし」

「おう。じゃあ、さっさと終わらせようか」

速度が二割り増しになった俺たちは予想より早く仕事を終わらせ、甲賀の元へと向かった。

甲賀の住んでいる家と言うか屋敷は目立たないように住宅に囲まれてひっそりと存在している。

まぁ、職業柄目立つ家には住めないので当然だけど。
甲賀の家の扉をノックする。ある一定のリズムで叩かなくては開いてくれないので、いつもこの瞬間は気を使う。

「・・・む、何だお前たちか」

扉を開けた甲賀が怪訝そうな顔をする。

「おはよう、甲賀。あがってもいいか？」

「構わんぞ。」

そう言って家の奥へと戻っていく甲賀の後に続き、俺と一刀も家の中へと足を踏み入れた。
家の中では着物を着た人たちが忙しそうに歩き回っており、日本に帰ってきたのかと錯覚するような光景が広がっている。
たまにランサーの複製がいたりするが、ランサーの格好も大日本帝国軍の制服なので、全く違和感がない。

「こっちだ」

すすすー、と障子を開けて甲賀はとある部屋の中へと入っていく。

「あれ、甲賀の部屋変わったんだ」

「うむ。人が増えたし、ランサーと言う労働力もあるからな。増築とまでは行かなくとも、改築は人知れずできるものだ」

「・・・改築、したのか」

一刀が呆然とした表情で家の中を見回す。
その気持ち、分からないでもないぞ。俺も以前来たときと代わりすぎてて一瞬どこか分からなくなったから。

「ま、座れ。・・・ちょっと待ってろ。今茶と茶菓子を持ってくる」

「そんなにお構いなくー」

「こういうのは、礼儀だ。命の恩人であるお前になら、なおさらな」

甲賀は口角を上げるだけの笑みを浮かべて、部屋から出て行く。

「・・・なぁギル？」

「ん、どうした一刀」

「この家だけ、昭和っぽいんだけど」

「確かに。白黒テレビとかの家電はさすがに無いみたいだけど、雰囲気は日本のそれだよなぁ・・・」

一刀がきょろきょろと部屋を見回しているのに習って俺もきょろきょろと周りを見回す。
良くもまぁここまで再現したものだ。

「待たせたな」

再び障子を開いて部屋の中に入ってきた甲賀。
その手には盆が乗っており、お茶が人数分あった。
さらに甲賀の後ろからはオリジナルのランサーが入ってきて、お茶

菓子をちゃぶ台の上に置いた。

「よくいらっしゃいました、北郷殿、ギル殿」

「元気か、ランサー。」

「ええ。ギル殿も息災のようで何より。北郷殿もお元気そうで何よりです」

「ああ、ありがとな、ランサー」

「・・・それで?今日は何用だ」

「そうそう。早速本題に入るんだけどさ・・・」

俺は甲賀とそのそばに正座しているランサーに風呂を作りたいと説明する。

「風呂・・・と言うよりは温泉に近いな、それは。・・・しかし、この辺で温泉などあったか・・・?」

「湧き出るものはおそらく少ないかと。」

甲賀とランサーは首をかしげて考え込んでいるようだ。

やっぱり甲賀でも知らなかったか・・・。

「うーん・・・もうこうなったら最終手段に出るしかないかなぁ・・・」

「最終手段?」

きょとんとした顔の一刀が疑問を口にした。

「ああ。乖離剣を真名解放して、ドリルみたいにして地面を掘る。いつか何かに突き当たるだろ」

「ちょっとまて。ギル、貴様何時からそんな馬鹿になった」

焦ったように腰を浮かせた甲賀に笑い返しながら、俺は口を開く。

「いやー、流石に半分は冗談だって。温泉が湧き出るかもしれない、って言うところでやるならまだいいけど、何もないところ掘るほど暇じゃないさ」

「・・・ギル殿がいうと冗談に聞こえないのが不思議です」

「ふむ・・・少し難しいかもしれないが、後は給湯システムを作るしかないんじゃないか？」

「給湯システムを？」

「ああ。川かどこかと風呂場を繋げて、何らかの手段で風呂場に入れる前に川の水を温める。湯になった川の水を風呂場に流せば、風呂にはなるじゃないか」

甲賀が説明してくれたのは、水道があって、給湯のためのボイラーがある前提の話だ。

・・・だが、いい案かもしれない

「よし、取り合えず今から俺の宝物庫の中からいくつか使えそうな

のを見繕うから、ちょっと検討してみようぜ。」

「使えそうなのって・・・宝具でか？」

「そんなに所帯じみた宝具があるのか・・・？」

疑問符を頭の上に浮かべる二人の言葉をスルーしつつ、宝物庫を開く。

中から取り出したのは常に燃える剣。多分何かの炎の剣の原典だとは思うんだけど、常に燃えているのならボイラー代わりにならないだろうか。

「うぅむ・・・燃料としてはいいが、それの温度調整はどうするんだ？流石に沸騰している湯を風呂にはできないだろう」

「・・・確かに。もう少し温度が低いものか・・・」

常に燃える剣をしまい、ごそごそと宝物庫をあさる。

「お、これならどうだ？水をお湯に替える杖」

「何でそんなぴったりなものがあるんだよ！？」

ただの木の枝にしか見えない杖を取り出すと、一刀に突っ込みを入れられた。

んなことといわれても、さまざまな宝具の原典が入ってるんだからあっても不思議じゃないだろ。

「・・・まぁ、それで湯の問題は解決したな。後は水道か・・・」

「川からの水を風呂場に送るのと、風呂場のお湯を川へと戻す二つが必要だな・・・」

「それに、川と風呂場の高低差を考えると、何か水を動かすような装置が必要だな。・・・ギル、宝物庫の中に水を操る宝具とかないのか？モーセが持っていたようなの」

「・・・一刀、お前結構無茶言うんだな。まぁ、探すけど。」

水をお湯に替える杖をちゃぶ台の上に置き、再び宝物庫をごそごそ。

「あ、こんなのあったぞ」

「なんだ？」

「水が下から上に流れるようになる珠」

「ほほう。なるほど。それなら使いようによっては何とかなるな。」

「よし、ボイラーと水道はこれでいいとして。後は施設だな」

取り出した杖と珠を見ながら、一刀がうんうんと頷く。

「まぁいい。施設の建設は任せろ。こっちには労働力が大量にいるからな」

確かに。忍者たちはすでに大量に存在しているし、ランサーだってその気になれば千人規模に増えられる。

「それに、俺の魔術は何かを組み立てるのに向いてるからな。宝具

を使うのは初めてだが、やれないことはないだろう」

「よし、頼んだ。俺はまず城の風呂を改装する許可を取ってくる」

「そうだな。それが成功したら、兵士の宿舎とか、町に作るのもいいかも。」

「ああ。風呂に入ればさっぱりするし、みんなも喜ぶだろ」

それから、俺と一刀、甲賀とランサーの四人で、内装には富士山を描こうだとか自動的にかぽーん、と鳴るような魔術装置を作ろうだとか様々な話をした。

・・・後半は、確実にボイラーや給湯装置に関係ないことだったのに気づいたのは、話し合いが終わって、帰り道を歩いているときだった。

・・・

「・・・常に入れるお風呂、ですか」

早速朱里と雛里に相談してみる。

真剣な表情になって考え込む二人は、俺の提出した企画書とにらめっこしているように見える。

「いいかもしれませんね。今まではお風呂の日じゃないときに訓練すると、水浴びくらいしか身体を洗うすべはなかったようですし・・・」

「この・・・宝具と魔術の併用による常時給湯装置、と言うのが気になるのですが・・・」

「ああ、それはどうせお湯が流せるんだったらシャワーとか欲しいなぁと思って」

「しゃ、しゃわー、ですか？」

俺の説明に、朱里と雛里が首を傾げる。そっか、シャワーとか分からないよな。

昨日は一刀や甲賀と話してたから、すっかりここが三国時代だって忘れてた。

「ええと、こう、小さい穴がたくさん着いた筒から、お湯が出てくるんだ。で、それで身体の汚れを流したりするんだけど・・・」

こんな感じ、と図を描いて説明する。

模型でもいいから作ってくればよかったかな。

「はわわ・・・そんな便利なものが・・・。」

ちなみにその後、シャワーが作れるのならカランも作れるだろうということになったのだが、それでは水の出力が足りないという壁に突き当たった。

そこで再び宝物庫をあさると、流れる水の勢いを加減速させる石が出てきた。

それを使って、水の勢いを高めるとのことだ。

「それなら、できそうですね。・・・でも、宿舎や町に作るのは、その宝具がいくつもないといけないですよね？」

「そこはまだ検討中だ。取り合えず城内で作ってみて、いろいろと

不具合とか使い心地とか聞いてみる。それで大丈夫そうだったら宿舎とかにも水道を伸ばして・・・って感じかな、今のところは」

「・・・さすがギルさんですね。そこまで考えてらっしゃるなんて」

「はは。ありがと、嬉しいよ。それで、風呂ができたときには朱里と雛里に一緒に入ってもらいたいんだが」

「はわわっ!?ギルさんと一緒にですか!?」

「あわわ・・・ま、まだ心の準備が・・・」

俺の言葉に、顔を真っ赤にしてあたふたし始める二人。

・・・どうしたんだろうか。

「俺と一緒にってことじゃないんだが・・・。それに、俺がいなくても怪我するようなことはないから大丈夫だと思うけど・・・?」

「そ、そういうことではなくて・・・」

「ん?ああ、使い方ならちゃんと説明してから入ってもらうから大丈夫だ」

「・・・雛里ちゃん、多分私たちが思ってることと全然違うこと思ってるね、ギルさん」

「そだね・・・。先は長そうだよ、朱里ちゃん」

次は二人いっせいに落ち込んでため息をつき始め、本気でどうしたんだろうかと心配になった。

そんなに俺と一緒に風呂に入りたかったんだろうか。

「・・・大丈夫か、二人とも。そんなに落ち込むほど俺と一緒に入りたかったのか？」

「はわわっ！？そんな恐れ多いこと！」

「あわわ・・・む、無理です・・・！」

・・・よく分からないが、再び混乱し始めた二人を落ち着けさせ、改築の許可を貰った。
早速一刀と共に甲賀の家に行き、計画を始動させる旨を伝えた。

「よし、ならば忍者集団の中から、工作活動が得意なのを十数人と、ランサーを二十人ほど連れて行け」

「助かるよ。」

「俺はお前が取り出した宝具をどう給湯装置に組み込むかを考えるから、しばらく工房に篭る。用があるときはオリジナルに言え。」

「ああ。よし、それじゃ一刀、お前は内装のデザインを頼む」

服の意匠を考えたという一刀は、やはりと言うかなんというかデザインの才能があるらしく、衣装を作るときや家の内装といったことを頼むとかなりのクオリティで仕上げてくれる。

「おう！日本と見間違うくらいのもの作ってやるぜ！」

「その意気だ。取り合えず、壁とかの素材を作ったりする職人たち

の工房の場所、教えとくな。」

さて、俺はちょっくら宝物庫でものぞいてみるかな。
何か使えるようなのがあれば甲賀のところに持っていくとしよう。

・・・

「・・・バーサーカー。そういえばお前も日本人なんだよなぁ」

「・・・・」

給湯装置を作成するにあたって、川から風呂場への水道やらの工事を始めることに。
がっこんがっこんと何かを掘り進めたりする音が、土ぼこりが飛ばないようにと引かれた幕の向こうから聞こえてくる。
その様子を見に行こうと街を歩いていると、道中で路地裏への入り口をふさぐ様に立っているバーサーカーを見かけたので、ちょっとだけ話しかけてみたのだ。
・・・まぁ、答えが返ってくるとは思ってないが。

「まぁ、次は温泉でも掘り当てるから、そのときはお前も呼ぶよ。
城の風呂場はお前には小さいからなぁ」

「・・・」

仁王立ちの体勢から微動だにしないバーサーカーにそういうと、かすかに首肯してくれたような気がした。
俺は一人で納得しながら、路地裏にいるであろうシャオは何をやってるのか気になった。

「・・・にしても、路地裏で何やってるんだ、シャオは」

そう言って覗き込もうとすると、今まで無言で仁王立ちしていたバーサーカーが一変した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「おおおおおおっ！？」

急に雄たけびを上げるバーサーカーから慌てて距離をとる。

まさかシャオから路地裏に他人を入れないように、とか命令されてますかね！？

「・・・というか、周りの人たちがまたか、見たいな顔して通ってくってことは、日常茶飯事なんだな、これ」

はぁ、とため息をつく。

まぁいいや。シャオにだって秘密の一つや二つくらいあるだろ。

「それじゃあな、バーサーカー。頑張ってくれ。」

「・・・」

無言のバーサーカーに別れを告げて、俺は目的地へと向かう。

水を引くところから始めるつもりだけど、川を分かれさせるなんて簡単にできるものかね？

・・・

「・・・うわぁ」

できてました。なんていうか、昨日までただの川だったのに今じゃ城への支流ができてるんだもの。
驚いた。凄いな工作部隊とランサーたち。

「む・・・？ギル様！どうかいたしましたか？」

ランサーの一人が気づくと、全員がこちらを見る。

「いや、どれくらい進行してるかなっていう確認をしにきたのと、後どれくらいで終わりそうかなって聞きに着たんだけど・・・」

「なるほど。ええっと、ここで計画の統括をしてるのは・・・」

「私ですっ」

「ああ、そうでした。それではギル様、詳しい話は彼から」

そう言ってランサーがよけると、別のランサーが前に出る。
同じ日本人なだけあって顔立ちは似ているが、服装以外はやはり別人だ。
まぁ、服装もちょっとだけ違ってたりするんだけど。

「説明させていただきます！川の支流を城の浴場と繋げる工事は、今のままで行きますと明日には完成すると思われます！」

「・・・早いな」

「はっ。恐縮です」

そう言って敬礼するランサー。甲賀の一件以来、俺にも敬意を払ってくれるようになってちょっとこそばゆく感じる。
まぁ、明日繋がるって言うんなら、後は甲賀の給湯装置がどうなったか、だな。
次はそっちに行ってみるか。

「うん、分かった。じゃあ、俺は甲賀が作ってる給湯装置の様子を見に行くよ。」

「はい。・・・大丈夫ですね。今は家にいるようです」

ああ、そういえばランサー同士はお互い一瞬で意思疎通できるんだっけ。

「分かった。じゃあ、オリジナルに今から行くこと伝えておいてくれ」

「はっ。それでは、お気をつけて！」

「ああ、ありがとう」

そう言って俺は休憩のときにでも食べてくれ、とランサーに手土産を渡し、別れを告げた。
・・・え？いや、手土産くらい用意しないと。俺たちのわがままで動いてくれてるんだし。

・・・

「お、ランサー」

「・・・ああ、ギル殿ですか。お待ちしておりました」

そう言って出迎えてくれるランサーが、それで、何か御用でしょうか、と聞いてきたので、俺はそうそう、と前置きしてから口を開いた。

「さっき工事現場を見てきたんだが、明日には完成するって言ってたからさ。甲賀の方はどうかと思って。」

「なるほど。・・・今ならマスターも大丈夫だそうです。」

念話かなにかで確認を取ったのか、ランサーは中へどうぞ、と玄関を開けて言った。

お邪魔します、と声を掛けて家の中へ。一応説明はされていたので、工房まで一直線だ。

「甲賀、入るぞー」

「む、ああ、入れ」

入れ、といわれたので遠慮なく入る。

工房は純和風の内装をしており、様々な道具が並んでいる以外は他の部屋と変わらないように見える。

が、周りに張ってある札や置いてある様々な薬品などから魔力を感じるので、結界を張ってあることが分かる。

「どうかしたか?」

畳に正座しながら宝具を弄っている甲賀は、こちらを見ないまま用件を聞いてくる。

「装置のほうはどうかな、と思って。ランサーから聞いてると思うが、明日には支流を繋げる工事も終わるみたいだし、装置の状況はどうかなぁと」

「うむ、宝具を弄るのは初めてだったが、何とかコツはつかめた。明日の工事終了までにはできるだろ」

「そっか。それは良かった」

なら、明日から給湯装置と水道工事の両方を進めていけるだろう。よし、当面は甲賀たちに任せて大丈夫だろう。後は一刀の様子を見に行ったあと、政務に戻ればいいだろう。

・・・

「あ、ギルさん。お疲れ様ですっ」

一刀の様子を見に行ったがいなかったので、諦めて政務へと戻ることにした。

政務室には朱里だけがいて、俺が入ってきたのでいったん筆を止めてあいさつしてくれた。

「お疲れ様。今日は朱里だけか？」

「はい。桃香さまは午前中で政務は終わっていますし、さっきまで雛里ちゃんもいたんですけど、愛紗さんと隊列の訓練に行ってしまって・・・」

「そうなんだ。よし、じゃあ今日は二人で頑張るか」

「ふ、二人・・・二人きり・・・は、はいっ！頑張りますっ」

「そこまで肩肘張らなくていいよ。二人しかいないっていっても仕事は少ないんだし、ゆっくりやっていこうぜ」

そう言って朱里の頭を撫でる。こうすると喜んでくれることは経験から分かっている。

俺の予想通り、朱里は少し恥ずかしそうにしながらも笑顔で撫でられている。

「はわわ・・・ゆ、ゆっくり頑張りますっ」

「おう。ゆっくり頑張ろうぜ」

朱里から余計な肩の力が抜けたのを見て、俺も自分の席に座る。

自分で言っておいてなんだが、本当に仕事少ないな。これなら日が暮れる前に終わりそうだ。

「・・・あ、あのっ」

「んー？」

朱里が政務中に声を掛けてくるとは珍しい。

いつもはせっせと一生懸命筆を動かしているだけなのに。

「その、ですね・・・。ば、晩ご飯をご一緒させていただきたいのですが・・・！」

「晩飯を一緒に食べたいってことかな？」

「はいっ・・・。もう、誰かとご予定があったりしますか・・・？」

「いや、特にはないよ。・・・うん、今日は一人で食べようと思ってたから大丈夫だ」

今日は侍女の仕事が長引いてちょっと遅くなるので、先に食事を取っておいてください、と月に言われてたし。
それに、朱里と一緒に食事するというのは久しぶりじゃなかろうか。

「それじゃ、仕事終わったら街に行こうか。」

「はいっ。」

さて、どこに連れて行こうかな。
最近は治安も良くなったし、日が暮れても開いてる店は増えてきている。
だから、以前よりはいろいろと選択肢があるんだが、むしろありすぎて困るな。

「朱里、何か食べたいものとかあるか？」

ただ悩んでるだけで答えが出るわけでもないので、思い切って本人に聞いてみることに。
俺の質問にふぇっ！？と驚いた朱里だったが、次の瞬間えーっと、えーっと、と悩み始めた。
お互いに筆が止まってしまっているが、幸い時間には余裕がある。
少しくらい話をしていても大丈夫だろう。

「えと、あんまりたくさん食べられないので、量が少ない料理が置

いてあるお店がいいです」

「なるほど。・・・あ」

そうだ。小食の朱里に、ちょうどいいところがある。
あそこなら朱里もちょうどいい量が食べられるだろう。
よし、行くところは決まったな。

「うん、行くところが決まったよ、首里」

「はわわ、どこでしょうか・・・？」

「はは、まだ内緒」

「ギルさんが意地悪です・・・」

ぷぅ、と頬を膨らませて怒っていますよ、とでも言いたげにこちらを見つめる朱里に思わず笑みが漏れた。

「笑わないでくださいよぅ・・・」

「ごめんごめん。別に馬鹿にしたわけじゃないんだよ。ちょっと朱里が可愛かったから」

「はわわっ！？」

そんな、可愛いなんて、はわわ、と面白いぐらいに取り乱している朱里を見ていると、やっぱり笑みが漏れてしまう。
しかし今度は俺が笑っていることなんか気にならないぐらいに取り乱しているらしく、いまだに顔を真っ赤にしながら俯いている。

しばらくは再起動しなさそうなので、朱里の分の仕事もいくつかやっておく。うむ、このくらいならまだ手伝えるな。
さて、早めに終わらせて、朱里の可愛い姿を見る作業に戻るかな。

・・・

「はわ～・・・もう日も暮れるのに、人が一杯ですねぇ」

はぐれないように、と手を繋いだ朱里から、驚いたような感心したようなどちらとも着かない呟きが聞こえてくる。
大戦も終わり、街の巡回に回せる人員が増えたことや、街を明るくするための工夫のおかげで日が暮れても人がいなくなることはなくなった。
流石に深夜になれば人も出歩かなくなるが、大戦前よりも街の人たちが外出している時間は長くなっただろう。

「朱里たち軍師が一刀や俺の案を実現してくれたからだよ。ありがとな、朱里」

「はわわっ。そんな、私はただギルさんや北郷さんの案が素晴らしかったから、ちょっとお手伝いしただけで・・・！」

「まぁまぁ。謙遜するなって」

そんなことを話している間に、目的の場所へと着いた。
ここは街にいくつかある大衆食堂の一つなのだが、ちょっとだけ俺と縁がある店でもある。
以前来たときに店主から相談を受けたのだが、その時の俺の提案が大当たりしたらしく、それ以来ちょくちょく店主に相談を受けることになった。

なので、ここのメニューの半分は俺の提案、もしくはそれに近いものである。
今日はそのうちの一つが朱里にぴったりだと思って連れてきたのだ。

「こんばんわ、親父」

「おお！ギルさまですか！いらっしゃい！」

元気良く迎えてくれた親父と挨拶を交わし、四人がけの卓につく。

「朱里、今日は朱里にぴったりな品があるんだ。それを食べてもらいたいんだけど、いいか？」

「はいっ。ギルさんのおすすめなら、断る理由なんてないですっ」

「そっか。親父！ラーメン一つと、特別定食一つ！」

「あいよ！」

「あの・・・特別定食って・・・？」

「ん、まぁあまり食べられない子供とかのために作られたんだけど、朱里も小食だしちょうどいい量かなって」

そんなものが、と呟く朱里。
最初はお子様定食と言う名前にしようとしたけど、それだと頼めるのが子供だけになってしまうので、今の名前になった。

「量は少ないけど料理の種類はあるし、ちょっとづつ食べられるから朱里みたいな娘には良いと思うよ」

「そうなんですかぁ・・・。どんなのがくるのか、ちょっと楽しみですっ」

「はは、気に入ってくれるといいんだけど」

客が少なかったからか、料理はすぐに来た。

「はいお待ちどうさん！こっちがラーメンで、こっちが定食！」

「お、ありがと。」

「ありがとございますっ」

「それで、これは定食のおまけです、諸葛さま。諸葛さまは女性ですから、こういうのがいいと思いまして」

「おまけ・・・ですか？」

「へい。この定食は子供が良く頼むんで、おまけがついてるんです。」

なんだか感動した面持ちで、朱里は貰ったおまけを眺めて、特別定食――もうお子様ランチと言うことにしよう――を眺めてをしばらく繰り返してから、スプーンを手に取る。

やはりお子様ランチにはスプーンだということで、お子様ランチの開発と同時にスプーンも作成した。

現代と比べると粗いところがあるが、それでもスプーンとしての役割は完璧にこなしている。

まぁ、みんなにはスプーンではなく匙として認識されているのだが、

まぁそれは後でどうとでもなるのでよしとする。
ちなみにおまけもお子様ランチにつき物だということで頼んだ人にはおまけをあげることになっている。
おまけは商人が持っていた工芸品とか玩具とかのあまりものを安く仕入れているので、おまけをつけても負担ではないようだ。

「よし、いただこうか。いただきます」

「い、いただきますっ」

お子様ランチの内容はいたってシンプルだ。
まず山の形に整えられたチャーハン、おかずには餃子がふた切れと麻婆豆腐が少し。
果物を小さく切って現代版お子様ランチのゼリーの代わりにした。
後は親父の気分で惣菜が二つほどつくことになっている。
そして最後に小どんぶりに入ったラーメンがついてきて、なかなか手ごろなお値段なのです。

「はむっ」

チャーハンの山を崩して、スプーンですくい、口に運ぶ朱里。
流石に爪楊枝にくっついた国旗は用意できなかったので山の頂上には何も突き刺していない。

「どうだ、朱里。味のほうは」

「とっても美味しいです。それに、このくらいの量なら私でも簡単に食べ切れますし、いろんな種類の料理を少しずつ食べられるのはいいですね」

ニコニコと嬉しそうに笑いながら感想を告げてくれる朱里。
うんうん、親父の苦労も報われるだろう。これ作るために、親父の息子とか息子の友達に試食を頼んだらしいし。

「喜んでくれたなら、ここを案内した甲斐があったよ」

俺も朱里に釣られて笑顔になる。
やっぱり食事は楽しく食べないとね。
お互いに今日の仕事のことや明日の予定のことで話が盛り上がりながら食事をしていると、すぐに皿は空になる。
うん、満足満足。
正面に座る朱里も、満足そうにはふ、と息を吐いている。

「よし、じゃあ帰ろうか。」

宝物庫から代金を出して親父に渡す。
親父に見送られながら、俺と朱里は店を後にした。

「はわわ・・・いつもご馳走になっちゃってすみません・・・」

「いいって事さ。女の子にご馳走するのは男の特権だからな。素直に奢られると良い」

「は、はい。ご馳走様でした」

帰り道は人通りも落ち着いていたので、行きとは違って手は繋がなかった。
だが、ふと朱里を見ると、なんだか俺の手を見ては手を伸ばして急に引っ込めたりと忙しそうだ。
多分俺と手を繋ぎたいんだろうな。帰り道もはぐれそうで不安なん

だろうか。
まぁ、取り合えず繋いであげればわかるか。勘違いだったら謝って離せばいいんだし。
俺はおずおずと手を伸ばしていた朱里の手を取る。

「はわわっ!?」

「さっきから俺の手に手を伸ばしてたから、こうしたいのかなって思ったんだけど・・・俺の勘違いだったかな?」

「い、いえっ。勘違いじゃないです・・・」

「そっか。これからは遠慮しないで俺の手を取って良いぞ。別に怒ったりしないから」

「はわわ・・・その、が、頑張りますっ!」

むむっ、と拳を握って宣言した朱里。
そのときに俺と繋いでいる手にも力が入っていたが、全くと言っていいほど痛くなかった。
俺もちょっとだけ握る手に力をこめる。・・・もちろん、潰そうなんて全く思ってもいない。

「あっ・・・」

それに気づいたのか、朱里が少しだけ切なそうな声を出した。
・・・その後の帰り道は、すっかり日が暮れたな、とかそんな益体もない話をして帰った。
なんだかほっこりとした心で城へと帰ることができた。

・・・

サーヴァントにはクラスというものがある。
劉備はセイバー、本郷猛はライダー、といった具合にそれぞれにクラスがあり、さらに、クラスにはクラススキルというものがある。
一番ポピュラーなのは対魔力じゃないだろうか。セイバー、アーチャー、ランサー、ライダーの四クラスが持っているスキルだ。
そう言ったスキルを有効に活用することが、聖杯戦争で勝ち抜いていくためには必要だろう。
・・・なんでこんな話をしているのかと言うと、ある日自身のステータスを見たときに思ったのだ。

「・・・戦闘用のスキルが皆無に近いな・・・」

原作のギルガメッシュのスキルは対魔力E、単独行動A＋、黄金率A、カリスマA＋、神性Bの五つだ。
最初は俺もその五つしかなかったが、こうしてこちらで過ごしているうちにいくつかのスキルがついた。
魔力放出Eと、軍略C、そして千里眼Dだ。
軍略は一対多数でないと発動しないし、魔力放出は戦いに使えるランクではない。
唯一使えそうな千里眼も、俺自身が弓を使わないためにほとんど無用の長物と化している。
一対多数の戦いでは有利になるが、一対一の戦いの際に使えるものがない。
そんな考えに行きついた俺は、千里眼を生かすために弓を習うことにした。
弓の英霊として召還された以上は、ちょっとくらい弓も使ってみたいのです。

「あ、いたいた。」

宝物庫の中から魔力をつぎ込むほど威力が上がるという弓の宝具を引っ張り出し、城にいるであろう紫苑を探すと、割とすぐ見つけることができた。

蜀で弓といえばやはり紫苑だろう。一応桔梗も弓兵扱いだが、轟天砲はちょっと・・・。

「おーい、紫苑」

「はい？・・・あら、ギルさん。いかがなさいましたか？」

俺の声に振り向いた紫苑は、柔和な笑みを浮かべている。

こういう母性あふれるところがみんなに頼られる所以なんだろう。

「ちょっと頼みがあるんだ。この後、仕事とかあるかな」

「ギルさんから頼みごとと言うのは珍しいですね。私にできることなら良いんですけど・・・」

「紫苑じゃないと駄目なんだ。」

「私じゃないと駄目・・・ですか」

俺の言葉に、真剣な表情をする紫苑。

そんな紫苑に頼みごとをするため、俺は口を開く。

「俺に・・・弓を、教えて欲しいんだ」

「・・・弓を？」

「ああ、弓を。」

「なるほど、だから手に弓を持っているんですね。・・・分かりました。私がどれほどお役に立てるか分かりませんが、お手伝いしましょう」

「本当か！？ありがとう、紫苑！」

よし、と軽いガッツポーズ。

「うふふ、それじゃあ、訓練場へ行きましょうか」

「ん、よろしく頼む」

「はい」

・・・

「弓の訓練場に来るのは・・・二度目か」

前に璃々が遊びに来たときに紫苑を訪ねてきた以来だ。

以前は良く見てなかったので分からなかったが、練習用の矢が矢束に入っていたり、？や弓が置いてあるのが見える。

「ギルさんは弓を持参していらっしゃるから、後は？と矢ね」

「あ、右手だけ籠手出せるから、それを替わりに使うよ」

「あら、便利なんですね。じゃあ、矢だけでいいかしら」

そう言って、大量の矢を持ってくる紫苑。
紫苑はここにくる途中で部屋に立ち寄り着替えてきているので、自分の弓と籠手を持ってきている。

「ギルさん、弓を使ったことは？」

「ない。ほとんど剣で戦うか宝具を射出するかだったからなぁ」

「なるほど。それでは、基本からゆっくり教えますね」

そう言って、紫苑は弓の持ち方から始まり、矢の番え方、引くときの注意点などについて教えてくれた。
日本であったような弓道ではなく、どちらかと言うと戦いのための弓術といった感覚である。
千里眼のおかげか、少し習っただけで基本はマスターできた。
動いたり馬に乗ったりしながら矢を放つのは無理だが、動かずに的に当てるくらいなら九割の成功率だ。
うむ、これからもちょくちょく教わるとしよう。

「ギルさんは筋がいいわ。この調子なら、すぐに上手くなるわね」

長く話していたからか、紫苑から硬い敬語が抜け、普通に話しかけてくれるようになった。
流石に年上に敬語を使われるのはちょっと抵抗あるからな。

「それじゃあ次は・・・」

「んー？なんじゃ、紫苑。わしに内緒でギルと逢瀬か？」

「あら、桔梗じゃない。どうしたの？」

次の練習に移ろうとしたとき、弓を持った桔梗が訓練場へとやってきた。

桔梗は俺と紫苑を見るやいなや、にやり、と笑いながらからかってくる。

「なに、轟天砲を調整に出しておってな。ならば久しぶりに弓を引くかと思い立って来てみれば・・・。」

「そうなの。私は今ギルさんに弓を教えているのよ。想像と違って悪いわね」

「ほう、弓をな。・・・ふむ、ならば今からわしも教えよう。紫苑、交代じゃ」

そう言って紫苑と桔梗が視線をぶつける。二人の間に火花が散るのを見て、ああ、多分これから普通の練習じゃなくなるな、とひそかに覚悟を決めていた。

しばらく視線で押し問答していた二人だが、紫苑が折れたのか、俺から一歩はなれる。

「うむ。よし、ギルよ。取り合えず構えて矢を放ってみろ」

「分かった。・・・よっ」

紫苑の教えのとおりに矢を番え、弓を構え、弦を引く。

きりきりと音を立てて矢が引き絞られていく。

十分ひきつけたところで、勢い良く右手を離す。

「ほう・・・」

たんっ、と心地いい音を立てて的に突き刺さる矢を見て、桔梗が感心したような声を漏らした。
おお、結構好感触だったり？なんて思いながら姿勢を戻すと、何度か頷いた桔梗が口を開く。

「なるほど、基本はばっちりじゃな。引くときに時間を掛けすぎなところがあるが、まぁおいおい直っていくじゃろう。」

「そっか。ありがとう、桔梗」

「なんのなんの。ふむ、後は細かいところなんじゃが・・・」

それから数点直しておいたほうが良い所を教えられ、次はそれに気をつけながら弓を引く。

「よし、先ほどより良いぞ。この調子でもう二、三本ほどやってみろ」

「了解っ」

少し離れたところにいる紫苑からもいくつかアドバイスを貰ったりしながら的を撃っていると、背中に何か柔らかいものが押し付けられる。
一瞬何か分からなくて混乱したが、後ろから手を回して姿勢の変なところを密着して直している桔梗の胸が当たっているのだ。
これはまた、桃香とは違った色気を持った柔らかさが心地よく・・・
っとと。危ない。暴走しかけた。

「どうした、ギル。手が止まっておるぞ？」

背後から笑い混じりの声が聞こえる。

・・・ああ、桔梗にからかわれてるなぁ、と確信する。

「ごめんごめん。背中に幸せが広がってたから、堪能してた。」

矢を放つと、たんっ、と的中した音が聞こえる。

確認してみると、なかなかに真ん中に近い場所だ。うん、上達してるな。

「はっはっは。ふむ、なかなか嬉しいことを言ってくれる。・・・ま、今の状況で的中させたのは褒めてやろう」

そう言って離れる桔梗。・・・なんだか背中が寂しくなった気がする。

「・・・桔梗？そろそろ私に代わってくれないかしら？」

「ん？・・・まぁもう少し待て。後二射ほど・・・」

また問答が始まるのか、と思った矢先

「なんじゃ、ギルがこんなところにいるとは珍しい。」

「お、祭。こんにちわ」

「うむ。」

「ギルが弓を使っているのを見るのは初めてだな。」

「秋蘭まで。弓使い勢ぞろいだな」

訓練場にやってきたのは、祭と秋蘭だった。
桔梗と同じように、片手には弓を持っている。

「祭と秋蘭も練習に？」

「ああ。今日は華琳様が姉者と出かけていてな。時間が空いたから練習でもしようかと思ってきたのだが・・・」

「儂もそんなようなところじゃ。暇だから酒でも飲んで凄そうかと思っておったんじゃがの。冥琳がうるさくてのう。弓の練習をするといって逃げてきたのじゃが、途中で秋蘭と出会ったのでな。一緒に来たのだ」

なるほど。今日は弓使いが暇な日なんだろうか。

「それで？ギルが弓を持っているところなんて初めて見るが、一体どうしたんだ？」

「あーっと、なんといいますか・・・。俺って弓兵の役割の英霊なのに、弓使わないだろ？せっかくだから使えるようになっておきたくて、紫苑に指導を頼んだんだよ」

それで、桔梗も一緒に教えてくれることになって、今に至る、と説明すると、秋蘭はほう、と呟き、祭はかっか、と笑った。

「それならば、儂も教えてやろう。蜀の二人よりも経験はあるし、弓がもっと上手くなるじゃろうしな」

「ほう?祭よ、面白いことを言ってくれる。わしと紫苑の二人がかりで教えた弓よりも、おぬし一人のほうが上手く教えられるというか」

「なんじゃ、自信がないのか?」

祭のその一言に、桔梗もイラッと着たのか、売り言葉に買い言葉で次は祭が教えてくれることに。

・・・だんだんと当初の目的から離れていってるな・・・。

「さて、ギル。儂が見ててやるから、何度かやってみよ」

「ん、分かった」

それから、弓使い四人の視線にさらされつつ矢を放った。

紫苑と桔梗の二人に教えてもらっていた時点で、立ち止まっての射なら完璧に的に当てられるようになっているので、放った矢は大体的の真ん中へと突き刺さった。

「・・・ふむ、なんじゃ、つまらんな。いくつかは外すかと思っておったが・・・まぁよい。立ち止まっての射が完璧ならば、次は動きながらの射をするぞ」

「ちょっと、まだギルさんは弓を取って一日しかたってないのよ。ちょっと早すぎない?」

「ほう。今日だけでアレだけできたのか。ならば次の段階も今日中にはできるようにはなるじゃろ。」

そう言って祭は秋蘭を呼んだ。
何でも、走ったりしながらの射なら秋蘭のほうが上手らしい。
紫苑や祭も動きながら射ることはできるが、秋蘭にはかなわない、とのこと。
・・・ちなみに、桔梗の武器は轟天砲なので動き回る動き回らない以前の問題だった。
アレを撃つためには立ち止まらなければならないし、半分は大剣だし。

「・・・まぁ、私でどこまで力になれるかは分からないが・・・できる限りのことはしよう」

こうして、日が暮れるまで弓を射ることに打ち込んだ。
そのおかげで、立ち止まっての射はもちろん、戦いながらや馬上からの射もほぼ完璧となった。
これからもちょっとづつ練習はしていくが、あの四人からお墨付きを貰うくらいには上達したので今度誰かとの手合わせで使ってみよう。

「ふぅ。・・・今日は良く眠れそうだなぁ」

紫苑や桔梗、祭と秋蘭の四人とも仲良くなれたし、弓も上手くなった。良い日だなぁ。
すでに日が暮れて暗くなった城内で、背伸びをして歩きつつ、そんなことを思った。

・・・

第九話　弓兵として弓を使うために（後書き）

宝物庫の中の宝具はいろいろと便利なものが入っているのです。
そして主人公は新しい武器を手に入れた！てってれー。という弓兵イベント。
これは完璧に紫苑たちと絡ませたいがために書きました。多分ちょっとしか弓は使わないです。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第十話　みんなでお風呂に（前書き）

甲賀大活躍です。

それでは、どうぞ

第十話　みんなでお風呂に

弓の練習で疲れた身体を動かしながら、厨房へと向かう。
昼飯を食べてから今までぶっ続けだったので、疲れと同時に空腹もやってきた。
取り合えず何か食べて、それからゆっくり寝よう。
政務はほとんど片付けたから明日は暇だし、いつもより多めに寝ても大丈夫なはず。
とにかく、今はささっと晩飯を食べて眠りたい。
明日の午後には給湯装置も出来るらしいし、風呂はそのときでいいだろう。

「・・・おや？」

厨房を覗いてみると、何故か連華とシャオの姿が。
食事をしているわけではなく、エプロン姿でお玉を持って調理の真っ最中らしかった。

「おーい、連華、シャオ。」

「ぎ、ギルっ！？なんでここに！？」

「あ、ギルーっ。ねえねえ、今お料理の練習中なんだけど、味見してかない？」

「こらっ、シャオ！」

「えー、いいじゃん、食べてもらおうよー！」

「ちょっとまて。今料理の練習してたのか？」

俺がそう聞くと、シャオはにっこりと笑ってうんっ、と首肯した。
連華も少し恥ずかしそうに首肯したため、間違いではないようだ。

「・・・それにしても、これは・・・」

「あのねっ、これはその、ちょっと違くて・・・！」

「ねえ聞いてよっ。お姉ちゃんったら華琳に教わったこととかすっぽり忘れて料理するから、大変なんだよー！？」

「変な事言わないの！」

「なによー。ほんとのことじゃない！」

わーきゃーと言い合いを始めた二人をいったんスルーして、台所をちらっと観察。
切ったネギなどの材料が散乱しており、いくつか失敗作らしき作品が並べられている。

「・・・で、何でいきなり料理なんか始めようと思ったんだ？」

まぁまぁ、と二人を落ち着かせてから事情を聞くことに。
二人は大人しく椅子に座り、シャオが始めに口を開いた。

「花嫁修業よ！」

「花嫁修業？」

「そ！だってシャオはギルのお嫁さんになるんだし、お料理くらい出来ないとね！」

「わ、私も一応花嫁修業だが・・・その、姉さまが言うには、私もギルのお嫁さんになるかもしれないからって・・・」

「・・・シャオはともかく、連華もか？俺、初耳だぞ」

と言うか、シャオを嫁としてもらうことも了承してないんだけど。何故かとんとん拍子で勝手に進んでいってるが、どうすればいいんだろう。

「私は姉さまの後を継がなきゃならないし、まだ早いって言ったんだけど・・・あ、ぎ、ギルがいやだって訳ではなくて・・・！」

「あー、うん、大丈夫だ連華。雪連の性格はわかってるつもりだから。多分、シャオと競わせたら面白そうだなー、とか思ってるんだろう。」

ほんとにいやって訳じゃないのよ！？とあたふたする連華をなだめて落ち着かせる。

連華は真面目な娘だから、多分上と下の姉妹の挟み撃ちを食らって引くに引けなくなったんだろう。

「そうだ、味見して欲しいとか言ってたな。ちょうど腹も減ってるし、二人の料理食べてみたいな」

「わかった！今すぐ用意するから、ちょっと待っててね？」

「その・・・私のも、用意するわね」

そう言って二人は再び台所へと立ち、かちゃかちゃと料理の準備をする。
そして、俺の前へと運ばれてきたのは、チャーハンと麻婆豆腐。
どちらも少し不恰好ではあるが、美味しそうな匂いは漂ってくる。
ちなみに、チャーハンはシャオ、麻婆豆腐は連華が持ってきた。

「そ、その、今日初めて料理したから、ちょっと自信はないんだけど・・・」

「ついさっきまで華琳に教わって作ってたものだから、多分美味しいよー！」

「へえ、今日初めて作ったにしては上手じゃないか。凄いな」

「そんな・・・華琳の教え方が上手かっただけよ」

「でも、作ったのは連華自身だろ？ちゃんと身についてきてるってことじゃないか」

「そ、そうか。・・・ありがとう」

「もー！お姉ちゃんと喋ってばかりじゃなくて、料理食べてよー！」

俺と連華が話しているところに割り込んでそう叫ぶシャオ。
まぁ、確かに飯はさめないうちに食べたほうがいいだろうな。

「分かったよ。じゃあ、こっちのチャーハンから」

「うん。召し上がれっ」

レンゲで掬って一口。
・・・ん、少し焦げてるところもあるけど、不味いってほどじゃない。
と言うか、シャオの身体で中華なべを振れたのが不思議なんだけど・・・。
まぁ、鈴々がアレだけの怪力を持っているんだし、小柄イコール非力って訳じゃないからな、この世界。

「美味しいよ、シャオ。これなら完璧にチャーハンを作れる日も近いな」

「本当っ!?ありがとうっ!」

そう言って俺の元へと飛び込んでくるシャオ。
食器を倒さないようにシャオを受け止める。

「こ、こらシャオっ!危ないじゃない!」

「へへーん。ちゃんとギルが受け止めてくれるから危なくないもーん」

「だからって・・・!」

いきなり飛び込んできたシャオと、いきなりの出来事に怒った連華が言い合いを始めそうになるが、それを手で制す。

「あー、待った待った。奇跡的に怪我もしなかったから大丈夫だよ。な、連華」

「そうだけど・・・」

「シャオ。これからはこういう危ないことしたら駄目だからな。」

「はーい。・・・ごめんね、ギル」

少し反省したように返事をするシャオ。
うんうん、きちんと謝れる子はいい子になるぞ。

「よし。じゃあ、次は連華の麻婆豆腐食べようかな。」

「ど、どうぞ」

シャオを地面に下ろしながらそういうと、連華は俺の前へ料理を置いてくれた。
またレンゲで掬って口に運ぶ。おお、熱々で美味しいじゃないか。
少し水っぽい感じもするが、今日初めて作ったにしては上出来だ。
二人ともこのまま頑張ればとても料理上手になるだろう。うぅむ、見事に胃から捕まえられそうである。

「うん、こっちも美味しいな。これならすぐに上手くなるよ」

「そ、そうかしら・・・」

「ああ。俺が保障するって。良いお嫁さんになるよ」

「っ！？・・・そ、そう」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にする連華。褒められなれてないんだろうか。

いつもは男言葉の連華がここまで柔らかい言葉を使うってことは相当恥ずかしいんだろうな。
こんなことを言っては何だが、とても可愛いものである。

「ほら、二人も一緒に食べようぜ」

せっかく作ったんだし、みんなで食べたほうが美味しいだろう。
俺の提案に、二人はすぐに返事を返してくれた。
三人で卓について、料理の練習中に起きた出来事なんかを聞きながら食べていると、すぐに料理はなくなった。

「ごちそうさま。さて、後は片付けだな」

「うぅ、ごめんなさい」

食事中、食べさせてもらったお礼と言うことで台所の片づけを手伝う、と言ったところ、連華に猛反対された。
散らかしたのは私たちだから、私たちで片付ける、とかそもそも味見のはずだったんだから、ギルがお礼をする必要はない、とか。
美味しいものを食べさせてもらったし、味見とか関係なくお礼したいんだ、と言って何とか納得させたがな。

「よし、取り合えず材料の欠片を集めて、こぼれた汁を拭こう」

そういいつつ、ジャケットを脱いで厨房にある余ったエプロンを身に着ける。
こういう作業のときには服が汚れるかもしれないからな。
取り合えず俺は崑崙の周りの欠片を集めたり、飛び散ったりこぼれたりした汁をふき取る。
連華とシャオの二人もせっせと作業しているようだ。この分なら、

十分も掛からずに後片付けは終わるだろう。
・・・にしても、シャオがこうも片付けに精を出すとは思わなかった。
いつものわがまま姫っぷりはなりを潜めているし・・・。もしかしたら、今日の花嫁修業で大人に一歩近づいたのかもしれない。
後で褒めてあげないとな。

・・・

「おわったー！」

「ふぅ、終わりね」

「よっし、ご苦労さん」

予想通り十分足らずで片づけを終えた俺たち。
先ほどまでの惨状から一転し、きちんとした厨房へと戻っている。

「火の元は大丈夫だよな？・・・うん、大丈夫だ。さ、帰ろうか」

「うんっ。・・・ねえねえ、シャオ、ギルのお嫁さんになれるかなぁ？」

厨房から出た瞬間に、シャオが腕に抱きついてそんなことを聞いてくる。
・・・うぅむ。料理は美味しかったし、片付けのときの手際も悪くなかった。
現状でこれならば、シャオはまだまだ伸びしろがあるんだし、将来はもしかしたら良妻賢母となるのかもしれない。

「・・・そうだな、なれるかもな」

「ほんとっ!?やったー!」

今は、まだまだ足りないところがあるけど、これから先が楽しみだな。

そんな風に思いながら受け答えをしていると、シャオとは反対側を歩いている連華が、俺のジャケットの袖を掴んで引っ張ってくる。

「どうした?」

「あ、あの・・・私は、どうかしら・・・?」

どうかしらって・・・ああ、そうか。連華も花嫁修業のために料理してたんだよな。

そりゃあ、花嫁になれるかどうかは気になるか。

「ああ、ばっちりだ。俺だったらすぐに貰いたいくらいだよ」

「そっ、そう?・・・ふふ、ありがとう、ギル」

連華はその猫のような瞳を細めてそっと笑った。

袖を握ってくるという行動もあいまって、凄くドキッとした。

ええい、孫家の姉妹は可愛すぎるだろ!何だこの姉妹。

いたって冷静そうに装いながら、どういたしまして、と返す。

「駄目だよギルっ。ギルのお嫁さんはシャオなんだから!」

「まだ決まったわけではないでしょうっ」

「だってギルに会ったのはシャオのほうが早いし、その分有利なんだから」

俺を挟んで姉妹喧嘩をする二人を微笑ましく思いながら、呉の屋敷へと向かう。

道中は常にどちらかから話しかけられていたので、一切暇しなかった。

二人を屋敷まで送り届けたあと、一人で街を歩くときの寂しさがいつもの倍ぐらいに感じるくらいだった。

「さってと・・・予想外に遅くなっちゃったな。ちょっと急ぐか。」

恋と全力で戦った日の次くらいに疲れた。

帰ったら真っ先に寝台に飛び込もうと思いながら自室の扉を開ける。

「あ、お帰りなさい、ギルさん。」

「お帰り。遅かったじゃない。何やってたのよ」

「・・・月。それに詠も。何か用か？」

「何も用はないけど・・・用がなきゃ、あんたの部屋にきちゃ駄目なの・・・？」

そう言って上目遣いになりながら俺の目を見つめてくる詠。

・・・むむ、確かにそうだな。

「えへへ、ご迷惑かと思いましたが、お邪魔してました。」

「ん、全然構わないよ。・・・ごめんな、詠。」

謝りながら詠の頭を撫でる。
詠は、ん、と気持ちよさそうに声を上げる。

「・・・別に気にしてないわ。」

頭から手を離すと、詠はその部分を手で押さえて不機嫌そうにそっぽを向く。
不機嫌そう、とはいっても耳まで真っ赤にしているので多分照れ隠しだろう。
二人が座っている寝台に上がり、仰向けに倒れこむと、両隣に二人が寄り添ってくる。

「・・・ギルさんのにおいがします」

「こっちは月の匂いがするよ」

「へぅ・・・今日お風呂入ってないから臭いかもしれないです・・・」

「はは、大丈夫。全然そんなことはないよ」

強いて言えば少し汗のにおいがするくらいだが、その程度は全く気にならない。
・・・と言うか、女子って問答無用で良い匂いするからずるいと思う。
今となりに寝てる月も詠も、風呂に入ってないとは思えないほど良い匂いがする。

「詠も良い匂いするなー」

「ちょっ、ばっ、髪の匂い嗅ぐなばかっ」

「ふははー、諦めろー」

「何棒読みで言って・・・あ、ちょっとどこ触ってるのよ！」

「太もも」

「答えるなっ」

どこ触ってるんだといわれたから答えたら怒られた・・・。
理不尽な気がしなくもないが、まぁ詠が恥ずかしがり屋のツン子だっていうのは前から知ってるし、別に気にすることでもあるまい。
これだけ疲れてるんだ。最後の最後まで疲れきってやる。

「あ、ギルさん・・・その、するんですか？」

服の中に手を入れられながら、月が潤んだ瞳でそう聞いてくる。
すべすべと柔らかいお腹を撫で回していると、月はくすぐったそうに身をよじる。
もしかしたら俺以上に疲れてるかもしれないと思っていやか？と尋ねてみるが、いいえ、と返してくれた。

「えへへ。また私と詠ちゃんを一緒に、なんですね」

「うぅ・・・せめてお風呂には入っておきたかった・・・」

そんな詠の独白を聞かなかったふりをして、俺は二人の肌へと手を伸ばした。

大丈夫。明日にはいつでも風呂に入れるようになってるはずだから。

・・・

「・・・朝か」

朝日が目に入ると自然に目が覚める。眠気はない。

・・・早起きしすぎたらしい。早朝訓練をしている兵士の声すら聞こえない。

まぁ、健康的でいいとは思うが。

「・・・月も詠も、幸せそうに寝てるなぁ。」

隣ではハイニーソックスとガーターベルトだけを身に着けた二人がすぅすぅと寝息を立てて眠っている。

月と詠に抱きつかれている腕をゆっくりとはずし、起こさないように寝台から降りる。

疲れは取れてるから十分眠れたということだろう。背伸びをすれば、背骨がぽきぽきと気持ちの良い音を立てる。

「ふぅ。・・・ちょっと早いけど、朝飯を食べに行くか」

二人に布団を掛けなおして、少し乱れている髪を直してから、部屋を出る。

あー、朝日が目にまぶしい・・・。

「お、ギルじゃねえか」

「ん?・・・瀧か。どうしたんだ、こんな朝早くから」

「そりゃこっちの台詞だぜ。ギルがいっつも起きてくるの、もうちょい後だろ。」

「あー、なんだか目が覚めてな。眠くないから二度寝もできないし」

「つまり暇ってことか」

「・・・そういうことになるな」

「んじゃ、俺と一緒に走るか？」

「走る？」

瀧の説明によると、ライダーの特訓についていくための体力づくりとして三日に一度の間隔で城壁を走っているらしい。
良くやるなぁ。

「で、どうする？」

「んー、そうだな、俺も一緒に走ろうかな」

「おう、了解。さっさと着替えてこいよ。運動用の服くらいあるだろ？」

「あるけど・・・」

そういいつつ宝物庫の服と今の服を交換する。

「一瞬で着替えられるから」

「・・・英霊ってずりぃなぁ。」

「まぁまぁ。ほら、行こうぜ」

「あいよ。」

城壁の上へと向かっている途中、見張りの兵以外の兵には一切出会わなかった。

見張りの兵は俺を見て驚きだす始末だし、いかにこの時間に出歩く人間が珍しいことが分かる。

瀧は見張りの兵と仲が良いらしい。まぁ、城壁ランニングの度に話しかけてるらしいから、仲良くなるのも当然か。

実はこいつ、初対面の人間とも数時間後には一緒に酒飲んでるぐらいに人当たりが良い。

瀧は街の警邏の仕事をしているのだが、店で暴れている暴漢とすら打ち解けて自首させるように導いたことも多々ある。

敵対している奴とすら仲良くなる瀧が、見張りの兵と仲良くならないほうがおかしいのだ。

「よっしゃ、まず軽く五周くらい行くか。」

「五周？大丈夫なのか、瀧」

「あん？大丈夫に決まってるだろ。最初はきつかったけどな。今は余裕もって走れるぜ」

・・・一体何時からやってるんだろ。

「よっしゃ！行くぜ」

掛け声と共に走り出す瀧を追うように俺も走り出す。
一定のリズムを崩さずに走る瀧を見て、走り慣れてるなぁと感心する。
かく言う俺もここに来た当初より体力はついている。
ついていけなくなることはないだろうが、ペースは一定に保っていこう。
規則正しい呼吸で走り続ける瀧と共に城壁の上を五周走りきる。

「よっしゃ、調子いいからこのまま街を走るか！」

そう言って城壁をおり始める瀧。
城壁を走るだけじゃなかったのかと驚きながらもついていくと、宣言どおり街の中を走り始める。
仕事の都合上朝が早い人たちが出てくる時間帯になったからか、まばらながらも人が活動を始めているようだ。
街の人とも仲が良いらしい。おはようさん、とか頑張れー、と瀧に声を掛ける人がかなりいる。

「人気だなー、瀧は」

「はっ、そうか、ふっ、ねぇ、ふっ」

呼吸の合間に言葉を織り交ぜるようにして喋る瀧。
警邏の人間も声を掛けられることはあるだろうが、それと比べても瀧の人気は高いほうだろう。
大体瀧の警邏ルートとは違う場所の人と仲が良いのは驚くしかないだろう。

「・・・これも、瀧の才能かもしれないな・・・」

破天荒な瀧がなんだかんだいって受け入れられているのは、こういう人当たりの良さとかがあるのかもしれない、と思った朝だった。
・・・ちなみに、この後街の裏路地すべてを走ってから早朝ランニングは終了となった。
今まで知らなかった裏路地のルートやらを教えてもらえたのはラッキーだったな。今度街の散歩でもするときにゆっくりと見るとしよう。

・・・

ランニングの後、軽く汗を飛ばして服を着替える。
まぁ、後で風呂に入れるとなればこのくらいは我慢できるな。
甲賀が作業している給湯装置設置予定地に向かう。
城の風呂場の後ろに建てられた小屋の中に入ると、中では甲賀が宝具を組み込んでいるところだった。

「おはよう、甲賀」

「む、ギル。・・・もう朝になったか。」

「・・・もしかして、徹夜か？」

「結果的にはそうなるな。そう心配そうな顔をするな。慣れているから苦ではない」

こちらを振り返った甲賀にそういわれ、心配そうな顔をしてたか、と顔を触りながら呟く。
それから少しだけ装置を組み込むために手を動かしていた甲賀だが、装置が完成したのか、蓋らしきものを取り付けてから立ち上がる。

「これで完成だ。理論上はこれで動くはずだが、なにぶん宝具を弄ったのは初めてでな。不具合が出るかもしれん」

「ありがとう、甲賀。・・・で、操作を教えてもらいたいんだけど」

いくつかスイッチらしきものがついているが、俺では全く理解できない。

つまみらしきものがついているので、それで温度調整をするのだろうと推測できるだけだ。

「ああ、元よりそのつもりだ。いいか、このボタンで・・・」

甲賀の説明によって給湯装置の使い方は理解した。

と言っても、大まかに分けて、お湯を沸かす、温度を調節する、あとは給湯を開始、停止させる機能があるというだけだ。

後は故障したときに甲賀が弄る用の機能がついているだけなので、覚えやすくて助かる。

「取り合えず入ってみるか。一刀を呼んで来い」

「了解。ちょっと待っててくれ」

「ああ。俺は最終的な調整をランサーとやっておくから、別に急がなくても良い」

小屋を出る直前にそう声を掛けられつつ、俺は一刀を探しに城へと向かう。

この時間なら、多分城のほうにいるだろう。

「・・・やっぱり」

「え？・・・あ、ギル」

俺の声に気づいた一刀がこちらに振り返り、駆け寄ってくる。
幸い一人のようだ。連れ出しやすい。

「給湯装置が完成したらしくてな。実験ついでに風呂に入ろうかと思って」

「ほんとか！？いやー、ちょうど入りたいと思ってたんだよなー」

そう言ってにっこり笑う一刀をつれて再び城内の浴場へ。
入り口にはランサーの複製が立っており、すでに脱衣所で甲賀が待っていると伝えてくれた。

「ありがと。それじゃあ、入らせてもらうよ」

「はっ。ごゆっくりどうぞ！」

敬礼をしてくるランサーの複製に手を上げて答えながら、「ゆ」と書かれた暖簾をくぐる。
脱衣所では甲賀とランサーがすでにタオル装備で待っていた。

「来たか。大体の調整は終わった。後は入って確かめてみるだけだ」

さっさと着替えろ、と目で訴えてくる甲賀に急かされる様に、俺たちは服を脱いで脱衣籠にいれ、タオルを腰に巻く。
先導するように入っていったランサーと甲賀の後ろに続き、浴場へ。

「おお」

「どうだ?できる限り一刀の設計図に準拠してるつもりだが」

以前入った時とは全然違う内装となっている。
いくつか並んで設置されているシャワーとか、口からお湯が出てくるようになっている龍の頭なんかが増設されてある。
壁には富士山の絵が書いてあって、現代日本の銭湯を思い出す内装に替わっていた。

「すげー!ここまで無茶な注文して平気かなぁ、とか思ってたけど、かなり再現されてる!」

「ああ。俺も一刀の設計図を見たことあるけど、ほとんどこれと一緒だ。」

「まぁいい。テストもかねてシャワーで身体を洗おう。・・・貴様らから、異常なほど生臭いにおいがする。あと女の甘いにおいも。」

「うっ」

「・・・かたじけない」

少し半眼でこちらを睨んでくる甲賀と目を合わせないようにそそくさとシャワーの前まで移動する。
風呂椅子に座ってシャワーの栓をひねる。

「お、シャワーだ」

楽しそうに一刀がシャワーから流れてくるお湯を身体に受ける。
俺も一刀と同じようにシャワーからのお湯で身体の汚れを流してい

く。

「・・・うわー、なんか向こうで銭湯に行ったときみたいだな」

感慨深そうに一刀が呟く。

確かに。こうして両隣に純日本人の外見である一刀と甲賀がいるとどこかの銭湯に着たかのような錯覚を覚える。

「ふむ。シャワーに不具合は見られんな。」

「ええ、こちらも不具合はありません。」

「次は頑張ってくれた工作忍者たちに入らせてあげてくれよ、甲賀」

「ん、元よりそのつもりだ。そのくらいの役得があったほうが良い」

男四人が並んで頭を洗い始める。

おー、なんか感動するな、これ。

ちなみにこの排水はこの後下水道を通って川へと戻っていく。

甲賀の話によると一応浄水はするらしいが期待はするな、とのこと。

ふぅむ、しかしこれはいいものだ。

男の意見だけではなく女性の意見も聞きたいので予定通り後で朱里たちにも入ってもらうことにしよう。

「そういえば宝具の起動のための魔力ってどうしたんだ?」

「霊脈からちょっぱらってきた。近くにいいのがあったからな。少し弄って、宝具が常に発動するくらいの魔力を貰ってる」

大元には影響ないから大丈夫だ、と断言する甲賀。

甲賀がそこまで言うなら大丈夫だろう。

「さて、頭も身体も洗ってすっきりしたことだし、ついにメインディッシュだ」

「おお・・・！」

そういいながら立ち上がり、甲賀や一刀が本日のメインディッシュ、浴槽へと歩いていく。

・・・

「はぁ～」

アレから数分。

かぽーん、と魔術によって出された音が浴場内に響く。

このかぽーんという音は五分ごとになるようになっており、入浴中の目安として使えるようになっている。

・・・というか、本当にこの音が出るようにするとは・・・。

「いや～、いいねえ、風呂は」

満足そうなため息をついた一刀がまた満足そうにそう言った。

再び四人一列に並んで湯に浸かっている俺たちは、頭の上にタオルを乗せながら風呂を堪能していた。

「こっちも不具合は無い様だな。・・・うむ、ゆっくり浸かるとするか」

しばらくまったりと浸かった後、全員ほくほくとした顔で暖簾をく

ぐっていた。

「大成功だったな。これで城内での風呂の問題は解決したといっても過言ではないな」

「ああ。・・・それじゃあ俺は朱里たちに話をつけてくる」

「入れるなら夜にしろ。工作忍者たちには日が暮れるまでに入っておけと伝えておく。」

「分かった。それじゃ、甲賀、ランサー、ありがとな」

「ふ、面白そうだと思ったから手伝ったまでだ。礼には及ばん」

「また何かあれば是非！喜んでお手伝いいたします！」

「はは、なら、またお言葉に甘えるかもしれないな。」

そう言ってから三人に改めて別れを告げ、政務室へと歩いた。

・・・

「はわわ、そうなんですか・・・」

「給湯装置にしゃわー・・・。完成したんですね」

政務室に行くと朱里と雛里が政務を始めるために準備をしているところだった。

早速話を切り出してみると、今日の夜なら大丈夫です、と二人とも同意してくれた。

「よし、じゃあ日が暮れた辺りに迎えに来るから、政務室にいてくれ」

「はいっ」

「はい・・・！」

その後政務の準備を手伝った後、政務室を後にする。
今日は政務の仕事はないし、何より今日はちょっと試すこともある。
日が暮れるまではまだまだ時間があるし、ゆっくりといくかな。

「さて、忘れないうちに一つ目はやっておかないと」

日が昇っているうちにやるべきことは、大まかに分けて二つある。
一つ目は・・・。

「お、こっちか。」

瀧に今朝教えてもらった裏路地の様々なルートを確認することだ。
こういう通路が放っておかれると、犯罪者なんかが逃走するためや隠れるために使うかもしれない。
・・・まぁ、かなり治安はいいほうなので、そんなことはほとんどないとは思うんだが。

「む？」

いくつかのルートの安全を確認し、少し狭い隙間を通ると、表通りからは外れた広場に出る。
こんなところがあったのか、と思いながらきょろきょろと回りを見

ていると、近くから声が聞こえてくる。

「だーかーらー、ギルの好きそうな食べ物を調べて欲しいのよ！」

「で、でも・・・私がこっそり忍び寄ってもギル様は気づいてしまわれるんですよぅ」

「んもう！明命もあの黒いのみたいな気配遮断を身につけなさい！」

「無茶ですよ！小連さまが直接聞いてはどうですか？ギル様なら、こっそり調べるより簡単に教えてくれそうですよ？」

・・・声と会話内容から察するに、ここには明命とシャオがいるらしい。

と言うことは、もしかしてこの広場へ誰も来ないようにバーサーカーに入り口を塞がせていたのか。

うーむ、流石のシャオもこっちのルートから人が来るとは予想していなかったんだろう。俺もこんなところに出るとは予想してなかった。

「そんなの意味ないじゃない！先にギルの好きなものを調べて、それを作れるようになってれば、お姉ちゃんより一歩先にいけるでしょ？」

「それは確かにそうですが・・・」

先ほどから話を聞いていると、どうやら俺の好きな食べ物を明命に調べさせようとしているらしい。

しかし、明命はその頼みに難色を示している、と。

・・・まぁ、明命はちょっと抜けてるところがあるからなぁ。

猫に目がないところとか。あれは結構致命傷だと思う。
そういえば以前も明命からいろいろ聞かれたりこっそり後を着けられたりしていたのだが、あれもシャオのお願いがらみなんだろうか。
アサシンの気配遮断で慣れている俺はそう言った類の『気配を消そうとする』感覚に敏感になっているのですぐに気づいてしまったのだが。

「うぅむ。しかし明命の言うとおり直接聞きにくればいいのに」

多分昨日の花嫁修業の一環としてまた料理を食べさせたいと考えてくれているんだろう。
そして、俺に食べさせるのだったら俺の好きな料理のほうが良い、と思いついて明命に調査を依頼、って所か。
直接聞きに来ないのは・・・やはり、サプライズで食べさせてあげたいとか考えてくれているのか・・・？
そうだとすると、とてつもなく嬉しく感じる。
昨日の一連の流れから、俺の元にシャオが嫁に来るのも悪くないと思っている辺り悪質である。
まさかシャオ、計算済みか・・・！？
シャオ、恐ろしい子・・・！

「・・・ま、なんにせよこのまま盗み聞きはよくないな。」

少し遠回りになるが、いったん戻って別ルートから行こう。
そう思って踵を返した瞬間、足元でぱきっ、と音がした。
慌てて足を見てみると、枯れ枝を踏んでしまったらしい。なんて王道な・・・！

「っ！誰ですか！？」

向こうまで響いたのか、明命が俊敏に音の方向・・・つまり、こちらに向けて構えを取る。

「バーサーカーの目をかいくぐってここまで来れるなんて・・・相当やるみたいね」

これは出て行くべきなんだろうか。

・・・このまま逃げたら後で大変なことになりそうだ。諦めるしかあるまい。

害意がないことを示すために両手を挙げながら二人の前に歩み出る。

「あれ?ギルじゃない」

「ぎ、ギル様でしたかっ」

俺の姿を見た二人の反応は対照的だった。

きょとんとした顔をしつつも冷静な反応を返したシャオと、構えを解いてあたふたと取り乱した明命。

「どしたの、こんなところまで。・・・っていうか、どうやってきたの?」

「そ、そうですよっ。ここへの入り口は、バーサーカーさんが塞いでくれてるのに・・・」

「あーっと、話すと長くなるんだけど・・・」

二人に問い詰められ、俺は裏路地の隠しルートのことを話した。

前も話を聞いてたの?と聞かれ、今日この場所を知ったばかりで、話はちょっとしか聞いてない、と返した。

あの話の中身を全部聞いていたとなると少し面倒くさくなりそうだったので、来てすぐに枯れ枝を踏み、会話内容は詳しく聞こえなかった、と言っておいた。

「そ。・・・ならいいわ。過程はなんにせよ、あんなところまで通ってシャオに会いに来てくれた、ってことだもんねっ」

そう言って俺へと飛び込んでくるシャオを受け止る。
凄いポジティブシンキングだな、と感心しながら頭を撫でてやる。

「で、こんなところで何の話をしてたんだ?」

立場的には俺は何も知らない人なので、こういっておかないと怪しまれる。

「ん、明命とちょっと訓練してたの」

「へえ、花嫁修業といい、シャオは意外と頑張り屋さんなんだな」

「えへへー。シャオはちゃんと頑張る子なんだからっ」

そう言って嬉しそうに飛び跳ねるシャオ。

「明命もお疲れ様。シャオはお転婆で大変だったろ?」

「あ、えと・・・その、まぁ」

「あー!何よそれ、ひっどーい!」

明命が少しだけ視線をそらしながら気まずそうにそう答えると、シ

ャオが頬を膨らませて怒った様に声を上げる。
まぁまぁ、と言ってなだめるように頭を撫でるとすぐに機嫌が戻ったので、多分本気で怒ったわけではないんだろう。

「ま、今日の訓練はもういいわ。ねえギル、シャオと明命と三人でどこか行かない？」

「わ、私もですかっ！？」

「当たり前じゃない。ね、いいでしょ？」

「あー・・・」

まぁ、二つ目の目的は一人じゃなきゃ駄目、ってことはないから大丈夫だけど・・・。

「別にいいけど・・・午後からは俺、別にやることあるから付き合えないぞ？」

「あれ、今日はお仕事休みじゃなかった？」

「・・・なんで俺の予定把握してるんだ？」

「だって、シャオはギルの奥さんになるんだもん。夫の予定くらい把握してないとねっ」

「・・・まぁいいや。仕事じゃなくてな。ちょっとした野暮用なんだけど・・・どうせなら一緒に来るか？」

「えっ？いいの？」

「ああ。多分作業的には単調になるからな。話し相手が欲しいんだよ」

「じゃあじゃあ、シャオが話し相手になってあげる。」

「そっか。」

「明命も午後は大丈夫よね？」

「はいっ。大丈夫ですけど・・・ご迷惑ではないですか？」

シャオから俺へと目線を変えて聞いてくる明命。

「全然そんなことないよ。むしろ、明命にもきて欲しいな」

「あ・・・。は、はいっ！」

嬉しそうに返事をして俺の近くへ寄ってきた明命の頭を撫でてやる。
明命は猫好きだが、明命本人は犬っぽい。
撫でると明命の頭に犬の耳と尻に全力で左右に振られる尻尾が見える。

「そだ。バーサーカー、戻っていいよー」

いつの間にか広場の入り口にまで来ていたバーサーカーにシャオが声を掛ける。
すると足元から粒子になっていくように霊体化していくバーサーカー。

「いこっ、ギル」

「ああ。」

シャオは俺の右腕に両腕を絡ませ、明命はニコニコと左隣を歩いている。

・・・さて、ここから近いところは・・・蜀の屋敷か。

・・・

第十話　みんなでお風呂に（後書き）

と言うわけで、しばらく呉中心になるかもしれません。

そして完成したお風呂。これで定番のお風呂イベントができる！

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第十一話　お菓子を食べるために（前書き）

サブタイトルを考えるのって難しいといまさら気づきました。
今回はいろんなところに手を伸ばしています。
そしてようやくキャスターの正体が判明します。

それでは、どうぞ

第十一話　お菓子を食べるために

二つ目のやるべきこと。
それは俺の宝物庫から出てきた一つの宝具・・・地下に眠るものを探し出すという羅針盤だった。
地下にあるものなら有形無形問わず探せて、探す深さはこめた魔力によって変わる。
これならば温泉も突き止められるのではないかと思い、こうして街中を歩いているのだ。
かれこれ一時間は歩いているが、いまだに羅針盤の針はくるくると回るだけで一方向を指さない。

「温泉とかってないのかな、この辺」

「温泉？」

「そう。地面から湧き出るお湯のことをそういうんだけど・・・」

見たことないなぁ、とシャオ。明命も見たことがないと答える。
・・・火山とかないから温泉もないのかね。

「・・・ここにはないか。次はあっちだ」

「あっちね。いこいこっ」

「あ、待ってくださいよー！」

次は呉の屋敷の近くを調べてみるか。
俺たちは人ごみを掻き分けながら呉の屋敷へと向かう。

羅針盤にいまだ反応は現れず、くるくると回っているだけだ。
流石に街中にはないか、とため息をつきかけたそのとき、前方から声が聞こえてきた。

「ぎ、ギル！偶然ね」

顔を上げてみると、そこには思春を連れた連華がいた。

「連華。それに思春も。こんにちわ」

「ええ、こんにちわ。・・・その、ギルは何をしてるの？」

「おねーちゃんには関係ないでしょー！」

「シャオ！？あなた、どうしてギルと・・・！？」

「んふふー。ギルが一緒にいて欲しいって言ってくれたの。ねー、ギル？」

「ん？ああ、一人で作業するのが心もとないから、話し相手になってくれってシャオと明命に頼んだんだ」

「・・・なんだ、そういうこと」

「むー、ちょっと正直に言いすぎじゃない。」

ほっとした様子の連華と頬を膨らませるシャオ。

「そういえば、連華は何してたんだ？」

思春を連れて歩いていたってことは、城に何か用事があったとか・・・？

「え、ええと・・・と、特に何もしてないわ。街を歩こうかなって思ってて・・・」

「そうなんだ。あ、ちょっと早いけど俺たちと飯でもどうだ？ちょうど終わりにしようと思ってたし」

本当はまだまだ余裕があるが、四人もつれての温泉探索は効率が悪いだろう。
それに、まだまだ日暮れまで時間があるといっても余裕は持っておきたい。
早めに朱里たちの元へ行っておいたほうがいいだろうしな。

「そ、そうね・・・。ご一緒させてもらおうかしら」

「ん、じゃあ行こうか。」

新たに二人を加えて俺たちは歩き出す。
向かうのは・・・うーん、どこへ行こうかな。
あ、そういえば前に流々が手伝いをしていた店があったな。あそこにしよう。

・・・

「いただきまーす！」

六人がけの席へと案内された俺たち。
俺の両隣にシャオと連華が座り、対面に思春と明命が座った。

その後、それぞれの注文を店主に告げる。
時間が中途半端だからか、客は少ない。
そのためかすぐに注文した料理が来て、一番にシャオがレンゲを手に取り、先ほどの挨拶を口にしたのだ。
それに釣られるように残りの四人もいただきます、と声を合わせる。

「ギールー」

「んー？」

「はいっ、あーん」

名前を呼ばれて振り向いてみれば、レンゲに乗ったチャーハンを差し出してくるシャオがいた。

「ちょっ、シャオ！？」

「あーん」

あ、美味しい。うむ、この街の飲食店ははずれがないのがいいよな。

「ギルっ！？」

連華がそんな俺たちを見て何故か声を荒げる。

「う、うぅ・・・ぎ、ギルっ！」

「おお？」

急に連華に声を掛けられ、少しびっくりする。

振り返ってみると、連華もシャオと同じように箸を突き出してきている。
箸には餃子が挟まれており、連華の腕が震えているのか、ぷるぷると餃子も震えている。

「あ、あーん！」

威嚇するような圧迫感と共にそう言い放つ連華。
あれ、あーんってもっとこう、和やかな雰囲気で言い放つ台詞じゃなかったか。
この娘、真剣勝負の時かのように気合入ってるんだけど・・・。

「あー」

取り合えず食べないことには始まらないので餃子をいただく。
おお、肉汁が良い感じに染み出てくる。

「ありがとう、連華。」

その後、シャオと連華に俺の麻婆豆腐を食べさせた。
二人とも嬉しそうにしていたのでよしとしよう。
全員が食べ終わった後、五人分の料金を払って店から出る。

「ぎ、ギル。自分の分は自分で払うわ」

「いいっていいって。お金のことなら気にしなくていいから」

黄金率のことは言ってあるはずなのだが、やっぱりみんなは遠慮するみたいだ。
俺と良く食べに行く娘たちはあまり気にしないようになったけど、

今日初めて一緒に行った連華は遠慮するか。

「ギル、ごちそうさまでした。お礼に今度はシャオが何か作ってあげるからね！」

「ん、どういたしまして。楽しみにしてるよ」

「じゃ、じゃあ、私も今度料理を作る！」

「そっか。分かった。そっちも楽しみにしておく。」

「・・・ふん。一応礼は言っておく」

「ごちそうさまでしたっ。じゃあじゃあ、私は今度お仕事のお手伝いしますっ」

「おう。何かあったら頼むな」

「はいっ」

その後、四人を呉の屋敷まで送り、城へと向かう。
そろそろ日も暮れそうだ。朱里たちを迎えに行かないと。

・・・

政務室へとたどり着く。
こんこん、とノックの後、扉を開ける。

「朱里、雛里、いるか？」

「あ、ギルさん。二人ともいますよ」

「あ、あわわ・・・お疲れ様でしゅ」

政務室の中では、二人とも書類を片付けている最中だった。
しかしそれももうすぐ終わるだろう。元々の量が少なかったし、二人の処理能力なら完全に日が暮れたぐらいに片付くはずだ。
かといって何もしないのもあれなので、少しくらいは手伝う。

「こっちの書類片付けておくよ。」

「はわわ、すみません」

「いいって事よ。二人にも早くシャワーを体験してもらいたいしな」

「あわわ・・・楽しみです」

そう言って笑う雛里。
女の子だからやはり身だしなみ関係の充実は嬉しいんだろう。
それなら、宝具を使ってまで改築した甲斐があったというもの。
朱里と雛里がどんな反応をするか想像しながら筆を動かしていると、すぐに片付いた。

「よっし、終わった」

「こちらも終わりましたっ」

「こっちもです・・・！」

「ん、じゃあ片づけしておくから二人は風呂に入る準備をしてきて

くれ」

「はわわっ、そんな、お片づけをお任せするなんて・・・」

「大丈夫だから。それに、俺が片付けてる間に二人が準備してきたほうが効率がいいだろ？」

「あわ・・・確かにそうです・・・」

少し渋った二人だが、半分無理やり納得させる形で準備させに向かわせた。

政務の道具を片付けるのぐらい一人でできるし、女の子の準備は往々にして時間が掛かるものだ。

しばらくして準備を終えた二人が戻ってきた。

「よし、じゃあいこっか」

「はいっ」

「はい・・・！」

・・・

二人と共に風呂場へと到着する。

取り合えず服を脱ぐ前に説明しておかなくてはならないので、服を着たまま浴場へと入る。

「はわわ・・・凄く変わっちゃってますっ！」

「あわわ・・・見たことがないものが増えてる・・・」

龍の口から常に出てくるお湯や、シャワーとカランに二人は興味津々のようだ。

「これがシャワー。で、こっちがカラン。ここの栓を右にひねるとシャワー。左にひねるとカラン」

実際に出して説明する。

二人は目をぱちくりとさせて驚いているようだ。

「す、凄いです。これなら髪の毛や頭が洗いやすくなります・・・！」

「桶にお湯を溜めておけるのも便利ですね」

自分でも栓をひねって確かめている二人。

「それから、こっちはいつでもお湯が張ってある浴槽。川の水をお湯にしてここの龍の口から出て、この床についている穴を通って川に戻る。」

「川から水を引っ張ってきたんですか！？」

「ああ。まぁ、いろいろと手を借りたけどね」

甲賀のところの工作忍者とか複製ランサーとか。

彼らがいなければ完成まで数年掛かっていたかもしれない。

「よし、説明はこれくらいでいいだろ。後は実際に使ってみてくれ。」

脱衣所へと戻り、二人にそう告げて俺は脱衣所から出る。
さて、後は二人が出てくるまで待とうかな。

・・・

脱衣所で衣類をすべて脱ぎ、生まれたての姿となった朱里と雛里の二人は、手ぬぐいだけを持って浴場へと戻ってきていた。

「このしゃわーっていうの、凄いよね」

「うん。私は髪が長いから、こういうのがあると洗うのが楽になるから嬉しいな」

「あ、そっか。雛里ちゃん、かなり髪の毛長いもんね」

そんな他愛もない会話をしながらシャワーを使う二人。
しばらくシャワーの便利さを体感した後、常にお湯が張ってあるという浴槽へと向かう。
龍の頭を模した像の口から、どばどばと絶え間なく湯が出てくる様子は、二人の興味を引いた。

「近くで見ると、改めて凄いって思っちゃうね」

「うん・・・。ギルさん、宝具を使ったって言ってたけど・・・」

「川の水をお湯にしたり、水道を整えたり・・・そんな宝具もあるんだね」

「・・・今度、ゆっくりお話したいな」

「うん。私も。」

にこやかに会話をしつつ、二人は湯船に身体を沈める。

「ほわぁ・・・沸かしたお湯を溜めてるわけじゃないから、お湯が冷めなくて暖かいね」

「そうだね。なんだか、疲れが全部溶けちゃうみたい」

「ふふ、確かにそんな感じがするね」

「早く皆さんにも試してもらいたいね、シャワーとか」

「愛紗さんとかは雛里ちゃん見たいに髪が長いから、喜んでくれるかもね」

二人の頭の中には、愛紗や翠といった髪が眺めの将の姿が何人か浮かぶ。

「兵士さんたち用に同じようなものを作れば、兵士さんたちが気分転換できるようになるかもね」

「そっか。兵士さんたちは訓練の後とか凄い汗だもんね」

「お風呂からあがったら、ギルさんに聞いてみる？一つしかこういうのは作れないのか、それともいくつか作れるのか」

「うん。そうしようっか。・・・でも今は、もうちょっと寛いでいたいかな」

「ふふっ・・・。そうだね、朱里ちゃん」

途中でいくつか政務関係の案が浮かんできたが、とりあえずは新しい風呂を堪能することにした二人。

二人が風呂から上がったとき、ちょっと入りすぎでのぼせかけていたのは仕方がないことであろう。

・・・

ふあ、と何度目かのあくびをかみ殺した頃、朱里と雛里の二人が暖簾をくぐって風呂場から出てきた。

お、あがったか、と声を掛けながら立ち上がると、二人はこちらに駆け寄ってくる。

うぅむ、小柄な二人がこうして駆け寄ってくれる姿にはちょっとした感動すら覚えるな。

「ギルさんっ、しゃわーの使い勝手は素晴らしかったですっ。髪の毛や身体を洗う時間が短くなって、効率的にお風呂を使えるようになると思います！」

「常にお湯が張ってあるというのも素晴らしいと思います・・・！好きなときに身体を流せるというのは、とっても嬉しいですっ・・・」

俺の前に到着すると同時にまくし立てるように話しかけてくる二人。

よっぽど感動したんだろうな。まぁ、俺もできた風呂を見たときは同じようなことを思ったけど。

「なるほど。あ、シャワーとかに不具合はなかった?使いづらいと

ころとか」

こういうのは聞いておかないと。

慣れた俺たちでは気づかないような不具合とか使いづらさとかあるかもしれないしな。

・・・なんてことを思って聞いたのだが、杞憂に終わったようだ。

二人はぶんぶんと頭を激しく振って

「全然ありません！むしろ使いやすくて戸惑っちゃうくらいでした！」

朱里の言葉に頷く雛里。

「そっか。なら、他の娘たちにも使ってもらおうかな。そのときは、朱里と雛里に説明役を頼みたいんだけど、いいかな」

元々この二人に新しい風呂に入ってもらったのは、不具合や使いづらさを見つけてもらうこととは別に、他の将に説明する役割をしてほしかったからだ。

頭が回る二人なら、説明も分かりやすくやってくれるだろうしな。・・・といっても、シャワーもカランも使い方が複雑って訳じゃないからあまり意味はないかも知れないけど。

ま、日ごろ政務や訓練なんかで一番苦労を掛けているであろう二人だから、こうやってリフレッシュしてくれたのは良かった。

「はいっ。任せてください！」

「あわわ・・・が、がんばりましゅっ」

やっぱり雛里はちょっと緊張してしまうのか、少し噛んでいたもの

の、それでも力強く頷いてくれた。

「それじゃ、湯冷めしないうちに部屋に戻ろうか。」

二人にそう促して、俺たちは城の通路を歩き始めた。
とりあえず、これからも温泉の捜索は続けよう。
今は宝具を使って擬似的に水道や給湯装置を作っているが、あれは流石に量産できない。
温泉が発掘できれば効能も期待できるしな。よし、明日からも頑張ろう。

・・・

「ギル。頼みがある」

朝起きて部屋から出たら、キャスターが立っていた。
驚いて硬直している俺にそう言い放ってからしばらくして、ようやく俺はキャスターに何か頼みごとをされかけていることに気づいた。

「・・・頼み？」

多分ろくなもんじゃないな、と目の前で笑みを浮かべるキャスターを見て直感する。
こういう笑みは隣の部屋で孔雀の恥ずかしい声を聞いていたとき以来だ。

「ああ。・・・そう身構えるな。簡単なことだからさ」

「聞くだけは聞こう。」

「なに、本当に簡単なことさ。・・・私の作ったホムンクルスと戦って欲しい」

・・・想像以上にろくでもなかった。

「ホムンクルスって・・・あの？」

「もちろん。最近は研究環境もよくなってきたからね。いい感じのレシピができたんだ。」

「・・・ほう」

前に部屋を訪れたときも広げていた何かの設計図っぽいものはホムンクルスのレシピだったのか。

・・・まぁ、最近はあまり動いてないし、鈍ってないか確認するためにも受けておくかな。

「それくらいならいいだろ。」

「助かる。私では作り出せはしても性能確認はできないからね。ほら、キャスターだし」

自慢になってないけどね、と言いながら薄く笑うキャスター。

・・・そういえば、キャスターって何の英霊なんだろう。

三国大戦のときから今まで、一切キャスターの情報は知らなかったからなぁ。

ホムンクルスくらいしか特徴は知らないから、錬金術師かなぁ、位の憶測しかない。

「・・・なぁ」

「ん？」

「その頼みごと受ける代わりに、俺からの質問に答えてもらっていいか？」

「全然構わないよ。なにかな。マスターのスリーサイズ？」

「大丈夫。それは知ってる。・・・終わった後でいいよ」

「了解した。それじゃ、中庭にでも行こうか」

ちょうど良く捕まえた兵士に政務に少し遅れるという連絡を頼み、仲良く連れ立って中庭へ移動する俺たち。

ホムンクルスと戦えといわれたが、俺が思い出すのは一番最初の失敗ホムンクルスと量産型ホムンクルスだ。

前者は一番最初にキャスターが攻めてきたときに遭遇し、後者とは聖杯戦争中何度か戦っている。

・・・一体では足止めくらいしかできないが、何体も出現すればかなり手こずる相手になっていく。

新型はどんな感じなんだろうか。若干楽しみである。

「・・・よし、この辺でいいかな。」

そう言ってキャスターは立ち止まり、持ってきたフラスコに手を伸ばす。

中身は見えないが、八つあるように見える。

「ふふふ、とりあえず八連戦位してもらうけど大丈夫かな？」

「ん、魔力にも余裕あるし、連戦なんて・・・ふふ、こっちの訓練じゃ連戦なんて日常茶飯事ですよ」

愛紗→鈴々→翠→紫苑→恋の連戦のときは本気で死ぬかと思ったけど。

まぁ、そのおかげで技量も上がったし、文句はないんだけど・・・

もう少し、自重してくれても良かったんじゃないかな。

・・・ちなみに、そのときに心配してくれた璃々に思わず求婚して紫苑にあらあらまぁまぁと言われながら額を打ち抜かれたのはいい思い出だ。

あれ、英霊じゃなきゃ死んでたよな・・・。

「・・・そ、そうかい。なら遠慮はいらないね！ゆけっ、ホムンクルスよ！」

そう言ってキャスターはフラスコの一つを地面に叩きつける。

軽い音と共にフラスコが割れ、煙を上げながら中身が外に具現化する。

「・・・これは」

全体的に緑色なのは変わりないが、手には双剣を持つその姿には見覚えがある。

と言うか、つい先日同じスタイルで戦う奴と模擬戦をしたばかりだ。

「ふっふっふ、驚いたかい？驚いただろう！私は気づいたのだ！骨格を一から作るより、すでにあるものを参考にすればいいと！」

嬉しそうに語るキャスターの前で、ホムンクルスが剣を構える。

・・・剣にも魔力が宿っているようだ。普通の剣ではないが、かと

いって宝具でもない・・・微妙な代物だ。

「セイバーを筆頭に、七騎のサーヴァントを基にしたホムンクルスを作ってみたのさ！」

その言葉と共に、ホムンクルスが突っ込んでくる。

慌てて宝具を発射しそうになったが、キャスターは性能テストと言っていたはずだ。

王の財宝（ゲートオブバビロン）で制圧射撃をしてしまっては、性能を測るどころではないはず。

ならば、普通に戦うのが一番いいか。

そんな結論に至った俺は、宝物庫から一つの宝剣を抜く。

原罪（メロダック）。選定剣の原典になったという剣で、必ず心臓を穿つ、とかの特殊な能力がない代わりに、圧倒的な使いやすさを誇る。

「ふっ！」

左右から迫る双剣を避けるため、スウェーバックで状態をそらす。

目の前を通り過ぎる双剣の隙を突くように原罪（メロダック）を横薙ぎに振るう。

だが、セイバーを模したというホムンクルスは俺が原罪（メロダック）を振るい始めたときからすでに身体を引いていた。

「・・・なんとまぁ」

そのままバックステップでホムンクルスは俺から距離を取り、すり足で移動しながらこちらとの間合いを計り、低く構えている。

元になったセイバーの技術を模倣しているのか、その構えは先日見たセイバーのものとほとんど同じだった。

実験体なので倒しても良いと言うお墨付きがなければかなり苦戦するだろう。手加減はかなり難しいのです。

「はっ！」

魔力放出で踏み込みの速度を加速させ、瞬きよりも早くホムンクルスの目の前へと到達する。

最高速のままでホムンクルスの左から剣を振るう。が、ホムンクルスはしっかりとその速度に反応していた。

俺の顔を見据えたまま、両手に持つ双剣を俺の原罪（メロダック）にぶつけ、下に逸らす。

地面に引っかかる原罪（メロダック）の感触に、あ、やべ、と思わず心の中で呟いた瞬間、目前には双剣が迫ってきていた。

「ぬ、おおおっ！？」

原罪（メロダック）を一旦離して身体を深く倒す。

風をきりながら俺の頭の上を通っていく双剣。

俺は双剣が通り過ぎたのかを確認しないまま原罪（メロダック）を抜いて、ホムンクルスの背後へと回る。

ホムンクルスが俺に背後をとられたと認識する前に、原罪（メロダック）を振り下ろす。

「・・・ふぅ」

ホムンクルスの頭を叩ききる直前で、剣を寸止めする。

よかった。もう少し振り下ろすのが遅れてたら、切り裂くしかなかった。

「・・・ふむ、まぁこんなものか」

そう言って、キャスターは空のフラスコにホムンクルスを戻した。

・・・どうも、あの国民的モンスターゲームを髣髴とさせるよなぁ、あれ。

「さて、次はこいつだ！」

そんなことを考える俺を尻目に、キャスターは新しいフラスコをこちらに投げてくる。

さて、後七体だ。頑張りますか。

・・・

あの後、想像通りと言うかなんというか、ランサーを元にしたものやアーチャー・・・つまり俺を元にしたものなど、七騎のサーヴァントを模したホムンクルスが出てきた。

ランサーホムンクルスはスピードに重点を置いているらしく、ステータスで言うならＡ＋の敏捷を誇るらしい。

・・・その代わり、耐久と幸運が哀れになるほど低く、牽制のつもりで入れた蹴りで決着してしまった。

アーチャーホムンクルスは遠距離からの攻撃を中心にしており、キャスター曰く「完全な後方援護用」とのことだった。

接近するまでは手こずったが、懐に入ればすぐに決着はついた。

ライダーホムンクルスは・・・うん、まぁ、ライダーって乗り物あって初めて実力を発揮するじゃないか。

流石にそっちは用意できなかったらしくて、ただ徒手空拳で戦うホムンクルス、といった感じだった。

アサシンホムンクルスは右腕が長く、トリッキーな動きでこちらを翻弄してくるタイプだった。

こっちもやっぱり宝具は用意できなかったらしく、トリッキーな動きに慣れればすぐに対処できた。

バーサーカーホムンクルスは一番脅威だった。

量産型ホムンクルスに薙刀を装備させ、パワーをそのままに機動力を上げたという隊長機のような扱いだった。
薙刀を砕いたところでキャスターからストップがかかり、しばらく破壊した中庭を修復することになった。
そして、最後。
キャスターホムンクルスは一番・・・弱かった。
魔力を籠めた石を投げてくるのはなかなかに怖かったが、それがなくなればただのホムンクルスだった。
一切攻撃しないで終わった唯一のホムンクルスである。

「・・・ふむ、これで最後まで終わったわけだけど」

そして、八つ目のフラスコの中身は貂蝉を模したホムンクルスだった。
・・・妙にリアリティがあり、緑色の身体をしていたサーヴァントホムンクルスとは違い、人間と同じ肌の色をしていた。
しかも、声まで再現しており、そっちに能力の容量の九割を使ったとかで戦闘能力は皆無だったが、倒すのに一番時間が掛かった。
サーヴァントホムンクルスは寸止めで終わらせていたが、この貂蝉ホムンクルスだけは切り裂いた。容赦なく切り裂いた。
キャスターがあー、惜しいことを・・・とか呟いていたが、知るものか。

「よし、とりあえず問題点はまとめられたな。・・・また手伝ってくれると嬉しいね」

「・・・貂蝉ホムンクルスをやめたらな」

「分かった分かった。あそこまで拒否反応が出るとは知らなかったんだ。許してくれ」

「分かったならいいんだ。・・・それで、手伝った見返りだけど」

「ん？ああ、そんな話してたね。見返りと言っても・・・金は要らないよね？前にあげたような概念武装でも作るかい？」

「いや、一つ聞きたいことがあるんだ」

「ほう。いいよ、それくらいならお安い御用だ。」

意外そうな顔をするキャスターに、ずっと気になっていたことを聞くことにした・

「キャスターの真名が知りたい」

「・・・へぇ。そういえば誰も知らないんだっけ。あ、マスターは知ってるけど？」

「こういうのは本人から聞くものだろ？」

確かに孔雀に聞けば嬉々として教えてくれそうだが、それはなんだか意味がないように感じたのだ。
まぁ、それに本人に聞いたほうがいろいろと面白そうだ、っていうのもある。

「んー、じゃあ東屋にでも行こうか。腰を落ち着けたほうがいい話だろうし」

「ああ、そうしよう」

・・・

中庭から少し歩いたところにいつもみんなが使っている東屋のひとつがある。
そこに座った俺は、宝物庫からワインと酒器を取り出す。
話をするのに、口を潤すものがないのはどうかと思ったからだ。

「お、ずいぶんサービスがいいじゃないか。神代のワインとはね」

「昼間から酒っていうのもどうかと思ったが、お茶を用意するのもなんだかな、って思ったんだ」

「ま、いっか。遠慮なくいただくよ。・・・それで、私の真名だっけか。」

「ああ」

キャスターの質問に頷く。

「私の真名はね、パラケルススっていうんだ。本名はテオフラストゥス・フィリップス・アウレオールス・ボンバストゥス・フォン・ホーエンハイム。長いからパラケルススのほうで呼んでくれて構わない」

「・・・錬金術師じゃないかとは思ってたけど、まさかそんな大御所だったとは」

「宝具は知ってると思うけど、四大元素（エレメンタル）の精霊とアゾット（Azoth）剣。アゾット（Az oth）剣のほうは、柄から出した粉を固めて賢者の石にしたり、粉のままエリクサーのような治療薬として使うこともできる」

・・・それ、相当凄くないか。
賢者の石、あるいはエリクサーと言うのは、不老不死を与えるといわれている霊薬のことだ。

「ま、作り出せるといっても流石に完璧なものは無理だけどね。とりあえず作り出した賢者の石に指向性を持たせることができるのと、ある程度の治療に使えるくらいさ」

「それでも凄いだろ」

「流石にデメリットもあってね。生成するのに魔力を多めに消費しちゃうのと、生成した賢者の石の内包する魔力は、生成するときに籠めた魔力の半分くらいになっちゃうんだ」

「・・・燃費悪いな。バーサーカー並だぞ」

「はは。まぁ、時間を掛けて大量に生成して、戦闘になったら一気に使うのが私の戦い方なんだ。」

「なるほどなぁ・・・。」

ちなみに、とキャスターは帯刀していたアゾット(Azoth)剣を鞘ごとぬいて立ち上がる。

「これが短剣のほかに杖とも呼ばれてたのは、こうして鞘から抜いて使えば短剣にしか見えないけど、こうして鞘に入れて刀身を下に向ければ・・・」

そういいながらキャスターは剣の柄が上に来るように鞘を持つ。

それは空想の中でよく見る魔術師が杖をもった姿に見えた。

「こういう風にもって柄の先っぽから賢者の石出してたから、杖の先から賢者の石が出ているように見えたんだと思う。それで、これが杖なんじゃないかって話になったんだろうね」

「・・・何ともまぁ、すさまじい勘違いだな」

「はは、昔の話なんてそんなものさ。・・・さて、これくらいかな。後は聖杯からの情報でも見てくれよ」

「ああ。ありがとな、わざわざ」

「構わないさ。それを言うなら、私もわざわざ君に頼みごとをしたんだしね」

そう言って、俺たちは立ち上がる。

「じゃあ、私はホムンクルスを改良してくる。」

「おう。俺は・・・政務しに行かないとな」

大遅刻である。

ま、今日は愛紗がいないみたいだし、このくらいの遅刻ならまだ取り返せる。

昼前には大半の仕事は処理できるだろう。

「それじゃ、頑張ってくれ」

「そっちこそ」

こつ、と靴の音を鳴らしながら、俺たちは正反対の方向へと歩き始めた。
・・・にしても、パラケルスス、ねぇ。
っていうか、あいつ賢者の石遠慮なく爆破させてたのか。
錬金術師が見たら泣きそうな光景だな・・・。

・・・

「遅いじゃない」

「・・・は?」

政務室に入ると、女卑弥呼が俺の席に座って政務をしていた。
朱里や雛里、桃香はいないようだ。

「何でここに・・・?」

「何でって・・・あんたが遅刻するみたいだから、代わりにやっといてるんだけど。」

何いってんのアンタ?とでも言いたげな顔でしれっと言われてしまった。

「・・・何が目的だ?」

「ん?特に何も。暇だったからね。たまには仕事でもするかー、って。」

「たまには・・・って」

「いやー、だってほら、わらわって女王じゃん？たまにはそれっぽい仕事もしておかないと。うちの弟、そういうの厳しいのよねー」

ああ、あのどんなところにいても姉に声を届けられる弟のことか。

・・・まぁ、こんな姉を持てば誰でも厳しくはなると思う。いつか会うことがあれば、龍の内臓を材料とした胃の薬をあげよう。

「ほらほら、座んなさいよ。わらわの対面で仕事できるんだから、狂喜しなさい」

「・・・すげえこと言い出すな、この女王」

そんなことを卑弥呼に言いつつ、言われたとおりに卑弥呼の対面に座る。

別にどこに座っても良かったのだが、多分この娘は対面に座らなかったらかんしゃく起こすだろうと思ってのことだ。

「ほら、アンタの分」

卑弥呼はずず、と机の上の書類をこちらにずらしてくる。

まぁ、卑弥呼がやっておいてくれた分、いつもより少なめだ。

「そういえば朱里たちは？」

「ああ、はわわはたわわに呼び出されて、あわわはなんかの会議だったかしら。」

・・・訳すと、朱里は穏に呼び出されてどこかへいき、雛里は軍か何かの会議に行ったのだろう。

「それで、ちょうど遊びに来てたわらわが代わりにやってあげてんのよ。」

遊びに来てた、の辺りで不安になったが、仕事はちゃんとやってるようだ。

流石は女王。ふざけてばかりじゃないんだな。

「ふんふーん」

しばらく手を動かしていると、静かだった政務室に鼻歌が響き始めた。

目の前の卑弥呼が、筆を動かしながらふんふーん、と歌っているようだ。

「何の曲だ？」

「・・・へ？」

声をかけてみると、顔を上げた卑弥呼と目が合った。

卑弥呼はきょとんとした顔でこちらを見ている。

「いや、なんか鼻歌歌ってたから、何の曲かなーと」

そこまで言ってようやく卑弥呼は心当たりに思い至ったらしく、ああ、と呟いた。

「鼻歌歌ってたのね、わらわ。っていうか、曲とか知らないわ。わらわのセンスがあふれ出たのよ」

「・・・そっか」

「ええ。」

再び書類に顔を戻す俺たち。
しばらく筆を動かしていると

「ふーんふふーん」

紙の上を筆が滑る音しかしなかった政務室に再び聞こえる鼻歌。
・・・なんだろう。卑弥呼が上機嫌な気がする。
いつもは不機嫌そうにむすっと真一文字に結ばれている口も、下弦の月のように曲がってるし、鼻歌まで歌っている。
何かいいことでもあったんだろうか。

「あ、そうだ。金ぴか」

「・・・せめてギルって呼んでくれ」

「う、うん。・・・ギル？」

「ん？」

「・・・これ終わったらお昼でしょ？」

「ああ、そうしようと思ってるけど」

「そ。じゃあちょうどいいわね。ギルに街を案内させてあげる。ついでにお昼おごんなさい」

「・・・別にいいけど。どうしたんだ、急に。」

「別にいいじゃない。急に街に行きたくなっただけよ。・・・それともなに？わらわとじゃ嫌なの？」

後半の台詞はすさまじく不機嫌そうにこちらを睨んで言った卑弥呼。心なしか、魔力が収束している気がする。

「全然嫌じゃないぞ。あまり卑弥呼と出歩いたことないからな。ちょっと驚いただけだ」

「ふん。ならいいのよ」

キャスターの真名を教えてもらったからか、卑弥呼のこともうちょっと詳しく知りたいと思ってたところだしな。

・・・管理者のほうの卑弥呼？ごめん、だれそれ？

「じゃあ、さっさと終わらせちゃおうか。」

「ええ。・・・といっても、わらわは九割方終わらせてるけどね」

そういいながら卑弥呼は最後の書類に手を伸ばす。

・・・確かに九割がた終わってるな・・・。

ま、俺もあと少しだし、あまり焦って間違っても大変だからな。

焦らずいつもどおりやっていこう。

・・・

「で、どこいくの？」

「んー、取りあえず腹ごしらえからかな。何か食べたいものあるか？」

「なんでもいいわよ。わらわ、嫌いなものないし」

「なんでもいいっていわれてもなー」

それが一番難しいんだけど。

「ま、ぶらぶらしながら気になったところに入ればいいじゃない」

「・・・それもそっか。ほら、はぐれるなよ、卑弥呼」

俺がそういうと、卑弥呼は腕組みをしつつぷいっ、と顔を背ける。

「はん。わらわを子ども扱いしないの。ま、なんかあったら飛べばいいし」

「飛ぶな」

「な、なによぅ。いいじゃない、便利なんだし」

「飛・ぶ・な・！」

「・・・分かったわよ。飛ばないわよっ」

俺の説得が通じたのか、卑弥呼は不承不承といった感じに頷いた。

流石に街中で飛ばれたらとてつもなく困る。

仙人が町に現れた！とか大騒ぎになるに決まってる。

「ま、たまには自分の足で歩くのもいいわね。ほら、ギルがリードするのよ。」

飛ぶなって言ったのあんたなんだから、と言いながらこちらを見上げる卑弥呼に、分かってるよ、と返す。
我がまま女王な卑弥呼の扱いもようやくわかってきた。
戦場以外ではまともに話した事もなかったんだなぁ、といまさら気づく。
こうして外を歩くのは楽しいみたいだし、これからもちょくちょく誘ってみるかな。

「？なによ、わらわのことじろじろと見て」

「ん、あー、いや、卑弥呼って可愛いなぁって」

「・・・当然じゃない。女王よ、わらわ」

俺がそうごまかすと、卑弥呼は俺の方とは真逆の方向に顔を向けながら、そんなことを言い放った。
・・・これと似たような反応を詠にされたことがあるな。
その時の詠と同じようなことを卑弥呼が思っているなら、確信は持てないが、照れてるんだと思う。
一人で納得しつつ、テクテクと歩く。うーむ、やっぱりこの辺の活気は凄いな。

「あ、ギル。前に月に聞いたんだけど、ここのラーメン、美味しいんだって？」

そのまま俺のほうを向かずに歩いていた卑弥呼は、ある一軒の屋台を見つけ、俺の裾を引っ張りつつ屋台を指差しながらそう言った。

卑弥呼が指差した屋台に目を向けてみると・・・ああ、確かにここは美味しいな。
何せ、華琳がなかなかやるわねと褒めていた屋台だからだ。
幸い客も少ないみたいだし、すぐに食べられるだろう。

「ああ、なかなかのものだぞ。食べていくか」

「ええ。ふふん、わらわの口に合うかどうか、試してやろうじゃない」

そう言って不適に笑いながら、卑弥呼は俺の服の裾を引っ張ったまま屋台へと足を向けた。

・・・

「美味しいじゃないっ。ちょっと、この店うちの城に持って帰りましょうよ」

「無茶を言うな。・・・ご馳走様。ほら、行くぞ卑弥呼。」

二人分の御代を払い、やだやだこの屋台もって帰るのー！と駄々をこねる卑弥呼を持ち上げつつ屋台から離れる。
しばらく俺に運ばれると、騒いでも無駄だと悟ったのか、俺の腕からふわりと地面に降り立つ。

「ちっ。いいじゃん、屋台の一つや二つ買ってくれても。損はしないわよ？」

「・・・あー、はいはい」

「何その生返事！わらわのことを何だと思ってるのよっ」

「外見だけ成長した子供」

「・・・うぅー。なんか今日は冷たくない？」

「冷たくしてるつもりはないんだけどな・・・。疲れてるんだよ、多分」

実際今日はキャスターのことやら卑弥呼のわがままやらで意外と疲れている。

・・・まぁ、多少面倒くさいというのもあることは認めよう。

管理者のほうも、魔法使いのほうも、卑弥呼と話しているといつの間にか振り回されている。

「ふーん・・・。ま、いいわ。わらわの遊び相手がいなくなると困るものね。今日はこのくらいにしておくわ」

城に着いた途端に魔法を発動させる卑弥呼。

「ちょっと弟に愚痴ってくる。また来るわ」

「ああ、そのときは屋台ぐらい買ってやろう」

俺がそう返すと、卑弥呼は一瞬虚を突かれたような表情になる。

だが、すぐに笑顔になると、いいわよ、そんなことしなくても、と苦笑気味に言った。

「はは。じゃあ、何か卑弥呼を持て成す案を考えておく」

「ええ、楽しみにしてる。じゃね。」

魔力の残滓を残して平行世界に飛んだ卑弥呼。
少しの間それを見届けた俺は、午後の政務を行うために政務室へと向かった。

・・・

「お、今度はいるな」

部屋に入ると、桃香と朱里、雛里の三人が机に座ってお茶を飲んでいた。

「あ、お兄さんだー。お昼食べてきたの？」

「ああ、三人は昼飯食べたのか？」

「うんっ。それで今は、お仕事前に食後のお茶なの」

俺の質問に、桃香が代表して答えた。
朱里と雛里はこくこくと頷いて桃香の言葉を首肯している。
そうなんだ、と桃香に言葉を返しながら、自分の席に着く。
すると、朱里がそうだ、と呟いてから

「ギルさんも、お茶いかがですか？」

と聞いてくれた。
・・・お茶か。今出かけてきたばかりでちょっと一息つきたい気分だし、貰おうかな。

「そうだな・・・。うん、貰おうかな」

「分かりました。すぐにご用意しますね」

俺の答えを聞いた途端に立ち上がり、かたかたと準備を始める朱里。

「あんまり急がなくていいからなー」

そんな朱里に声を掛けると、大丈夫ですー、と返答が返ってきた。

「そういえばさ、雛里」

「あわわっ・・・!?は、はひっ」

急に話しかけたからか、雛里はあわわと慌てだす。

雛里の頭に手を置いて落ち着かせてから、再び口を開く。

「前にお菓子作ってくれるって言ったじゃないか。それ、今日できるかな」

疲れたときには甘いもの、と言う考えが頭によぎったときに思い出した二人との約束。

以前、政務中にお菓子が得意だといった二人に、今度食べさせてくれよ、と俺は返したはず。

で、その機会に恵まれずに今日まで来てしまったが、これはいい機会だと思って頼んでみる。

「今日、ですか。・・・材料があれば、多分大丈夫です」

「材料か。・・・んー。ああ、そうだ。使わなくて残しちゃったっ

て言うお菓子の材料、確か城にあったな。あれ、もったいないからさっさと使おうと思ってたんだけど・・・それでも大丈夫かな？」

確か何かの祭りがあったとき、お菓子を作って振舞おうとしていたのだが、予定していた職人がこれなくなり、材料だけが余ってしまったのだ。

祭りも小規模なものだったし、数十人が食べればすぐになくなってしまうくらいのお菓子しか作れないのだが、二人が作る分にはちょうどいいだろう。

「あ、そういえばありましたね。すっかり忘れていました・・・」

「まぁ、俺たちが直接取り仕切ったわけじゃないしな。覚えてないのも無理ないよ」

確かあの祭りは区画を取り仕切っている長がやりたいと言い出したからちょっと協力しただけだったはずだ。

他の政務に追われていたときに、その内容まで覚えておくというのは難しいだろう。

「じゃあ、後で朱里ちゃんと相談してみますね」

「ああ。楽しみにしてる。」

「あ、私も食べたいなー」

ニコニコと話を聞いていた桃香は、手を上げながら雛里に言った。

「は、はい。桃香さまもどうぞ。」

恥ずかしいのか、帽子のつばを押さえて俯いてしまう雛里。

「お待たせしました、ギルさん。・・・あれ?どうしたの、雛里ちゃん。顔が真っ赤だよ?」

「あ、あのね・・・?」

タイミングよく戻ってきた朱里は、俺の前にお茶を置いた後、顔を真っ赤にして俯く雛里の顔を覗き込んだ。
雛里は恥ずかしそうにしたまま、いきさつを話した。

「お菓子、ですかぁ。確かにしばらく作ってませんし、久しぶりに作ってみるのもいいかもね、雛里ちゃん」

「うん。・・・ちょっと、自信ないけど」

「えへへ、頑張ろうねっ」

「うんっ・・・」

「よし、じゃあ残りの政務も片付けて、お菓子の時間にしますか。」

今からこの量なら・・・うん、ちょうど三時のおやつに間に合うくらいには終わるだろう。
楽しみもできたことだし、今日も頑張るかな。

「私、いつもより頑張っちゃうよ~!」

「いつも、頑張ってくれればいいんだけどな」

「はうっ。そ、そういう意地悪な事言わないでよぉ、ギルさん」

「ごめんごめん。つい」

「んもー。つい、じゃないよ」

頬を膨らませる桃香を見てほんわかと和やかな気持ちになりながら、筆を取る。

ふと朱里たちを見ると、朱里たちもニコニコと笑顔になっている。

・・・こういう風に、人を自然と笑顔にさせられるのも、桃香の才能だよなぁ。

・・・

第十一話　お菓子を食べるために（後書き）

と、言うわけでキャスターさんはパラケルススさんでした。
人格なんかは私の独断と偏見が遠慮なく入っているのでその辺はご了承ください。

そして、いろんなところでいろんなフラグを立てる主人公君。ちょっと替わってくれ。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

番外話　サーヴァントステータス　キャスター（前書き）

と言うわけで、ようやく判明したキャスターさんのステータスです。
キャスターと言うクラスを作るのがここまで難しいとは思ってなかったです・・・。

番外話　サーヴァントステータス　キャスター

クラス：キャスター

真名：パラケルスス　性別：男性　属性：混沌・善

クラススキル

陣地作成：B
ホムンクルスを設計、作成する際に有利な判定を得られる工房を構築できる。
なお、パラケルススは工房内で賢者の石を生成した場合、消費魔力を三分の一抑えることができる。

道具作成：A
魔力を帯びた道具の作成ができる。
賢者の石、ホムンクルスの作成、精霊の調整などの際に必要なスキル。
固有スキルの魔術と合わせ、魔術装置を作ることにも秀でている。

固有スキル

魔術：A＋
一般的な魔術のほかに、錬金術にも精通している。
賢者の石を生み出したとされるその技術力は格段に高く、現代の魔術師よりも高度な魔術行使を可能とする。

医術：A
元々は医者であるパラケルススは、魔術だけではなく医術の能力も

高い。
もともとのランクはC程度だが、賢者の石との併用によってそのランクを高めている。
困ったときは賢者の石。とっても便利らしい。

護身術：D
旅をしている際に自然に身についた護身術。
一対多などの状況ではほとんど役に立たないが、一対一の状況で、なおかつ相手が盗賊などであれば、取りあえず危機は凌げる、といった程度。
英霊との戦いではほとんど役に立たないスキルだが、魔術師相手ならば撃退することができる。

学術：B
医学部で教授をこなせる程度には教養を持ってそれを生徒に伝えられる。
人に何かを説明するとき、本来の半分の文書量で伝えることができ、相手を納得させられる。
ただし、自分よりランクの高い者に論破されたときや、理不尽に否定された場合、焚書に走る。

能力値

筋力：E＋　魔力：A＋　耐久：E　幸運：D＋　敏捷：E　宝具：A＋

宝具

『四大元素（エレメンタル）の精霊』

ランク：Ｂ　種別：対人宝具　レンジ：５０　最大補足：四人

パラケルススが再発見した四大元素。その元素の精霊たちと共に戦える宝具。
赤、緑、青、茶の色に光る野球ボールほどの大きさをした球体にしか見えないが、それぞれに自我がある。
パラケルススと特殊なパスを繋いでおり、パラケルススから供給された魔力によって飛行、攻撃を行う。
火、風、水、土の属性に弱点を持つものに対して大きなアドバンテージを発揮する。
精霊たちの協力がなければ、ホムンクルスは生成できなかったかもしれない、とパラケルススは語る。

『アゾット（Azhot）剣』

ランク：Ａ＋　種別：対人宝具　レンジ：１～２　最大補足：一人

パラケルススが帯刀している短剣。杖とも言われていた。
魔力の通りやすい短剣として使えるほか、柄では粉末状の賢者の石が生成されており、取り出して使用することができる。
賢者の石を固体にした場合は、前もってその魔力をどのように使うのかを設定しておかなければならない。
爆発させるとしたら、普通に爆発させるだけなのか、何か対象に向けて指向性を持った爆発にするのか、などを設定しなければならないので、攻撃手段としての賢者の石は速度としては劣る。
粉末状、もしくは液状ならば主に霊薬として使う場合がほとんどである。
治療の際に併用したり、固めて固体の賢者の石にしたりと汎用性は高い。
ちなみに、刀身の部分には四大元素（エレメンタル）の精霊を宿すことができ、それ

ぞれの属性を纏った剣として使用することができる。

番外話　サーヴァントステータス　キャスター（後書き）

医師で錬金術師って凄い出自ですよね。
そして、賢者の石のチートっぽさが目立ちます。
ここのこのスキルちょっと変じゃないか、というところがあればご指摘お願いします。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第十二話　大人から子供に（前書き）

今回の話は、感想でいただいた案を元にした話があります。
感想で案を下さった方、どうもありがとうございます。

それでは、どうぞ

第十二話　大人から子供に

政務が終わった後。俺たち四人は厨房へと来ていた。
目の前では朱里と雛里がお菓子作りに精を出している。うむ、エプロンっていいなぁ。
俺の隣にいる桃香も、ニコニコと二人を見守っている。

「ふふ、二人とも楽しそうだね～」

「ああ。お菓子を作るのが好きなんだろうな。」

「あ、雛里ちゃん、次それ貸して」

「うん。・・・はいっ」

「ありがとうっ」

二人とも満面の笑みである。
よほど楽しいんだろうなぁ。
・・・思えば、大戦の頃からお菓子を作っていないことになるんだし、そりゃ楽しいか。

「朱里ちゃん、あんこできたよ」

「あ、俺味見してみたい」

「私もっ」

出来立てのあんこと言うものに興味が沸いてついつい出てしまった

一言だったが、雛里は笑顔でいいですよ、と言ってくれた。
ちゃっかり手を上げていた桃香と一緒に、あんこを味見する。

「・・・おお」

「おいひーね、おにーさんっ」

もごもごと口を動かす桃香に同意を求められ、ああ、と頷く。
あんこだけでもすでに旨い。店を出したら確実に繁盛するだろう腕前だ。

「あわわ・・・よ、良かったです」

「それでは、もう少しだけお待ちくださいね」

俺たちの反応を見た二人は、満足そうに作業に戻る。
これから生地を作ったりするんだろう。
ならば、邪魔しないように静かにしているのが一番だろう。

「くんくん・・・美味しそうなにおいがするのだっ！」

静かにしようと思った瞬間に、背後から鈴々の声が聞こえた。

「まてっ、鈴々っ・・・って、ギル殿!?」

そのすぐ後に、愛紗の声も聞こえる。
どうやら匂いを嗅ぎつけた鈴々と、それを追いかけてきた愛紗、ということなんだろう。

「あれ、愛紗ちゃん。どうしたの？」

「いえ、その・・・鈴々が突然走り始めまして・・・」

「あーっ、朱里と雛里、お菓子を作ってるのだ！」

「はわわっ、り、鈴々ちゃん？」

「あわわ・・・愛紗さんまで・・・」

突然現れた二人に、朱里と雛里は持っているものを落としそうになるほど驚いていた。

・・・まぁ、どたどたと大きい音をたてながら走ってくれば、誰でも驚くか。

「ほら、鈴々。こっちにおいで。静かに待ってるなら、お菓子を分けてあげるから」

そう言って手招きすると、鈴々は

「ほんとにっ！？わかったのだー！」

元気に返事をして、俺のひざの上へと着席した。

・・・あれ？

「なぁ鈴々、何でひざの上に？」

「ふぇ？お兄ちゃんがこっちにおいで、って言ったからなのだ！」

「・・・そっか、そういえばそう言ったな」

俺の想定していた「こっち」とはちょっと違ったが、まぁ鈴々が嬉しそうなのでいいだろう。

「・・・鈴々ちゃん、いいなぁ・・・」

「はは、桃香はまた今度な」

鈴々を羨ましそうに見ている桃香を撫でつつ言う。
前に桃香にひざを貸したこともあるし、なんだかんだ言って子供っぽい桃香ならではといったところか。
喜ぶポイントが鈴々と同じようなところなのは桃香の可愛いところだ。

「ほんとにっ!?」

「ああ。俺のひざでいいなら、いつでも」

「えへへ、やったー」

今にも飛び上がりそうに喜ぶ桃香と、それをいさめる愛紗。
全力でいつもどおりの展開だ。全く問題ない。

「・・・いい匂い」

「恋殿ぉ～、そんな犬のように四つんばいにならないでくださいませ～!」

くんくんと鼻をならしながら散歩中の犬のように厨房へとやってきた恋と、それを必死に止めようとするねね。
・・・とてつもなくねねに同意したい。やめてくれ、恋。

「あ、ぎる」

「むむっ！ギルですかっ？」

「・・・恋、四つんばいはやめなさい。ほら、裾とか汚れまくりじゃないか」

「いい匂い、したから」

「駄目だぞ、そういうことしたら。女の子がはしたない」

ちょいちょいと手招きして恋を呼び、裾についた土やら砂を払う。
ああもう、手のひらも汚いな。水で洗わないとな。・・・水、まだストックあったっけ。

「・・・あ、あった。ほら、恋。これで手を洗うと良い。」

「・・・ん」

「いつ見てもその宝物庫とやらは不思議ですなー」

それから恋とねねも朱里たちのお菓子を待つことになり、翠や蒲公英、星まで集合する騒ぎになってしまった。
まぁ、元から材料は大量にあったからお菓子も大量に作るつもりだったし、消費する人間は多いほうがいいだろう。

「できましたー！」

「それでは、中庭に移動しましょうか」

そう言って完成したお菓子を持って二人が歩く。
確かに、この人数だと厨房は手狭だし、外は良い天気だ。
ぞろぞろとみんながお菓子を持つ朱里たちについていく。

・・・

「それでは、皆さんどうぞっ」

そう言って朱里がお菓子を並べると、鈴々と恋、そして翠が真っ先に飛びついた。
消えるようになくなっていくお菓子。もう半分ほど消えている。

「・・・ふっ！」

意識せずもれた気合の声と共に、お菓子に手を伸ばす。
敏捷値に任せた速度で、やっとお菓子を一つ取れる。
・・・なんでこの娘たち、お菓子を取るのに牽制とかフェイントとか掛けてるんだろう。

「あむ。・・・おお、良い甘さだ」

くど過ぎない甘さは、俺の好みにぴったりと合う。
・・・って、うわ、もう皿の上に何もないぞ・・・。

「・・・ギルさん」

「ん？」

隣から雛里の声が聞こえる。

視線を向けてみると、小さい皿にいくつかのお菓子を乗せて俺にすっと渡してくれた。

「こうなるかもって思って、最初にとっておいたんです・・・」

「おぉ、ありがと！桃まんとか一つも食べてないから助かるよ」

「あ、そんな、お礼なんて・・・！」

いつもの魔女帽子ではなく頭巾をつけている雛里の頭を撫でる。
あわわといつもどおりに照れる雛里にもう一度ありがとうと言ってから、桃まんを手に取る。

「・・・どきどき」

「・・・わくわく」

朱里と雛里が、擬音を口に出しながらこちらを見ている。
・・・なんだか桃まん一つ食べるだけなのに緊張してきたぞ・・・？

「あ、む。・・・おー、こっちも良い感じじゃないか。美味しいよ」

「あわわ・・・！やったね、朱里ちゃん・・・！」

「うんっ。ギルさん、そちらのお饅頭も食べてみてください！」

恋や鈴々が物欲しそうにこちらを見る中、俺は雛里が取っておいてくれたお菓子を一つずつ味わっていく。
美味しいと伝えると、その度に嬉しそうにはしゃぐ二人を見て、こっちも嬉しくなってくる。

・・・うん、また二人にはお菓子を作ってもらおう。

「・・・あ、後ですね・・・こ、こちらもどうぞっ」

「これは？」

目の前に出されたのは、パイ・・・のようなもの。
少なくともこの時代のこの国にはないもののはずだ。

「えっと、以前教えてもらった天の国の料理の中で、このパイ、というものだけは材料があったので・・・」

「おそらく、祭りでパイを作るつもりだったのでしょう。作り方も一緒にありましたので、その、ギルさんのいた国のお菓子を作ってみたんですっ！」

ほほう。
・・・そういわれれば確かに、祭りで珍しいものを作りたいと頼まれて一刀と一緒にパイのレシピを思い出した覚えがある。
俺の財力でそろえた材料と、一刀の努力によって完成したレシピが、まさかそんなところに眠っていたとは・・・。

「・・・にしても良くできてるなぁ・・・。俺たちが考えたレシピ、若干怪しいところもあったはずだけど」

一刀と二人で「・・・あれ、ここってどんな材料使うんだろ」「えー、なんか白い粉じゃなかった？」「あー・・・名前が思い出せない・・・。」「白い粉、でいいだろ」みたいなやり取りが数回あった。
・・・ごめん、嘘ついた。数十回くらいあった。分量とか全力で適

当だった。

「あ、あはは～・・・。その、作り方と完成図を見てなんとなく推測して作ったんですよ～」

「ちょっと失敗もしましたけど・・・味のほうは大丈夫なので・・・」

・・・凄いな。あのあやふやなレシピを見て完成させたのか。

「・・・えっと、取りあえずいただこうかな。・・・いただきます」

そう言って一口かじる。

・・・おおっ、パイだ！これ、パイだ！

うむうむ、ちょっと味が薄い感じがするが、あやふやレシピで、しかもぶっつけ本番で作ったにしては完璧だ。

「あの、取りあえず作り方は別に書き留めておいたので、後で確認してみて欲しいです・・・」

「ああ、俺たちが作ったレシピ・・・作り方より、断然そっちのほうがいいと思う。」

それから俺は、久しぶりに食べられた現代のお菓子が懐かしかったのか、一人ですべて平らげてしまった。

桃香たちには全然構わないよ、といわれたが、流石にそれは気がとがめる。

また材料をそろえるので、桃香たちにも作ってあげてくれ、と朱里に頼んでおく。

・・・そんなこんなで、朱里と雛里のお菓子はとても美味しくいた

だきました。

・・・

「・・・は？」

「いえ、ですから、手合わせを願いたいのです」

二人のお菓子に舌鼓をうった後。

腹ごなしついでに街でも回ってくるか、と考えていた俺に声を掛けてきたのは星だった。

星は自身の獲物である赤い槍、『龍牙』をちらりと見せながら、食後の運動に手合わせでもどうですか？と言ってきたのだ。

そこから、さっきのやり取りに繋がるわけなのだが・・・。

「・・・俺より、愛紗とかの方が訓練にはなると思うけど」

「何を言っておられる。訓練ではなく、食後の運動・・・腹ごなしですよ」

「ですよ、とか言われてもなぁ・・・。」

「私はいまだに一度もギル殿と手合わせをしたことがないのです。ですから、ここは一つ」

「・・・まぁ、断り続けても諦めないだろうしなぁ」

自身の背後に手を伸ばし、ゲイボルグの原典を取り出す。

「ほほう？ギル殿の獲物は突撃槍のような剣と聞いておりましたが」

「リーチ・・・間合いの問題だよ。槍に剣は不利だろ？」

「ふむぅ・・・剣のほうも見たかったのですが・・・」

「それに、俺の宝具は相手に合わせるのが本来の使い方だからな」

不死の生物には不死殺しを。物量には宝具の雨嵐を。
そうして相手を圧倒するのがギルガメッシュの戦い方。・・・だと、俺は思っている。
と言うわけで、相手が長いリーチを持つなら、こっちも長いリーチの獲物を。

「ま、俺も槍は使えるから・・・」

取り出した原典を星に突きつける。

「満足はさせてやれると思うけど」

「・・・面白いですね、ギル殿は」

原典を構える。鎧はつけない。もし当たっても、神秘を纏っていない武装は俺に通用しないからだ。

「ふふ、それでは・・・行きますっ！」

不適に笑った星が、力強く地面を蹴る。
ふわりと蝶のように跳んだ星が、上空から突き刺すように龍牙を突き出してくる。
上方から攻撃されることなんて一度もなかったので、一瞬思考に空

白ができる。

「・・・しっ！」

だが、すぐに思考を張り巡らせ、上空の星を迎撃する。
空気を切って迫る槍と槍が中空でぶつかり合う。
一瞬、切っ先が火花を散らし、星と俺の視線が交じり合う。

「はっ！」

槍を基点に滞空していた星は、そのまま俺の後ろに回るように着地する。
こんなに身軽な人間がいるとは・・・！
背中合わせで立っていた俺たちは、何かを考える前に一歩前へ足を踏み出していた。
槍は中距離をカバーする武器。密着するほどの距離では進化を発揮しない。
振り返りざまに横薙ぎの一撃。星と考えることは一緒だったらしい。
お互いの武器が再びぶつかり合い、火花を散らす。
ぶつかり合った槍は、すぐにお互いの手元に引き戻され、次の攻撃に備える。

「・・・やりますな、ギル殿」

「星にそう言ってもらえると、自信つくよ」

槍に腕を絡めるように構える星と、腰を下ろし、両手で構える俺。
お互いに不敵な笑みを浮かべ、相手の間合いを計る。
少しずつ、少しずつ間合いをつめていく。後数ミリ・・・今！

「はあああああああああぁっ！」

「せえええええええええいっ！」

お互いが間合いに入ったと感じ取った俺と星は、一歩前に踏み込み、槍を突き出す。
シャッ、と刃物を研いだような音を立てて、お互いの槍がすれ違う。
軌道がずれて顔の横を通っていく赤い切っ先。・・・って、あぶねえな！？

「・・・ふ、ふふ。分かりました。これくらいにしておきましょう」

「ん？・・・いいのか？どう見ても不完全燃焼、って顔してるが」

槍を戻した星がいきなりそんなことを言ったので、思わず疑問が口をついて出てきた。
正直言って、決着がつくまでやめないような人間だと思ってたので、とても以外だ・・・。

「ええ。この辺でやめておかねば、やめられなさそうになりますので」

それはあれか。今まではウォーミングアップだったのよ、と言うことか。

「それに、待ち遠しそうにしている娘もいることですし」

そう言って、星はちらり、と視線をずらす。
その視線を追ってみると、そこには恋が軍神五兵（ゴッドフォース）をもって立っていた。

「・・・えーっと、恋？もしかして・・・手合わせしたい・・・とか？」

「ん」

こくり、と首肯。

「そ、そっかー！じゃあ、俺は街に行くから、星と存分にやっててく・・・・」

「・・・ぎる、と」

最後まで言わせずに、言葉をかぶせてくる恋。

・・・あぁー・・・。

「恋、お前はギル殿の奇妙な剣を見たことがあるんだったな？」

「・・・ん。かいりけん、って言ってた」

「・・・ほほう。申し訳ありませぬ、ギル殿。ギル殿の本気が見たくなってしまいました」

そう言って、妖艶に笑う星。・・・あ、いやな予感が。

「恋と二人ならば、ギル殿の切り札も引きずり出せましょう。・・・恋、良いな？」

「・・・いい。最近はぎるも強いから、多分ちょうどいい」

・・・この後、恋と星を相手にしている最中に偶然通りがかった翠、鈴々、雪連を追加した五人を相手にし、攻撃を防ぐためとはいえ宝物庫を使うほど追い詰められた。
あ、死んだ、と思ったのは両手では数え切れないほどだ。・・・良く生きてたな、俺。
その後、何とか休憩を入れてもらい、神代の酒を振舞ってうやむやにし、逃げてきたわけだ。

「あーよかった、今度こそ、街にいけそうだな・・・」

エアを回さないで戦うのがアレだけ辛いとは思わなかった。
・・・まだまだ精進が足りないな。

・・・

「あ・・・ギルさんっ！」

「お、月。・・・なんだか凄く久しぶりな気がするなぁ」

駆け寄ってきた月の頭を撫でつつ、そんな感慨にふける。
あー、こうやって月の頭撫でてるだけで、今日のあの激戦の疲れが癒される・・・。

「・・・あの、何かあったんですか？」

「え？」

「いえ、その・・・お疲れのようでしたので」

「あー、さっきな――――」

かくかくしかじかうまうま、と月に事情を説明する。

「・・・恋さんと鈴々ちゃん、それに星さんと翠さんと雪連さんを同時に相手して、良く生きていましたね・・・」

「やっぱり、月でも引くようなラインナップだったか・・・」

若干笑顔が引きつっている月が、お、お疲れ様・・・でした?となんだか気まずそうにねぎらってくれた。

「アレに愛紗と春蘭が入っていたら・・・ああ、多分駄目だ」

「あ、あはは・・・」

「・・・そういえば、月はまだ仕事なのか?」

何も持っていないから、もしかした休憩時間かも知れないな、なんて思って聞いてみる。
すると、月は笑顔のままふるふると首を振った。違うらしい。

「いえ、今日はお休みなんです。お仕事が夜遅くまでだったので、今まで寝てたんです」

「そうだったのか。遅くまでお疲れ様」

そういえば、たまに兵士の夜食を作る手伝いとかに行ってたな、と思い出しながら月をねぎらう。
月は両頬に手を当てて、へぅ・・・ありがとうございます、と呟くように答えてくれた。

「あ、じゃあ月は今暇なのか？」

「は、はい。」

「じゃあ、街にでも行かないか？」

「ぜひっ。」

「良かった。どこ行こうか？・・・お任せします、以外でな」

「へぅ。・・・え、えーっと・・・。」

んー、と考え込み始めた月の隣を歩きながら、平和だ、と心の中で呟く。

少なくとも月なら南海覇王を握りながら「血が滾るわ・・・！」とか言わないし、無言で必中無弓（ゆみ、きそうかちなし）を撃ってこないし、地面をへこませるほどの一撃をはしゃぎながら放ってくることもない。

・・・ああ、さっきまで俺、地獄にいたんだなぁ。気がつかなかった。

「あ、そうだっ。あの、ギルさん。私、服をみたいですっ」

「服？」

「はいっ。あの・・・し、下着を、選んで欲しいんですっ」

・・・人通りの多い街中で、何をおっしゃってやがりますか、マイマスター！

ああっ、饅頭屋のおばちゃんの優しい視線が痛い！

「・・・ゆ、月？そういうのは、もうちょっと声を抑えて欲しかったなぁ・・・」

「えっ？・・・あっ・・・。へ、へぅぅ・・・」

ようやく周りの状況やら視線に気づいた月は、恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして抱きついてきた。
俺のお腹の辺りに顔を埋めて、恥ずかしそうにいやいやと首を振り、慌てた様子で口を開く。

「ち、違うんですっ。その、紫苑さんと下着の話になりまして、いろいろとお話を聞いたんです。それで、その、ギルさんに選んでもらったらどう？といわれまして・・・」

・・・煽った紫苑も紫苑だが、素直にそれを実行する月って凄いな・・・。

「は、反対したんですけどっ、そ、そうしたら、その、・・・をするときにも、楽しみが増えるわよ、と言われて、ぎ、ギルさんが選んでくれるなら、って・・・」

「あー、うん。もういいよ。大丈夫、大体の事情はわかった。」

「へぅ・・・お恥ずかしいです・・・」

「ま、取りあえず行こうか。」

下着を取り扱っている店へと向かう途中、ようやく落ち着いた月が口を開く。

「今日、本当は詠ちゃんも一緒の予定だったんです」

「そうだったのか？」

「はい。でも、急に軍師のほうのお仕事が入っちゃいまして、一人でお部屋にいるのもなんだかもったいないなぁって思ってたんです」

「それで、外を散歩してたのか？」

「散歩・・・ではないです。ギルさんが今日お仕事だっていうのを聞いて、政務室に向かう途中だったんです」

「あぁ、そういうことだったんだ」

「そういうことだったんです。」

そう言って繋いでいる手に力を入れる月。

「どうした？」

「なんでもないですよ」

ニコニコと笑顔でそういうと、月は再び前を向く。

・・・？

凄く上機嫌だ。卑弥呼といい月といい、なんだか今日は街に出ると上機嫌になる日なんだろうか。

「・・・謎だな」

余談ではあるが、将に女性が多いからか、街の店も若干女性向けのものが多い。
・・・まぁ、男勝りの武将もいるとあって、飲食店はどちらかと言うと男性向けといった様相を呈しているが。
何を言いたいのかと言うと、下着が売っているところに男が行くべきではない、と言うことだ。

「・・・ぎ、ギルさん、そんな顔しないでください。なんだか私まで恥ずかしくなっちゃいます・・・」

「いや、無理を言うな。女性用下着売り場(こんなところ)で男に平常心を求めるのは間違いだと思うんだ、俺」

「へぅ・・・」

気まずい表情をしている俺と、恥ずかしそうに俯く月。
・・・なんだか変な二人組が、女性用下着売り場で立ち往生していた。
うーむ、落ち着いて見回してみると・・・月に合いそうなのがいくつかあるな。
月が落ち着いたら、後でちょっとあわせてみるかな。・・・お、あの白いのとかいいかも。

「・・・あ、あの、ギルさん?」

「・・・よし、月、いくつか良いのあったから、ちょっとあわせてみようぜ」

「え?え?・・・あの、ちょっと、ギルさんっ・・・!?」

・・・

「ごめんなさい」

「いえ、その、大丈夫ですから、頭を上げてください・・・！」

あの後、良い感じに暴走した俺は、数点の下着を選び、月に合わせて確認していた。
三着目あたりからはぅはぅ言い始めた月に気づき、こうして頭を下げているわけだ。

「そ、それに・・・ギルさんに選んでもらえて、嬉しかったです」

「それはなによりだ。いくつか見繕って、買って行こう。暴走したお詫びと言うわけではないけど、代金は俺が持つ」

「自分で払います・・・といっても、無駄なんですよね」

「ああ。こういうときに払うのは、男の甲斐性だからな」

「・・・それでは、お言葉に甘えることにいたします。」

数着の下着と、追加で服を見繕う。
やっぱり、メイド服以外の服も見てみたいのだ。

「今度一緒に出かけるときは、これを着ていきますね」

「ああ、楽しみにしてる」

・・・さらに余談であるが、その夜見た月の下着は、その日買った

うちの一つであったと言っておこう。

・・・

俺の宝物庫にはいろいろなものが入っている。
風呂桶やら着替えといった生活用品から、秘薬や宝具までその数は数え切れない。

「・・・これは・・・」

ある日見つけた秘薬。
それは、ギルガメッシュも使用していた若返りの秘薬。
あの子ギルに変貌する薬である。
その霊薬を見て、俺は疑問に思った。
・・・俺が飲むと、どうなるのか？
まず一つ目の仮説は、俺の少年期に戻る、と言うもの。
これが一番可能性としては高い。
二つ目は、原作の子ギルが出てくる可能性。
多分可能性は低いだろう。

「どっちなんだろう。凄く気になる」

ええっと、なになに・・・？
うわ、ラベルに用法、用量がきちんと書いてある・・・。
まぁ、ぐいっと飲み干せばいいんだろう？

「む、ぐっ、ぐっ・・・ぷはぁっ！不味い！」

ぱぁん、と床にビンを叩きつける。
ありえないほどに不味い！なんだこれ！飲み干したことを後悔した！

「う、お・・・おおおおお・・・？」

・・・

桃香が街へ出ると、子供たちのはしゃぐ声が耳に入ってきた。

「あれ、今日は新しい子がいるのかな」

子供たちの中に、いつもは見ないような少年が一人混ざっていることに気づいた。

たまに桃香も子供たちの中に混ざるため、いつもは見ない子供がいればすぐに分かる。

その少年は子供たちの輪の中で、中心となっていた。

「なぁなぁ、次は何するー！？」

「そうだなぁ・・・あ、そうだ。これはボクのところの遊びなんだけど・・・」

会話を聞いているだけでも、彼らが楽しそうに遊んでいることが分かる。

「でも・・・あんな子、この街にいたんだなぁ」

彼の服装は街の子供と同じようなものだ。

しかし、彼の髪は金色。あんな色をしているのはなかなか珍しい。

「ふふ、でも、みんな楽しそう」

少年を中心にして、なにやら球を蹴り合う遊びを始めたようだ。
みんなが笑顔になって遊んでいるのを見て、自然と笑顔になる桃香であった。

・・・

「あら？」

北郷一刀は、華琳と共に街を歩いていた。
その際、華琳が何かを見つけ、立ち止まった。

「ん？どうした、華琳」

「・・・ねえ、あの子供・・・」

「え？」

そう言って華琳が指差したのは、金髪の少年。
何人かの少年少女と遊んでいるようだが、見た目も動きも人目を引く。

「凄いな・・・あんな子供なのに、動きが違う」

間近で春蘭や霞の動きを見てきたため、一刀も身体の動かし方である程度の実力を見て取れるようになっていた。
そんな一刀の目から見て、少年の動きは一般人とはかけ離れているように見える。

「ええ。・・・いいわね、あれ」

「いいわねって・・・まさか、武将として雇うわけじゃないだろうな・・・？」

「何言ってるの。当たり前じゃない。良い人材は、それをきちんと使いこなせる主の下へ行くべきなのよ」

そう言って、少年の下へと向かっていく華琳。
放っておくわけにも行かないので、一刀も後を追う。

「あなた、今ちょっといいかしら？」

「はい？・・・ええっと、ごめん、みんな。ボク、抜けるね」

華琳と一刀に気づいたのか、少年はこちらに振り向き、二人が誰なのかを確認すると少年たちに別れを告げた。

「おう！またな、亞茶！」

「うん、また。・・・それで、何か御用でしょうか」

再び二人に視線を戻した少年は、人懐っこい笑顔を浮かべ、首を傾げる。

「あなた、名前は？」

「亞茶です。」

「そう。亞茶、あなた、私の下で働く気はない？」

「曹操様の下で、ですか？」

「ええ。あなたの身のこなしは回りの子供より・・・いいえ、そこらの兵士よりも洗練されていた。あなたなら、すぐに一角の将となれるわ」

「うーん、褒められて悪い気はしませんが・・・申し訳ありません。お断りさせていただきます」

悩んだ表情を見せた少年・・・亞茶が、申し訳なさそうにそう言った。

「・・・そう。理由を聞いても？」

「はい。ボクには、すでに使えている主がいますので。」

「その主の名前は？」

華琳が亞茶にそう聞くと、彼はぶつぶつと何かを呟いた後に

「すみません、明かすことはできません」

そう断言した。

表情は笑顔であったが、その身に纏う空気はただの少年のものではなかった。

一刀はその重圧に冷や汗を流す。この子、本当に子供か、と心の中で戦慄していると、華琳が笑みを浮かべながら口を開く。

覇王と称された彼女は、このぐらいの威圧なら跳ね除ける胆力を持っているのだ。

「へえ、本当に面白そうね、あなた。まぁいいわ。いずれあなたの

主も突き止めてあげる」

「ええ、楽しみにしています」

亞茶がそういうと、ふっと重圧が消える。
それでは、と別れを告げると、彼は人ごみの中へと走っていった。

「それでは、頑張ってください、お兄さん」

「えっ？」

最後に、意味深な一言を残して。

「・・・確かに、凄い子だったなぁ」

「ええ。・・・ふふ、絶対に突き止めてやるんだから」

「か、華琳・・・？」

静かに燃える華琳を何とかなだめていた一刀には、去り際の一言のことなど、すでに頭にはなかった。

・・・

天下三分によって一時の平和が訪れたといっても、犯罪がなくなったわけではない。
酒に酔った荒くれ者たちが暴れたり、店主を脅して金を強請り取る強盗がいたりする。
そんな中、街に出た武将たちはちょくちょくそんな犯罪者たちを懲らしめたりしているのだが、一向に数は減らない。

今日も、ある一つの飯店の前で、騒ぎが起きていた。

「おらおらぁ！この娘がどうなってもいいのかぁ！」

「くっ・・・卑怯な！」

男が少女を人質に、金を要求しているのだ。
刃物をちらつかせ、少女の首筋に当てる男。
そんな状態では、駆けつけた警備隊も、たまたま近くにいた雪連と連華も、手を出せずにいた。

「・・・隙がないわね。ああいうのは、どこかに付け入る隙があるものだけど。」

「お姉さま・・・」

「待つのよ。焦ると判断を誤るわ」

「その通りですね、お姉さん方。」

「だれっ！？」

背後から聞こえる声に振り返ると、そこには金髪の少年が笑顔で立っていた。

「こんにちわ！ボクの名前は亞茶、といいます」

「そ、そう。私は孫策。・・・あなた、今は離れてたほうがいいわよ。ここは危ないから」

雪連がそう言って注意するも、少年は聞いていないかのように一歩前に出る。

「こらっ、お前・・・」

「ああん?なんだ、てめえは。」

連華が止めようと手を伸ばすが、後少しのところで届かなかった。
少年は男の前に出ると、二倍はあるであろう男を見上げながら、怖気づいた様子もなく口を開いた。

「こんにちわ、おじさん。・・・その娘、ボクの友達なんですよ。離してもらえませんか?」

「はっ。離せるものか。ガキ、てめえはすっこんでろ。」

少年の言葉は、にべもなく切って捨てられた。
それでも、少年は表情を変えない。

「・・・そうですか。確か、あなたの要求はお金、でしたよね?」

「あぁ、そうだ。金さえ持ってくれば、ちゃあんと後で嬢ちゃんは返してやるよ」

そう言った男の顔を見て、雪連は男にそんな気はないのだということを読み取った。
最後まであの少女を人質に、どこかへ逃げた後に処理するつもりなのだろう。
ここから出すわけには行かない。いっそ、打って出るか。
そんな考えが頭をよぎり始めたそのとき、少年・・・亞茶が、懐か

ら袋を取り出した。
その中から一つ、金を取り出す。

「この袋には、すべてお金が入っています。これならば、しばらくは暮らしていけるでしょう」

「おお！お前、いいとこの坊ちゃんだったのか？・・・まぁいい。それさえくれれば、お友達は離してやる」

「ええ、差し上げます・・・よっ！」

亞茶は袋の口を紐で縛ると、上へと放り投げた。
突然の出来事に、全員の視線が袋へと注がれる。
・・・そう、人質を取っていた男でさえも、数瞬、袋へ視線を向けた。

「ふっ！」

その数瞬で十分だった。
小柄な体躯を弾丸のように加速させた亞茶は、男の手から刃物を奪い、少女を男から引き離す。

「なっ、しま」

「遅いですよ、おじさん！」

刃物を地面に捨てた亞茶は、たん、と地面を蹴って跳び上がる。
そのまま男の顔の前まで跳んだ亞茶は、回し蹴りを男に決めた。
振りぬかれた足は男の顎に当たり、脳を揺らす。
大男、と称されても問題ない巨体が、後ろ向きに倒れる。

「・・んー、やっぱりリーチは前のほうがいいですね。わざわざ飛び上がらずとも、拳で狙えますし」

どこからか取り出した縄で男を縛りながら、思案顔で何かを呟く亞茶。

男を縛り終えた後、助け出した少女のもとへと向かい、優しく声を掛ける。

「大丈夫だったかな。怪我とかしてないといいんだけど」

「あ、ありがとね、亞茶くん。」

涙目ではあるが、もう恐怖は感じていないらしい。

泣き笑いのような表情で、少女は答えた。

「なら良かった。・・・お兄さん方、何してるんですか。ほら、早くおじさんを連行しないと。」

「へ？あ、ああっ。よし、連行するぞ！」

「は、はっ！」

ようやく正気に戻った警備兵が、縛られた男を連行していく。

「・・・あなた、凄いのね」

「いえいえ、友達が危険だったので」

「えへへ、ありがとね、亞茶くんっ」

腕に抱きついてきている少女の頭を撫でながら、雪連の言葉に答える亞茶。

「ふふ、えらいわね。・・・ねえあなた、呉に来ない？」

「ええっと、それは・・・」

「もちろん、私のところで将として働かない？ってこと。」

「ちょ、ちょっと姉さま!？いきなりなにを・・・」

「申し訳ありません。お断りします」

「そ？・・・まぁいいわ。別に今は魏や蜀と戦ってるわけでもないし。」

意外とあっさり引いた雪連。
その落差に連華が違和感を抱いていると、雪連はしれっと爆弾を落とした。

「それに、シャオと連華の夫には、ギルがいるしねぇ」

「姉さまっ！」

顔を真っ赤にして雪連に詰め寄る連華。
二人が騒いでいる間に、少年は人ごみにまぎれていく。

「さーて、後会ってないのは・・・っと」

・・・

朱里と雛里は、詠、ねね、と共にギルを探していた。
今日が休みなのは知っていたが、温泉についての質問がいくつかあったためだ。
時間もあまりとらせないつもりだったし、すぐに解決するかと思ったのだが・・・。

「うーん、いませんねぇ、ギルさん」

「・・・あいつ、どこに行ったのかしら」

城内をくまなく探した四人は、一同にうーん、と悩んでいた。
部屋にはいない、兵士たちにも見かけたら探していたと伝えてほしいと言ってあるが、いまだに誰も会っていないと聞く。

「・・・後は、政務室くらいですね。今日はお休みだから、いないと思っていましたが」

「桃香あたりに頼まれれば、あやつも断らないでしょうからなー」

「あわわ・・・羨ましいなぁ」

「？雛里ちゃん？」

雛里はぼそり、と呟いたつもりだったのだが、朱里にはしっかりと聞こえていたらしい。
朱里は雛里に顔を向けてどうしたの、とでも言いたげに名前を呼んだ。

「へっ?あっ、な、なんでもないのっ」

「そ、そう?ならいいんだけど」

慌てる雛里に、なんでもないと本人が言っているなら、あまりしつこくするべきじゃないと判断して切り上げる。
そして、思考はすぐにギルの行方へと移っていく。

「あれだけの存在感を放つ方ですから、これだけ回っていないのであれば、街のほうに行っているのかもしれませんね」

「そうですなー・・・。取りあえず、政務室を確認してから、なのです」

「そうね。・・・まったくもう。」

政務室の前へとたどり着く四人。
ノックをすると、中からはどうぞー、と声が聞こえてくる。

「失礼します。あの、ギルさん・・・は・・・?」

「どうしたのよ、朱里」

「・・・あの、誰ですか?」

そう言って朱里は目線をまっすぐに向けたまま質問する。
詠たちも後から部屋の中に入ってきて、そこにいる人物を確認する。
いつもいる桃香や愛紗ではなく、そこには・・・

「こんにちわ」

笑顔で手を振っている、金髪の少年がいた。
そんな異常な状況に、四人は驚いた。
見たこともない少年が、兵士たちの警備の目をくぐり、城内を巡回して警戒しているアサシンすら抜けて、政務室で座っている。
その状態が異常といわずして何と言うのか。

「まさか、侵入者っ!?」

「あ、大丈夫ですよ。危害を加える気はありませんから」

「・・・信用できると思ってるの?」

「まぁ、されるとは思ってませんが、危害を加える気ならもう四人とも生きてませんよ?」

そう言ってにこりと笑う少年。だが、その目は笑っていなかった。

「確かに、ここまで誰にも見つからずにやってきた時点で相当な実力者でしょうね。・・・私たちでは、太刀打ちできないぐらいに」

「ま、そりゃそうね。・・・で、何が狙いなわけ?」

「んー・・・取りあえず皆さんに会って話せただけで目的は達してるんですよねぇ。・・・と、言うわけで」

そう言って少年は窓を開け放ち

「それではみなさん、お元気でっ」

「なっ」

「飛び降りたっ！？」

慌てて四人が窓に駆け寄り、下を確認するが、すでに少年の姿はどこにもなかった。

「・・・な、なんだったんでしょうか・・・？」

「とにかく、早急に他の将たちにも伝えねばなりませぬぞー！」

「はい。あれほどまでの実力者がいるのなら、英霊の皆さんの力も借りないといけないかもしれませんね」

「恋みたいな化け物・・・とは思いたくないけど」

四人は急いで桃香たちを探すことにした。

あの少年が何を考えているのかは分からないが、何か対策を取らねばならないだろう。

・・・

「ん？お前、どこから来たんだ？」

「はい？・・・これはこれは。お姉さん、こんにちわ」

「ん、ああ、こんにちわ。・・・それで、お前は誰だ？見たことのない顔だが・・・」

春蘭は目の前に立つ少年を見つめながら、首を傾げる。

「ふぅむ・・・誰かの子供か？迷子なら、私が案内してやるが」

「あはは、大丈夫ですよ、お姉さん。お城の中は熟知してるので、完璧です」

「そ、そうか。完璧か」

「ええ。・・・あ、そうだ」

そう言って、少年は饅頭を一つ、春蘭へ渡す。

「これ、さっきいただいたものなんですけど、ボク一人じゃ食べ切れなくて。お手伝いしてもらっていいですか？」

「む、むぅ。それなら、いただこう」

「いただいてください」

「はむっ。・・・おお、旨いな！」

「それは良かった。・・・それでは、ボクはこれで」

「ああ！饅頭、ありがとなー！」

「いえいえ」

そう言って去っていった少年を見送り、春蘭はいいやつだったなぁ、と呟きながらその場を後にした。

・・・

城内は、騒然としていた。
正体不明の少年が侵入していることを知らされた武将たちは、全員でその少年を追っていた。
城内は武将たちが、街には兵士たちが動員されており、かなりの大事になっていることが見て取れる。

「あちゃー、やりすぎましたかね。今度の大人のボクは不思議なことにいい人っぽいので自重してるつもりだったんですけど」

少年は、やっぱり世界が特殊だからですかねー、とやりすぎたか、と言っている割には反省の色のない言葉を吐いていた。
今彼がいるのは、中庭の東屋である。
そこで優雅にカップを傾ける。中には何故か紅茶が入っている。

「んー、後会ってないのは・・・マスターは最後にするとして」

「へぇ、誰かに会うのが目的かしら?」

「そうなんです・・・よ・・・?」

紅茶と考え事に集中しすぎたらしく、いつの間にか少年の周りを武将たちが囲んでいた。

「あちゃー、久しぶりすぎて気抜いてましたかね」

「・・・侵入者の癖に、優雅に茶を飲んでいるとはね。少し驚きだけれど。・・・たいした根性だと褒めるべきかしら」

「まぁ、このくらいでしたら物の数にもなりませんので、別にいいかなー、とか思ってたり」

その言葉に、何人かの武将の堪忍袋の緒が切れた。

「きさま！先ほどの饅頭はおとりだったのか！」

「あはは、あれは本当に単純におすそ分けですよ。美味しかったでしょう？」

「うむ、旨かった！」

「・・・春蘭、あなた、正体も知らぬ人間から物を貰っていたの？」

「華琳様・・・す、すみません」

ああ、またか、とため息が漏れる。

「まぁいいわ。取りあえず、この三国の将を物の数にもならぬ、といったこと、後悔させてあげましょうか」

「ふふ、久しぶりにわくわくしてきたわ！」

「子供とはいえ実力者・・・容赦はせぬぞ！」

華琳、雪連、愛紗の三人がそう言ったと同時に、春蘭たちが少年に向かって駆ける。

将たちに囲まれ、威圧感をぶつけられても涼しい顔をしていた少年に、すでに容赦する気はないらしい。

朱里たちの言葉もあり、英霊の一人を出し抜くほどの実力者だと思

われているのもあるのだろう。

「・・・あちゃー、これはほんとに、大人のボクに悪いことしたなぁ・・・・」

がたん、と椅子から飛び降り、包囲網を跳んで脱出する。
ふわりと着地した少年は、武将たちの方へと振り向く。
その顔には、呆れのような感情が浮かんでいた。

「でも、気づかないあなたたちも悪いですよね。今度の大人のボクはボクに性格近いと思うんだけどなー」

どうあっても気づかれないってなんか呪いっぽくないですか？ボク、幸運高いんだけどなー、と呟きながら、少年は懐に手を持っていく。

「何を言っている！」

「・・・しかし、あの身のこなし・・・恋並かも知れぬな」

「あはは！男でまだあんなのがいたのね！楽しみだわ・・・！」

「・・・勝手にヒートアップしてるとこ悪いんですけど、そろそろ終わらせようと思います。」

「何を・・・！」

不敵な笑みを浮かべて立ち尽くす少年に様々な武器が迫る。
刃や矢が迫る中、少年はただ口角を上げて笑い。

「それじゃ、返しますね、大人のボク」

迫る凶刃や矢は、空中に浮かぶ剣や槍や盾に防がれた。

「・・・なんだこりゃ。おいおい、子ギルが何かやらかしたか？」

その中央で、元の姿に戻ったギルガメッシュが、エアを構えて愛紗の青龍偃月刀を防いでいた。
全員もれなく驚愕の表情を浮かべている。

「あーっと、子ギルが何かしたのなら謝るから、みんな、武器を収めてくれないかなぁ・・・」

「え、え・・・」

「ぎ、ギル殿？」

「こ、子供がギルでギルが子供で・・・？」

・・・

かくかくしかじかと事情を説明される。
・・・なるほど、原作子ギルになったらしいな。
しっかし、まさか正体を明かさずに動いていたとは・・・俺の偽名の亞茶を使ってたし・・・。
ふぅ、使ってみて分かったが、あれで若返っている間は意識がなくなるみたいだ。

「なるほどね、若返りの妙薬とは、ほんとに何でもあるのね、その宝物庫」

「ああ・・・。俺もびっくりしてるところだ」

あんなに不味かったのもびっくりだよなぁ・・・。

「も、申し訳ありませんギル殿！あれだけ似通っていたのに、ギル殿だと気づかなかったとは・・・不覚です・・・！」

「あぁ、多分それは仕方ないよ。宝具か何かでごまかしてたんだろ。そういうのいくつかあるし」

しょんぼりとしている愛紗をそう言って励ます。

「にしても面白いわねぇ・・・あ、そうだ、それ、祭とかに飲ませたらどうなるかしらね？」

「ほほう？策殿、儂がなんですと？」

「とか、ってどういう意味かしらね、雪連ちゃん？」

「そうじゃのう。とか、の中に誰が入っておるのか、聞いてみたいのう？」

「あ、あはは－・・・じゃねっ！」

祭、紫苑、桔梗に詰め寄られて、冷や汗を流しながら逃げる雪連。

・・・あーあ、余計な事言うから。

「はわわ・・・ご、ごめんなさいギルさん。・・・私たちが、早とちりしたばかりに」

「いいって。不用意にあんなの飲んだ俺にも責任はあるし」

しゃがんで朱里と視線の高さをあわせつつ、親指で涙をふき取る。
雛里からも同じように謝られたので、頭をくしゃくしゃと撫でて励ます。

「気にしてないって。な？」

「あわわ・・・はい・・・」

「・・・ふん。」

「あー、詠。・・・怒ってる？」

「怒ってないわよ！」

あ、怒ってるな、これ。
ねねも同じような状況だし・・・。

「詠、ごめんな。今度埋め合わせするから」

「べ、別にそんなのいらないわよっ！」

「ねねもすまないな。」

「・・・まぁ、わざとではないようですから、別に許してやってもいいのです」

「本当かっ！？ありがとな」

「わわっ、ば、バカッ！降ろすのですー！」

嬉しさのあまり思わずねねを抱き上げてしまった。
降ろすのです、とか言ってる割には嬉しそうなので、しばらくやってあげよう。

「・・・もう、ばか」

後で、詠にはきちんと謝っておかないとなぁ・・・。

・・・

「・・・って事があったんだよ」

「そんなことが・・・子供姿のギルさん・・・ちょっと見てみたかったです」

「・・・もう一度あの薬は飲みたくないなぁ」

「ふふ。残念です。」

騒ぎのせいで集まった将に謝り、街で子ギルを捜索していた兵にも謝った後ふらふらと城内を歩いていると、月を見つけた。
声をかけると、今から休憩なので一緒にお茶をどうですか、と誘われ、月と詠の部屋でこうしてお茶をご馳走になっている。
そして、月に今までの顛末を聞かせると、先ほどのような反応が返ってきた、と言うわけである。

「あ、もう一杯どうですか？」

「うん、貰うよ」

とぽとぽと湯飲みにお茶が注がれる。

ふぅ、ようやく一息つけた気分だ・・・。

・・・ちなみに、その夜はふてくされた詠が納得するまで相手させられました。

翌朝、腰が痛いと涙目になっている詠を見て失笑してしまったのは、仕方のないことだと思う。

・・・

第十二話　大人から子供に（後書き）

と言うわけで、子ギル登場です。
彼の自由奔放さが書けていればいいのですが・・・。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8345w/

真・恋姫†無双　ご都合主義で萌将伝！

2011年11月16日23時33分発行